

---

# 中から出てくる

岳石祭人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

中から出てくる

### 【Nコード】

N7980E

### 【作者名】

岳石祭人

### 【あらすじ】

テレビ局の倉庫に封印されていた心霊ビデオが番組で放送されるや、それを見た若い女性が「化け物」に変身する現象が連続する。映研の高校生たちと最強の女霊能力者が調査を開始するが事態は予想だにしない驚天動地の展開を見せ……。霊能力者紅倉美姫「オリジナル版」。

## ブログ 心霊ビデオ撮影（前書き）

夏休み特別企画「霊能力者紅倉美姫」オリジナルバージョンです。  
キャラクターが気に入って「紅倉美姫」は中編をいくつか書いて  
いますがもともしリーズの予定はなく、この作品は特に後半かな  
り無茶苦茶な展開になっています。

改めて読んでみたらやはりかなり危ないネタがあるで15禁、  
子どもはダメ！ということでごめんなさい。

2006年8月29日〜12月31日作品。

## ブローグ 心霊ビデオ撮影

テレビやビデオで「恐怖映像特集」ってあるよね。ホームビデオに何かおかしなものが映ってたり、心霊スポットって呼ばれているところで本当に何か映っちゃったり。

で、それを狙って撮ろうとした連中の話なんだ。

高校の映画研究同好会の連中だね。

インターネットで地元の心霊スポットを調べて、ある一件の空き家で撮影することにした。

海岸沿いの雑木林の中に建つ小さな一軒家なんだけど、この二階の窓で少女の霊が何度も目撃されているんだそうだ。

実際行ってみると、まさに廃屋でぼろぼろで、裏側の壁がハンマーで叩き割られたみたいに崩れていて中に入ることができた。中も荒れ放題で、有名な心霊スポットだから何人も入り込んでいるらしくあちこちスプレーやマジックでイタズラ書きがされている。

「 参上！」とか

「おまえはもう呪われている！」とか。

連中は崩れた階段を何とか上って二階の例の部屋に行ってビデオカメラをセットした。

夕方6時と、夜中の0時と、深夜の2時にそれぞれ20分間カメラが回るようにタイマーをセットして。

彼らが心霊ビデオを撮ろうと思ったのは弱小同好会の名前を上げようと言うのと、やっぱりテレビ局かビデオ会社に売り込んでやろうと言う金のためと、二つ目的があったんだけど、けっこう本気で考えていて、どうやったら霊を確実にカメラに収められるか作戦を考えていったんだ。

一番考えられるのはわざと霊を怒らせるようなことをしておびき出すって手なんだけど、

それは怖い。

メンバーは五人なんだけど、一人女の子がいてね、そういうのは嫌だって別の手を考えてね。

逆に、霊の喜ぶことをしてやって、快くカメラの前に出てきてもらおうと言う作戦でね。

ネットで調べたところその女の子の幽霊は、中学生で、孤独な少女で、バレリーナのオルゴールと熊のぬいぐるみが大好きってことなんだ。

それぞれうわさ話の中でストーリーがあるんだけど、まあそれはいいだろう。

それでバレリーナのクルクル踊るオルゴールと、大きな熊のぬいぐるみと用意して持っていたんだ。オルゴールの方はタイマーを改造して時間になるとふたが開くように工夫してね。

他の箇所はぼろぼろでろくがきだらけなんだけど、その部屋はきれいなもので、六畳の畳の部屋なんだけど、さすがに壁のろくがきも小さなものがちょこちょこあるだけで、やっぱりさすがに祟りが怖いんだろうね。

がらんとなんにもなくて、押入があって、これを開けるのは勇気がいったけど、なんにもなくてね。

隅に三脚立ててカメラを据えて、ワイドレンズでできるだけ広く部屋が映るようにして、タイマーをセットして家を出たんだ。

夏休み中の話なんだけど、女の子だけ帰って、男どもは雑木林と松の防砂林の丘の向こうが海だからね、キャンプ気分でビールなんか飲みながら（未成年は飲んじやいけないんだぞ！）、変なのが入り込んでカメラを持っていったりしないように交代で家の様子を見に行つて、一夜を明かしたんだ。

朝日が昇つて、家の二階の部屋に行つてみると、カメラとオルゴールはあるんだけど、何故か熊のぬいぐるみは消えていた。たしかにオルゴールといっしょに部屋の中央に置いたはずなんだけどね、不思議だね。

これは本当に霊が持つていったんじゃないか？って興奮して、カメラと機材を持ち帰ったんだ。

オルゴールは霊へのプレゼントとしてそのまま置いておいたんだけど、不思議なのはね、これも何故か中で何か引つかかったみたいに入たが開かないんだ。けっこう高いやつだったんだけど、怖くて持つて帰れないよね。

さて、視聴覚室のテレビにつないでみんなで見るとね、

まずは午後6時から20分間。

日没は7時過ぎだから外はまだ明るいんだけど、窓は南向きだからね、ちよつと光量が足りなくてノイズが出ちゃってる。霊の出やすい環境とビデオで撮影できる明るさと考えてこの時間を選んだんだよね。

ビデオが回りだして5分後にオルゴールのふたが開いて10分間音楽が鳴って中のバレリーナがクルクル踊る。

みんな息を詰めてじーっとテレビに見入ってる。

なんの変化もなくて駄目かと半分くらい諦めて、オルゴールが鳴り出して5分ほど経ったところで、

「あ、これなに！？」

って一人が指さして、なんだなんだと巻き戻してみると、天井の方からふうつと丸い小さな薄い白い光が降ってきて、オルゴールの周りをふわふわ漂ってるんだ。

オーブ、英語で言う人魂だね、それなんだよ。

ああ、ところで僕もオーブの映った写真撮ったことがあるんだよ。しかも画面いっぱい大量に。

土合駅って知ってる？日本一のモグラ駅なんだけど。ホームが清水トンネルの中にあって、地上の改札口まで階段を486段、70メートルも登らないとならない地下駅なんだよ。

しょっちゅう通過はしてたんだけど、一度下りてみたことがあつ

てね。記念にデジカメで写真撮ったら、映ってたんだよ、オーブが、画面いっぱい無数に。

なーんてね、たぶん違うよ。電車が通過してすぐフラッシュ焚いて撮ったからね、空气中に散った水分にフラッシュが反射しただけだろう。びっくりしたけどね。

でも、あれだけのトンネルの中だからね、ひよっとして本当に本物のオーブが映っているかもしれないね。

おっといけない、話を戻そう。

やったー、映ってる！

って、大騒ぎでね。

本物の心霊ビデオだ！

これは評判になるぞ！

いくぐらいで売れるかなあ？

って、もう大喜びで。

ねえねえ、なんか踊ってるみたいじゃない？ きつと気に入って喜んでくれてるのよ！

なんて、その女の子メンバーも目をウルウルさせちゃってね。たしかにオルゴールの周りをふわふわ漂って、踊っているようにも見えるんだよね。

ずいぶん長く、オルゴールが止まるまで5分くらい映っていてね、それだけの時間一つと同じオーブが映り続けている映像というものないんじゃないかな？

ひよっとしてこれって本当にすごい映像なんじゃないか？ って今度は黙り込んでしまったね。

オルゴールが止まって、・・・タイマーでふたが閉まるように仕掛けをしておいたからね、オーブは戸惑ったみたいに一瞬止まって、すーっと消えていったね。

ああ、行っちゃった、もっと長く鳴っているようにしておいた方が良かったねえ、なんて言ってたんだけど、

しばらくして、また変なものが映ってたんだ。

白い煙みたいなものなんだけど、なんだろうなと思って見ていると、だんだん人の形に見えてくるんだ。

来たあつ！・・・って背筋がゾツとしてね、  
人魂どころじゃない、完全な幽霊だ！  
って。

もやもやしてはつきりしないんだけど、たしかに中学生くらいの女の子に見えるんだよね。部屋の入り口に立ってこっちを向いてるんだけど、顔まではさすがに分からない。

それが歩いて、オルゴールの隣に置いた熊のぬいぐるみのところに来て、かがんで抱きかかえようとして手を伸ばしたんだ。

つかんだ、と思ったところでブツンと映像が切れちゃってね。2  
0分、時間切れ。

なあんだよお、こんなすっごいいいところでえ！

って、がっかりして、ええいこの怒りをどこにぶつけてやろうか？  
ってな感じなんだけど、

すぐ次の映像が始まってね。

赤外線モードの緑がかった灰色の画面。

と思ったら、一人がいきなりビデオ止めちゃってね。

おい、何すんだよお！？って他の奴らは怒るんだけど、その止めた男子、

「おい、今俺すっごい嫌なのを見たような気がするんだけど・・・」  
って、深刻そうな顔をしてるんだよ。

そしたらまた他の一人が、

「実はさあ、俺も・・・なあ、おまえら気が付かなかったか？」  
って言うんだよ。なんだよ？って訊くと、その男子、ビデオを少し巻き戻して、

夕方の映像の終わりのところなんだ。

「ほら、見る！」  
って。

言われて見ると、他の連中もゾツとしてね。



幽霊の女の子の顔が映像の切れる寸前はつきりこつちを見てるんだ。

ゾーツとしてね。

別にカメラは隠してないから、気付いて当然なんだけど、幽霊にはつきり見られるって、やっぱり怖いだろう？

表情はもやもやで全然分らないんだけどね。

で、次の暗視モードの映像が始まって、夜中の0時から20分だね、そしたら女の子が、キャッ、て悲鳴上げて、

「首……」

って、震える手で指さして。

千切れて転がってるんだよ、熊のぬいぐるみの首が。

中の綿が飛び出てあちこちに散らばっていてね。

乱暴に振り回して、床に叩きつけたって感じでクタって寝てるんだ。

また、ゾーツとしてね。

どうしよう、どうしよう、女の子怒らせちゃった！…

ってメンバーの女の子はすっかり怯えて泣いちゃってね。他のメンバーが、落ち着け、とにかく続きを見よう、って。

何事もなく5分過ぎて、オルゴールのふたが開いて音楽が流れ出したんだ。

だいじょうぶだよ。な、さっきはオルゴールは気に入ってたみたいじゃないか、って女の子を励ましてね。

でもオーブも女の子の霊も現れなくてね、

じーっと緊張して食い入るみたいに画面を見てたんだけど、パタンってふたが閉まって、音楽が止んで、

はあー………、ってため息をついてね。

出なかったね、って頷き合っただけど、

急に画面が白くなってね、

突然至近距離で横からぬつと何かがカメラの前に現れたんだ。

完全に不意を付かれてみんなギャッて腰を抜かしそうになってね。

ピントがジージー合い辛そうにして、なんとかその眼前のものをとらえたんだ。

ぎゃー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・つ！

って今度こそみんな悲鳴を上げてね。

はつきり映ってるんだよ、幽霊の女の子の顔が。

ただし、それはもう人間の顔をしてないんだ。

完全に人間以外の生き物になっているんだ。

死んでるのに生き物って言うのも変だけど、とにかく、完全に人間じゃないんだ。

例えて言うなら、

思い切りリアルな「ムンクの叫び」だよ。

笑えないよ。

本物だよ。

白い丸い顔に、

真っ黒い目玉が開いてるんだ。

黒目だけの巨大な目玉が、カツと開いてこっちを睨んでいるんだよ。

鼻は凹凸がなく小さな縦の穴が二つ開いていて、

小さな口が魚みたいに丸く開いているんだけど、中に細かい歯がびつしり生えているんだよ、尖った針みたいなのがね。

顎はなくてなめらかに首につながっていて、

濡れたみたいなお真っ黒なおかつぱの髪の毛が被さっているんだ。

まるきり異次元の生き物だよ。

これは、腰を抜かすよ、マジで。

みんなあわあわ言って、画面から逃げるようにして、それでも怖すぎて画面から目は離せない。

丸い口がパクパク言って何か言ってるみたいなんだ。

なんだろう？ 何言ってるんだろう？って耳を澄ませていると、

なんにも触ってないのにテレビから聞こえるサー・・ッと言う音が  
どんどん大きくなっていつて、何か声らしいものがかすかに聞こえ  
たかと思ったら、いきなり耳をつんざく大音量で、

「ナニ撮ッテンダヨオッ！」

ってビリビリに割れた声で言っつて、ボンッ、ボンッ、てスピーカ  
ーが両方とも破裂して煙噴いて、

同時にブツン、って画面もフラッシュみたいに光って切れちゃっ  
たんだけど、くつきり、女の子、とも言えない女の子の幽霊の顔が  
焼き付いて残っちゃったんだ。

激怒、という感情をそのまま形にしたような物凄い顔がくつきり  
と白黒でね。

その後は、もう、阿鼻叫喚だね。

みんな悲鳴を上げて部屋を逃げ出したよ。

その後ねえ。

テレビは壊しちゃったけど、ビデオは無事だったんだ。  
で、勇気を振り絞って続きを見たんだ。

あれだけ凄まじい物を見ちゃったからね、今さら逃げてもどうし  
ようもないだろうと。

次の深夜２時の２０分間にも女の子の幽霊は映っていたよ。

音楽の鳴るオルゴールの周りをうろろ歩いて、ふたが閉じると  
きに、スーッと、煙みたいになって消えていった。

どうやらオルゴールの中に入っちゃったようなんだな。

翌日オルゴールを取りに家に行ったよ。

オルゴールはそのまま部屋に置いてあった。

熊のぬいぐるみは、いくら捜しても見つからなかった。三番目の  
映像にはもう映ってなかったからね、女の子がどこかに持っていっ  
たんだろう。

そのビデオとオルゴール、嚴重に梱包してテレビ局に送ったよ。  
もう5年経つけれど、いまだにそれが何らかの形で放送された  
ことはないね。

作り物、と思われたのかもしれない。

でも、違うと思うんだ。

本物過ぎて、とても放送できないんだろう。

あれは・・・、

放送できないだろうなあ・・・・・・・・・・。

もしかしたらテレビ局にはそういう本物だけど決して放送できない映像って言うのがいっぱいあるのかもしれないねえ。

## 第1話 「衝撃！ほんとうにあった少女霊ビデオ！」

うるさい。

窓の外で蝉が鳴いている。

暑い。

うるさい。

部員どもがテレビを点けて笑っていやがる。

「あーっ、これこれ！」

・・・・・・

うるさい。

「ほら、部長！ これですよ、これ！」

なにが？

馬木良人はむっつり不機嫌且つ無気力な顔を机から上げた。頬にべったり机と腕に挟まれたしわが貼り付いている。きゃははははは、と桜野葉子が笑った。テレビを振り返って

「あーあ、終わっちゃった。部長が早く見ないからですよ」と口をとがらす。

「何がだよ。おまえらテレビなんかつけてると怒られるぞ」

「いいだろーが。教師なんて来やしねえよ」

桜野をアイドルと奉る松岡がちよつとした敵意を含んだ目で睨んだ。かわいそうな奴。

ここは視聴覚室。別棟になっていて、たしかに夏休みの現在人が来ることはめったにない。視聴覚室を一応部室として使用している馬木たちは映画研究同好会のメンバーだ。馬木が部長・・・同好会なんだから会長というのが正しいのかも知れないが、会長、はいかにも偉そうで、そんな偉い人間が長を務めるほどのたいそうなグループではない。メンバーは他に4人。

副部長の沖浦かすみ。アイドルオタクの松岡健夫。馬木の友人の

角谷昌幸。以上三人が2年生で、もう一人、桜野葉子が唯一の1年生だ。

ここに会する5人が新潟県立青山高校映研の全部員だ・・・現在は。夏休み前にはもう3人の部員がいた。文化祭に向けてのビデオ映画の撮影計画もずいぶん盛り上がっていた。が、3人抜けた。2年生一名に1年生二名だ。現在8月4日。3人抜けた分のシナリオを詰めたり代役を搜したりしているが・・・思うようにはことが進まない。さてどうするかという会合だが、映研存亡の鍵を握る一年生ホープ桜野はテレビを見て笑っているし、松岡は喜んで太鼓持ちに徹しているし、沖浦はもうここにいるのもウンザリしているし、角谷は・・・こいつはいつも付き合いたけはいい、誰に対しても。

馬木は、終わったな、と思っている。この夏も、映研も。むつつりしている馬木に桜野はプンプン言う。

「もう、部長。やる気がないですよ！」

「はいはい。ありません。」

「で、なんだあ？『ほんとうにあった少女霊ビデオ』がどうしたって？」

さつき桜野が「これこれ」と騒いでいた番組のコマーシャルだ。画面は見えていないが音だけは耳に入っている。桜野がパアツと表情を弾けさせて

「なんだ、分かってるじゃないですかあ！」

と喜ぶ。太鼓持ちの松岡が細い狐目でまた睨んだ。

「そうですね、うちもホラー映画作りましようよ！ 受けますよ！」「ね？と松岡に無邪気に問いかける。松岡は喜んで「そうだよね、受けるよね」と相づちを打つ。桜野葉子。かわいい顔して女は怖い。」

「ホラーなあ・・・」

馬木はあまり気が乗らない。

「準備がたいへんだぞ。暗いシーンは撮影も難しいし」

「だいじょうぶですよ。最近のお化けは昼間でも平気で出て来ち

やうんです。わたしやりますよ、顔真っ白に塗って押し入れからバアツて」

松岡が駄目駄目と笑って手を振る。

「ヨーコちゃんのお化けじゃかわいくて誰も怖がらないよ」

太鼓持ち。プライドのない情けない奴め。

「あ、そうだ」

角谷がにこやかに言う。

「ホラーコメディーならいいんじゃないのお？ お化けが出てくるのに誰も怖がらないの」

「怖いですよ、わたしだってえ」

桜野が目をギョロツとさせてうらめしやと角谷に迫る。

「うわあ、降参。怖い怖い」

「もうっ、カク先輩まじめにやってください！」

ごめんごめんと角谷が笑って場が和む。角張った名前と反対にこの男は誰からも好かれる。一部例外を除いて。また松岡が今度は角谷を睨んでいる。困った奴だ。

だが桜野はけっこう本気で怒っているようだ。

「わたしホラーがいいって言ったじゃないですかあ」

そういえばそうだった。とん挫した企画の会議だ。その時も馬木は反対して、ファンタジックな軽いミステリーになったのだった。

「部長、恐がりなんでしょう？ ほーら、恐がりな部長にお仕置きです」

と、桜野がポシエツトから取り出したのは、

「あ、iポッド。いゝんだ」

と、角谷も羨ましが、桜野の家はお金持ちなのだ。

「えっと、これ！」

ボタンを操作して、どうぞと馬木に渡した。角谷が隣から覗き込みつつ、

「副部長も見ましようよ」

と一人白けている沖浦を呼び寄せる。沖浦もしょうがないわねえ

ともう一方の隣から覗き込んだ。松岡もアイポッドを手渡しされた馬木を嫉妬の目で睨みつつ上から覗き込んだ。

ディスプレイにざらざら薄暗い室内の映像が映っている。ふつうの民家の六畳の和室だ。

「なにこれ？」

「見ててください、出ますから」

・・・・・・・・・・・・・・・・

『何撮ってんのよおおおおおっ！！！』

思わず手がビクリと震えた。きやはははは、と桜野が大笑いした。「部長やつぱり恐がりなんだあ！？」

きやははははははははは。

ファイルが終了してメニュー画面に戻った。

「なんなんだ、これ？」

正直、怖かった。最後のバケモノの登場するところなんて実に上手い演出だ。10分弱、3パートからなる定位置カメラの映像だ。素人の作ったものなのだろうか？

「分かりません！」

と、桜野は得意になって言った。

「今ネットで出回っている謎の心霊ビデオなんですよお。果たしてこれは本物か？ってね」

・・・・・・桜野はほんとうにホラーファンなんだ、かわいい顔してるくせに。

「ねえねえヨーコちゃん、これって・・・？」

松岡が不思議そうな顔をして聞いた。

「そうなんです、松岡先輩！ あれなんです、ほらっ！」

お昼のバラエティー番組がCMになってまたさっきの番組の宣伝が流れた。



『これは本物か！？ ついに解禁された呪いの少女霊ビデオ！ 怨念の叫びにスタジオが凍り付く！ 今夜生放送でその全貌が明らかにされる！ 今夜7時「ほんとうにあつた呪いの少女霊ビデオ」！』  
全面にモザイクがかかり、画面いっぱいには赤い煽り文句がでか  
か出て隠しているが、これは確かに今見た動画ファイルの映像だ。

なーんだ、と馬木は一気に白けた気分になった。

「なんだ、これ、テレビ番組の宣伝じゃないか」

つまり、こうだ。

敢えてこれがなんなのか一切説明せず、映像だけネットに流す。  
これだけインパクトのある映像だ、評判になるだろう。「本物の心  
霊ビデオが存在する」という既成事実を作り上げて、それを検証す  
るという形でテレビ特番を作れば、そりゃあ視聴率が稼げるだろう。  
でも、なにか引つかかる。なんだろう？

「そうかもしれないですけど」

桜野が顔をつきだして二ヤニヤ脅すように言う。

「ほんとうに本物かも知れませんが。このビデオ、もともとかな  
り危ないサイトから広まってきたみたいですから、全国ネットのテ  
レビ局がそんな危ない真似しますっ？」

桜野がお化けをやるホラー映画、けっこういけるかも知れない。

「この映像がネットに流れているのはテレビ局とは別ルートってこ  
とかあ・・・」

馬木はパソコンやインターネットにあまり詳しくないから分から  
ない。たしかにこういうやり方はテレビ局は二の足を踏むだろう、  
少なくとも上の人間は。

しかし馬木が引つかかっているのはそういうことではない。

「なんかなあ・・・、見たことあるような・・・」

しかし、桜野に指摘されたとおり馬木は極度の恐がりだった。幼  
少の頃不良の叔父に「怖いぞ怖いぞ」と散々脅されて「白雪姫」の  
魔女の変身シーンを見せられたせいだ。こんなマニアックなホラー  
ビデオなんて見ているわけない。

「ねえ」

思わぬ至近距離から声をかけられて馬木はまたみっともなくビクリとした。声の主沖浦がなんで驚くのよ？と睨んだ。

「これってもしかして、金森先生の言ってたビデオじゃない？」

金森先生って誰です？と桜野が訊く。

「そんな先生この学校にいました？」

「いや、学校の先生じゃないよ。5月に教育実習で来たこの卒業生で・・・、ああ、そうか、あの時の・・・」

ね？と沖浦が目を見つめ合わせた。馬木は思い出す風を装って視線をずらした。

「そうだな、確かにあの話のままだ。へえー、偶然だなあ・・・」

「えー、なんですなんですか？ 教えてくださいー！」

桜野が身を乗り出してくる。

「うん・・・。カクは・・・、いなかったっけ？ 昼休み俺と沖浦が教室で相談していたとき実習の金森先生が女子たち相手に怪談を話していたんだよ。その時映研の生徒たちが撮ったっていうビデオの内容が、この映像とそっくりなんだ」

な？と沖浦に確認したが、今度は彼女の方がフンとそっぽを向いてしまった。おいおい。

「えーっ、じゃあもしかして！」

桜野がいかにも嬉しそうに両手を胸の前で握って言った。

「これを撮影した場所って、この近くなんですか？」

まさか・・・と心配になる。

「いや、たしか車で行ったって言ってたからそんなに近くじゃないと思うぞ」

「そうなんですかあ。でも、県内、きつと青山市の中か近くですよ  
ね？」

「おいおい、君君」

馬木はジロツと恐い目で睨んで言った。

「まさか行ってみようなんて思っていないだろうな？ 駄目だぞ、そ

んなところに行っちゃ」

「はいはい、分かってます」

本当かよ……。

結局何もまともでないままお開きになった。ただ角谷がホラーコメディーのアイデアが気に入ったようでシナリオを考えてみると言った。いつもお付き合いだけの奴にしてはこの積極性は珍しい。やる気を出せばこいつの頭の良さは大いに期待できる。

馬木は視聴覚室の鍵を教務室に返しに行き、中庭に出た。温室の裏のバラの陰で待っているとしばらくして桜野が来た。

「お待たせしました、旦那様」

肩に手を置き、ちよんとつま先立って唇を合わせた。・・そう、

二人はそういう仲だ。

「あのさー、その旦那様はやめてくれないかなー」

「じゃ、ダーリン」

「うーん・・、それもなんだかなあー・・」

葉子は目を細めてニイツと白い歯を見せる。まさに豹変。年齢が一気に五つくらい上がった感じた。女は魔物だ。

「だってえ、わたしの「おっと」だもん」

良人という名前のおかげでオットやオットーが小学校からのあだ名だ。名字からウマと呼ばれることもある。

葉子は後ろを向くと背中を押し付けて両腕で馬木の首を抱いた。

白いブラウスの半袖からほのかに汗が匂った。高2の若者にはかなりの刺激だ。

「松岡先輩しつこくて困るわ」

「うまくまけた？」

「ええ……」

馬木は葉子の体に腕を回して抱いた・・・と言っても胸ではなくお腹の上に腕を重ねて。まだそれ以上の関係ではない。

「もっつ」

と、葉子は抱えた馬木の頭にグリグリプロレス技をかけた。

「いててて。降参。許して」

女の子って言うのはなんでこんなに気持ちいいのだろう、とその魅力に理性が負けてしまいそうで怖い。

ようやく許してもらった。

「さっきの話だけど、本当にあんな場所行っちゃ駄目だぞ。葉子はお嬢様だからな、世の中怖いものなんて無いって思ってるんだろけど、世の中には怖いものがいっぱいあるんだぞ。俺なんか葉子のこと考えると怖くてしょうがないぞ」

「なんで？」

「葉子がいなくなっちゃったらどうしようって怖くて怖くてしょうがないのさ」

「それってつまりどういうこと？」

「葉子が大好きで、愛してるってことさ」

「嬉しい。わたしも良人さんが大好き。愛してる。世界中で一番大切な人よ」

「俺も。葉子が世界中で一番大切だ」

・・・・・・・・・・・・・・・・

本当かよ？・・・と、体を熱くしながら心の一部が醒めて考えている。愛してるとか一番大切とか、そんなことが言えるほどのものか、俺たちは？ ガキのくせに。

遊びだ、言葉も愛も。

でも、楽しいし、これはこれで本気だ。  
いいだろう？ 情熱に浮かされたって。若いんだし、青春なんだし。

「だから約束。ぜーったいに、危ない所に近づかないこと」

「はい。」

約束、した。

夜7時。

番組が始まった。

大げさなナレーションとテロップで恐怖が過剰に演出される。

青と赤でおどろおどろしく装飾されたスタジオ。出演者の並ぶテーブルの手前に、アンティークな小テーブルにプラスチックのケースに収められたいかにも曰くありげな卵形の装飾品。

「皆さん今晚は。ついに始まってしまいました、緊急特番『衝撃！ほんとうにあつた呪われた少女霊ビデオ』」

ついに始まってしまいました、と言うのは決して大げさではなく本当に我々スタッフの本音なんです。そここの事情を、ディレクターの三津木俊作に聞きます」

「はい、番組ディレクターの三津木です。実はですね、この番組は3ヶ月くらい前から具体的な準備を始めているわけですが、1週間前になってガラリーと事情が変わってしまったんですね。今回メインで取り上げる予定でいます少女の霊がこれ以上なくはつきり写った呪いの心霊ビデオですね、これはあまりに衝撃的すぎてテレビ放映は出来ないだろうと言う判断で長くライブラリーに保管されていたものなんです、眠らせておくには惜しいと、今回スタッフが頑張りました、こうして皆さんに見ていただく運びになったわけですが、実はこうして準備をしてきて満を持して放送をしようという直前になって、実はこのビデオが既にインターネットで動画ファイルとして、かなり広くですね、出回ってしまっているということが判明したわけです」

「三津木さん。それに関して我々テレビ局が番組宣伝のために意図的に流出させたのではないかという憶測があるわけですが、それはいかがでしょう？」

「いや、それはまったくありません。スタッフにも確認しましたが、そういうことは一切していないと、ここに言明いたします」

「するとどうということなんでしょう？」

「ええ。このビデオが送られてきたのは今からおよそ5年前なんです。5年前と言いますとインターネット環境も既にかなり整備されていましたし、元がビデオですから、ダビングしたテープがあることも十分あり得るわけですね。ですから今現在インターネットに出回っている動画はですね、我々とは別の所から出てきたものだと、いうことです」

「なるほど。そうした動画ファイルが存在すること自体は特に不思議ではないわけですね。しかしこのタイミングでそれがこうして広く出回り、番組以前にかなり大きな話題になっているというのは、ちょっと不気味な偶然という感じがしますね。三津木さん、それがこの番組にどういった影響があるのでしょうか？」

「そうですね。特に番組内容が変わるわけではないんですが、その環境がですね、あまり気持ちのいいものではないと。嫌な感じがしますね。実はビデオがあまりに衝撃的なもので、カット、もしくはモザイクをかけて放映するしかないかと思っていたんですが、もう出てしまっていますのでね、見せます。これは本当に凄いです。衝撃です。テレビをご覧の皆さんは十分覚悟してご覧ください」

「分かりました。視聴者の皆さん、これは本当に危険な映像です。小さいお子さん、妊娠中の方、心臓の弱い方は十分に注意し、危険を感じたときはただちに視聴を中止してください。」

さて、今夜はゲスト、といいますか、番組の安全を守ってくださいますオブザーバーとして美人霊能師として皆さんお馴染みの岳戸由宇先生においでいただいています。岳戸先生よろしくお願いします」

「お願いします」

「さて先生、このビデオ、実はわたしも事前に見たんですが、先生もご覧になっていますね？ 先生いかがでしょう？ 非常に衝撃的な一方、あまりにはつきり写っていてですね、わたしは正直なところこれが本物なのかどうか疑わしい思いもあるんですが、ズバリお訊

「きします、先生、このビデオは本物の心霊ビデオなのでしょうか？」

ゲストと観客からざわめきが起こり、早くも悲鳴が上がり司会者が気にする。

「だいじょうぶですか？　だいじょうぶ？　この番組は生中継で、今現在すべて現在進行形でお送りしています。何が起ころのか、早くも予想のつかない雰囲気になっています。」

先生、本物ですか？」

「本物です」

「断言なさいます？」

「断言いたします」

「ふうむ・・・。」

さて、では番組中盤でお送りする予定でした『ほんとうにあった呪いの少女霊ビデオ』、構成を変えましてこれからさっそくご覧いただきます。我々の前に置かれている卵形のオモチャのようなもの、これがいったいなんなのか、ビデオを見ると分かります。では、どうぞくれぐれもご注意の上ご覧ください。衝撃です」

白地に黒のテロップ。

これから9分30秒の「心霊ビデオ」を放映します。これは非常に強い刺激を与える衝撃的な内容を含む映像です。小さなお子さま、妊娠中の・・・

はじまります。





う仕掛けのものです。スタジオにありますこれは、ビデオに映っていた実物です」

悲鳴。

「この実物の方は後で検証するといたしまして、あ、7時40分になります。ご覧ください」

部屋の暗視カメラの映像。中央に同じオルゴールが置かれている。カタツとふたが開き、「花のワルツ」の音楽と共にバレリーナが踊り出す。オルゴールのとなりにはやはりビデオの最初に映っていた熊のぬいぐるみ。

スタジオに切り替わる。隅に小窓で部屋のライブ映像が流れ続けている。

「スタジオにカメラがある間はこうして別窓で現場の様子を常にご覧いただきます。先生、どうでしょう、この放送、非常に何か起こりそうな雰囲気があるんですが、今映っている現場で何か起こるでしょうか？」

「かなり高い確率で起こると思います。画面から非常に強い思念を感じます。霊体がカメラを通して我々を強く意識しています」

悲鳴。

「あそこにいる霊が我々を見ているんですか？」

「そうです」

悲鳴。

「では、今スタジオにあるこのオルゴールなんですが、ビデオの最後で少女の霊がこの中に入っていたように見えたのですが、彼女は今ここにはいないわけですか？」

沈黙。 岳戸由宇は手をかざしてオルゴールを探るポーズを取る。

「こちらにも強い思念を感じます。こちらにも霊は入り込んでいます」

悲鳴。

「では先生、こちらの霊とあちらの霊は別々のものなのでしょうか？」

「いえ、同じものです。霊とは死者の念です。念は同時に複数の場に存在することが出来ます。同じ霊体があちるところに存在することに矛盾はありません」

中年の男性タレントがちゃかして言う。

「ほほお、幽霊っていうのは便利なものだね。電話なんかなくても本人が来てくれるんだ？」

岳戸由宇は不機嫌に眉をつってタレントを睨む。

「あなたは霊の存在を信じていないようですね」

「ああ、俺はね、正直信じないね。俺はね、あんなの作り物だと思うよ。ちやちな特撮だよ。今どきコンピューターでいくらでももっと凄いのが作れるだろう？ 驚かなかったよ、俺は」

観客席に向かって言う。

「ねえ、本物の幽霊だって言われるから怖いんだよ。映画だって言われたらあんなの怖くもなともないよ」

岳戸由宇。

「ではわたしの言葉が嘘だと？」

「さあねえ？ あんたは本気で信じてるんだろ？ いいよ、信じてるんならね。でもさ、俺は、信じてないから。それだけ。ね？」

ふてぶてしく言うタレントに、岳戸由宇は、笑った。

「そうですね。あなたのような人に何を言っても無駄でしょう。それならそれで幸せなことです。何があっても、どんな悪いことが起こっても、霊のせいになんてなさらずにご自分で解決なさるうとするんでしょう？ どうぞ、せいぜい頑張ってください」

タレントは、何か言い返そうとして、やめた。

10分が経ち、オルゴールは閉じた。何事もなく。

「オルゴールはこの後8時10分と30分にまた開くことになっています。先生、今は、何事も起こりませんでしたね？」

「そうですね」

「ですね。まだ2回ありますし、ご覧のように部屋の様子はライブで映り続けています。どうぞご注目ください。ここからもう一度あ

のビデオを、今度は具体的に岳戸由宇先生の解説を聞きながらご覧いただきましょう」

8時30分。

「番組最後はこのスタジオのオルゴールを開けてみようと思うんですが・・、あ、現場のオルゴールが開きましたね」

キャア！ キャツ！ あれ、キャアーツ！！

「え、なんです、なんです？ 映った？ 何か？ 人？ 人が映ったんですか？ 視聴者からも電話？ 少女が覗いた？ 出ますか？ 出ます？ 見てみましょう」

現場暗視カメラの映像、約2分前。

広角レンズで六畳の部屋がほぼ全部映っている。奥に廊下に出る引き戸があるが、三分の一ほど開いている。そこからはつきりと黒髪の少女の顔が半分覗き、すつと引ッ込んだ。悲鳴。悲鳴。悲鳴。

先ほどの中年男性タレントが怒鳴り声を上げる。

「違うだろう！ 悪質だよ。幽霊でもなんでもないじゃないか、女の子だろう、生きている、ふつうの！ ヤラセだろう？ こらスタッフ、馬鹿にするな！ デイレクター！ 出てこいよ！」

スタジオ騒然の中冒頭のディレクターがひきつった顔で出てくる。

「ヤラセだろうこれ！」

「いや、違います。そんなはずありません」

喧嘩腰のタレントにディレクターも怒気を抑えた声で答えた。司会者。

「三津木ディレクター。現場でスタッフが誤って映ってしまったということはないんですか？」

ディレクターはインカムで連絡を取り合いながら答える。

「いえ、それありません。建物内は完全に無人で、スタッフが周囲から監視していますが誰も中に入ってません」

中年タレント。

「どうなってんのよ？ だってあれ、人間でしょ？ 誰かいるんだ

よ。周りどうなってるの？ 見せてよ」

ディレクターはこわばった顔でスタッフと話し、

「場所を特定されるのは困るんですが、仕方ありません。外のカメラをこちらに出します」

外で慌てまくっているスタッフたちが手持ちで揺れまくっているカメラに映される。

「どうなんだ？ 間違いなく誰も中に入っていないの？」

現場ディレクター！

「その・・はずです。我々は誰も見ていません。ただ、ご覧のように暗いので、ぜったい・・とは言い切れません」

「ほら、誰か入っちゃったんだよ」

「カメラを持って中に入れますか？」

「えー、はい、入りますか？」

「うーん・・、入ってくれ」

カメラが裏の崩れた壁から中に侵入する。無遠慮なライトが乱雑な内部を映し、床に壁に真つ黒な影が乱舞する。

「えー、下には誰もいません。えー、二階なんですけど、ここ、階段を上がってすぐが例の部屋なんですね。えーと、ここから覗いて、あそこに部屋の戸が見えますから、あそこに人がいたはずなんです  
が・・」

「いいから、見に行けよ！」

「えー、行きます。階段は腐食して途中が抜け落ちています。危険です。登っています。カメラ・・、危ないな・・」

キヤアッ！ イヤアアアアア！

「なんです？ なんですか？」

観客席で泣き喚く女性にアシスタントが駆け寄る。

「壁。女の子が居た・・」

「え、壁ですか？ 階段の？」

「壁撮してください、階段の」

派手ならくがきだらけの灰色の漆喰の壁。

「どこ？ どこですか？ わっ！」

ガリッ、バキッ！ ドドッ！

きゃああああ！ きゃああああ！

スタジオ無言。悲鳴だけ。階段を踏み抜いて落下したカメラマン。カメラは一体どこを向いているのか、真っ暗な中に目がじっとカメラを見つめている。女？・・の目。

ディレクターが叫ぶ。

「川田！ 川田！ だいじょうぶか！？ 起きてるか！？」

うーんとうめき声。カメラが動いてライトに照らされた天井を撮す。

「すみません。落ちました」

「おい、今どこ撮した？ カメラ戻せ！」

「え、どこ？」

「おいAD！ 川田今どこ撮ってた？ え？落ちた？ だから！・・

階段の中？ 川田！撮せ！」

カメラが階段の下を撮す。ライトに照らされて割れた木材が映る。

「違うぞ！ さっきは真っ暗だったぞ！ 穴ないか、穴！」

「えー・・と、ちょっと分かりません」

「なんだよっ！」

司会者。

「三津木さん、落ち着いて。川田カメラマン、二階はどうです？ 行けそうですか？」

「あー、駄目ですね。すみません、完全に階段踏み抜いちゃいました」

「そこから見える範囲で人影はありますか？」

「えーと、廊下はほぼ全部見えますが、人影はありません。人がいるとすれば奥の物入れと、和室だけです」

「部屋のカメラで見れますね？・・あっ！」

画面がゆっくり傾き、ガタンと横になった。三脚が倒れた模様。もう一台もガタンと倒れた音がした。床の低い位置だけになった画

面に、ぬつと、白い裸足の足が入ってきた。

「人だ！ 部屋に人がいるぞ！」

「ヤラセだよ！ ヤラセだヤラセ！」

怒号渦巻く中、CM。

CM明け。

「視聴者の皆さま、たいへんお見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ございませんでした。現場の状態が確認できていませんが、人がいるのは確かなようです。一体あそこで何が起こったのか、後日目を改めまして必ずご報告いたします。この場合はスタジオで番組を進行させていただきます。」

さて、思わぬアクシデントで予定が大幅に狂ってしまったもう時間も残りわずかとなってしまいました。さて、最後にスタジオにありますこのオルゴールですが、専門家に調べていただいたところ内部のスイッチに当たるところに何かゴミが詰まっていたということで、ふたを開けないように細心の注意を払ってゴミを取り除いてもらいました。ここで最後にこのオルゴールを開き、その様子を見ながらお別れとさせていただきます。岳戸由宇先生、ゲストの皆さん、ありがとうございます。視聴者の皆さん、今日の事故の検証は次回この番組で必ずご報告いたします。たいへんお見苦しい番組になってしまったことを心からお詫びいたします。では、さようなら。次回のこの番組で、必ずお会いいたしましょう。」

岳戸由宇の勝ち誇ったような笑顔。怒りも露わな中年タレント。憔悴しきった女性タレントたち。

スタッフの手によりプラスチックケースが外され、卵形オルゴールのふたが開かれる。画面下には製作スタッフのスタッフロールがもの凄いい速さで流れていく。「花のワルツ」が流れ出す。しかしそれは軋んで歪んで、限りなく不快な演奏。バレリーナの回転も一定せずおかしい。ついに何かに引っかかったように回転が落ち、バレリーナの腕が見えない系に引っ張られるようにねじれ、体がねじれ、

腰がひしやぎ、ブチツと千切れた。下半身だけが猛烈な勢いで回り、早回しの演奏、ボンツとバレリーナの乗った回転台が斜めに飛び出し、プラスチック製の卵がひび割れ、中から真っ黒な錆びた液体が流れ出した。番組は終わり、お詫びテロップが長々映し出された。前代未聞の番組となった。

神奈川県在住の高校生中谷志保は携帯電話で友人と話していた。爆笑している。

「もう笑った笑った。もー、さいっこう！　こんなに笑える番組ないよねー？」

えー、マジ？　あり得ないよー。作り物に決まってるじゃん！　えー、信じてんの？　あり得ねーよー。

ほら、なんだっけ、紅倉美姫？　あの人出てこなかったじゃん。あたしあの人は好きなんだー。だってすげえじゃん、死体とか見つめちゃうしさー。えーっ、岳戸由宇なんて駄目じゃん。だってあの元グラビアアイドルでしょ？　心霊スポットロケとかいっぱい行ってさ、それで靈感に目覚めて本格的に修行して霊能者になったって言うんでしょ？　だからさー、タレントなのよー、脚本があつてさ。そうよ、だからさー、最高に笑えたじゃん、バラエティー番組として。きゃははははははは」

大笑いしながら志保は床を転げ回った。番組を見ながら食べていたポテトチップスの袋を思わず蹴飛ばし残りをカーペットにぶちまけた。

『志保、笑いすぎだよー。呪われても知らないよー』

志保は笑いが止まらず床を転がり続ける。ドタンバタン、笑いすぎで腹がねじ切れそうになりながら。

『ちよつと志保ー。聞いている？　笑いすぎだつてばー。おーい、聞こえてるかー？　おーいおーい。……』

志保？　ねえ？　志保ったら、だいじょうぶ？　笑いすぎで腸捻転

？」

母親が階段を上がってきた。

「志保！ 何騒いでるの！ 開けるわよ！ こらっ！ 何を騒いで・  
」

ドアを開けた母親は一目見るなり娘の異常に気付いた。床を転がりながら体をビクビク踊らせているのは、激しい痙攣だ。床に転がった携帯から声がしている。

『志保ー、おい、ほんとにだいじょうぶー？』

「志保！ どうしたの！ しっかり！」

暴れる娘を抱きかかえた母親は悲鳴を上げて思わず娘を放り捨てた。

「ガアーーーーーッ！」

白目を剥いて泡を吹く志保の頭はまるで風船のように腫れ上がり、顔が左右に引き離されていた。

「ひいつ、志保、ひい、ひいひいひいひい、ひいひいひいひい」

母親も失神寸前でへたりこみ、ただただ悲鳴を上げて苦しみ暴れる娘を眺めていた。

志保の顔はまるでビデオの中のバケモノそっくりだった。



## 第2話 疑惑

馬木は6時前に目を覚ました。

暑くて寝ていられない。体中にべっとり汗をかいている。気持ち悪い。まだ寝不足で胸がムカムカする。

だが。

朝早く目覚めたのも気分が最悪に悪いのも、暑さのせいばかりではない。

ものすごく、嫌な夢を見た、ような気がする。  
嫌な予感が、胸に重く凝り固まっている。

10時。このところ日課のように学校の視聴覚室に集合する。

「いやあ、俺たちもほんと飽きもせず通ってくるよねー」

角谷が軽く言うつと沖浦は

「わたしはもうとつくに飽き飽きしているわよっ」

と言い返した。松岡はむっつり黙ってカメラの手入れをしている。

「桜野はまだ来てないんだ？」

馬木は努めて軽く言ったが我ながらわざとらしい気がしてならない。

「珍しいねえ、ヨーコ君、いつも一等賞なのにねえ」

「沖浦。電話してみてくれないか？」

「自分でしたら？ 番号知ってるんでしょう？」

「番号は知ってるけど、俺ケータイ持ってないもん」

沖浦は呆れながらも携帯電話を開いて桜野の名前を押した。もともと桜野への連絡は彼女がしている。馬木は桜野に電話したことはない。

「駄目。圏外もしくは、だつて」

沖浦はあっさり携帯を閉じた。

「何か用ができたんでしょ。だいたいこう毎日集まってダラダラやつてるんじゃないかな」

そりやおまえだろう、と心の中でツツコミつつ、馬木はそうだろうかと考えた。この集会を何故が一番楽しんでいるのは桜野だった。こんな連中相手に毎日キャピキャピ喜んでいられる。来ないにしろ遅れるにしろメールの一つくらいよこしそうなものだ。

「念のため自宅にもかけてみてくれないか？」

沖浦はものすごく嫌そうな顔をした。

「自宅の番号なんて入ってないわよ」

「まあまあ、もうちょっと待ってみようよ」

角谷がニコニコして言った。

「俺昨日ちょっと考えてみたんだ、ヨーコちゃんが幽霊のぜんぜん怖くないホラーコメディ」

「な？　これならオツトもだいじょうぶだろう？」

角谷は馬木のことをこう呼ぶ。良人。おつとだ。

「高校生程度の手作りホラーにビビるか」

と言いつつ馬木は内心ほつとしている。いやそれどころか感心した。けっこう笑える。やっぱりこいつは才能がある。嫉妬を覚えるくらいだ。

「ねえカク君、念のため訊くけど」

沖浦が怖い笑いを作って言った。

「そのかわいい幽霊があたしじゃ駄目なわけ？」

「いやあ、幽霊をいじめる悪女っていうのもなかなかセクシーでいいと思うんだけどー？」

この一っ、とふざけ半分で怒って和気あいあいとなったところに松岡がボソッと、

「駄目に決まってるじゃないか」

と言って座を白けさせた。ほんとにガキで困った奴だが……

「なあ松岡。おまえ昨日のあれ見た？」

「見たよ」

「どう思う？」

「どうって、何が？」

「何がって、そりゃあ……」

「言いづらい。我ながら馬鹿げていると思う。だが……」

「沖浦は見たか？」

「なに？」

「ほんとうにあつた呪いの少女霊ビデオ」

「くっだらない、と露骨に顔に出しつつ、」

「あたしはバイト。あんたらみたいな暇人と違うの」

「カクは？」

「うん、なんとなくチラチラ。これ考えてたからね」

と、シナリオを示した。

「けっこう面白かったよねー」

「だからなんだよ？」と松岡が冷たい目を向ける。しょうがなく、馬木は言った。

「部屋のライブ映像に女の子が覗いているのが映ったじゃないか？」

「あれさあ……」

「言いづらい……」

「あれ、桜野に似てなかったか？」

馬鹿馬鹿しい、とは、思う。が、昨夜はその考えが頭から離れず眠れぬ夜を過ごしたのだ。

戸の向こうから少女は顔を、目鼻はすべて覗かせ、そしてスツと引つ込めたのだ。テレビ局の最新カメラとは言え真つ暗な部屋の中やはりざらつきがあり、色も鮮明ではなく、顔の細部まではつきり見極めることはできなかった。しかし、瞬間的に、

「あ、桜野だ」

と、思ってしまったのだ。

まさか、そんなわけはない、と常識で考えつつも。

どうだ？と一番しつかり見ていたような松岡に目で訊く。

松岡は、ニヤリと、嫌な笑いを浮かべた。

「ああ、似てたな、ヨーコちゃんに。本人だったら面白れーよな」  
思わずカツとなった。嫌な奴だ。そんなわけないだろうとからかっているのだ、ろう。もし仮に葉子本人だったとしたら、こいつは心配するより喜んで面白がるのだろう。こいつの葉子に対する好意とはそういう類のものだ。

「馬鹿ねー。そんなわけないでしょう」

と沖浦が言った。

「なんだよ。おまえ見てないんだろう？」

「見てないわよ。みなみに聞いたのよ、これでね」

と携帯を示した。みなみとは沖浦のクラスメートだ。ちなみに一年の時は馬木も二人と同じクラスだった。二年になってクラス替えで馬木は別のクラスになった。

「キヤーキヤー大喜び。まったくなんであんなもの喜ぶんだかねー」

沖浦かすみ。こいつも分からないと言えば分からない奴だ。なんでいまだに映研をやめないでいるのか・・・

「そうだよねー、俺もヨーコちゃんだ、と思っちゃった。不思議だよねー」

と角谷。

「なんだ、見てたのか？」

「思わずね。でも困ったなあ、けっこう怖かったよね、あれ。あれがヨーコちゃんだったら、俺のかわいい幽霊ちゃんが怖くなっちゃうじゃないか」

そうだ、あれは、怖かった。葉子だ、と思ったのに、背筋がゾクリと冷たくなった。

葉子に似ている少女はまるで魂が抜けたような感情の失せた顔をしてカメラを見ていた。

一番考えられることはなんだろう？

心霊現象に興味のあった葉子は問題の家を探り当て番組放送中に行ってみた。そこで撮影隊に出会い、番組を盛り上げるための「やらせ」に協力して幽霊を演じた、

というところではないだろうか。

どうでもいい、とにかく馬木は早く葉子に会ってこの胸の不安感を払拭してもらいたかった。

「携帯貸してくれないか？ 桜野の家にかけてみる」

沖浦は呆れながらも貸してくれた。

桜野の家の電話には母親が出た。苛立ったような不機嫌な声だ。風邪だろうか？ 11時を回って寝起きもないと思うが。

青山高校映研の部長を名乗ると、

「英研？ ああ、映研。あの子もくだらないものに関わってるわね」と言った。ずいぶんな言われようで馬木は快く思われていないかと思ったら、

「で、部長さん？ なに？ 葉子がどうかした？」

と、あっけらかんとまるで同級生と話しているような気楽な調子で言われた。声もずいぶん若い。母親ではなくお姉さんだったのだろうか？ 桜野がまだ来ていないことを告げると、

「えー、そうなの？ 知らないわよ。起きたらいなかったから、どこか出かけたんでしょ？」

と、無遠慮な大あくびが聞こえた。

「あの子の携帯は？ ああ、電源切れてんの？ んじゃあ、もしあの子が帰ってきたらあなたに電話させればいいのね？ はい分かりました。じゃあねー部長さーん」

軽い調子で切れた。少なくとも桜野の身を案じている様子は微塵もない。

もう帰るかと相談しているところにひょっこり思いがけない訪問者があった。

一学期に教育実習で来ていた金森さんだ。

「やあ、馬木君。君、映研の部長だったんだね。由利先生にここにいるはずだって聞いてね、陣中見舞い」

とハンバーガーの袋をドサツと差し出した。由利先生は映研の顧問の「情報技術科」講師だ。由利は名前ではなく由利絵梨佳先生。自称23歳のなかなかの知性派美女で我が映研唯一の誇りである。ただし実際に部活動に加わることはほとんどない。

金森さんはいかにもハンバーガーが似合うちよっとお肉のぽちゃぽちゃした丸メガネのお兄さんだ。シルエットは松岡と共通するが開放的なお坊ちゃん的な明るさが正反対だ。

ハンバーガーをご馳走になってあれこれどうでもいい話をし、シイクをすすりつつ馬木は訊いた。

「金森さんは映研部員だったんですか？」

前に女の子たち相手に「怪談」を話していたときには「他人の話」として部外者を装っていた。金森先輩はぎこちなく、しかしそのために来たのだろう、話し出した。

「そうなんだ。僕は君らの先輩で、昨日、見たかな？ あのビデオを作った張本人なんだ」

東日テレビディレクターの三津木俊作は重い気分でVIP専用の特別応接室のドアをノックした。三津木がここに入ることは滅多にない。

「失礼します」

ドアを開けて中のVIPを見た瞬間ハッとした驚きに打たれた。これまで何度も顔を合わせているがいまだに慣れるということがない。億単位のスポンサーの重役でなければ招かれることのないこの特別応接室で高級銘柄の紅茶をすすっているのはわずか23歳と19歳の小娘どもだ。ただし、ただの、小娘のわけがない。

「紅倉先生、わざわざおいでくださって申し訳ありません。芙蓉さんも、ご苦労様です」

37歳の、それなりに場数を踏んできた中堅ディレクターである三津木が額にじっとり汗を浮かべて頭を下げた。

紅倉美姫。べにくらみき。三津木の手がける心靈番組にたびたび出演してもらっている霊能者だ。

芙蓉美貴、ふようみき、はその助手。

共に美人である。超の付く。

二人は白と黒だ。

紅倉美姫の髪は銀色だ。老女の透けた白髪ではない、内から輝くシルバープラチナだ。肌は白く、瞳は赤い紫だ。目鼻立ちも深く日本人離れしている。混血だろう。いや人間外だ。

弟子の芙蓉美貴は細く、瞳が大きく、長身でモデルのようだ。真つ黒なストレートのロングヘアは日本的だが、彼女の顔は紅倉美姫に非常によく似ている。まるで姉妹のようだが本人たちの弁を信じるならまったくの他人で血のつながりはないそうだ。

「先生、どんなご用でしょう？ お呼びくださいましたらこちらから伺いましたのに」

紅倉美姫がじつと三津木の目を透視する。物を見る視力はひどく低く、常に靄った状態のようだ。ただし、別のもの、が見える。

「分かっているんでしょう、三津木さん？」

へへえー……。ついひれ伏してしまう。心の中で。

「やはり昨夜の番組の件で？」

紅倉美姫は童女のように困った顔をして三津木を睨んだ。彼女は三津木に対してそれなりに親しみを持っているようだ。三津木も好意を持ちながら、やはり慣れない。

「何故わたしたちを呼ばなかったんです？」

弟子の芙蓉美貴の方はストレートにきつい。目つきも態度も攻撃的で、彼女は紅倉美姫のボディガードも兼ねているのではないかと思われる。

「どうしてです？」

まあまあ美貴ちゃん、と紅倉美姫がたしなめた。両方ミキなのでややこしい。

「別に呼ばれなかったことに腹を立てているわけではありませんよ。そりゃあ他にも霊能力をお持ちの方は何人かいらっしやいますものね、わたくしにお呼びがかからなくても恨む筋のことではありません」

と、紅倉美姫は仲間外れにされた子どものようにすねた。が、

「が、解せません」

目が半眼になりますます異星人じみて見える。

「わたくしの方が視聴率が取れますでしょう？ それともギャラが高すぎますか？」

たしかに。いやいや・・

「いや、あれはその、先生にお願いするほどのものでもないかと思いついて・・・・・」

「どうして？」

「それはその・・・・・」

困った。紅倉美姫はお見通しで甘えた猫のようにニタツと笑った。  
「わたくしが出演などするはずがない、いえ、番組そのものを潰すと心配したんでしょう？」

・・・・・・・・・・。

「何故でしょうねえ？」

優しい声をして、性格はけっこうサドだ。

「それは・・・・・」

「それは、あれが偽物の、ヤラセ番組、だったからでしょう？」  
・・・・・・・・・・。その通りです。

「「作った」？「撮った」じゃなく？」

金森先輩はいたずらのばれた子どものように悪びれ、しかしちよ



つぱり得意そうに言った。

「そうだよ、あれはさ、『ブレアウィッチプロジェクト』だったんだ」

ブレアウィッチプロジェクト。森に住む魔女を題材にした大学生二人組が作った「似非」ドキュメンタリーホラー映画だ。

「つまり」

いかにも本物っぽく作って、フィクションかドキュメントか敢えて明かさず、「本物が偽物か」と、はつきり言って話題性だけでヒットした素人映画だ。

「そ。ウケを狙ってあれを真似て作った偽心霊ビデオなんだ。思った以上に出来がよかったんでさ、文化祭でばらしちゃうのはもったいなくてさ、「本物」としてテレビ局に送ったんだ。わざわざオルゴールまでいっしょにさ。これは話題になるぞ、ってけっこう本気で期待してたんだけどさ、なーんにもなし。まったくの期待外れで、すっかり白けちゃってさ、女の子を喜ばせる怪談のネタにしかなくなってなかったわけ。……昨日まではさ」

馬木の見たところかなりの出来で、これはいけるぞ！と高校生たちが盛り上がったであろうことは十分理解できる。テレビ局はあれをどう判断したのだろう？

「分からないわけないと思うんだよな、プロがさ。ちょっと本格的に調べればあれが作り物の合成だってことはすぐに分かると思うんだ。だからさ、テレビ局としては分かかって番組作っただと思うんだよな。だから俺も番組始まったときはニヤニヤして見てたんだ、よくやるぜ、って。でもさ、あれ、さすがにやりすぎだろう？」

そう思う。めちゃくちゃだった。抗議の電話が何万件とかかかってきたのではないだろうか？

「俺、だんだん怖くなっちゃってさ、誰かに話さないではいられなくなっ……」

それでこうして同じ仲間の後輩たちの所へ来たわけだ。でも、他にいるでしょうが、仲間が。まさかあれ金森先輩一人で作った

わけじゃないんでしょう？」

「ああ。メンバーは5人。でも卒業してからはバラバラで、みんな県外に出っちゃってるから」

金森先輩は地元の大学の現在4年生だ。

「電話も？」

「駄目なんだ。どこも通じない。二人とは4月まではまあたまに連絡取り合っていたんだけど、今はみんな就職活動で忙しいんだろうなあ……」

青山高校はまずまずの進学校で生徒はほとんど大学に進学する。

大学4年の夏と言えばある意味大学生活の中でもっとも忙しく精神的にピリピリした時期だろう。金森先輩はまじめに教師への道を目指しているそうだ。

「まさかね……」

金森先輩は子どものように指を噛んだ。

「ほんとうに呪われているなんてことは……」  
眉間に苦悶がある。

「どうしたんです？ あれ、作り物だったんでしょ？」

馬木を見る瞳に脅えと動揺の色が濃い。

「の、はずなんだ……。でも、分からない……」

「何が？」

「幽霊の女の子だよ……」

幽霊役の女の子。そういえば見た感じ中学生の、まだ1年生くらいだった。

「映研のメンバーじゃないんですか？」

「違うんだ。実は……」

言うのを逡巡している。怯えている。ほんとうに誰かに聞いてほしいのはそのことなのだ。

蝉がまたうるさく鳴き出した。馬木も額からじつとりした汗が流れ落ちたが、身体の内部がヒクリと冷たい。肝が冷えるとはこういう状態か。ぼっちゃり型の金森先輩は滝のように汗を噴き出させな

がら、顔が見るからに青くなっている。

「実は・・・あれを本物だと信じているのがいるんだ。部員の嶋村早苗は、あれを本物だと信じ切って、本気で怖がっていたんだ・・・」

三津木は汗を拭き拭き釈明した。

「あの手の番組を生でやるリスクは、先生もちろんご存じですね？」

通常三津木の担当している「ほんとうにあつた」心霊シリーズは収録で行われる。放送は金曜夜7時から2時間のスペシャル枠で二月に一度くらいの割合で行われている。これまで生放送でやったことはなかった。

この手の番組でナマは怖い。

何もなくて白けるか、逆に事故が起こって番組がめちゃくちゃになるかだ。どちらもしゃれにならない。

通常一月前、遅くとも二週間前には収録を済ませている。編集作業もあるが、それより収録中に「何か」があつてそれを次回の番組につなげられるかどうか、追跡取材で見極めて、番組放送時に予告として流すかどうか決めるのだ。だからスタジオの収録はいろいろな場合を想定してかなり長めにそれぞれの話をふくらませてもらっている。編集でどれを取り上げるか決め、後は切るのだ。

今回無茶とも言える生放送を敢行したのは、二つの理由がある。

一つは番組の人气が低迷してきたからだ。視聴率が取れない。同じスペシャル枠のライバル「生追跡！真相を探れ！」シリーズにすっかり視聴率を奪われた形だ。それが他でもないこの紅倉美姫大先生のおかげだ。

「生追跡！真相を探れ！」はアメリカのテレビ番組を真似た未解決の凶悪事件を視聴者からの情報収集で解決しようという生放送番組だ。現在進行形のスリリングさと実際に事件解決につながった実

績とでグングン視聴率を上げてきた。その中で超能力者による透視で事件の真相を探り、犯人を捜し出したり、行方不明の被害者・死体を見つけ出したりするコーナーがある。そこに登場したのが紅倉美姫だ。当初は外国から犯罪捜査に実績のある外国人の超能力者を招いていたが、彼女の登場以来ほとんど彼女が一手に引き受けるようになった。

彼女は、当たる。ほとんど百発百中だった。これまでに見つけた死体が七体、特定した殺人犯が15人、内9人が逮捕されている。

登場した当初は「霊能者」という肩書きで胡散臭く見られていた。そう、もともと紅倉美姫は三津木が「ほんとうにあった」シリーズで発掘した霊能者だった。そちらで評判となり、「ステップアップ」という形で「生追跡！」シリーズに試用で登場したが、今ではそちらの実績で世間の認識は高い。三津木としては面白くないが、紅倉美姫は義理堅くいまだに「ほんとうにあった」シリーズにも出演してくれている。「ほんとうにあった」シリーズで視聴率が稼げるのは彼女の登場コーナーだけだ。

今回の放送を生で敢行した理由の一つが生放送で視聴率を稼いでいるライブルへの対抗意識。

もう一つの理由は、製作会社からの強力な売り込みがあったからだ。

「ほんとうにあった」シリーズはチーフディレクターの三津木がいて、局の製作チームがあり、しかし実際のロケや再現ビデオの製作は外部の製作プロダクションに任せることが多い。三つほど仕事を任せるプロダクションがあるが、そのメインである「アートリング」がそもそも今回の企画を持ってきたのだ。

「嶋村早苗さんっていうのは？」

「映研5人のメンバーの内の唯一の女の子だ。俺たち男はみんな2年で、彼女だけ1年生だった。彼女にだけは・・・あれが作り物だ

って知らせないで見たんだ……」

金森先輩の苦悶に深い後悔の念が滲んだ。

「ビデオは俺たち2年4人が、幽霊役の女の子を使って、作ったんだ。サナちゃんには『本物の心霊ビデオを撮るぞ!』って言って、わざわざ現場に連れて行って、騙してね……。夏休みだったし、ちよつとしたいたずらだったし、面白かったし……。俺たちみんなサナちゃんをアイドルみたいにかわいがっていたからさ、ちよつと脅かして楽しむつもりだったんだ。もちろんすぐに『ドッキリでしたー』ってばらして、笑い話にするつもりだったんだ。実際見終わってからすぐに教えたしね……」

金森先輩の話しぶりでは、それで済まなかったわけだ。質問する。「たしか見ているときにテレビが壊れたとかって言ってましたよね？」

「うそうそ」

金森先輩は手を振って否定した。

「それは怪談の作り話。ちゃんと最後まで通して見たよ。見ている間俺たちはそれっぽいこと言って演技してたけれどね」

そうして内心彼女のことを笑っていたわけだ。いたずらにしてはやり過ぎな気がする。金森先輩も反省したように

「そうだなあ……。一時間は長すぎたなあ……。本物ってことで彼女に見せたからね。青くなっちゃって、さすがに俺たちも途中から拙いかなって思い始めたんだけど……」

なかなかやめようとは言い出せなかったわけだ。

「部屋は……。まさにここだよ」

思わずテレビを見る。今日は葉子がいないのでテレビはついていない。

「カーテン閉めて薄暗い中見てただけだし、見終わってカーテン開けたときにはビックリしたな、サナちゃん、真っ白になって完全に固まっちゃってたから……」

それは……

「拙いんじゃないですか？」

「拙いよね。大慌てさ。嘘だよ、全部作り物だよ、俺たちが作った劇ビデオなんだ、って。ブルブル首を振って信じようとしないうから隠しておいた『バケモノ』のお面まで大慌てで引っ張り出してさ。でも、彼女、サナちゃん……」

金森先輩は暗く悲しい顔をする。

「呪われる！ あの女の子に呪われる！ って大声でわめいて、俺たちは慌てて彼女を抑えて口を塞いで……」

「何かしたんですか！？」

「と、とんでもない！」

金森先輩は青い顔で強く否定した。

「とにかく俺たちは彼女を納得させようとビデオの素材、ブルーバツクで幽霊の演技をしている女の子の映像とか、マスクを脱いで笑ってる女の子の映像とか見せてさ、とにかく謝って、作り物だって納得してもらうために必死で説明したよ」

「ひどいわ！」

沖浦が憤慨して責めた。

「よくそんな話を笑い話にして話せますね！」

笑い話というのは昼休みに女子たちを怖がらせていた怪談のことだろう。金森先輩はひどく困って言った。

「いや、落ちがあるんだよ。サナちゃん、平謝りに謝っている俺たちに向かって急にケラケラ大笑いを始めてね、狂ったかってギョツとしたけど、

「なーんちゃって」

って。舌を出して。

「やーい、引っかかった引っかかったー。分かってましたよーだ、作り物だってことくらいー」

って。なーんだー……。って、俺たちはすっかりへなへなへたり込んでしまってたね。まあ……。ほっとしたよ。笑い物にされたのは俺たちの方だったってわけ」

なーんだ……。だが、金森先輩の表情は冴えない。

「それで俺たちもすっかり白けちゃったってところもあるんだけど……。本当のところはどうなのか、分からない。サナちゃんはあるとして笑ってたけど、ほんとうに偽物だって分かってたんだろうか？　ほんとうに偽物だって納得したんだろうか？　俺にはサナちゃんの脅え様はひどくリアルで……。演技には見えなかった……。」「ふとした静寂というものがある。それまで当たり前に聞こえていて気にも留めなかった音が突然途絶えて、瞬間的に静寂を感じる」とが。蝉の鳴き声が途絶え、まさにその静寂が下りてきた。

「……。早苗さんはその後？……。」

「ふつうに学園生活を送ってたよ。ほら、君たちが今こうして映研部員でいられるのは彼女が後を継いで同好会を継続させてくれたおかげじゃないか」

「今現在？」

「それは……。分からない。学年が違うからね、卒業しちゃってからは、それっきりだ」

また静寂が下りてくる。重い。

「で……。」

話を思い返すと……

「女の子、って言うてましたよね？　幽霊役の？　それは……。誰なんですか？」

金森先輩の顔が一段と青く、病氣的に青黒くなった。

「それは、青木……。部長が連れてきたんだ、親せきの女の子だって、たしか小学校の5年生だったと思う。名前は……。青木……。ようこ……。」

蝉がまたけたたましく鳴き出し、ゾクリと震えが走った。偶然だろう。しかし5年前に小学5年生なら、葉子と年齢は合う。が、名字が違う。

金森先輩はゴクリとつばを飲み込み、恐怖をいっぱいたたえた目で馬木を見つめて言った。

「そ、それでさ・・・まさかと思うんだけど、きのこの番組、幽霊みたいな女の子が出てきただろう?」

馬木の目にも恐怖が感染する。まさか・・・聞くのが怖い。

「あれ、彼女に似ている気がするんだよ。5年前に幽霊を演じた女の子が、5年間で成長した姿に・・・・・・」



### 第3話 事件

沖浦が言った。

「それのどこが怖いのよ？」

怖い、とは一言も言っていないが金森先輩も馬木もそういう青ざめた顔を見合わせていた。沖浦は呆れたように言った。

「だから、その子だったってことでしょ？ 5年前に幽霊を演じた女の子が、5年後に再び幽霊を演じてテレビに映ったっていう？」

「あ・・・」

馬木は思わず間の抜けた声を出した。考えてみれば、その通りだ。沖浦は呆れ返った。

「5年たっても5年前のまま成長してなかったら、そりゃあ怪談でしようけれど、成長してたんでしょ、5年分？ だったらなんの不思議もないじゃない。それが桜野さんかどうかは、あたしは見てないからなんとも言えませんけどね」

そうだ。もともと番組が最初からヤラセとして作られていたなら、その元のビデオの出演者である桜野・・・かどうかは未確認だが、テレビ局の方からあらかじめ「仕込み」として出演依頼があってもおかしくない。いや、まさしくそういうことだったのではないか？

それが桜野であつたなら、馬木たちも彼女にまんまと騙されたということになるか。

うひゃひゃひゃひゃ、と松岡が気味の悪い笑い声を上げた。

「そいつは傑作だな。どこの間抜けだろうな、一番引つかかってビビってやがんのは？」

・・・・。本気で腹の立つ奴だ。そもそもは金森先輩がそんな当たり前のことをさも恐ろしそうに言うから・・・、と金森先輩を見ると、丸メガネの奥の目をまん丸に見開いていて、馬木はギョツと

した。

「ど、どうしました、先輩」

「君ら、知っているのか、その女の子を？・・・」

「ええ。うちの部員ですよ。今日はまだ来てないですけど」

「生きて・・・いるのか？」

「え？」

なんだろう、金森先輩のこの驚愕ぶりは？ 馬木の胸にまた重苦しい不安がわき上がってきた。

「どういうことですか？ その・・・青木ようこさんという女の子は、亡くなったんですか？」

「あ、ああ・・・、そ、そうなんだよ、そのはずだ・・・」

「どういう？・・・」

「青木がそう言っていたんだ。一昨年、春、東京にいるはずのあいつと思いがけず出会ってね、あいつは黒服を着ててさ、葬式か？つて訊いたら、うん、ほら覚えているだろう、ビデオに出てもらったように、あの子が死んでしまったんだ、って言ったんだ・・・」

今度はちやかす人間はいなかった。重苦しい沈黙が全員を包み込んだ。

「ビデオであんな役させちゃったからさ、俺、怖くなって、死因を訊いたんだよ。そしたらあいつ俺のそんな気持ちを見過して笑って言ったんだ、交通事故だ、ありきたりの、運の悪いな、って。もう2年も前のことだ、関係ねえよ、ってね」

「・・・。それで、割り切れるものだろうか？」

いや、そんなものか。それがビデオ出演直後の事故なら関連づけて考えるだろうが、2年も経っていたら、無関係だろう。ホラー映画に出演するだけで命の危険を感じていたらその手の俳優なんてやつてられないだろう。

しかし、すると・・・、どういうことなのだろう？

「金森先輩は番組の幽霊らしき女の子がビデオに出演した女の子に似ているから、怖く感じているわけですよね？」

「うん・・・」

「でも俺たちはさっき言ったように、幽霊らしき女の子がうちの部員の桜野葉子に似ていたから、不思議がっていたわけですよ」

けっきょく青木ようこと桜野葉子は無関係か？

金森先輩は困って言った。

「その桜野葉子ちゃんって写真ない？」

家になら数枚あるが・・・

「あるわよ」

沖浦が携帯を差し出した。部員たちを写した写真が何枚か保存されている。そんなに仲間意識が高い奴だったのかと感動した。

「あれ？あれ？おかしいな。桜野さんの写真、ブイサインしている思いつきりアップのがあったはずんだけど・・・」

行ったり来たりを繰り返して、あったのはけっきょく馬木の肩越しに後ろを向いている写真一枚だけだった。

「ごめーん。おかしいなあ・・・、保存に失敗したのかな？・・・」

背中まである髪をポニーテールにまとめている。今どき珍しいかも知れない髪型だが、目のクリツとして子鹿みたいな葉子にはよく似合っている。携帯の画面を覗き込みながら金森先輩は首を傾げた。

「よく・・・分らないなあ・・・」

そりゃそうだろう。

「先輩、どうです？明日かあさってでもまた来てもらえます？俺写真持ってきますよ」

「ああ、いいよ、また明日来るよ」

高校生のガキどもにつき合うのも鬱陶しいだろうが、金森先輩もよほど気になるようで承知した。

ところで、馬木は考える。ビデオの中の女の子は葉子に似ていただろうか？小学5年生ということだが、もっと大人っぽく見えた。しかし小学校の56年生と言えば成長期まった中で、特に女の子は大人っぽい子と子どもっぽい子と両極端だ。光量不足の荒い画面の中でかなりばかされていたから顔はよく分からなかった。はつき

り映っているのはバケモノのどアップだけだ。なんとも言えない。

「ビデオのオリジナルの素材って残っていないんですか？」

「さあ？・・・」

金森先輩は首を傾げて考える。

「あれば・・・、持っているのは青木だ。処分してなければね」

金森先輩は言い訳するように言った。

「その死んじやった女の子、ようこちゃんさ、撮影はすごく楽しそうにノリノリでやってたんだ。お化けビデオを作ってみみんなを驚かせるんだ、って。まあ、お化け屋敷のお化けを演じるノリだよ。だからさ、俺たちもあのビデオにはそんな思い詰めたようなシリアスな思い込みなんかなかったんだよね・・・」

頭の中であれこれ思いを巡らせていた三津木に紅倉美姫が問うた。

「あんな馬鹿な代物がどこから出てきたんです？」

「あー、そうです。先生もご存じでしょう、製作プロダクションの「アートリング」。あそこの社長が持ってきたんですよ。あ、いや、ビデオ自体はうちの倉庫に眠ってた奴なんです、素人の投降ビデオで。社長、等々力さんが「おまえんところこういうブツがあるだろう？」って言うてきて」

等々力社長は三津木の大学の先輩で45歳。三津木もこういう番組を作りながらもそれなりに大会社内に人並みのしがらみや野心があるが、等々力は根っからの好き者だ。付き合いはもうずいぶん長い。

「で、探したら、出て来ちゃったわけですよ。そう言えばわたしも見たことがありますね、まあ、ああいう代物ですから、こりゃ使えないなお蔵入りしていたわけ・・・」

三津木は、面白いとは思ったが、これを「本物」としてはとてもしゃないが放送できないなと考えたのだった。三津木もプロだから

これを送ってきた坊やたちの考えなどお見通しだ。

「それで改めて二人で見えてみましてね、等々力さんがこれをやるう！と、すっかり盛り上がりつつやいまして。わたしは反対したんですよ。これやつちゃったら笑い物になって「ほんとうにあつた」シリーズは打ち切られちゃうって。でも等々力さんはすっかりその気で「生で行こう！絶対いけるから」って。まあ、あの人の言葉は当てにならないんですが、わたしも・まあ、魔が差したって言うんですか、そうだ、どうせ作り物なら最初から仕込みで生で行ってもいいか？って思っちゃいまして……」

つまり完全なバラエティーの作りだ。まじめな心靈番組で生は怖い。でも最初から全部仕込みの作り物なら、生の方が緊張感があつて面白いに決まっている。三津木もついその気になってプロデューサーを説き伏せ、……ここに来る前にさんざん絞られてきた。今や三津木のディレクター生命は風前の灯火である。

三津木は叱られている子どものように紅倉美姫を上目遣いに覗いた。紅倉はふうーと困ったため息をついた。

「馬鹿なことをしましたねえ。」

それで、岳戸さんにはどう話を持っていったんです？

岳戸由宇の名前が出て芙蓉美貴の方は露骨に輕蔑の色を浮かべた。三津木はちよつと心が痛い。

「岳戸先生にはまずビデオを見てもらつたんですよ、いかがでしょうか？って、何も言わず」

その時の彼女の反応は、三津木の予想と正反対のものだった。

「岳戸先生は非常に感心されて、これは恐ろしいものだ、なかなか気持ちでは痛い目に遭いますよ、これはわたしに任せなさい、と、有無を言わせぬ調子で断言されて……」

それで彼女には今さら「作り物です」とは言えなくなつてしまったのだ。彼女に見せた時点で三津木はこれが作り物の合成映像であることを確認していた。

「フツ」

と芙蓉美貴が小ばかにした笑いを漏らした。

「あの人信じているわけね、いまだに。やっぱりタレントね」

彼女を悪く言われて三津木はまた心が痛んだ。そうだろう、二人から見れば彼女などしょせんアマチュアの三流霊能者だろう。だが、それでも三津木は彼女を悪く言われたくはない。

紅倉美姫が芙蓉をたしなめるように言った。

「美貴ちゃん。あなたも考え違いしているわよ。彼女は、恐ろしい人よ」

芙蓉も三津木も『え?』と驚いて紅倉美姫を見た。紅倉美姫は半眼でじつと壁の向こうを見据えて言った。

「三津木さん。あなた、彼女を連れてきているわよ。彼女の意識が、わたしたちの会話を聞いているわ」

三津木はゾツとするより、何故か慌てた。紅倉美姫は三津木に視線を向けると軽く微笑んだ。三津木はドギマギする。

「生き霊!？」

芙蓉はキツと凄んで紅倉美姫の見ていた辺りに神経を集中させた。

「いいわよ、美貴ちゃん」

紅倉はどうつてことないように弟子に言った。

「意識と言っても無意識に近いものよ。たまたま、付いて来ちゃっただけよ。ね?」

芙蓉がきつい視線を三津木に向けた。

「へー・・・、そういうご関係だったんですか?」

へらつと唇が侮蔑を浮かべる。若い娘は残酷だ。独り身の中年男性の寂しさなんて分かるまい。

「気になるのは、」

紅倉美姫は声のトーンを改めて言った。芙蓉も気を引き締める。

「岳戸さんがどの程度意識的であるか、です。どうです?あの番組はどこまでヤラセで、どこから予定外だったんです?」

「そうですね、やっぱり中継に女の子が映っちゃってからですよ」  
「そうだ、あそこからめちゃくちゃになったのだ。あれは仕込みで

はない、少なくとも三津木は知らない。しかし・・・あの中継を現場で取り仕切っていたのが、アートルングだ。電話で話した等々の様子ではあれも仕込みではなかったようだ・・・少なくとも等々力は知らなかったはずだ、と、三津木は信じている。

「先生、あれは・・・なんだったんです？・・・」

紅倉美姫も珍しく答えに迷った。

「あれは、人です。生きた人間です。が、霊的なものも強く感じます。本人のものであるような、ないような・・・わたしにも判断が付きません」

芙蓉美貴が驚いた顔で紅倉美姫を見つめた。彼女は自分の師を神のごとく絶対に信じているのだ。

紅倉美姫が目を閉じ、首を傾けた。

「この件はひどく複雑なようですね。様々な思惑が入り交じっています。それらが全て偶然か、何ものかが仕組んだものか、分かりません。邪悪な物が感じられます。人が死にます。恐ろしい出来事が起きます。あなたも、わたしも、大勢の人が巻き込まれます。地獄の光景が見えます。この世のものではありません。血です。大量の血が真っ黒に渦巻いています。口です。巨大な口が開いて何ものかを飲み込もうとしています。・・・・これは、なんでしょう？ 花が見えます。真っ赤な・・・薔薇・・・・恐ろしい・・・・」

三津木は高級な革張りのふかふかソファに腰掛けながら、ストンと、腰が抜けてひっくり返ったような感覚を覚えた。夢の中で階段を踏み外すような感覚だ。

紅倉美姫の口からこれだけ恐ろしい予言を聞いたことはない。おまけに、彼女自身の口から「恐ろしい」という言葉が出るなど、これまで一度もなかった。

三津木は背中をゾロゾロ冷たい汗が伝い落ちるのを感じた。クラーのせいばかりではない。三津木は、恐怖を感じていた。

自分のせいなのだろうか？ 自分があの番組を作ってしまったせ

いなのだろうか？　これからいったい何が起こるといふのだろうか？  
紅倉美姫が目を開いた。三津木は思わずヒツと息を飲んだ。紅倉の目は充血して全体が真っ赤になっていた。それこそ真っ赤な薔薇の花びらだ。

紅倉美姫はその目でまた三津木の背後の壁を凝視した。

しばらくして、ふつと笑い、目を閉じた。

「美貴ちゃん、タオル」

芙蓉美貴はあらかじめ氷水で絞っておいたハンドタオルを紅倉美姫のまぶたにあてがった。紅倉は気持ちよさそうにはあーっと思いを吐き、しばらくソファに頭をもたれて上を向いていた。タオルを取って目を開くとまだ幾分充血が残っていたが一応元の目に戻っていた。

「逃げられちゃった、岳戸さん。かなり強く探りを入れたからさすがに気付かれちゃったわね」

失敗失敗と笑った。紅倉美姫は三津木にいたずらっぽく訊いた。

「困ってるんでしょ？」

「そりゃあもう！」

「助けてあげましょうか？」

「是非！・・・お願いします」

マジで首になりそうだ。プロデューサーの説教も紅倉美姫の訪問で逃げ出すことが出来たのだ。そのプロデューサーだって泣きそうに・・・既に半分泣いていた。

「岳戸さんから連絡してくるでしょう、あの番組の続きをやらせろって。きっと、今度はわたしも出演させると言うでしょう。わたしと対決させろって。わたしの返事は、OKよ」

三津木も泣きそうになった。うれし泣きだ。たすかったー・・・と「わたしが出演するとなれば上の方たちもあなたに番組を作らせてくれるでしょう？」

えっへんと威張った。三津木は心の中で女王様と手を合わせた。芙蓉美貴は何故先生がこんなむさい中年男にそこまで好意を寄せる



のか怪しみ、幾分不快に感じている。三津木はちよつと得意になった。三津木と紅倉美姫の間には特別な固い絆があるのだ。

「でも、」

と、紅倉美姫は浮かれる三津木にクギをさした。

「今度は面白半分では出来ないわよ。本気で危ないわよ。もしかしたら更に事態を悪化させて被害を大きくしてしまうことになるかも知れません」

「被害……」

人が、死ぬのか？……

紅倉美姫はため息をついて言う。

「しかし、放っておくこともできません。事態はおそらく既に進行しています。止めなければ、際限なく広がっていくでしょう。やがて本当に死者が出ます。止められるのは……、やはりわたししかないのでしょうか……」

紅倉美姫は静かに、怖い顔になった。芙蓉美貴も思わずゴクリとつばを飲み込み緊張した。紅倉美姫は言う。

「今のところ鍵は二つ、岳戸宇さんと、ビデオ。岳戸さんにはいずれご挨拶するとして、ビデオのことをもう少し詳しく聞きましょうか。アートルングの等々力社長は最初からビデオのことを知っていたんですね？ どうして知っていたのでしょうか？」

「はい。新人ADの青木君から聞いたそうです。自分が高校時代に作って投稿したビデオがあるはずだって」

馬木はもう少し金森先輩に質問した。

「ところで先輩、あのビデオ映像がインターネットで流されているのって知ってますか？」

「ああ。ビックリしたね。ま、あれを流したのは青木だろうね」

「青木……部長？」

「そ。あいつさ、ここ卒業してから映像系の専門学校2年通って、その後「アートリング」って言う製作プロダクションに入社したんだ。低予算のホラービデオとかテレビの心霊番組の製作なんかやってる、ほとんどホラー専門の会社。昨日の番組にも「アートリング」の名前があつたよ」

「なんだ・・・」

呆れた。冒頭でディレクターがインターネットの映像は番組とは無関係だって言っていたが、大嘘、思いつきり身内じゃないか。ほんと、よくやるぜ、だ。

「じゃあ、全部青木さんの仕業ってことで話がまとまるじゃないですか？」

どうせ番組自体ぜんぶヤラセなんだから、あの女の子だってその青木さんが仕込みで似た女の子を見つけてきて幽霊を演じさせた。

ただ、あそこまで無茶苦茶にして、新人の若造の青木さんにそこまでの権限はないだろう。金森先輩は首を傾げて言う。

「まあ、そうだなあ・・・。青木の話じゃその社長、かなり悪乗りしやすい人みたいだからなあ・・・」

ま、そんなところか。その社長さんがつい暴走してテレビ局も慌てるあんなめちゃくちゃな番組を作っちゃったということだ。

そうなると馬木がただ一つ心配なのは、その青木さんが見つけてきた幽霊役の女の子が葉子だったのではないかということだ。

「そうだ、あの家ってこの近くなんですか？」

ビデオを撮影し、昨夜番組でライブ中継していた家だ。金森先輩はクスツと笑った。

「気付かなかった？ あれ、五十嵐大学の医学部のすぐ裏だよ」

五十嵐大学は金森先輩の通っている地元の国立校で、金森先輩の所属する教育学部などの入る本校舎は青山市の外れにあつてだいぶ離れているが、医学部だけ市の中心に近い所に付属病院と共にある。ここ青山高校から、せいぜい4キロも離れていない。

「あんな家ありましたっけ？」

「松林の中をずーっと道路が走っているだろう？　で、医学部があるって、寮のアパートがあるだろう？　そのすぐ隣が空き地になってて、そこに一軒だけ、あの家があるんだよ」

「あ・・・」

たしかに、見たことがあるように思う。そうだ、あれはてっきり大学の施設で、寮の管理者か何かが住んでいるんだとばかり思っていた。

「あそこ、空き家だったんですか？」

「うん。もうずーっと。俺が高校生の時からね」

「空き家には見えなかったように思うけどなあ・・・」

「道からじゃ分からないかもしれないけれど、近づくとけっこうすごいぜ。裏は、テレビに映ったとおり崩れているしさ。中もろくがきだらけ」

「分からないなあ・・・。空き家だったって所有者がいるわけでしょう？　かつてに中に入ってからくがきなんか、誰がするんです？」

「そりゃあ、いろいろ、悪い奴らがいるからねえ」

金森先輩はニヤニヤ嫌な笑いを浮かべた。

「昔は大学生たちがホテル代わりに使っていたらしいよ。今はさすがにそんな雰囲気じゃないけどねえ・・・」

どんな雰囲気だか。

「じゃあやっぱり、当然女の子の幽霊が現れるって話は？」

「もちろん、作り話。ブレアウィッチプロジェクトを真似てあちこちのそれ系のホームページにうわさ話をばらまいたんだよね」

まったく、どこまでもふざけた話だ。だんだん腹が立ってきたが、ふと見ると今度は沖浦が青い顔になっていた。

「どうした？　だいじょうぶか？」

「先輩、あそこなんですか？」

沖浦は怯えたように金森先輩に言った。

「まずいですよ、あそこは・・・」

「その昔実験動物の死骸の焼却施設があった、だろう？」

金森先輩はごめんごめんと笑いながら謝った。

「それもデマ。みんな青木の作り話。もうありとあらゆる作り話をばらまいたからねえー」

金森先輩は昔のいたずらを思い返してへらへら笑っていたが、沖浦の脅えは収まらなかった。馬木は心配になった。

「どうしたんだ、おまえ。幽霊とか全然信じてないんだろう？」

「信じてないわよ、馬鹿馬鹿しい。でも、」

沖浦はキツと遠慮なしに金森先輩を睨み付けた。

「そういうくだらない悪ふざけが嫌いなんです！」

・・・こいつはどうも生真面目すぎる嫌いがある。そこがいいところではあるが、苦手な部分だ。沖浦はなおも言う。

「それに、それ、多分本当のことですよ」

「え・・・」

今度は金森先輩が青くなった。

「わたし中学校時代社会科の課題で地域医療の変遷を調べたことがあつて、その時五十嵐大学病院のことを調べたんです」

沖浦の家はこのすぐ近所だ。

「昔の見取り図と現在の敷地を比較したんです。その場所には「実験試料消却所」ってあつて、そのとなりに・・・「動物墓地」って・・・」

金森先輩の顔がヒィ・・・とひきつった。

「そ、そ、そうだったの？ 知らなかった・・・」

偶然かなあー、それともあいつ知ってたのかなあー・・・と金森先輩は悩み、沖浦は意地悪にざまあ見ろと言う顔で眺めた。

「ふざけてそんなことするから罰が当たったんですよ」

「はい。すみません」

金森先輩は神妙に後輩に頭を下げた。

「じゃ、いいかな？ 俺、そろそろ帰るわ」

金森先輩は悄然と立ち上がり、

「はい、どうぞ。いろいろありがとうございました。ああ、ごちそ

うさまでした」

馬木も立ち上がって挨拶した。金森先輩はじゃあねーとフラフラ出ていった。

「おい、沖浦」

馬木は睨んで言った。

「それ本当かあ？」

「うっそ」

ベエと舌を出した。

「おまえな」

「いいじゃない、あんな安っぽい嘘に引かかって、心にやましいところのある証拠でしょ」

だから生真面目で正義感の強すぎるのが困りものなのだ。松岡がひやはははと気持ち悪い声で笑った。

「副部長グツジョブ！・・・俺、あの人嫌い」

こいつに嫌われてもぜんぜん気にすることはない。

「それではその青木っていう新人ADさんがインターネットに映像を流出させたんでしょうか？」

「はあ・・・」

紅倉美姫に問われて三津木は曖昧に返事をした。

「当然そう疑いますよね？ わたしも疑いました」

「ちなみにあなたは、そっちの方には関係していないの？」

「してません」

芙蓉美貴にほんとうかしら？と疑いの視線を向けられて三津木は心外なと眉をしかめた。

「本当ですよ。その青木ADもきつく問い詰めたんですよ。でも本人は知らない、自分はやっていないと言い張って、別に犯罪でもありませんし、ま、こっちは警察でもありませんし、そう言われれば信じるしかありません」

「青木さんってどんな人？」

「そうですねえ・・・」

三津木は考えた。考えなければ思い出せないくらい特に印象もない。

「無口ですね。まだ新人ですから当然ですけど。等々力さんはノリ重視の人ですから、現場でもきつい言葉でどやしたりってことはないんですよ。で、わりと和気あいあいって感じなんですけど・・・、そんな中でかえって浮いてる感じだったでしょうか？　なんとなく扱いづらい雰囲気の子でしたかねえ・・・」

「つまり、何考えているか分からない、陰では何をやっているか分からない、ってことね」

「はあ・・・、そうなりますか・・・」

三津木も言葉ではかばいながらやはりこの青木を疑っている。今さら新人A D一人に責任を負わせてどうなる問題ではなくなっているが。

「では、そのビデオを改めて見せてもらいましょうか。オリジナル、あるんでしょう？」

「はい。すぐにご用意します」

ビデオを見ながら三津木はずっと退屈していた。これが作り物であるのは分かり切っている。今さら見てもしょうがない。物は今や昔懐かしくなりつつある8ミリビデオだ。もっともこれも純粋なオリジナルではなく、パソコンで加工した映像をダビングした物だ。電動ブラインドを閉じて薄暗くして46V型の液晶大画面テレビで見ている。粗悪な素材をこんな大画面で見ていると目が痛くなってくる。ビデオのオリジナルは1時間もある。

三津木はのんびりビデオ鑑賞している二人を羨ましく思った。紅倉美姫が自分たち一般庶民のようにあくせく働く必要はまったくない。彼女がこの特別応接室に案内されたのはテレビで視聴率が稼げるだけではない、裏で局の上の人間たちの個人的な相談役になって

いるからだ。

40分近く経ってバケモノが登場した。

『何撮ってんのよオオオオオオ！』

芙蓉美貴がビクリとして二人の後ろに立って見ていた三津木は思わずクスリと笑った。どうやら彼女は本物よりこけおどしの作り物の方が怖いらしい。まあ、ドッキリビデオとしては良くできているし。

紅倉美姫はさすがにビクともしない。もっとも彼女の目には映像はほとんど見えていないだろう。もやもやした光がうごめいているだけだ。代わりに、彼女の目には別の物が映っている。

3パート目になって、オルゴールが鳴り出すともやもや煙のような幽霊がオルゴールの回りをひたすらうろつろ歩き回っている。時折ボケたり部分的にはつきり映ったり、なかなか凝った映像処理をしているが、もう飽きた、退屈だ。

「ま、こんなものですよ」

三津木は退屈を我慢できずに紅倉美姫に声をかけた。

「まあ、なかなかよく出来てはいますがね」

横から紅倉美姫の顔を覗き込んだ三津木はギョツとした。紅倉美姫はもの凄く恐い目で画面を睨んでいた。空気が違っている。紅倉美姫が強い霊能力を発揮する時は三津木のような素人でもはっきり分かる。芙蓉美貴もまた画面を凝視し、画面の青い光に額の脂汗を光らせていた。

「ど、どうしたんですか、先生！芙蓉さん！」

「・・・・・・・・・・」

紅倉美姫が画面を指さした。三津木はえ？と画面を見て、・・・・・・・・・・戦慄した。

「な、なんだ、これは・・・・・・・・・・」

ゾツと冷たい物が背筋を駆け上がった。画面全体がゆらゆら揺れている・・・・ように感じるのは、全体に白いもやが浮かんだり消えたりしているからだ。よく見ると濃淡があり、何かの形がある。そ

れを見極めたとき、三津木は「いい……」と悲鳴を漏らした。骸骨だ。いくつもの骸骨たちが浮かんでは消え、画面を横に、斜めに、行き交っている。水槽に魚をいっぱいに入れて、その魚たちが狭い水槽を脱出しようと泳ぎ回っているようだ。骸骨たちはどんどんはつきり見えてきて、後ろのオリジナルの映像を覆い隠す勢いだ。三津木はドシンと背中を壁にぶつけた。思わず後ずさっていたのだ。

「せ、先生、な、なんですか、こりゃあ!？」

もう何度も見ているビデオだ。断じてこんな物は映っていないかった。

「わたしが見たからです」

紅倉美姫は芙蓉にビデオを止めさせ、言った。

「明かりを」

三津木は慌てて走ってブラインドを開いた。昼の光を浴びて三津木はほっとしたが、紅倉美姫の顔を見てまたギョツとした。真っ青になっている。

「あれは最初からビデオに映っていたものです。が、表には現れていなかったのです。あなたがもしもつと念入りに画像解析していたら影くらい見つけられたと思います。もっとも、前の映像の消し残りと考えたでしょうが」

ビデオでそういうことはある。前の映像に重ね取りした場合それが完全に消えず新しい映像の奥に残ってしまうことがあるのだ。

「しかし、でも、これは……」

「わたしの霊力に反応して増幅されたのです。わたしが視ようとすると、表に引き出してしまったのですね」

恐るべき霊能力だ。

三津木は思い出した。

「江戸先生はこれが本物の心霊ビデオだとおっしゃっていました」  
「そうですね。彼女もこれを見ていたでしょう」

本物……だったのだ……。しかし映像としては現れず、特殊



な能力を持ったものにしか見えなかったのだ。

「恐ろしいですね」

紅倉美姫は言った。

「これは、この世の景色ではありません。いったい何故こんなものが現れてしまったのでしょうかねえ？・・・」

これは、三津木なんかの手に負える代物ではない。まったくなんという物を持ち出してしまったのか、今さらながら激しく後悔した。「行ってみなければなりませんね、これを撮影した場所に。そして、会わなければ」

馬木は廊下に出てぼんやり窓から外を見ていた。今日はもうおしまいだ。何をする気にもならない。

ここは二階。イチヨウの枝越しに正門が見える。金森先輩が歩いていく後ろ姿が見えた。車ではなかったらしい。自家用車はまだ持っていないようだ。正門を出ようというところでふと金森先輩が振り返った。馬木はあれ？と思った。突然人が現れたように見えたのだ。葉っぱが邪魔して見えていなかったただけだろうか・・・

女だ。黒髪の。変なかつこうだ。エプロンかと思ったら、白衣だ。医師や看護師の白衣ではなく、薄い緑色のパジャマの上に患者が手術の時にでも着させられそうな白いエプロン型の白衣を着ている。そういうファッションでも流行っているのか、馬木にはさっぱり分からない。

金森先輩はその女から声をかけられたのか振り返ったが、なんだろう、きよろきよろして、また道路の方に向き直った。歩き出し、立ち止まった。女が後ろに近づき、金森先輩が前に飛び出した。

あっ！・・・・・・・・・・・・・・・・

金森先輩は右手から来た車に跳ねられた。キイツと鋭いブレーキの音がした。金森先輩はもろに腰を跳ねられ前方に吹っ飛び、転が

った。頭の中で音と映像と順番がごっちゃになる。頭脳がショートして、真っ白になってしまった。ジーンと耳鳴りが大きくなってきて、思考が戻ってきた。事故だ！金森先輩が車に跳ねられた！

電気店の名前の書かれたワゴン車から作業着の若い男が下りてきて、呆然と金森先輩を見下ろしている。女も跳ね飛ばされた金森先輩を顔を横に向けて見ている。なんだ？なんなんだ！？馬木には女が金森先輩を突き飛ばして車に轢かせたように見えた。

女が歩き出した。自分が突き飛ばして轢かせた金森先輩を横目にゆうゆう道路を横断していく。おいっ！思わず馬木は心の中で叫んだ。女が、立ち止まり、ゆっくり振り向いた。馬木は何故か葉子か！？と思ったが、違った。100メートルくらいの距離か、はつきりとは分らないが21、2歳、金森先輩と同じ年くらいだ。女は馬木を見て、ニタリと笑った。やっぱりこいつだ！こいつが金森先輩を轢かせたんだ！女はまた向こうを向くとゆうゆう歩いていき、やがて家の陰に隠れて見えなくなった。

「ちくしょう！」

視聴覚室を出てきた沖浦がビックリした。

「なによ？ どうしたの？」

「正門の前で事故だ！金森先輩が轢かれた！」

「え！？・・・」

「なに！事故！？」

松岡が飛び出してきた。手にはしっかりご自慢のデジタル一眼カメラを持っている。

「そいつはたいへんだ！」

カメラを握って嬉々として階段を下りていった。

「110番しなくちゃ」

沖浦も馬木の隣で事故現場を見て慌てて携帯を取り出した。通行人や近所の人たちが徐々集まってきた。

「うわっ、たいへんだ。俺、職員室に行つて来る！」

角谷も走っていった。

事故・・・なのか・・・、と馬木はジーンとしびれの残る頭で考えた。事件、ではないのか？　しかし、今自分の見た光景は、あまりにも現実離れしていた。あの女が何者なのか、いや、本当にそんな女がいたのか、本当について30秒ほど前のことなのに、馬木の頭はもう自分の記憶に自信を持てなくなっていた。

警察の事情徴収で馬木は

「急ブレーキの音がして、見たら金森先輩が倒れていた」

と嘘をついた。いや、本当に嘘なのかどうか馬木にも分からない。何故なら、金森先輩は急に車の前に飛び出してきた。轢かれたのだ。突き飛ばした女の話などまるで出なかった。轢いた運転手が、あの女を見ていないわけないのだ。誰も見ていなかった。馬木だけだ、あの女を見たのは。

金森先輩は、命は取り留めたらしい。しかし、集中治療室に入り、意識は戻っていない。

夜8時過ぎ。馬木に桜野葉子の母親から電話がかかってきた。昼間馬木が話したのはやはり葉子の母親だった。しかし今の彼女の声は、せつば詰まって、昼間とは別人のようだった。

『ねえ、あなた、部長さん、葉子知らない？』

『いえ、結局今日は桜野さん学校には来なかったんですが』

『そうなの？　本当？　ああ、どうしよう・・・』

『桜野さん、どうしたんです？』

『ああ、あの子、葉子ね、どうやら昨日の夜家を出ていったきり帰ってきていないらしいのよおお・・・』

馬木は、再び頭が真っ白になった。

## 第4話 探索

中谷志保の容態は一応安定していた。未だ意識は戻らないが腫れは引いている。

腫れ、というべきか？・・・

と、担当した外科の黒井医師は疑問を持っている。交通事故の激突などによる頭部の腫れで一番怖いのは脳の膨張だ。頭蓋内部で脳が膨張すれば、圧迫され、死亡、深刻な後遺症の残る恐れが高い。そうした場合には緊急に開頭手術が必要となる。だから外科の自分が担当した。が。

中谷志保の症状は明らかに違っていた。頭部及び顔面が風船のように膨らみながら、ぶよぶよしているわけでも、ぱつぱつに突っ張っているわけでもなかった。骨が、皮膚の下にあった。

そういう顔、としか言えない。まるで宇宙人だかアマゾンの半魚人だか知らないが、そんな・・・言っては失礼だが、バケモノ顔だ。そういう骨格をしているのだ、もともとこういう顔だとは思えなかった。母親は激怒した。娘はこんなバケモノではない、と。黒井始め当直の医師たちは迷った。骨が短時間で形が変わるほど膨張するなどあり得ない。腫瘍が時間をかけて進行するならあり得るが、母親の話では突然苦しんで暴れだし、こんな顔になってしまったという。事実、病院に搬送されてきたときにはぐったりして時おり痙攣する程度だったが、救急隊員が駆けつけたときにはまだ苦しんで暴れていたという。

あり得ない。あり得るとすれば、はなはだSF的な発想だが、遺伝子の突然変異的異常だ。まあ、あり得ない。常識的に。

しかし、現実には、中谷志保の顔は元に戻った。今どきの、黒井にはよく見分けのつかない典型的なコギャル顔だが、まあかわいい顔

に。発症が午後9時ちょうど、翌午前5時、発症から8時間後に徐々におよそ30分ほどかけて元の顔に戻った。これもあり得ない。骨だ。骨がこんな短時間に膨張したり痩せたりするわけがない。が、黒井自身が確認したように、現実だ。

中谷志保の病症は痙攣と呼吸困難だった。巨大な顎に圧迫されて、というより、巨大化した頭部を細い首が支えきれずに喉がふさがれてしまっていたのだ。鎮静剤を射ち、気管内チューブを挿入して呼吸を確保した。治療と言って、他に出来ることはなかった。その後彼女は眠り続け、8月6日現在午前11時、発症から38時間が経った。

「原因はなんでしようねえ？」

県の保健所から来た職員が肥大した頭部のレントゲン写真を見ながら訊いた。原因。未知のウイルスという可能性もなくはない。保健所の気になっているのはこの病気の感染の危険性だ。

「さあ・・・、なんでしようなあ。今のところさっぱりです」

黒井医師も脳のCTスキャン画像を見ながら言った。外科である黒井の仕事はまず患者を治すことだ。未だ目覚めない彼女の容態の方が気になる。未知の病気だ、予断は禁物だ。

携帯の呼び出しが鳴り職員は「失礼」と廊下に出ていった。

「はあ？ なに？ ほんとう？ いや・・・、まだ分からないんだけど・・・、ちょっと待ってね」

職員がなんともへてこな顔で戻ってきて言った。

「どうやら患者第2号が出たようです。いや、もしかしたらもつと出てるのかも知れないですけど・・・」

黒井は緊張して訊いた。

「どこです？ 市内ですか？」

「いや、それが・・・」

へんてこな顔で言う。

「夕張だそうで・・・」

黒井医師も思わずへんてこに顔をしかめた。

「夕張って、メロンの？ 北海道かね？」

「ええ、そうなんです。あっちの病院でもまったく始めての症例で、慌ててあちこち情報を求めて、うちに当たったようです」

「発症は？ いつ？」

「ちよつと待つてください」

廊下に出ていく職員に黒井も付いていった。

「昨日の早朝、5時頃の様子です」

「昨日の朝5時・・・」

ちよつと中谷志保の腫れが引き始めた頃だ。

「川崎から北海道までどれくらいかかるかな？」

言ってから黒井医師は何を馬鹿なことを考えているのだろうと思つた。病原体がなんであれ、中谷志保からその患者に移動したなど馬鹿馬鹿しい。

「いや、いいよ。それで患者の年齢性別は？」

「・・・。15歳の女性だそうです」

中谷志保が17歳。まあ近い。

「現在の容態は？」

「・・・。えー、今現在腫れは引いていますが意識不明の状態が続いているそうです」

「腫れが引くまでどれくらいかかってる？」

「・・・。約8時間だそうです」

「・・・同じか・・・」

中谷志保は今現在無菌室に隔離されている。今さら気休めだが。神奈川と北海道。全然違う土地にほぼ同時に二人の患者が現れた。もし何らかの病原体があるとすれば、それは既にかなり広い地域に分布していると考えるべきだ。

「まずいですね・・・」

保健所職員もそれを考えて青い顔をしている。

「早期に原因を特定しなければならんな」

黒井医師も厳しい顔で言った。もはや自分の患者一人の問題では

ない。

「呪いよ」

わあつと職員は驚き、黒井もビククリした。茶髪の、黒井にはよく見分けのつかないイマドキの少女が真っ青な顔で立っていた。

「君は誰かね？」

「わたし、志保の病気の原因を知ってるのよ」

「本当かね？」

「呪いよ、ビデオの少女の」

それは志保が電話で話していた友人、荒井ミイナだった。

「はあ？」

「本当よお。志保の奴さんぜん馬鹿にして大笑いしてたからあの少女に呪われたのよおー！」

「何を言ってるのかね？」

黒井医師は扱いに困った。ミイナは本気だった。

「本当よお！ 御被いしなくちゃ！ そうだ、紅倉美姫よ。志保あの人のファンだって言ってたもん。ねえ、志保は病気じゃないのよ、呪われているのよ！」

黒井医師はまいった。しかし、思い出す。中谷志保が救急車で搬送されてきたとき同乗してきた母親が半狂乱になりながら言っていた。

あんな番組見ているから、バケモノが移っちゃったのよ！と。

しかし、

「馬鹿馬鹿しい」

と黒井医師は切り捨てた。黒井は幽霊や神といったものを信じていないわけではなかった。むしろ経験的にそういうものはあるのだと思うている。しかし、患者は中谷志保一人ではなく二人出ているのだ。もしテレビの幽霊が原因なら、全国で何千何万という患

者が現れてしまうではないか？

そんな馬鹿なことがあってたまるか、と黒井は怒りを感じた。幽霊ごときに、そんなことが許されてたまるか！

「ちくしょう・・・、やっぱ信じないんだ・・・。」

ミイナは悔しそうに恨めしそうに黒井医師を睨んだ。

「いいよ。どうせ医者になんか志保が治せるわけないよ」

ミイナはキツときびすを返すと廊下を引き返した。ズンズン歩く自分が志保を助けるんだ、そうだ、紅倉美姫、あの人に助けを求めらんだ！・・・。

この日も結局馬木たちは視聴覚室に集まった。桜野を除く馬木たち4人と、今日は珍しく顧問の由利先生もいる。

由利絵梨佳先生。自称23歳の知性派メガネ美人。本人も大いに美人を自覚しているが伸ばしっぱなしの髪の毛に櫛も入れず、けっこうだらしない。いつもほわーんとした雰囲気だが、今日ばかりは深刻に眉を曇らせている。

昨夜、馬木と、副部長の沖浦と、顧問の由利先生に桜野葉子の母親から電話があった。前日の夜に出かけたまま娘が帰ってきていない、と。何故昨日の昼間馬木が電話をしたときにそれが分からなかったのか？

「山崎先生の話によると」

山崎先生は1年B組、桜野の担任だ。

「桜野さんの家はちよつと問題があるらしくて・・・」

桜野の家は青山市でも有数の資産家、らしいが・・・。由利先生は生徒たちを見渡してどこまで話してよいか迷ったが、

「他言無用よ」

と、恐い目で前置きして話した。

「今桜野さんのお父さんは別居中なの。その・・・、離婚を前提とし



て・・・」

由利先生はその手の話は苦手らしく、本当に嫌そうな顔で言った。「でも離婚となってもお母さんの方は全然困らないらしいの。実家が大金持ちだから」

有数の資産家であるのは母親の実家なのだ。由利先生は苦い顔でますます嫌そうに話す。

「ところでねえ、桜野さんには三人の妹がいるんだけど・・・、実は四人ともお父さんが別々の人なのよ・・・」

！　なんと。由利先生はもの凄く嫌そうな顔をして、松岡は嬉々とした顔になったが、すぐに引つ込めた。

「お母さんはまだ３３歳なんだけど、既に三度も離婚して、今四度目の離婚をしようとしているわけよ」

知らなかった。葉子がそんな複雑な家庭の娘だったなんて。資産家の実家に父親が別々の四人の娘たち。まるで横溝正史の世界だ。

由利先生はため息をついて言う。

「四人の父親たちがどんな人か知らないけれど・・・、やっぱりお母さんの方にも問題はあるでしょうねえ・・・」

馬木は最初に電話したときの様子を思い出す。葉子の母親はまるつきり女子大生のような若い声と気安い話しぶりだった。

「毎日の生活もめちゃくちやみたいで、家事全般お手伝いさんに任せつきり。いまだに夜遊びが大好きで、おとこの夜も遅くに帰宅して昼近くまで寝ていたらしいわ」

馬木が電話したときはまさに寝起きだったわけだ。

「だから桜野さんがいなくなっていることにずーっと気付かずだったのね。夕飯の時間になって妹さんに聞いてようやく前の夜からいなかったことを知ったのよ」

由利先生はプンプン怒っている。自分とは違う種類のだらしなさに腹を立てているのだ。馬木も困った母親だと思ったが、最初の電話のやたらフレンドリーな感じと、昨夜の電話のせっぱ詰まった感じの落差に本気で葉子を心配しているのが感じられ由利先生のように

な嫌悪感を持たない。むしろ好印象を持っている。馬木は質問した。  
「妹さんは桜野が出かけたのを知っていたわけですか？」

「ええ。桜野さんの下の14歳の妹が見かけて、どこ行くの？って訊いたらないしょにしててって言われたんですって」

「ちよつと待つてくださいよ。・・・14歳いい！？」

葉子は12月生でまだ15歳だ。それで別の父親？

由利先生がぐつと眉根を寄せて睨んだ。訊くな、ということだ。

「それで、どこ行くかは聞いていないんですか？」

「聞いていないそうよ」

「桜野はそういうことはよくあつたんですか？」

「ここしばらくはなかったそうよ・・・。中学の頃はけっこう荒れてたみたいけど・・・」

うーむ・・・、と馬木は心の中で唸った。まったく知らなかった。やはりストレスの多い家庭のようで、葉子もいろいろあつたのだろう。今のバンビみたいにかわいらしい葉子からは想像も付かない。

「・・・ちなみに、その下の妹たちは？・・・」

由利先生は睨みながら、教えてくれた。

「8歳と5歳ですって。ちなみに、子どもは4人だけ。男兄弟はなし」

2番目の旦那さんとは少しは上手くいつていたのか？ いずれ大して長くは保たなかったようだが。馬木は、そうだ、と思って訊いた。

「桜野って名字、今のお父さんの名字ですか？」

「いえ、お母さんの名前。お父さんはお嬢さんですって」

「じゃあ、・・・青木って名前だったことってありませんか？」

さあ？と由利先生は首を傾げた。

「そこまでは知らないわ。なんで？」

「あ・・・、いえ・・・」

馬木は思わず沖浦と視線を交わした。由利先生に言うべきかどうかどう

か？

角谷が言った。

「ねえ由利先生。先生はおとこの夜にあった『ほんとうにあった少女霊ビデオ』って番組見ました？」

馬木はおいおいと思ったが、由利先生は・

「ああ！ 見た見た！ おっもしろかったわねー」

と大喜びした。おいおい・だ。

「カッくんも見たのー？」

甘い声を作って思いつき笑顔で見つめた。由利先生は角谷が大のお気に入りだ。

「ええ。部屋のライブ映像に幽霊みたいな女の子が出てきたでしょう？ 俺たちあれが葉子ちゃんに似ていたなって話してたんですよ」

「桜野さんに？」

由利先生はうーん・と考えた。

「そうだったかな？ よく覚えてないけど・。偶然でしょ？」

「それが偶然とばかり言えないようなんですよ」

角谷はいいよな？と馬木たちに確認して5年前のビデオに出演していた青木ようこという少女が桜野によく似ていることを話した。

「えーっ！？ あれ、作り物だったのー！？」

「・・・おいおい。先生は、なによーつまんないのー、とブーたれた。

「で、それでなんなの？」

馬木が言う。

「桜野はそのテレビに関係して何かのトラブルに巻き込まれたんじゃないかと心配しているんです」

「うーん・・・、そっかー・・・」

「桜野の家では桜野の行方不明をどう思っているんです？ 警察には届けたんですか？」

「警察には届けたようよ。なんと言っても桜野家のお孫さんですからね、警察の方でもそれなりに真剣に取り組んでいると思うわ。誘

拐の可能性もあるし、慎重に取り扱っているんでしょね。でも、家出か、ちよつとした非行か……。そういう年頃だし、以前はいろいろあつたわけだし、警察も両方考えているでしょうね」

いずれにしろ表立つての搜索は控えていると言つところか。

「俺、これからそこに行つてみようと思います」

「ええ、そうね。行きましよう」

由利先生は反対するとか止めるとかするかと思つたらあつさり賛成した。ポカンとした馬木に、

「なによー？ 大事な生徒のためじゃない。それくらいするわよ」  
いい先生だ。

「で、どこ？ 知ってるの？」

場所を教えると、

「ええーっ！？ そんな近くなのー！？」

と驚いた。ほんとうに素直ないい人だ。

あの……。と沖浦が言つた。

「ああ、沖浦さんは来なくていいわよ。やっぱり女の子は心配だから」

「いえ、そうじゃなくて、……。金森先輩はどうなんです？」

由利先生も顔を曇らせて答えた。

「まだ意識が戻らないそうよ。でも、命は無事だったんだから、きつとだいじょうぶよ」

「はい……」

馬木は沖浦が何を考えているか分かる。金森先輩を脅して責めて、そのせいで事故にあつたんじゃないかと気にしているのだ。

「おまえのせいのわけないだろ。あれは……」

馬木は思い出して瞬間的にゾツとなつた。

「あれは……。金森先輩の不注意だ。ただの事故だ……」

ただの事故……。どこかで聞いたような言葉だ。馬木は出来るだけ思い出さないようにする。

「おまえは残つてろ。って言うか、帰っていいぞ。どうせもつこの

夏は映研の活動はないだろう」

うん・・・と沖浦は頷いた。馬木はほっとした。何故か沖浦をそこに連れていくのは拙いような気がした。

「行ってきたら電話で報告するから、いいな？帰れよ」

松岡も何故か遠慮した。

「俺もちよつと用があるから」

と。今日は珍しく憎まれ口もきかず、大人しい。なんとなく分かる。由利先生は松岡を嫌っているし、松岡も由利先生を苦手にしている。松岡が来ないのは馬木もありがたいが。

由利先生の車で行くことになった。馬木も角谷もついウキウキした気分になったが、先生の車、古いタイプのカローラを見て、うつと思わず後ずさった。・・・汚い。泥とほこりにまみれて、後部座席はクレイゲームの景品のぬいぐるみが占拠し、くしゃくしゃのティッシュペーパーとチョコレートの包み紙とジンジャーエールの空き缶が散乱していた。

「部長、後部座席。カッくん、助手席ね」

てきぱきと指示する。

「先生」。若い女性なんだからもう少し・・・」

馬木は取りあえず座る場所を確保しつつ情けなく言った。幻滅である。

「あゝ？ 若い女性のナマの生態に触れられて興奮するでしょう？」  
「しないって。角谷も苦笑しながら言う。」

「先生。俺今度洗車しますよ」

「ワオ！ ラッキー」

角谷に対してはハートマーク付きだ。

「シートベルトした？ 行くわよ」

覚悟して身構えたが、意外と運転は上手く、スムーズに発進した。学生の通学路である商店街の細い道を抜け、大通りを行き、左折

して坂道を少し上った。五十嵐大学付属病院のエントランスが見えた。駐車場があるが、入らず、右折してぐるっと病院の周囲を巡った。また坂道。左手、フェンスの向こうの病院の白い建物がどんとん下に下がっていく。病院と大学の医学部があつて、どういう構成になっているのか分らないが、表の大きな四角の建物の裏手にいくつかこぶのように小棟が連なつてくつついている。こつちが医学部かも知れない。

フェンスが切れ、松を中心とした夏の緑のこんもりした林が現れた。右手にも広がっている。左折して林の中を通る道を走っていく。あのまままっすぐ行けば50メートルほどですぐ海岸だ。8月6日日曜。海水浴客の車がたくさん見えた。海がこんなに近くなのに馬木は今年はまだ泳ぎに行っていない。葉子と行こうか？という話はしていたのだが・・・。

右手、大学病院と反対側の林の中に3階建てのアパートの群が見えてきた。4棟か。その手前に空き地がある。ここに・・・。

空き地にロープが張られていた。立入禁止と札が下がっている。

「部長。ロープ上げて」

「ええ、立入禁止つて書いてありますよ？」

「こら、かわいい一年生部員が心配じゃないの？」

馬木が下りてロープを引き上げると由利先生はカローラを進入させた。こんなに行動力がある、というか、怖い物知らずの人だとは知らなかった。

「うわー・・・、すごいわねー・・・」

車から降りてきて、先生も馬木たちも圧倒された。

家の周りは真っ赤だった。花だ。真っ赤な大きな花が咲き乱れていた。

「ハマナスかな？ あんなに真っ赤な花だったっけ？」

ハマナスはこの向こうの砂浜にたくさんはえている。たしか赤紫とか白とかの花だったと思う。

「うわ、どこから行こう？」

ハマナスは太い茎にびっしり鋭いとげが生えているので要注意だ。ルートを探していると、

「おいおい、あんたたち」

と、となりのアパートの方からすててこ姿のおじいさんが渋い顔でやってきた。

「駄目だよ、入ってくるなってあっただろう？ 海水浴か？それとも野次馬か？ どっちにしる駄目だよ、あーあ、車まで乗り入れちゃって。駄目だっていうのに、しょうがないなあ」

細い腰に手を当てて年長の由利先生をジロリと睨んだ。馬木たちは半袖シャツに学生ズボンをはいている。由利先生はけっこうミニな黒のワンピースに白のボレロとかいうものを羽織り、青いサンダースに替えている。

「すみません。わたし青山高校の教師で、由利と申します」

由利先生は名刺を老人に渡した。老人は名刺を確かめて由利先生を見た。

「講師」

由利先生はニコリ押しの強い笑顔を作った。

「実は、内密に願っていたんですがおとこの夜からうちの生徒が一人行方不明になっていまして、どうやらここに来たようなんです」

「生徒さんが？」

老人は怪しみ、ウンザリしたように言った。

「ま、昨日から若い子はいっぱい来ているからね。迷惑な話だよ。入っちゃいかんと言うのに、隙を見てこっそり入ってくる。夏休みだからしょうがないだろうけれど、先生方にも注意してもらわね」

角谷が質問する。

「やっぱりテレビのせいだ？」

「そうだよ。映ったんだろう？ここ。外からは撮さないって約束だったのにな」

「やっぱりここなんだあー・・・」

家を眺めた。近くで見ると、確かにボロい。2階建ての小さな家。青い瓦屋根に元は緑色だったとおぼしきトタンの外壁はすっかり色あせ錆でボロボロになっている。1階の窓の障子は皆破れて黄ばんでいる。木枠の戸のかしげた玄関の柱に木の表札がかかっているが黒く汚れてまったく読めない。2階の、あの窓が撮影の行われた部屋だろう。ボロボロのカーテンが端にぶら下がり、真っ昼間の日射しの中、部屋の内部は真っ黒だ。

その窓に、ずっと下から顔が覗いた。

馬木はひやっと悲鳴を上げたが、

「あつ、こら！」

と老人が怒鳴った。しばらくして家の裏手から中学生くらいの男の子と女の子が出てきて裏の林の方に逃げていった。

「ほら、これだよ。油断も隙もあつたもんじゃない」

老人はプンプン怒り、馬木は角谷にニヤニヤ見られて赤くなった。なるほど、裏から入るんですね

と由利先生は言い、老人にいいですよね？とニッコリ笑いかけた。しょうがないなあ

老人は仕方なく言ったが、馬木が尋ねた。別に中に入るのを躊躇したわけではないのだが・・・。

「ここは大学の施設なんですか？」

「いや、私有地。個人の土地だよ」

「そうなんですか。では、あなたは？」

「わしは、となりのアパートの管理人で、その土地を管理している会社からついでに頼まれているだけだ」

「その会社の土地なんですか？」

「さあ、知らんね」

「これ、家ですよ？ 誰が住んでいたんです？」

「さあ、知らん。わしが来た10年前にはもう空き家だったからな」  
「誰も住んでいないのに10年以上土地だけほったらかし？」

「わしは知らんよ。どうせ金持ちなんだからこんな土地、どうでも



いいんだろう」

すかさず角谷が訊く。

「どなたの土地かご存じなんですか？」

「・・・知らんよ・・・」

「ひょつとして、桜野さんの土地？」

「・・・」

図星だったらしい。事件はどんどん桜野へ関係が収束していく。

「桜野さんの家のどなたかがこちらに来たことはありますか？」

「・・・」

老人はむつつり貝のように口を閉ざしてもういつさいしゃべるつもりはないらしい。

「それじゃお邪魔しまーす」

由利先生が言って歩き出し、馬木たちも後に続いた。角谷が言う。

「多分桜野家・おじいさんの方ね、そっちの方じゃ本当にどうでもいい土地なんじゃないかな？ でなきゃテレビの取材なんて許さないだろう？ きつと大学に売りつけたかったけれど値段の折り合いが付かなかったとかそんなところじゃないの？」

「そうか？ けっこうな土地じゃないか？」

奥行き20メートル幅30メートルくらいある。

「せめて駐車場にするくらいのことはいらないか？」

「うーん、どうなんだろうねえ？」

由利先生に訊く。

「ねえ先生」

「なーに」

「この一帯の林ってどこの所有なんですか？」

「さあ？ 国が県じゃないの？」

「そこにこうして個人の土地があるんですか？」

「そうね。用地買収で折り合いが付かなかったんじゃない？ ま、相当昔の話でしょうけれど。でも、あるじゃない、けっこう広い道路でもポコッと変な土地が飛び出しているの」

「そついえばありますねえ」

裏手に回ると大勢の人間が踏み荒らしたようにハマナスが倒れて道が出来ていた。由利先生はトゲに触れないように気を付けながら進んでいった。

「はい到着。行け！部長！」

「ええーっ、俺？」

「あんたが行かないで誰が行くの？ あたしに行けって言うの？」

「いえ・・・」

恨めしそうに角谷を見る。

「俺も行くけどさ」

まずはおまえがと薄情にニヤニヤして手をニギニギした。

馬木は崩れた壁をくぐった。剥き出しの水道管。洗面台の下だ。木目調のマットが浮き上がって波打つ床には白く乾いた足跡がいっぱいに付いている。窓はあるが表の明るさに目が慣れていて暗い。

右手に小さな風呂場、左手、開いた引き戸の向こうは台所のような。よいしょと上がると、ガサツと嫌な感触がしてググツと床が沈んだ。腐っている。正面の引き戸も開いているがその向こうに開いたドアがある。トイレのドアだ。廊下へ出てそーっと覗く。和式の便器に空き缶やアイスの袋などゴミがいっぱいに詰まっている。壁にろくでもないらしくがきがいつぱいある。短い廊下の先はもう玄関だ。左手に部屋が一室、右手にこのトイレと、階段があるきりだ。本当に小さな家だ。

なるほどらくがきがあちこちにされている。壁はもちろん、いつたいどうやったんだか天井にまである。『死霊の盆踊り』とかお化けを意識したものが多い。ということは心霊スポットとしての噂が立つてからのもので、するとこれは金森先輩たちが噂を流したせいだろうか？ 罪なことをしたものだ。

玄関の傾いだ格子の間に磨りガラスを通して表の群生するハマナスの真つ赤な花がぼんやり滲んでいる。左の部屋の障子のボロボロに破れているさまを見て、馬木はもう足がすくんでしまった。階段

の先など、見上げるのも怖い。

トントンと台所の方から音がして、馬木は飛び上がった。

「ねー、ここ開かないの？」

由利先生だ。馬木は急いで戻った。裏口がある。鍵を外して開けると、ギイツと嫌な音がして上の方が引つかかった。歪んで、変形しているのだ。ドンドン叩くと、パラパラ乾ききったゴミが降ってきて、バアンとドアが開いた。

「入り口があるなら開ければいいのに、なーんでさっさと開けないかなあー」

「はあ、すみません」

思いもよらなかった。

「お邪魔しまーす。靴はこのままでいいわよね」

由利先生は遠慮なしにズカズカ上がってきた。

「うわあ、もうちょつときれいなら越してきたいんだけどなあ」

いったいどんなところに住んでいるのか。角谷も先生の後に続いて入ってきた。

「どう？何か手がかり見つかった？」

「いや・・・」

そんな余裕はなかった。角谷は別にも留めないで由利先生といつしよにあちこちを眺めた。

「昼間はいいけど夜中に一人では入れないよねー」

幽霊の噂が作り話だと分かっているけど怖いだろう。三人いつしよに和室を覗いた。やはり畳の上に土足では上がりづらい。8畳。畳は膨れ上がって、カサカサになっている。破れた障子から真っ赤な花が覗いているようで馬木はゾゾツとした。

「なんか全体に水をかぶったみたいだねえ」

角谷が黒ずんだ柱を触って言った。スがいっぱい空いている。

「ここまで波しぶきが飛んでくるのかなあ？」

「塩害はあるでしょうけれど、ここまで波が来たらたいへんでしょっ？」

丘の上だし、土地の分薄くなっているだろうけれど背後に防砂林が5メートルはある。

「じゃあ下からかなあ？」

角谷が床を踏みながら言った。ミシミシ沈み込む。怖がる馬木にニタアツと笑って言う。

「下に何か埋まっているのかな？ ハマナスの花があんなに真っ赤なのは地面の下の血を吸っているのかも……」  
想像してしまった。

「ハイハイ、恐がりさんを脅すのはほどほどにして、まさかとは思うけれど人が隠れられそうな場所を探して」

由利先生に言われて角谷は和室に入っていて押し入れを調べた。何も無い。馬木は引き返して風呂場と台所を調べた。こちらでも何も無い。先生はガタガタ苦勞して玄関の戸を開けた。この家に風が通るのは何十年ぶりだろうと思ったが、考えてみればテレビのスタッフが機材の搬入などで開けているだろう。必要以上に怖がる必要はないのだ、と馬木は自分を鼓舞した。

「一階は何もないねえ。と言うことは」  
やっぱり二階だ。

階段は真ん中が見事に崩れ落ちている。足場が狭くかなり急だ。ちよつと気の利く設計士が大工なら物置でも作りそうなものだが、踏み抜かれた階段の下はただの空間で支柱が覗き、木片が散乱している。テレビの中継ではこの空間に女の目がじーっと覗いていたのだ。まあ、あれも仕込みだったのだろうが……。

二階に上がるのは無理かと希望的観測を抱いたが、ご丁寧の手すりからロープがぶら下がっていた。

「いいよいいよ。今度は俺が先に行くから」

角谷がぐつと引つ張って確認してからロープをたぐって器用に手すりによじ登った。

「うわっ、ちよつとここもヤバイ感じ。気を付けて上れよ」

角谷に手すりを押さえてもらって馬木もよじ登った。先生は当然

下で留守番だ。

「ここだ。ご丁寧にちよつとだけ戸が開いている。覗くのも開けるのも怖いが・・・、角谷はあつさり開いた。」

「ふうん、やっぱり何もないね」

さつさと押し入れも調べ、窓から外を眺めた。

「ちよつと待った。そこからこつち覗いてみ」

角谷がちよつとしやがんで言った。カメラの立っていた位置だ。

馬木は3分の1開いた戸からせいぜい怖い顔をして覗いてやった。

「そうそう、そんな感じだったよね。葉子ちゃんはそこに立っていたんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「じゃあさ、こつちに歩いてきてよ」

馬木は部屋に入っていった。

「そうそう、そうだよねえ。やっぱりそうなるよね」

「何がだよ？」

馬木は角谷の前まで歩いてきて言った。角谷はニヤツとして言った。

「あそこからここまで歩いてくればどうしたってこのカメラに写ってことさ」

「あ・・・・・・・・」

そうだ、スタジオが混乱して大騒ぎしていたからすっかり注意が逸らされてしまったが、あの後ここにあったカメラが倒された。それを倒したのが葉子なら、ここまで歩いてくる姿が必ずカメラに写っていたはずだ。

「なんだよ・・・」

馬木は今さらながらテレビに踊らされたことに腹が立った。カメラを見ていたスタッフはその姿を絶対に見ていたはずだ。

「いいじゃん。だからさ、テレビ局に掛け合ってそのビデオを見せてもらえばはつきり正面から顔が映っているはずだ。そうすればそれが葉子ちゃんかどうかはつきりするだろう？」

「そうだな」

テレビ局があっさり見せてくれるとも思えないが、桜野家は地元の名士だし、犯罪に巻き込まれた可能性があるとすればまさかテレビ局も拒否はすまい。

「ま、別の誰かがもう一人いたって可能性もあるけどね」

「ヤラセなんだからその可能性もある。」

「おまえやっぱりさすがだなあ」

「誰でも気付くだろう？」

「そうか・・・。馬木はテレビに映ったものがすべてと思い込んでいた。」

二階にはもう一つ物置があるが、何もない空間を高い位置にある小窓からの強烈な日射しが白々と貫いていた。

「やっぱり何もなかったな」

馬木はさっさと下へ行こうとしたが、

「待てよ、変じゃないか？」

角谷は何か探して物置と廊下と部屋を行ったり来たりした。

「何探してるんだ？」

「この家、外から見たとき真四角だっただろう？　おかしいじゃないか？　下と広さが違うぞ」

「あ・・・」

本当に自分は目に見えるものにしか頭が回らない。下には8畳の部屋と台所と風呂場とトイレがあるのだ、ここには6畳の部屋とせいでい3畳分の物置があるきりだ。階段を上りきったところに物置、反対側に部屋。正面から見て右半分がほぼそっくり消えている。

「・・・ただの手抜きなんじゃないか？」

角谷は馬木の臆病な言葉なんか無視して考えている。

「2階の東側に窓ってあったっけ・・・。ふつつ構造を考えればここにもう一部屋あるはずなんだよな・・・」

角谷は階段脇の壁を眺め、トントン所々叩いたりした。

「壁紙をベリツとめくつたら隠されたドアが現れたりしてな・・・」

馬木はますます怖気だった。角谷が呆れて、少し怒って言った。

「おまえさー、葉子ちゃんのことを心配じゃないのか？」

「そりゃもちろん心配だよ」

「家庭のこと聞かされて嫌いになっちゃったか？」

「・・・・・・・・・・」

馬木は黙った。そんなことはない、と否定したいが、どうなのか、分からない。嫌いになんてなっていない。しかし、葉子が実は馬木の思っていたような子じゃなかったのは確かだ・・。

いや、と馬木はようやく勇気を振り絞った。馬木の知っている葉子はやっぱりそのまま葉子のはずだ。過去の葉子なんて、知ったことじゃない。

「おりゃ！」

やけくそで壁を蹴った。・・・痛い。

「映画みたいには上手くいかないな」

角谷が笑って言った。

「じゃあもつと勇気のあるところを見せてもらおうかな。部屋の押し入れから天井裏に出られるだろう。そこから隣がどうなっているか見てくれよ」

「え・・・・・・・・」

死ぬ。心臓発作で。

「後でちゃんと葉子ちゃんに報告してやるよ、葉子ちゃんを捜すためにおまえがどれだけ勇敢だったかな」

「うつ・・」

仕方ない。馬木は部屋に戻って押し入れの前に立った。きれいに何もない。それがかえって怖い。この部屋だけほとんどらくがきがないのだ。なんだか押し入れから冷気が漂ってきている気がする。

「やっぱり俺が行こうか？」

馬木は無言で上の段に上った。押し入れに入るのなんて小学生以来だ。天井板に手をかけた。ガタツ。持ち上げる。ビクビクしながら顔を覗かせた。・・・映画じゃここでぬつと白塗りの女の顔が現れ

るんだ・・と叔父に教えられた。夜眠れなかった。心臓を破裂させそうにしながら見渡した。通気口の小さな明かりだけ。目を慣れさせるためじつと暗がりを見た。柱が何本も立っている、その奥が見えるようになってきた。ずっと家一軒分の空間が広がっている。隣と仕切る壁はない。この部屋と同じ天井板が敷き詰められている。隣どうなっているのか分からないが、この下に閉ざされた空間があるのは間違いない。

ふと、馬木の神経が強烈な危険信号を発した。ほんのかすかだが、何かを感じた。

「・・・フン・・・」

鼻。臭いだ。ゾゾゾ・・・・・と全身が鳥肌立つ。人間が絶対に受け付けない類の臭いだ。体がガクガク震えた。顔がブルブル震えて本当に歯がガチガチ鳴った。

じつと、一点を見つめる。暗くて見えない。しかしそこに小さな穴が開いているのを感じる。そこから、となりの空間の臭いが漏れてきているのだ。馬木は動けなくなった。

「おい、どうした？ 何かあったのか？」

角谷が心配して声をかけた。馬木は引き寄せられるように見えないう空間に手を伸ばした。失神寸前になっているのかも知れない。ガリッガリッと板をかく。爪が板の端にかかった。逃さないようにぐつと力を入れ、板をはぐった。

わつと下で角谷が声を上げた。

「なんだ！？ なんの臭いだ？ おい、オット、だいじょうぶか！？」

馬木の顔に異臭が吹き付けている。顔をしかめることも忘れて黒い空間を見つめた。窓は外からトタンを打ち付けられて潰されていた。こちらからの明かりだけで、暗闇に慣れた目によやくかすかに床が見えている。男が仰向けに倒れていた。生きていないのは、この臭いで明らかだ。

「おいっ、オット！」



角谷に足を揺さぶられて、馬木はへなへなと座り込んだ。もう動けない。腰が抜けた。

それがこの事件の第一の犠牲者、青木雄二だった。

## 第5話 連鎖

8月6日午後1時、富山県M海水浴場。

尾坂真二郎21歳会社員は砂浜から40メートルほど沖にぶかぶか浮いていた。日曜の昼、砂浜は家族連れとアベックでいっぱい、キヤーキヤー歓声が響いている。真二郎は地元の出身、勤めが機械工場で祝祭日が出勤の代わりに盆暮れ正月にまとめて連休になる。県外に散っていった友人たちはまだ帰ってこず、暇を持て余して勝手知ったるこの海に遊びに来た。

ナンパのつもりである。が、いいなと思う女を見つけても相手はグループ、一人で声をかけるような勇氣はなく、けっきょくなんとなく逃げるように沖に泳ぎだしてきた。「出会い」を期待しながら、虚しく砂浜の楽しいな歓声をうるさく感じていた。

遠浅の海であるがここまで泳いでくる人間はそういない。真二郎は子どもの頃から泳ぎは得意であったが、たいていは浮き輪やゴムボートで浮いてくるアベックどもだ。

そんなアベックがまた一組やってきた。男は女の浮き輪に捕まって二人でキャピキャピ騒ぎながらバシャバシャやってくる。

ちつくしよー、けっこうかわいい女じゃねーか。

そんな風に羨ましがりながら仰向けにさわやかに晴れ上がった青空を眺めた。

バシャバシャ派手な水しぶきが上がっているのが分かる。あーあ、俺も女の子とバシャバシャやりてーなー、と思いながら、派手すぎる水音に少々カチンときた。

何してやがるんだと見て、ギョツとした。思わず塩水を飲んでしまった。男が浮き輪にしがみつき、2メートルほど離れたところでバシャバシャ鮫でも暴れているみたいに水しぶきが上がっている。

「な、なにしてんだ？」

男はじつと水しぶきを見て動こうとせず、派手な水しぶきの中に水面を叩く女の手が見えた。

「なにしてんだ？」

真二郎には状況が理解できなかった。しかし砂浜の方でもこの異常に気付いて騒ぎ出した。

「バ、バツカやろう！」

こいつはかつこだけで泳ぎは苦手なんだろうと真二郎は思った。女が足が攣るか何かして浮き輪を離れて溺れだしたのだろう。泳ぎに自信のない男は怖くて見ているしかないのだ。真二郎は泳ぎに自信があつた。けっこうかわいい女だった。もしかしてこれが「出会い」になるかも知れない。真二郎は約10メートルの距離を全力でクロールした。

水しぶきが止まった。意識を失って沈んだのだろう。真二郎は大きく息を吸って潜った。水深3メートル。うつぶせの女のビキニの背中が見える。水をかき、接近した。左腕で背後から胸を抱えた。柔らかい感触が真二郎に力を与えた。俺はヒーローだ。右腕で力強く水をかき浮上した。

「ぶはっ」

水面に顔を飛び出させ息を吐き出した。

「おい、だいじょうぶか！ 息をしろ！」

抱きかかえた女の顔を上向かせて口を探った。何か、変だった。

浮き輪にしがみついた男の顔が目に入った。

「うわ、うわわわわわ」

恐怖に顔がひきつっている。真二郎は不安になった。額から冷たい汗が流れ落ちる。

「ウガアアアア！」

「ギャーッ！」

真二郎も悲鳴を上げた。水死体。そう思った。夏の怪談だ、お化けだ。丸く膨れ上がった顔、広い額にへばりついた濡れた黒髪、濡

れた真つ黒な目、小さな丸い口から覗く小さな無数の尖った歯。抱いた胸の柔らかさが、ぬめった腐肉の感触に変わった。

「ウガガガガガ！」

バケモノは怒りの雄叫びを上げ、振り上げた拳で真二郎の頭を殴った。もの凄い力だった。生きている。死体じゃない。2発、3発、水しぶきと共に真二郎の顔面は容赦ないパンチを浴びせられた。鼻の奥がつーんと痛い。水面に赤い色が漂った。訳が分からない。恐怖と、命の危険を感じた。

「うわあっ！」

真二郎もわめいてバケモノを両手で突き放そうとした。それをバケモノはどう捉えたのか、足を腰に絡ませ、左手で首根っこを掴むと右手の拳を思いきり振り下ろした。衝撃が頭の芯を貫いた。真二郎はバケモノに足を絡みつかせられたままいっしょに水中に沈んだ。真二郎は無我夢中で暴れた。夢にまで見た女の太ももが腰を締め付けている。しかしもちろん快感はなく凄まじい力が内蔵を押し上げ、肺を圧迫した。顔を両手でべたべた撫でられ、真二郎は逃れようと死にものぐるいで顔を振り立てたが、ゴボリと大量に泡を吐いた。

なんだよ、ひでえぜ……

急激に全身から力が抜けていき、真二郎は意識を失った。

20分後、水面に浮かぶ二人はゴムボートに収容された。尾坂真二郎は蘇生を試みられたが、そのまま帰らぬ人となった。青木雄二に続く、この事件の第2の犠牲者だった。

突如バケモノに変身した女性は、砂浜に横たえられ、ビクリビクリと魚のように痙攣を繰り返した。誰も彼女に触ろうとはしなかった。野次馬の輪もすぐに大きく広がった。何かの病気と考えるのがふつうだ。誰もそれに感染したくはない。しかし。

「同じだ……」

あの「ほんとうにあった少女霊ビデオ」の番組を見ている者がいた。彼女は携帯電話で写真を撮り、すぐに登録者全員にメールを送

信した。

荒井ミイナは紅倉美姫に会うべく東日テレビに乗り込んだ。紅倉美姫がどこに住んでいるか知らないからだ。あの番組のディレクターならここにいるだろう。受付で会いたいと言ったら「お約束は？」と拒否された。じゃあここから電話してくれと言ったら「まずお客様サービス係にご用件をお電話でお申し付けください」と断られた。食い下がるとガードマンがやってきて丁寧な言葉と強い握力で脇の出入り口から外に連れ出された。頭に来たのでスタッフ通用口に突入を試みたが、もちろん捕まった。名前と学校名を聞かれた。ちくしようと思つた。こっちは被害者だぞ、あんたらの作つた番組のせいだ！

ミイナはふたたびエントランスホールに入ると大声で怒鳴つた。「責任者出てこーい！ あたしの友だちはここの番組「ほんとうにあつた少女霊ビデオ」のせいでおかしくなっちゃつたんだ！ ネットで日本中に訴えてやる！ あたしの友だちはあの番組に呪われちゃつたんだ！」

ガードマンが今度は二人やってきて両脇からがつちりミイナの腕を掴んだ。

「ちくしよう！ 放せ！ 放せつてんだよお！」

引きずられながら喚き続けた。

「ディレクターに会わせろ！ そんな奴どうでもいいや、紅倉美姫に会わせろ！ あの人しか志保を助けられないんだ！ なあ、頼むよお、紅倉美姫に会わせてくれよお・・・」

「ちよつと」

女に声をかけられてガードマンは立ち止まった。

「お嬢さん。面白いこと言ってるじゃない。でもその話、わたしじや聞かせてもらえないのかしら？」

ミイナはビツクリしてしばし放心状態になった。

派手に赤青紫の薄い布を重ねて羽織った、それは岳戸由宇だった。

ミイナは胸に入社許可証を付けてもらってテレビ局関係者専用の喫茶店でメロンソーダフロートをご馳走になっている。岳戸由宇が勝手に注文したものが、子どもの頃からのミイナのお気に入りだった。

疑わしい目でストローをすすっているミイナを岳戸由宇は面白そうに眺めている。自分はアイスレモンティーを注文している。

岳戸由宇。ミイナはあまり好きではなかったが、こうして見るとさすがに美人だ。と言うか、顔が細くて目鼻立ちが異様にくつきりして、ザ・芸能人な感じだ。ここに来るまで何人かテレビでよく見るアナウンサーやタレントを見かけて、ミイナはすっかりぼーっと舞い上がってしまったている。岳戸由宇は28歳。元グラビアアイドルで、その頃はミイナは全然知らない。週刊誌で昔の写真を見て志保といっしょに笑い転げた。あまりに今と違っている。昔は、オッパイが大きいだけでまるで田舎臭くて、イケてなかった。いつの間にこんな淒味のある雰囲気美人に化けたのだろう。化粧が上手くなつたのだろう、整形したんじゃないか、テレビカメラに揉まれて磨かれたんだろう、と思っていたが、実際会ってみると本人の発するオーラは凄い。やっぱり本物なんだと思う。

けれど、志保は紅倉美姫のファンなんだ。岳戸由宇なんてただのタレントだって馬鹿にしていた。ミイナは・迷っている。

岳戸由宇はフツと笑った。本人は優雅に微笑んでいるつもりだろうが、どこかわざとらしく嫌味なところがある。

「やっぱり紅倉美姫さんじゃなくちゃお話しくださらないのかしら？」

「・・・・・・」

「じゃいいわ。あなたが話せる相手と呼んであげる」

岳戸由宇はシルバーのボディーにひし形のダイヤモンドを埋め込

んだ携帯電話を取りだして二つボタンを押した。ひし形はどういう意味があるのか分からないが彼女がよく使うマークで、イヤリングもひし形を4つ組み合わせたものだ。

「あたし。今来てるの。喫茶店に来て」

パチンと閉めてミイナに微笑んだ。ミイナは彼女に見つめられながらヤケになってメロンソーダフロートを平らげた。

電話の相手が来た。あの番組のディレクターだ。

「え・・・」

岳戸由宇はとなりに席をずらし、ここと指さし、ディレクターは「失礼します」と彼女の座っていた場所に座った。

「こちら荒井ミイナさん。あなたの番組の熱烈なファンですってよ」

「はあ・・・ディレクターの三津木と言います」

丁寧の名刺をくれた。

「荒井ミイナです」

ミイナもちょこんと頭を下げた。二人の様子を微笑ましく見て、岳戸由宇は言った。

「さ、ミイナちゃん。これで話してくれるでしょう？」

ミイナは、話した。

三津木は思わずうーむと腕を組んだ。とても信じられない話だ。その態度にミイナは怒りを覚えた。

「あ、いや・・・」

三津木は由宇に救いを求めた。

「彼女の言っていることは本当だと思うわ」

「しかし・・・」

「あなたも、わたしの霊能力を疑うの？」

「いや、・・・信じているよ・・・」

三津木の言葉に少し脅えがある。由宇は満足そうにフツと笑った。「そう。わたしは、本物よ」

三津木はゾツとしたように慌ててミイナに視線を向けた。

「しかし・・・、どうしたらいいんだ？　例えば、僕なんかが取材に行つて、いいのかい？」

ミイナも考えた。病院や、母親が、こんな怪しげなテレビの取材を許すとは思えない。ミイナは岳戸由宇に遠慮して小さく言った。

「・・・紅倉美姫さんなら・・・、志保がファンだから・・・」

岳戸由宇はあらあらと肩をすくめた。

「嫌われちゃったものねえー」

「ごめんなさい・・・」

ミイナ自身は岳戸由宇に好意を持ちだしている。三津木は考えて言う。

「今回のことは僕も反省している。番組を離れてでもやらなければならぬ責任がある。紅倉先生に個人的にお願いするのはかまわな  
いが・・・、いいの？」

「いいの？つて、何がよ？」

由宇は心外そうに三津木を睨んだ。

「あたしが嫉妬して横やりを入れるとでも言うの？　はあ、見くびられたものね。苦しんでいる人を救うことに手柄だのなんなの、くだらないことは考えてないわよ」

三津木は怪しんだ。そういう女ではない。

「言いづらいたがね、君がああのビデオをもう少し慎重に見ていてくれたら、僕も放送はもうちょっとその・・・」

「紅倉美姫に見せれば良かった、つてこと？」

由宇はジロリと睨んだ目をふつと弱々しく伏せた。

「そうね。あのビデオの扱いはもっと慎重にするべきだったわ。軽率だったわ。でも、じゃああたしが反対して、それで放送をやめた  
？」

「それは・・・」

「でしょう？　あたしは紅倉さんみたいに信用されていませんからねー」

フン、と怒ってしまった。



「いいいいいよ、悪かったよ。全部俺の判断ミスだ」

三津木はあやすように言って、ミイナにも頭を下げた。

「君のお友だちにもひどい目に遭わせてしまつて申し訳ない。紅倉先生には至急相談します。実を言うと紅倉先生にも叱られちゃつて、」

あつ・・・と口を滑らせて三津木は拙い顔をした。由宇はますます機嫌を損ねた。シンプルな着信音が鳴つて三津木はほっとしたように携帯に出た。

「は？ 新潟県警ですか？ あおきゆうじ・・・、青木雄二君ですか！？ 彼がどうかしましたか！？ え？ え？ ・・・え！？ ・・・」

三津木の顔が見る見る真つ青になっていった。

「は、はい。分かりました、こちらにありますので。はい、では後ほど・・・」

電話を耳から離して、三津木は虚空を見つめて放心状態になった。ただならぬ様子にミイナは耐えきれず訊いた。

「・・・どうしたんですか？・・・」

「あ、ああ・・・」

三津木は真つ青な顔を岳戸由宇に向けて言った。

「青木君が亡くなったそうだ・・・」

「まあ、お気の毒。で、誰、それ？」

「あのビデオを作つた張本人だよ。昨日から行方不明になつていて、等々力さんは逃げやがつたなつてカンカンになつていたんだけど・・・」

「へー・・・、そうなの」

岳戸由宇は別に驚いた風もなく、口の端をかすかに笑わせていた。三津木はまた疑惑の目で由宇を見た。これが、彼女の本当の反応だ。面白がつているのだ。

「それで、君は何故ここに來たの？」

由宇は怪しく三津木に笑いかけた。

時刻は3時半を回ろうとしている。

青木雄二の死因は首の骨折だった。即死だっただろうが、青木雄二の顔は苦痛にひどく歪んでいた。骨盤がひどく破壊されていた。馬木は暗闇で見た青木雄二を「仰向け」と見たが、正確には、首だけ上を向いていた。青木の首には凄まじい力で食い込んだ指の跡がはっきり付いていた。殺害者は青木の首を掴み、そのまま振り回して腰を床に叩きつけ、その反動で青木の首はねじれ、ボキリと骨が折れ、顔だけ上を向いて体はうつぶせに投げ置かれたのだ。熊が巨漢のプロレスラーでもなければ出来ない芸当だ。しかし。

青木の首に付いた指の跡は細く、押し入れの戸や天井板に桜野葉子の指紋が多数残されていた。桜野と青木の他の指紋はなかった。女の力ではあり得ないことだが、状況的に桜野葉子が殺害犯である可能性が最も高い。殺害場所も部屋の様子から見てここに間違いない。殺害時刻は二日前の夜2時から4時の間と見られる。

部屋の指紋と桜野葉子がすぐに結びついたのは、馬木がしゃべったからだ。ほとんど茫然自失とした状態で警察の事情聴取に訊かれるままにここに来た理由を答えてしまった。しばらくして拙かったかとも思ったが、仕方ないだろう。

ただの通りすがりの発見者ではないと分かって馬木たち三人は警察署に連れていかれて詳しい話を聞かれた。桜野の搜索願は母親から出されていたので馬木たちの話の裏付けはすぐに取れた。そこから桜野と青木の関係も分かった。

二人はやはりいと同じ土だった。桜野の母の最初の結婚相手が青木といい、青木雄二はその兄の子だった。5年前既に桜野は青木という名字ではなくなっていたが、青木は自分のいということ、「青木ようこ」と紹介し、桜野も別に否定しなかったということは、二人の仲は良かったのだろう。

その二人があそこでどういうことになってしまったのか？そして青木ようこが桜野葉子であつたなら、桜野は当然あのビデオのことを知っていただろう。なぜ知らないような素振りをしていたのだろうか？ 完成したビデオは見ていなかったのか？ 5年前、小学5年生の出来事をもう忘れてしまっていたのだろうか？

桜野が殺人犯……。どうでもいい、と馬木は考えるように努めた。いずれにせよ葉子が悪いわけがない。何らかの事故か、相手の青木という男が悪いに決まっている。とにかく早く無事葉子が見つかってほしいと、馬木は思った。

馬木たち三人が事情聴取から解放されて出口へ向かっているとき、刑事らしき二人に付き添われて女の人が入ってきた。すれ違いざまピンと来た。小さな顔の輪郭が葉子によく似ている。お母さんだろう。思った以上に若い。少女マンガから抜け出した天使のようだ。細く、とても4人の子どもを産んだようには見えない。痛ましい気さえする。この人にとても子育ては無理だろうと思った。

由利先生が目でする？と訊いてきた。馬木はぐったり疲れていた。精神的にもう保たない。由利先生は頷き、そのまま出口に向かった。時刻は5時を回ろうとしていた。

夜8時過ぎ。三津木はテレビ局近くのホテルの一室にいた。江戸由宇からのお呼び出しだ。二人は恋人、ではなく、愛人関係だ。主に由宇の要望で一方的に三津木が呼び出される。以前とはすっかり関係が逆転している。もっとも三津木は自分の地位を利用して由宇と関係を結んだつもりは全然ないが。

由宇が赤ワインを口に含んで妖艶に微笑む。三津木は改めて『変わったな』と思う。

江戸由宇。グラビアアイドルとしてデビューしたときには美崎優といった。本名は確かこのりこ。某若者向け雑誌のコンテストで入賞

してデビュー。グランプリではなかった。17歳の時だ。デビュー時にはそれなりに雑誌のグラビアに載り写真集も一冊出している。現在けっこうなプレミアが付いているそうだ。テレビのバラエティ番組にも何度か出演したが、一年が過ぎると早くもガクンと仕事が減った。もともとアイドルとして特に魅力のある子ではなかった。胸が大きいのと、肌が白いのと、笑顔に愛嬌があるくらいで、はっきり言えば若さと新鮮みだけが売りの、賞味期限一年の生鮮品と言うことだろう。

極端なセクシー路線に行くか、色物のお笑いに走るか、でなければ引退。そういう状態に追い込まれた。酷薄な業界だ。

そんなときに三津木がスタッフとして参加していた深夜の情報バラエティに出演した。ちょうど10年前だ。その番組で三津木はコーナーのディレクターを務めていた。心霊コーナーだ。三津木もずっとそんなことばかりやっている。

美崎優は頑張った。自分がどういう立場に置かれているか十分分かっていった。それにしても、根性があるな、と三津木は感心した。深夜心霊スポットに行ったりレポートするのだ。自分を撮すカメラのついたヘルメットをかぶって、時には一人きりで廃病院の中や樹海の中へ入っていくのだ。たいていの若い女の子は途中で泣きだして駄目になる。無理はさせない。それでなくても口け後おかしくなっ  
て業界から消えていく子が多いのだ。言っではなんだが、そういう捨て駒を事務所の方でもあてがってくる。つくづく因果な商売だと三津木も思っている。そんな中で、美崎優は本当に頑張った。

美崎優も泣いた。泣きながら、それでも決して引き返そうとはしなかった。三津木もつい調子に乗って無理をさせてしまうこともあった。ずいぶんいい画をたくさん撮らせてもらった。同行の霊能者の先生から叱られることも多かった。これ以上させてはいけない、と。美崎優はけなげに頑張った。泣きながら帰ってきて、それでもバスの中では笑顔を見せてスタッフへの気遣いも忘れなかった。必死だったのだろう。そんな優の頑張りをつい利用してしまった、と

いう反省がいまだに三津木にある。だからこうしていつまでも由宇の求めるままに密会を重ねている。

コーナーは深夜としてはけっこうな視聴率を稼いだ。優のおかげだ。だんだんと「心霊スポットの人気アイドル」とか「深夜の絶叫クイーン」とか言われて知名度が上がってきた。そういう言われ方は本人にとつて嬉しいものでもなかっただろうが。優はますます頑張ったが、精神的にはもうボロボロだった。そして、とうとう、壊れた。

ある有名な昔からの心霊スポットに深夜ロケに行ったとき、優はとうとう恐ろしい悪霊に取り憑かれて、おかしくなった。どうおかしくなったか、目撃者は三津木を含めていまだに口を閉ざす。その時のテープは全て破棄した。三津木は本当に「本物の」心霊ビデオというものを知っているのだ。それは絶対に放送できない。

七日月七晩苦しんだ優は、霊能者の先生のおかげでなんとか正常に戻った。さすがにもう無理だと思われた。でも優は芸能人でいたいと言って泣いた。優のおかげでさんざん潤った事務所だったが、さすがにこの状態は持て余して引退をほめかせた。寿命が少し延びただけで、長生きは出来ないと踏んでいる。三津木は怒りを感じ、本気で優のことを思いやった。優と関係を結んだのはこの頃だ。

三津木は本気で優との結婚を考えていた。しかし、優の方ではやはり芸能界への未練が相当にあった。そして、治ったと思われた霊障も、再び現れた。このままでは芸能人どころか、まともに生活することも危なく思われた。

三津木は霊能者の先生と相談し、優に一つ提案した。本格的な霊能者になるために先生の所に修行に入る、と。正直言って再デビューなど不可能だと思っていた。優の霊障を完治させることを第一に考えたのだ。優は承知し、一年間の寺での修行に入った。優が戻ってくることなど三津木は考えていなかった。自分が彼女の人生を壊してしまったことをずっと反省していた。しかし一方で自分と彼女はあれっきりの関係なのだろうと思っていた。

その優が「岳戸由宇」という霊能者として戻ってきた。その直前に先生が心臓発作で亡くなっていた。まだ40代だった。由宇と再会した三津木は我が目を疑った。すっかり細くなって、一年前の面影は微塵もなかった。どちらかというところぼっちゃりして愛嬌のあるタヌキ顔だったのが、すっかり顎の尖った妖艶なキツネ顔に変身していた。

岳戸由宇はスペシャル番組に出世した三津木の「ほんとうにあった」心霊シリーズに霊能者として出演するようになった。三津木はまたも由宇のおかげで視聴率を稼ぐことが出来た。彼女が参加すると番組は面白くなった。心霊現象の取材がどんどんどんどん根深く、大がかりになっていった。それは心霊現象の奥の奥まで見通す由宇の霊能力の高さの証明でもあったが、最初の頃こそ感心して熱くなっていた三津木だったが、だんだん怪しく思うようになっていった。「わざとらしい」「大げさすぎる」「嘘っぽい」。そんな視聴者からの感想が多く寄せられるようになった。三津木もそう思う。取材で現れる心霊現象は、岳戸由宇自身が作り出しているのではないかと、三津木自身が感じていた。しかし現象自体はトリックではない、本物だ。だから怖い。由宇にはいまだに悪霊が取り憑いたままなのではないかと、三津木は疑っている。

三津木は由宇と再び関係を持つようになった。しかし以前のようには本気で彼女のことを自分の人生と共に考えるようなことはなくなった。由宇は三津木の他にも男とつき合っていた。しかもそれを取り分け隠そうともせず。「霊能力を高めるため」と由宇は言った。「本気で安らぎを求めるのはあなただけよ」と言うが、もちろん結婚など全然考えていない。由宇は再び手に入れた芸能界での居場所に大いに満足していた。

2年ほど絶好調だった「ほんとうにあった」シリーズの人気は、だんだん落ちていった。ライバル番組も現れ、三津木はまた深夜に飛ばされるか番組自体の路線変更を迫られる立場になったが、今度は紅倉美姫に救われた。三津木は自分をつくづく運がいいと思う。

どうやら女に援助してもらえありがたい星の下に生まれたいらしい。しかし江戸由宇と紅倉美姫の相性は最悪だった。若さ、美貌、才能、人気、カリスマ性、すべてに由宇は紅倉美姫に嫉妬した。彼女こそ生まれながらの「本物」だった。それもまた紅倉美姫にとって幸せなことではなかったのだが……。番組は江戸由宇の色と紅倉美姫の色にはつきり分かれた。今や番組が保っているのは完全に紅倉美姫のおかげで、由宇もそれに便乗して生き残っている状態なのだが、だからこそなおさら江戸由宇は紅倉美姫が大嫌いだった。

「なんで昨日は来られなかったのよ？」

由宇は三津木の耳たぶを噛みながら言った。昨夜もホテルに誘われたのだが、三津木は理由を付けて断った。

「分かっているわよ、あの女と会ったからでしょう？」

由宇は三津木の顔に向かって無遠慮にアハハと笑った。

「いいわよ、あの女と会った後なんてこっちから願い下げだわ」

分かっている。黙っていても紅倉美姫に会った後で由宇に会うとすぐにバレる。

「臭い！」

と言つていきなり廊下へ思い切り蹴り飛ばされたことがある。ちなみに三津木は紅倉美姫とはこういう関係は一切ない。

三津木は由宇の思惑を読もうと表情を観察していた。昨日紅倉美姫は三津木に由宇の生き霊が付いてきていると言った。無意識だったが、バレた、と。

「あの女と何話したのよ？」

顔が近すぎて睨む由宇の目が4つに見える。

「どうせわたしの悪口言ってたんでしょ？」

「君は彼女のことを誤解しているよ。彼女が君の悪口を言ったことなんて一度もない。ただ……、恐ろしい、と言っていたよ、君のことを……」

由宇は上機嫌に笑った。この剥き出しの競争心。年は若くとも紅

倉美姫の方が数段大人だ。この差が、人気の差だ。

「あれから新潟の刑事が来たよ。いろいろ訊かれたよ、番組のこと。いずれニュースになるな。ワイドショーでも大きく取り上げられるぞ、番組と絡めて」

「へー、良かったじゃない、また次回も数字が取れるわね」

「冗談じゃないよ」

三津木はウンザリしたため息をついた。

「責任問題だよ。次回なんて、俺はもうクビだ」

「あの女を出せばいいじゃない」

由宇はムツとした顔で言うと、ニタリと笑った。

「わたしと対決させなさいよ。わたしとあの女、どちらがあの少女の霊の正体をつきとめるか？」

そーら来た、と思いながら三津木は顔には出さない。

「それなんだけどねー……。念のため訊くけれど、君、青木君とは何も関係ないだろうね？」

「関係って何よ？ 名前も顔も知らないわよ」

「ならいいんだけど……」

もの問いたげな目で見つめて由宇を不安にさせてやった。

「何よ？」

「青木君は例の家で死んでいるのを発見されたんだ。ひどい死に様で、殺されたんだそうだ」

「へー……」

由宇は何気ない風を装いながら笑みがこぼれるのを抑えられない。

三津木はむつつり言った。

「犯人は、その幽霊の女の子だってさ」

由宇は一瞬ポカンとして、アハハハと大笑いした。

「なんで笑うんだい？」

「警察が大まじめにそう言ってるわけ？ 幽霊が犯人だなんて、日本の警察も変わったものねえ」

「テープを見せてくれって言われたよ、あの部屋のライブ中継の、



女の子が映っている」

由宇が笑うのをやめて真顔で訊いた。

「で？」

「テープは残っている。が、女の子が映っているのはテレビにも映った戸の陰から覗いている横顔だけ。カメラに向かって歩いてくる姿は映っていないかった」

「別に不思議はないでしょう？幽霊なんだから」

三津木は由宇がまじめにそう言っているのか怪しむ。

「その部分だけ映像がないんだ。ザーってノイズだけの黒い映像で二つのカメラ共だ。カメラが倒される直前からまたふつつの映像に戻っている。刑事たちにもわざと消したんじゃないかとずいぶん疑われたよ。だが、俺はやってない」

三津木はじーっと由宇を見つめる。

「君はあの少女をどう思っている？ 生きている人間か、それとも死者の幽霊か？」

三津木を見つめ返していた由宇は、フツと意地悪に笑った。

「あの女はどう言っていたの？」

「君の意見が聞きたい」

「言ったら教えてあげる」

「分からないんだな？」

由宇の顔がキツときつくなった。三津木は危険を感じてぐっと由宇を抱きしめた。

「俺は君が心配なんだよ。今回の件は変だ。おかしい。とても俺なんかには理解できない裏があるんだ。しかもそれが進行している。面白がっている場合じゃないんだ。人が死んだんだよ？これからまだ死ぬかも知れない。俺があんな番組をやったせいだ。君を巻き込んだことも反省している。俺は、いまだに君に甘えている」

そうだ、自分はまた間違いを犯してしまった、と三津木は後悔した。

「分かった。いいわよ、ちょっと、放してよ」

三津木の腕から逃れると、由宇は三津木に口づけした。今度は自分から三津木の頭を両腕で抱いて甘えた。

「そうよ、わたしも解らないわ。凄く大きな力が働いている。巨大すぎて姿が全然見えないんだわ。この世界が、すっかりその力に覆い尽くされているのよ。そうよ、どんな人が死ぬわ。しょうがないわ、まともに立ち向かえるような相手じゃないもの、あの女だつてね。あなたも、わたしも、もう巻き込まれている。逆らっては駄目。邪魔すれば、殺されるのはあたしたちよ。ねえ・・・、三津木さんはあたしを殺させるような真似はしないわよね？」

「・・・しないよ・・・でも・・・」

由宇は三津木の口を塞いだ。

「いいのよ。生も死も、隣り合わせ。すごく近いところにあるんだから。でも、やっぱり生きていたいでしょ？」

妖艶に微笑み、生きている楽しさを味わわせるようにたつぷりキスした。

「・・・だが、君は彼女との対決を望むのか？」

由宇は歯を見せて笑った。

「そうよ。暴いてみるがいいわ、恐ろしい世界を。それだけ、あの女は死に近づく」

それが狙いか・・・。三津木は背筋がゾツとした。やはり由宇は取り憑かれているのだと思う。あちら側に付いて、向こうの者どもの手伝いをしているのだ。生きている者の敵、裏切り行為だ。

戦慄し、恐ろしいものを感じながら、それでも三津木は由宇を突き放せなかった。彼女をこんな人間にしたのは自分だ。そして責任を感じるばかりでなく、やはり三津木はいまだに彼女が好きだった。

三津木が抱きしめると由宇も答えた。

地獄へ・・・、

彼女といっしょなら堕ちてもいいと三津木は思った。

派遣社員をしている松田純は昼間なくした携帯電話をホテルのフロントで受け取った。昼食を取ったレストランに忘れていたのだ。純は今友だちと沖繩に遊びに来ている。

「あつたー？ドジ子ちゃん？」

「うるさい。あ、トモからメール来てた。高校の友だち。『ギイアアア！ ショック死注意！』だって。なんだろ？」

添付の画像を開けた。

「イヤー、なにこれー？」

思わず手にした携帯を遠ざけた。連れの友だちが笑った。

「あーあー、見た見たこれ。テレビのお化けビデオでしょー？」

「あ、なんだ、そうか。でもさー、これ、真っ昼間だよ？」

文章の続きを読む。

「『彼氏と遊びに来たM海水浴場にて』」

「おーおー、お友だちは男連れかい？」

「ちよつと。『突然若い女の子がこんな顔に変身しちゃった！ たいへん。呪われたくないから避難開始！ みんなも注意！』だって。なによ、これ？」

「いたずらに決まってるでしょーよ」

「だよな」

純は笑って、なんと返信してやろうか考えた。突然。

「あれ？ やだ、あたしなんか変。あ・・・頭、イタ・・・」

「え？ ちよつと、ヤダー。だいじょうぶ？ しつかり・・・」

純の手から携帯が転げ落ちた。

「う、う、ウ・・・ウガアアアアアアッ！・・・」

「ぎゃああああああああっ！」

午後9時。また一人変身が始まった。

## 第6話 家の事情

8月7日火曜。桜野葉子がいなくなつて3日目。今日もまた馬木たちは視聴覚室に集まつている。来い、とは言つていないが、沖浦も松岡も来た。昨日に続いて由利先生も来ている。が、これはもはや映研の集会ではない。桜野葉子搜索のための作戦会議だ。桜野はまだ見つかつていない。

「昨日はたいへんだつたみたいね？」

沖浦が馬木を氣遣つて言つてくれた。

「うん・・・」

馬木は彼女に申し訳なく思う。電話すると言つておきながら、しなかつた。夜9時過ぎに彼女の方から電話してきた。ニユースあの場所で殺害された青木先輩が発見されたのを知つたのだ。馬木は生返事をするだけで、何を話したのか覚えていない。

今朝からのワイドショーではかなり大きく騒がしく取り上げられていた。新聞には書かれていなかったが、テレビではしっかり現場がああの番組の中継地であり、殺された青木先輩がそのスタッフであつたことが明らかにされていた。

「それどころじゃないわよ」

由利先生がノートパソコンのディスプレイをみんなに向けた。インターネットの掲示板だ。びっしり書き込みがあるが・・・。

「『ビデオ少女の呪い』？」

「そ。昨日の午後から始めて、9時過ぎから爆発的に情報が増えているわ。中には、ほら」

別のブログを開くと、その「現場写真」が掲載されていた。それも別のサイトに更に別の写真が。

「富山県の海と、沖縄のリゾートホテル？」

インターネットと携帯電話のおかげで今や全国どこにでも情報発信者がいる。

「これ・・・本物なんでしょうか？」

沖浦が気味悪そうに顔をしかめて言った。

「リアルよね。わざわざこんな離れたところでこんな手の込んだいたずらでもないでしょうし、情報だけなら他にもあるわ」

由利先生が次々リストアップしていった。

「発生順に、神奈川が一番最初、次いで北海道、それから岡山、香川、宮城、そして富山、沖縄。一番新しいのが、今朝の三重」

「はあ・・・、でたらめです・・・よね？」

「でたらめねえ」

「規則性・・・なし？」

「それが一つあるようなの」

「なんです？」

「発生時刻」

「発生時刻？」

由利先生が画面を指さしながら説明する。

「最初の神奈川が5日の夜9時に発生。次いで北海道が翌早朝5時の岡山が昼1時。香川が夜9時。宮城が翌7日早朝5時。富山が昼1時。沖縄が夜9時。そして今朝の三重が5時」

「夜9時、朝5時、昼1時・・・8時間ずつ、ちょうど1日3回発生しているわけですね？」

「そういうこと」

「ねえ先生。発生って、どうなっちゃったんです？」

「突然こんな顔になっちゃって、意識を失うの」

「やだ・・・」

「ところが8時間たつと元の顔に戻るんですって。意識はずっと戻らないままだけ」

「8時間経って、また新たな発生が起こる？」

「そうね。まるで・・・呪いが人から人へ渡り歩いているみたいね」  
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沖浦が青い顔で口を押さえた。馬木も真っ青になっている。角谷

が感心して言う。

「先生、プロとは言えよくまあこんなに手早く情報が集められるものですね？」

「わたしなんかよりずっと詳しい人間がネット上にウヨウヨいるのよ。わたしはそれを追っかけて確認を取っただけ。だからね、」

由利先生が深刻に言う。

「この情報はもうすぐに一般に知られるようになるわ。青木さんの殺人事件もあるし、パニックになるでしょうねー・・・」

「つまり・・・あの番組を見た人間はみんな呪われる可能性がある？・・・」

「と、考えるでしょうねえ」

「青木先輩の事件と関係あるんでしょうか？」

「やっぱりあるんじゃないかなあ？ ふつうの殺され方じゃないわけだし」

馬木は思い出して頭が貧血を起こしそうになった。実際に死体を見ているのは馬木だけだ。ワイドショーで青木雄二の写真を見た。あの番組中で幽霊らしき少女の姿が映ってパニックになっている外のスタッフの様子がチラッと映ったが、その後ろの方に暗くチラリと映っているのが拡大されて映されてもいた。短髪ですっきりした顔立ちのけっこうな二枚目だった。ただ表情が暗かった。会社で作成したスタッフプレートの写真だったが、まるで警察発表の犯罪者の写真のようだった。そういえばどこか目の感じが桜野に似ていた。葉子も切れ込みの鋭いくっきりした目をしている。父親の遺伝なのだろう。

「青木先輩ってどんな人だったんでしょうねえ？」

「そうねえ、知っている金森さんは入院中だし・・・」

「容態はどうなんです？」

「ああ、意識は一応戻ったようよ。でもまだ絶対安静だから面会できるのはまだ23日後になるでしょうね」

「そうですか。でも、助かったんですね？」

沖浦はひどくほつとしたようだ。馬木は迷った。みんな金森先輩の事故はこの事件とは無関係と思っている。これもまた馬木だけが怪しい女を見ている。人一倍恐がりなのにどうして自分ばかり見てしまうのだらうと恨めしく思った。

「じゃあわたしは他のメンバーのことを調べてみるわ」

馬木が迷っているうちに由利先生がさっさと話を進めてしまった。「5年前顧問だった吉田先生は退職されちゃってるから、これから訪ねてみるわ」

相変わらずの行動力というかせっかちというか。

「日本史が専門で、郷土の歴史にも詳しいそうだから桜野家のことも聞いてみるわ」

すかさず角谷が

「あ、じゃあ僕もごいっしょしていいですか？」

「もつちろーん」

相変わらず角谷に対してはハートマーク付きだ。馬木が言う。

「じゃあ、俺は桜野の家に行ってみようと思います」

「桜野さんの家？」

由利先生が驚いて訊く。

「一人でいい？ わたしも行こうか？」

「俺も行こうか？」

角谷も心配して言う。

「いいよ、一人で。子どもじゃあるまいし。それに、俺一人の方があつちも話し易いんじゃないかと思うし・・・」

多分この中で葉子の母に好印象を持っているのは馬木だけだ。

「あたしは？ いい？・・・」

沖浦が遠慮がちに訊いた。

「いいってば。あのさ、おまえはもう来なくていいぞ。っていうかさ、もう来るな。本当にさ、嫌な感じがするんだ。また誰か巻き込まれるんじゃないかって。おまえはもうこの事件に関わらない方がいい」

「うん……。分かった……」

それじゃあ、と由利先生が話をまとめた。

「わたしとカツくんは吉田先生を訪ねて、部長は桜野さんの家。沖浦さんは帰宅で、松岡くんはどうする？」

「お、俺は……」

松岡は口ごもりながら言った。

「現場を見てくる。昨日行かなかったから……」

「そう。行っても警察がロープを張って中には入れないでしょうけれど。ともかく、松岡くんも気を付けてね」

「はい……」

由利先生はやっぱり松岡に対しては冷たい。

由利先生が教務室に寄るついでに鍵を返してきてくれることになって、廊下に出てぶらぶら歩き出した馬木に角谷が言った。

「おいこら、オット。おまえさー、かすみちゃんに冷たいぞ」

「沖浦に？」

「かすみちゃん、まだおまえのことが好きなんだぜ？」

「……」

そうなのだろうか？ とぼけているわけじゃなくて、馬木は本当に分からなかった。たしかに1年の時はクラスが同じこともあってけっこうよく話した。自分でもなかなかいい雰囲気だと感じたこともあった。でも、それ以上には関係は進まなかった。二人とも仲のいい友だちという関係で満足していたし、恋愛に関しては二人とも奥手だった。

だが、もし桜野が現れなかったら……。とも思う。もし葉子が現れなければ、ゆっくりゆっくり、二人の仲は深まっていったのかも知れない。そのままの二人でいっしょにいたなら、大学を出て数年後には結婚……。なんてことも、沖浦となら想像できた。

葉子は、そんな二人の関係を完全に破壊した。葉子は恐ろしく積極的だった。無邪気そのものに感じたが、今となってはどうだった



のかからない。

そうか……。と、馬木は思い返した。もともとなんにもなかった風を装っているが、実際何もなかったのだが、馬木と沖浦は自分で思っている以上に深く思い合っていたのかも知れない。

『俺が一方的に裏切ったということになるのかなあ……。』

馬木が葉子とつき合いだしても沖浦は何も言わなかった。クラスも離れて話す機会もグンと減った。もともと何もなかった風を装っていたのは沖浦もいっしょだ。

角谷が目細めて非難の眼差しを送っている。

「そんな目で見られてもなあ……」

今さらどうしようもない。角谷のやれやれという態度に力チンと来た。

「おまえこそどうなんだよ？ この女泣かせめ」

「俺は女の子を泣かせるようなことはしてないよ」

「ずるい奴め。誰か本命はいないのか？」

「いない……こともなくはない……かな？」

「いるんだな？」

角谷はまあまあとごまかして笑った。

「分かった。降参。この話はなし」

逃げた。

「今は葉子ちゃんを見つけることだ。そしたらさあ……。な？俺のシナリオ良くできてただろ？」

「うん」

プリティーゴーストおとめちゃん。

「葉子ちゃん主演で撮ろうぜ。文化祭には十分間に合うさ」

「うん。そうだな。撮ろう」

二人で笑った。男の友情だ。……ふと心配になった。もしかして角谷の好きな相手って……

「部長、ちよつといいかな？」

松岡だ。相変わらず陰湿な顔してやがる。松岡の視線に角谷は、

「じゃ、俺駐車場行くわ。副部長、待ってくれー」

と、一人とぼとぼ歩く沖浦を追っていった。

「なに？」

松岡は角谷と沖浦が階段を下りていったのを確認して、ニヤリと馬木に笑った。

「おまえ、由利先生が俺のこと嫌ってんの知ってるだろ？」

「そうなのか？」

「とぼけるなよ。おまえも俺のこと嫌いだろ？」

「別に嫌いとは・・・」

「かまわねえよ。俺もおまえが嫌いだ」

「・・・嫌いだよ」

またニヤツと笑った。なんなんだろう、こいつは？

「由利先生っていいよなー、あの脚。適度に太くてキュツと締まってるさ。レースクイーン出来るよな？」

確かに！・・・いやいや。

「俺さ、先生に見つかっちゃったんだ、盗撮してるところ」

「何を？」

「スカートの中。無線ＣＤカメラを靴に仕込んで下から撮ろうとしたところをな」

犯罪者だ、こいつ。

「二度としないって約束させられて許してもらったけど、見られないならスカートなんてはいてくるなってんだよな、血気盛んな青少年に目の毒だぜ。なあ？　へへへ」

馬木は笑わなかった。

「そうそう、先生もそういう目で俺を見るんだ。そうだ、俺はそういう薄汚い変態野郎だ」

「・・・おまえさあ、なんなんだよ？」

ガキか。そうやってワルぶってかまってもらいたいんだろうか？

「おまえ、金森先輩のことどう思ってる？」

「どうって・・・大人の、いい人じゃん」

「へっ」

松岡は思いつき馬鹿にして笑った。

「おまえみたいな甘ちゃんには分かんねーだろーがなー、デブのブ男つてのはみんな陰湿なスケベの変態野郎って決まってるだよ。本人が言うんだから間違いねえ」

「おまえ、自分がそうだからって人をいつしよにするなよ」

「やるよ」

松岡はカバンから写真を一枚取りだして馬木に渡した。

「わっ」

一目見て目を逸らした。それは倒れた金森先輩を撮した事故の写真だった。

「いらねーよ、こんなの」

「いいから見ろ！」

珍しく松岡のストレートに怒った声に馬木は嫌々写真を見た。両手を投げ出し、仰向きに体をひねった、腿から上の写真だ。メガネは吹っ飛び、硬く目を閉じた顔は苦痛に歪み、「あゝ・・・」と言うように口を開いている。馬木は痛々しさに顔をしかめた。

「よく見ろ、分かるだろう？」

何が？・・・嫌々さらに見ていると・・・

「あれ？」

「言つとくがな、俺は全然手を加えていないぞ」

「・・・・・・・・・・」

金森先輩のストラックスの腰の上に、白いものが浮き出ている。まるでレントゲンに映った骨のようだ。その腰骨が、グチャグチャにひび割れている。金森先輩のけがは大腿骨骨折と骨盤の複雑骨折だった。

「そういえば・・・・」

青木先輩も骨盤がめちゃくちやに叩き割られていた。

「あいつは性格のいいおまえの思っているような人間じゃねえぞ」  
「どういうことだよ？」

「本質は俺みたいに腐った奴だつてことさ」

「この写真はなんなんだよ？」

「さあな。でもまともじゃないよな。あの事故も、ふつうの事故じゃなかったってことさ」

松岡は疑惑の目で馬木を見た。

「おまえ、本当は事故の瞬間を見ていたんじゃないか？」

「・・・」

「ま、いいや。俺はヨーコちゃんのファンだからな、一応おまえに注意しておいてやっただけだ」

「そうか・・・。おまえ、これからあの家に行くのか？」

「ああ」

「なんで？　今さら行つたつてどうせ周りから見ただけだぞ？」

「テレビの取材が来てるだろ。それを撮ってくるのさ」

「今日もご自慢のデジタル一眼レフを首からぶら下げている。」

「ま、いいけどさ。気を付けろよ。おまえもあんまり変なところに首突っ込んで危険な目に遭うんじゃないぞ」

「へへ、俺が呪い殺されたらいい気味だと思うだろ？」

「思わねえよ。あのさ、カクとも話してたんだけどさ、桜野が帰ってきたら映画撮ろうぜ。カメラはおまえに任せるからな」

「俺に？・・・」

馬木はゲツと思った。松岡が目を潤ませている。おいおい、マジかよ？

「じゃ、俺も行くわ」

松岡は行きかけて、立ち止まるとギロツと馬木を睨んだ。

「ついでだ、これもやる」

また一枚写真を差し出した。受け取った馬木はギクツとして血の気が引いた。中庭で抱き合いキスしている馬木と葉子の写真だ。松岡がムツツリ言った。

「俺は本当は桜野なんてあんまり好きじゃねーんだ。ただのアイドルの追っかけごっこだよ。けっ、見せつけやがって。おまえ、桜野

にも遊ばれてるぞ」

ムツツリ怒って行ってしまった。なんなんだろう？ 馬木は写真を持ってぼーっと立ち尽くした。自分を性格のいい人間だなんて思っていないが、どうやら松岡や角谷や葉子よりずっと甘ちゃんな子どもだったらしい。松岡の言葉、もしかして葉子は松岡が写真を盗み撮りしていることに気付いていたのか？ ショックだ・・・。

葉子の家を訪ねるのに気が重くなった。

先に電話をかけて母親から訪問の許可をもらった。ただし気を付けて、とのことだった。桜野の家は中心街にほど近い高層マンションの最上階だった。気が付いてみれば昨日連れていかれた警察署のすぐ近くだ。あの家にも近いと言えば近い。行ってみて母親の警告の意味が解った。周囲の道路に怪しげな人間がウヨウヨいる。マスキミの連中だろう。今のところ桜野の名前は表に出ていない。未成年だし、誘拐の可能性もまだなくはない。幸いセキュリティがしっかりしているので馬木は彼らに捕まることなくマンション内に入ることが出来た。

部屋に招かれて、驚いた。桜野の部屋は2階建てだった。まさに家だ。これじゃあ娘がいなくなっても気付かないわけだ。

「いらっしやい。ふうーん、あなたが部長さんなんだ」

葉子の母は物珍しそうに馬木を眺めた。

「へえー、意外にふつうなんだ。あの子はあたしみたいにもっと面喰いかと思ったわ」

失礼な人だ。ご期待に添えなくてすみませんでした。

「あはは、ごめんねー。どうぞ、掛けて。ジュース？ コーヒー？ それともビールにする？」

「じゃコーヒーを」

「はいはい」

居間とつながったキッチンへ入っていった。広さこそそんなにな  
いがまるで一流ホテルのロビーみたいに豪華な居間だ。2階まで吹  
き抜けで、ここに2階に上がる階段がある。その階段の上から一人  
の少女が馬木を見下ろしていた。

「紗恵ちゃん、あなたも何か飲む？」

少女はプイと奥へ入っていった。葉子の下の妹だろう。目が細く、  
地味な感じで、華やかな母や姉とはあまり似ていない。

「どうぞ」

砕いた氷の入ったアイスコーヒーを出してくれた。炎天下自転車  
をこいできた馬木にはありがたい。コーヒーはブラックだった。

「ああ、ごめんなさい。わたしも葉子も砂糖は使わないし、紗恵ち  
ゃんはコーヒー飲まないから」

「いえ、けっこうです」

本当はひどく苦かった。葉子もこんな大人の味のコーヒーを飲ん  
でいるのだろうか？

葉子の母は頼杖を付いて微笑みながら馬木のコーヒーを飲むさま  
を眺めていた。まだ33歳というが、年齢以上に若い。母親という  
よりちよつと年の離れた姉だ。ただ、さすがに今日は目の下に疲労  
の色が濃い。馬木はコーヒーを飲み干してしまうと、ニコニコ眺め  
ている母親の視線が眩しくてドギマギした。

「あの・・・、葉子さんの行方は、何か分かりました？」

「さっぱり。まるで消えちゃったみたい。あの子お金持ってるから  
どこでも行けるしね、東京なんて出られたら、若いかわいい子なん  
で溢れかえってるでしょ？ 見つからないわよ」

「でも、いなくなって三日ですよ？ 昼間はともかく夜はどうする  
んです？ 子どもが一人でホテルには泊まれないでしょう？」

「一人ならねえー。でも悪い大人はいっぱいいるし、あの子、けっ  
こうずる賢いから」

娘の危ない話をしながら微笑んでいる。やっぱりどこかしら神経  
の在りかが違っているようだ。少女マンガの天使のような顔はほん

わかと優しく、目のキリツとした葉子とはちょっとタイプが違うが、共にとびきりの美人であることは共通している。危うさを感じながら、真木はやはりこの母親に好意を感じる。面と向かって気恥ずかしさを感じながらそのひたすら優しい眼差しがどこか幼い頃の懐かしい嬉しい感情を思い出させる・・・。

「がっかりした？」

「は？」

「葉子が実はけっこうな不良娘で」

「いえ・・・そんな・・・」

実はけっこうシヨックだ。母親は微笑んで言う。

「だからあなたを選んだのかしらねえ？ あの子、中学を卒業して、けっこう本気でまじめになりたいって思っていたようだから。でもあの子大人だから、恋人は必要なのね。だから絶対自分を裏切らない相手を選んだんだわ」

馬木は戸惑った。自分と葉子がつき合っていたことなど一言も話していない。

「葉子がいなくなつて、紗恵ちゃんから聞いたの。二人はけっこう仲良かったのよ。子どもの頃はもっと仲良かったんだからねえー、今はちよつと複雑、かな？」

母親は困つたように笑つて、寂しい目をした。

「知ってる？ 葉子と紗恵ちゃん、晴美ちゃん、知世ちゃん、四人とも父親が違うの？」

「はあ・・・」

「異常でしょ？」

「・・・」

母親はフツと暗く笑つた。天使のような子どもっぽい顔の裏の、33歳の女性の本性が現れたようだ。

「わたしが葉子を生んだのは18の時。高校を出てからすぐに最初の夫と結婚してその時にはもうあの子を妊娠していたわ。みだらと思うでしょうけれど、この時のわたしは心底から本気だったわ」

懐かしむように、悲しい目をした。

「相手は28歳のふつうのサラリーマン。優しい、いい人だったわ。お金なんてなかったけれど、わたしは幸せになろうと一生懸命だったわ……」

豪勢な居間を見渡して言った。当時はこれとは対照的な生活をしていたのだろう。

「でも、現実には甘くなかったわ」

唇は若かった自分を自嘲し、瞳は暗く怒りを揺らめかせた。

「葉子が生まれる直前、夫が会社で不祥事を働いて首になったわ。あのひどく落ち込んで、濡れ衣だって言ってたわ。そうだったんでしょね。陰で父が糸を引いていたのよ。父はわたしたちの結婚には大反対で、娘を奪ったあの人をひどく怒っていたわ。全然違うのに。わたしが、望んだことだったのに……」

葉子が生まれると、わたしと葉子はそのまま実家に連れていかれて監禁状態にされたわ。勝手に夫との離婚届を作られて、勝手に離婚手続きをされたわ。父は夫とは金で話が済んだからと言ったわ。そして勝手に新しい夫との結婚届を作られて、勝手に結婚させられてしまったわ！生まれた葉子のために父親が必要だらうって」

「それは……」

ひどい。

「それは、犯罪じゃないですか？」

「そうよね。でも、世の中お金で解決できないことなんて何一つないのよ」

まるで呪詛のように言った。

「わたしは監禁されて父の監視の下に新しい夫との結婚生活を営んだ。2番目の夫は父の会社の将来有望なエリート社員ということだった。どうでもいいわ、そんなこと。葉子を乳母に取り上げられてわたしはすぐに2番目の子を妊娠した。父は男の子を産ませたかったのよ。早く自分の跡取りが欲しかったのよ。でも生まれたのは紗恵、女の子だった。あの時の父の落胆した顔と言ったら……」



浮かべた笑いに馬木はゾツとした。天使の顔の裏にこれほどの怨念を抱えていたとは。

「父はさらに男の子を産ませたがったけれど、今度はわたしも徹底抗戦した。絶つつつ対、この人の子なんて生んでやるものですかと、毒まで飲んだわ。何度も救急車を呼ぶ騒ぎを起こして、夫の方でもさすがに愛想を尽かせたわ。わたしは強引に葉子と紗恵を連れて家を出た。また連れ戻されるくらいなら親子で心中してやるくらいのもりでね。今度は父も折れて、とにかく落ち着けと、このマンションを買い与えたのよ」

なるほど、大金持ちの一人娘の我が儘でこんな豪勢なマンションに住んでいるわけでなく、いわば軟禁状態なわけだ。

「家を出たわたしは前の夫の消息を探ったけれど、なんと外資系の商社に入社してニューヨークにいたわ。あつちでアメリカ人の奥さんでもらって、市民権も獲得したそうよ。ハッ、馬鹿馬鹿しい！」

やはり、裏切られた・・・と言うことなのだろうか？

「こうなりやこつちもヤケよ。父の薦める新しい男と結婚して、もう子どもは産めないかと思つたら簡単に妊娠しちゃつて、で、今度もまた女の子。あははははは。父親の奴、ざまあないつたらないわ。あはははははは。で、つまない男だつたからいいかげん離婚して、新しい男ともまた女の子生んじゃつて。あははははははは。もうね、みんな呆れ返っているわ。わたしもね」

あはははははははははは。

この人は、もう完全に自分の人生を捨てている……。

あはははは、と笑っていた母親はゲホンゲホンとむせてキツチンに走っていった。

「あー・・・、ごめんなさい。おかしくて笑い過ぎちゃった」

「はー．．、これも母の呪いでしょうね」

「お母さんの……呪い？」

「そうよ。ノ・ロ・イ。うふふふふふ」

だんだんこのお母さんも怖くなってきた。

「そもそもわたしはね、母が父を呪うための道具として生んだのよ。だからわたしに父の後を継ぐべき男の子を産ませないんだわ、女の子ばかりゴロゴロ産ませてね、完全に父に対する嫌味よ」

「お母さんというのは？・・・」

「死んだわ。わたしを産んで満足してね。」

わたしには二人の兄がいるのよ」

「え？ お母さん、一人っ子じゃなかったんですか？」

「お母さん？」

ニツコリ微笑んで馬木を見つめた。

「あ、いえ、すみません」

「いいのよ。葉子を大事にしてくれる人だったら喜んでお母さんになるわよー」

馬木は真っ赤になった。すっかり葉子と公認の仲にされてしまったが・・・、いいんだろうか？

「それで、えーと、お兄さんが二人いるんなら、お父さんの後継者なんてお母さんが産む必要もないじゃないですか？」

お母さん、とか、産む、とか、どうも生々しくてますます赤くなってしまう。

「それがちよつと複雑だね。わたしたち三人とも母親が違うの。で、正妻の子どもはわたしだけ。兄二人は妾、愛人の子なのよ」

うわっ。由利先生じゃないけれどますます生々しく嫌な話になってきた。

「兄二人とわたしはずいぶん年が離れているのよ。正妻である母はずーっと子どもが生まれなくてひどく惨めな思いをしていたよね。母はけっこうな家の出だったからプライドも高いし、周りからいろいろ嫌味を言われたよね」

なんだか前時代的な話でピンと来ない。

「ふふふ、馬鹿みたいと思うでしょ？ 桜野家なんて元はしょせん田舎のお大尽ですからね、いまだにくだらない見栄が強いんだよ。名

家の母を表向き持ち上げて、陰では跡取りの生めない役立たずと厄介者扱いして、ずいぶん言われようだったらしいわ。この時代だと思うでしょ？ でもね、いまだにいるのよ、そういう人種が」

軽蔑しきった顔で言った。そういう人種の中で生まれたせいで、人生をめちゃくちゃにされたのだ。

「わたしが生まれたのは父が52、母が46の時よ。今ならともかく、30年前じゃあね、高齢出産で死んでもおかしくないわよね。執念よね、母の、子どもの産めない役立たずと言われ続けた」

ここは、しよせん田舎の街だ。田舎の人間は口が悪い。

「生まれたのが女と分かって母は実に満足そうに笑ったそうよ。笑って、死んじやった、わたしを残してね。父はわたしを大いに持て余したわ。母の思うつぼね。」

母が笑ったのは、わたしが生まれたことで桜野家の後継問題がますますこじれると分かっていたからよ。上の兄二人は生まれがたったのひと月しか違わないのよ。しかも両方の母親ともろくな女じゃなくってね。双方取り巻きが事あることにするさく騒ぎ立てて、もう50にもなるうっていうのにいまだに兄たちの仲は最悪よ。わたしがさつさと家を出たかったのが分かるでしょ？ 父も二人の兄を嫌っているわ。兄たちの子も親譲りで全然かわいくないし、だからわたしにどうしても男の子を産んで欲しかったんでしょね、ハッ、いい気味だわ」

馬木はすっかり顔の火照りも消えて血の気が失せた。母娘二代の怨念の物語だ。しかしそれにしても前時代的な・・・。

「真二さんとの仲を邪魔しなければ、男の子だって産まれたかも知れないのに・・・」

真二さんというのが最初の夫、葉子の父だろう。葉子の母が唯一心から愛していた夫だ。その夫にも結局裏切られたわけだが。つくづく不幸な人だ。母親は笑って言った。

「父も最近じゃあすっかり気が弱くなってもう何もかもあきらめたみたい。知世の世話をよくしてくれて、ずいぶんかわいがってくれ

ているようだわ」

知世が四女。5歳だ。するとこの子は実家に預けっぱなしなのだろうか？ この人は本当に人生を捨ててしまっているようだ。こういう家庭で葉子は育ってきたのだ。そりゃあグレもするだろう。

「ひどい母親だと思うでしょう？」

「……」

「たしかにかわいそうよね、葉子も、紗恵も、晴美も、知世も。でも……」

母親は突然うつむいて激しく泣きだした。

「愛せないわよ、娘たちを。わたしが愛せるのは葉子だけ。紗恵ちゃんも、晴美ちゃんも、知世も、ごめんなさい、お母さん、愛せないのよ……」

うつうつと、と、両手で顔を覆い、背中を丸めておえつを漏らし続けた。2階にも聞こえているだろう。紗恵ちゃんはこの母親をどう思っているのだろうか？ 三女の晴美ちゃんはいっているだろうか？

泣くのが落ち着いてから馬木は遠慮がちに言った。

「あの……青木雄二さんは、ご存じですか？」

「ああ……お兄さんの子ね。最初の夫のお兄さんが弟のことを申し訳なく思っているいろいろ親切にしてくれたのよ。わたしの周りで唯一まともな人だったのに、雄二さんがあんなことになるなんてねえ……」

「葉子さんは青木葉子と名乗っていたようなんですが……」

「葉子が？ いつ？」

馬木は5年前のビデオ撮影のことを話した。

「ふうん……そんなことがあったの。知らなかったわ。そうね、葉子に青木の名前を教えたのはわたしよ。あなたは本当は青木葉子っていうのよ、って。子どもの頃だけど、憶えていたのね……」

そう、葉子は青木葉子として生まれながら実質その名で呼ばれることはなく、生まれてすぐに桜野葉子になったのだ。

「雄二さんと葉子さんは仲が良かったんですか？」

「さあ？・・・ わたしが知ってるのは子どもの頃数回会った程度で、そんなに仲良くなる機会もなかったと思うけれど・・・」

それでは別の機会に再会して仲良くなったのかも知れない。

「青木さんは3年前に友人に青木葉子さんが死んだと言っているんですが？・・・」

それが葉子のわけはない。

「3年前・・・」

母親は暗くため息をついた。

「3年前に死んだのは真二さんよ。強盗事件に巻き込まれてね」「ニューヨークですか？」

「いいえ。東京よ。結局あっちの奥さんと5年ほどで離婚して、日本に帰っていたのよ」

「なんで青木葉子が死んだなんて言っただんでしょう？」

「さあ？ 縁が切れたってことなんじゃない？」

「葉子さんやお母さんはお葬式には？・・・」

「出なかったわ。ご両親のいるこっちで葬儀はしたんだけど、結局葉子は生まれてから一度もあの人には会わずじまいだったわねえ・・・」

・・・。。。。。

「ところでお母さんは「本当にあった少女霊ビデオ」って番組、ご存じですか？」

「ああ・・・、なんだか話題になっているらしいわねえ？」

警察ではそちらの事情は話していないらしい。

「そうだ。あの家は桜野家の所有なんですか？」

「知らないわ。そうなの？」

「さあ？・・・」

違っただろうか？

「あの家で撮影されたその番組に、葉子さんらしい姿が映っていたんですよ。僕たちはそれであの家に行つて、青木雄二さんを発見したんです・・・」

「まあっ、雄二さんを見つけたの、あなたたちだったの!？」  
それも知らなかったのか。

「ええ、僕なんです」

「そうなの。ひどい目に遭ったわねえー」

お母様ほどではありません。

「そうですか、見てませんか。しまった、誰かにビデオ借りてくるんだったなあ・・・」

2階からトコトコ紗恵ちゃんが下りてきた。言うては申し訳ないがやっぱり姉ほどの美人ではない。元々の顔の作りより、表情が暗い。

「録ってあるわよ」

リモコンを取って大型テレビのとなりのハードディスクレコーダーを起動させた。羨ましい。しかし、下の会話は筒抜けだったようだ。廊下で聞き耳を立てていたのかも知れない。そう思うとこの子も怖い。インデックスから番組を選択し、始まったと思ったらすぐにそのシーンを呼び出した。

馬木も久しぶりに見る。暗くざらざらしながらもカラー映像で向こうの戸の陰から少女の斜めを向いた顔が覗いている。紗恵は一時停止し、画面を拡大した。デジタルって便利だ。少女の暗い目がじつとこちらを見ている。

「葉子ちゃん・・・ねえ・・・」

「間違いありませんか?」

「ええ。いくらなんでも自分の娘の顔は見間違わないわよ」

そうか。やはり葉子だったのか。

「この子、こんなところで何してるの?」

母親はこれがどういう番組なのか知らない。馬木が説明すると母親は困惑した表情になった。

「なんなの? じゃあ葉子ちゃんはお化けに取り憑かれて雄二さんを殺しちゃったの?」

「警察ではなんと聞かされたんです?」

「遺体の状態からはとても女の子の犯行とは思えないが、状況的には娘さんが犯人である可能性が一番高い、と言われたわ」

「お母さんは・・・どう思ってます？ 葉子さんが青木さんを殺したと思いますか？」

「さあ？・・・、そうなんじゃない？」

わりとどうでもいいように言った。

「葉子はまだ子どもだもの。子どもが何を考えているかなんて、大人には分からないわ」

大人と言ったり子どもと言ったりいいかげんだ。でもそれで正しいのかも知れない。無責任な言い様だが、この母親じゃあしょうがないかとも思う。母親が訊いた。

「紗恵ちゃんはどう思う？ お姉ちゃんが殺したと思う？」

「殺したんじゃないの？」

この妹もあっさり言う。

「お姉ちゃん、男なんて大っ嫌いだもん」

細い目でじつと馬木を睨んで言った。

「あなたも、どうせすぐに飽きられて捨てられちゃうわよ」

「こらこら紗恵ちゃん。嘘よ、部長さん」

娘をたしなめながら母親は優しく暖かく、じつと強い視線で馬木を捕らえて言った。

「葉子はつつぱって悪ぶってるだけよ。あなたのことは本気で好きだと思っわ。だから、ね？ 葉子を裏切らないでね？裏切ったら、恨むわよ」

母と娘にじつと見つめられて馬木は怯えた。異常な母、異常な妹、異常な家庭。本当のところ葉子が自分をどう思っているのか、馬木は分からなかった。

松岡は自転車をこいで「現場」に向かった。近くの林の中に自転

車を置いて歩いた。太った松岡には坂道の多いここまでの道のりはきつかった。歩き出した途端に汗がしたたり落ちてメガネが濡れた。しかし気持ちは元気だった。

「お、ラッキー。本田真由じゃん」

予想通りに現場の前の道路には大勢の報道陣が立ち並んでいるが、本田真由は東日テレビの地元の系列局BNTの美人アナウンサーだ。松岡はさっそくカメラを構えてシャッターを切った。

「真由たん、インタビューしてくれないかなー？」

松岡はえへへと熱烈な視線を送ったが、スタッフと打ち合わせをしていた本田アナウンサーはチラツと見たきり松岡を無視した。

「ちえっ」

松岡はカメラ小僧に徹してシャッターを切りまくると、いちおう背後の現場の方にも目を向けた。家は全体が建築中であるかのようシートで覆われている。現場検証は終わっているが、まだ警官が見張りに立っている。家の周りには真っ赤なハマナスの花が群生している。

「つまんねーな。ちくしょう、俺も死体発見したかったぜ」

撮る気もなくファインダーを覗いてあちこち見ていた松岡はハマナスの群生を見て、あれ？、とファインダーから目を離れた。気のせいかな？ またファインダーを覗いて、ズームを全開にした。

「なにやってんだ？」

思わず周りを見た。誰も気にしてない、と言うか、誰も気付いていないのか？ そんな馬鹿なと家の前に立っている警官を見たが、やはり全然気にしていない。

「いいのかよ？」

松岡は目でその辺りを探したが、見つからない。

女が、ハマナスの中に寝転がっていたのだ。

角度のせいかな？ここからでは距離があって横からしか見えないが、家の前に立っている警官からなら上からでーんと寝転がっている姿が見えるはずだ。



松岡は捜したが、やはり肉眼では見つからない。

もう一度カメラを構えてファインダーを覗いた。いた。カメラの位置をずらさないようにそっと目を離して今見た辺りを見た。いいい。

「マジかよ？」

ホラー映画で見たぞ、病院の地下室でビデオカメラを覗いたときだけ幽霊たちが見えるんだ。

写るのか？ 松岡は夢中でシャッターを切った。真由たんなんかもうどうでもいい。こりやすげえぞ！ シャッターを切りながら気付いた、女は一人ではない。

真つ赤な花の中に一人、二人、三人・・・五六人の女たちがまばらに横たわっている。みんな15から22くらいの若い女だ。パジャマを着ていたりTシャツを着ていたり、ビキニの女までいる。

「ちくしょー、近づいて撮りてえなー」

すっかり興奮状態になっている。花に埋もれているから最初に見つけた一人しか顔はまともに見えないが、パジャマ姿で茶髪のこの少女は、目と口を半開きにしてうつろな顔をしている。どうせ生身ではないが、周りは鋭いトゲだらけだ。耽美的なエロスを感じる。

「はいオーケーです。次2時からです」

昼のワイドショーが終わって中継のスタンバイが終わったのだから、そんな声が聞こえた。松岡の耳には素通りしている。

「面しれーなー。ざまあみろ、俺だけの独占だ！」

一カ所にとどまらず、松岡はテレビカメラなんて完全に無視してロープから身を乗り出してシャッターを切り続けた。

「やった。たまんねーや」

一番狙っていたビキニの女の顔が見えた。美人だ。二十歳くらいの成熟した体に口を開いたうつろな表情。松岡は夢中になった。

後ろから肩越しに女が覗いていた。

「わっ」

いくら夢中になっても首の横からぬつと顔を突き出されたら

ギョツとする。

「なんだよ？」

ストレートの髪の長い女だ。ＯＬらしくピンクのストライプの清潔なシャツを着ている。純日本的な２２くらいの美人だ。

「な、なんですか？」

女は熱心に松岡のデジタルカメラの液晶画面を見ていた。しかしこの日射しで松岡は液晶ファインダーを使って液晶画面は切っている。

「え？ 見たいんですかあ？ えへへ、このカメラすげえものが見えるんですよ」

松岡はデレデレ言った。

「・・・カ・ネ・モ・リ・・・」

「え？・・・」

松岡は顔をひきつらせた。この女も、寝転がっている女たちと同じうつろな顔をしている。

「カネモリ・・・」

女の目が大きく見開き、そのうつろな顔に見る見る激しい怒りが浮かんできた。

「ひ・・・ひ・・・」

松岡は青くなりながら思わず女の見ている液晶画面を見た。切っけるはずのその画面に、松岡の撮した事故に遭った金森先輩の姿が映っていた。

「ばかな・・・」

事故の写真の入っているＳＤカードはとくに抜いている。ここに古いデータは入っていないはずだ。

「カネモリ・・・」

「ひいひい・・・」

脚がガクガク震えた。漏らしそうだ。女は鬼のような形相をしている。動く気配に松岡は振り返った。真っ赤な花畑の中に女たちが立ち上がっている。パジャマのコギャルも、ビキニのセクシー美女

も。しかしみんなうつろな表情が一変してこの女と同じ憤怒の形相をしている。

「カネモリ」

「カネモリ」

「カネモリ」

「カネモリ」

・・・・・・。

もつといた。7人の女たちが憤怒の形相で呪詛のように金森の名を呟き、ザツ、ザツ、と、こちらに向かって歩き出した。

「ひ、ひ、ひいいいっ！」

や、やべえ！ 松岡の頭は猛烈に回転した。そうだ、ビデオカメラを覗いて幽霊たちを見た女は、その直後に幽霊たちに惨殺されるんだ！

「ひいいいっ！」

松岡は転げるように逃げた。

パパパパパパッ！！！！

「うわああっ！」

激しくクラクションを鳴らしてライトバンが走り去った。

「君、だいじょうぶか！」

「うわっ、放せ！」

松岡は助け上げようと差し出された手を振り払って一目散に走った。

「はは、ははは、はははは！」

走りながら、死にそうに心臓をバグバグ言わせながら、笑った。デブのブ男で良かった。そうだ、こんな醜いデブキャラの死に様なんて誰も見たがらない。助かった、デブ万歳！

止めてあった自転車に辿り着くと、松岡はしばし考え、自慢の宝物であるデジタル一眼レフカメラをカバンに突っ込み、かごに突っ込んで自転車をこぎだした。今度は自動車に轢かれないように慎重に。

## 第7話 消息

「う、う、．．．うわあっ！．．．」

金森勇一は意識を取り戻した。事故から二日経っている。

この二日間、金森はただ静かに眠っていたわけではなかった。ずっと恐ろしい悪夢を見ていたような気がする。夢の常として目覚めてからその内容を具体的に思い出すことはできない。しかし、そもそも説明しようとしても説明できない、具体的でありながら抽象的な夢だったような気がする。まさに悪夢的なイメージの連続という感じだった。

金森はそれを陰からただじつと見ていた。だから生還できた。理解できないその光景を、ただただ怯えて、震えて、隠れて見ていたのだ。

あ．．．またやられた．．．、と。

何が何に「やられた」のか、まるで思い出せない。思い出したら、俺もあそこへ連れていかれる．．．」

と、本能が思い出すのを強烈に拒否している。

『あれは誰だったのか？．．．』

金森はブルブル震えて思考にブレーキを掛けた。関係ない、俺は関係ないんだ、と。

金森は五十嵐大学付属病院に入院していた。重症患者専用の個室に入っている。マンガみたいに包帯をグルグル巻きにされた右脚が上から器具で吊られている。腰もガッチリ石膏で固められている。複雑骨折だ、まさに絵に描いたような絶対安静だ。目覚めて、命が助かったと分かってすぐに今度は立って歩けるようになるのか？という不安に悩まされることになった。

くそう．．．、なんでこんなことになってしまったんだ？

事故の瞬間、あつ、と思った。誰かに突き飛ばされたのだ。あつ、と思った次の瞬間には車に跳ね飛ばされていた。激痛。衝撃。後は覚えていない。

さっきお巡りさんが来て話を聞かれた。誰かに突き飛ばされたと言ったら変な顔をされた。そんな目撃報告はない、君は自分でフラフラ道路に飛び出てきたんだよ、と。そんな馬鹿な、と思ったが、言われてみると自信がない。

そうだったかも知れない。暑さで頭をやられていたのだ。そうだが、その前にも誰かの気配を感じて振り返ったが誰もいなかった。植え込みの影に隠れていたと考えられないことはないが、誰がそんな子どもみたいな真似をする？　もし自分を突き飛ばす気で潜んでいたのならあり得るが・・・

金森はブルブルと震えた。なんだかひどく嫌なイメージが浮かんだ。夢だ。誰かが走ってきて・・・・・・

やめろやめろやめろ！

思い出すな！

全身がびっしょり汗で濡れた。病室はクーラーが抑えられているのかけっこう暑い。

金森は吸い飲みから少量の白湯を飲んだ。思いつきり冷たい水がぶ飲みしたかったが、医者からしばらく水分は控えるように言われている。

はあー・・・とため息をついて半分ブラインドの閉められた窓を見た。3階だ。学校の校舎が見えた。小学校だ。先生になる夢はどうなるんだろう？　先生になってかわいい子どもたちと触れ合いたかったなあ・・・。俺の人生どうなるんだろう？　・・・

ふと・・・

ベッドの足元の奥、視線の端に影が映った。

ゴクリと喉が鳴った。汗が瞬間的に引いていく。全身に鳥肌が立っている。ブルブル震えがわき上がってくる。ゆっくり、顔を振り向かせた。

・・・・・・。

金森は驚愕し、脳髓と全身に強烈なしびれが走った。開いた顎が震えて悲鳴も上がらない。

バケモノが立っていた。

あのぬらぬらした風船のように膨れ上がったバケモノの顔だ。

「だ・・だ・・だ・・」

歯をカチカチ言わせてやつと言った。

「誰だ？・・・・・・」

誰のいたずらだ？ 金森はそう思ったかった。そうだ、5年前自分たちがやっていたはずだ。バケモノの顔の下はピンクのストライプのシャツにタイトスカートのOLスタイルだ。体は明らかに女だ。  
「誰だ？・・・・・・」

女？ 女の、誰が、こんな馬鹿ないたずらをする？ 病院のセキユリティーというのはどうなっているんだ？

女の両腕がゆっくり上がって、足を踏み出した。

「カ・ネ・モ・リ・・・・・・」

「うっわわわあああっ！」

女のスカートの腿がベッドに当たってドサツと倒れ込んだ。左足に乗った女の重みを感じる。

「カ・ネ・モ・リ・・・・・・」

吊った右脚の向こうからバケモノの顔が覗いてくる。腕を突き出し、ズルリ、ベッドに乗り上げてくる。

「うわ、うわ、」

ズルリ、ズルリ、石膏で固めた腰の上に手について乗ってきた。  
ミシリ。

「ぎゃあああああっ！」

体がバラバラになる激痛を感じた。現実だ。夢じゃない。

「うおおっ、ちくしょうっ！」

死に直結する激痛に金森は一瞬恐怖を忘れて怒りの反撃に転じた。バケモノのマスクを掴んで引きちぎろうとした。ヌルリ。

「ウガアアッ！」

バケモノは怒りの形相になって尖った無数の歯で金森の人差し指に噛みついた。ブツブツブツ。無数の針が指を突き刺した。

「ぎゃあああああッ！」

またも激痛に金森は悲鳴を上げた。この痛み、このリアルな怒りの形相、これは、本物だ！

「ぎゃあああッ、ちくしょうッ！！！」

金森は横殴りにバケモノを叩き落とした。同時に自分も床に転げ落ちた。足を吊った器具が跳ね上がり、心電図のコードと点滴のチューブが宙に躍った。

「ぎゃああああッ！」

絶対安静の身だ。目から涙が迸った。

「ガアアッ」

「ちくしょう、放せッ！」

追いつがるバケモノを振り払い、金森はドアに向かって這った。ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう。涙が溢れ、涎が滴った。頭の芯が沸騰したように熱い。生存への意志が全ての感情を忘れさせた。ガラリとドアを引いて廊下へ転げ出る。

驚いた看護婦が掛けてきて金森に手を差しのべた。

「ドウシマシタ？」

バケモノだった。

「うわっ、うわっ、放せッ！」

金森は泣きながら子どもがイヤイヤするように手を振り回した。

「う・ああ・・・」

下半身が変だ。痛みの変わりに冷たい水気を感じる。死んだ、と思った。神経が。もう駄目だ、俺はもう一生立ち上がることは出来ない。ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう。

「カネモリサン、ドウサレマシタ？」

「カネモリサン」

バケモノ顔の看護婦に仲間が駆けつけ、病室からバケモノ顔の〇

しが這い出してきた。

「カネモリー……」

「くっそおお……」

それでも金森は生きようとした。暴れ回り、汗を滴らせながら腕で這って進んだ。何度も背中から手が邪魔をした。放せ、放せ、放せ！　這って、這って、前からもバケモノの仲間がやってきて金森の行く手を阻んだ。

「カネモリサン」

「カネモリサン」

「カネモリサン」

「カネモリサン」

「カネモリサン」

「カネモリサン」

「カネモリサン」

手が、金森を押さえつけた。ヌルヌルのバケモノ顔が金森を覗き込み、笑った。

「金森さん」

金森はブルブル痙攣しながら、じつと女を見つめた。

「……嶋村……サナちゃん……」

女は笑った。

「金森さん。だいじょうぶですよ、さ、モドリマシヨウネ」

金森も笑った。涙が頬を流れた。

「俺は……悪く……ない……」

目がうつろとなり、顎がだらんと開き、耳の穴から赤黒い血が滴り落ちた。

金森は行ってしまった、精神が、忘却の彼方へ。もう二度と、帰っては来ない……。



馬木が自宅に帰るとちょうど松岡から電話があつた。すぐに学校に來いと言う。冗談じゃないと思つた。馬木のマンションから学校まで30分かかる。もう疲れた。しかし松岡は強引に「來いよ!」と命令して電話を切つてしまった。なんなんだ? しょうがない、行かざるをえない。

また汗を流してヒイヒイ言いながら学校に舞い戻つた。松岡は駐輪場で待つていた。

「なーんなんだよ?・・・」

馬木はへとへとだつた。

「やる」

また何か突きだした。小さなカードだ。

「えーと・・・SDカードか? 俺リーダー持つてないぞ」

「由利先生に借りればいいだろ」

ぶつきらばうに言つた。なんだかひどくこきげん斜めだ。

「やるつてどういうことだよ? 大事なデジカメの記録メディアだろ? これ、かなり高いんだろ?」

「もういらねえ。カメラはさつき中古屋に売つてきた。もうしばらくはカメラはやらねえ」

馬木はビックリした。カメラ小僧の松岡が宝物のカメラを手放すなどあり得ない。

「どうしたんだよ? 何かあつたのか?」

「ああ、あつたよ。何があつたかは、その中身を見る。もつとも写つてるかどうか分からねえがな。俺は、絶対に見ない」

「何が写つてるんだよ?」

馬木は持つているのも気持ち悪くなつた。松岡は質問には答えず、言つた。

「映画のカメラマンの件もなしだ。俺は映研をやめる。おまえらの付き合ひはこれつきりだ」

「いきなりなんだよ?」

こんな奴でも抜けられると困る。存続問題だ。また無視して言つ

た。

「おまえ、本気で桜野を捜す気か？」

「もちろん、・・・そのつもりだ・・・」

「だったらなあ、覚悟しろよ。おまえも、本気でやべえぞ」

向こうの方に見える駐車場にきつたないカローラが入ってきた。

由利先生だ。

「じゃあな。あいつらにも言っておけ、命が惜しければさっさとこの件から手を引けてな。・・・金森先輩は、多分もう駄目だぜ」  
「な・・・、どういうことだよ？」

松岡はムツツリしたまま自転車にまたがり行ってしまった。

「・・・怯えているのか？・・・」

逃げるような後ろ姿がそう見えた。

由利先生と角谷がやってきた。

「あれ、松岡君でしょ？ どうしたの？」

馬木は由利先生にSDカードを渡そうとして、はっと手を止めた。これを先生に見せてしまってもいいのか？ しかし先生は素早く馬木の手からSDカードを奪い取った。

「SDカード？」

馬木はあきらめて言った。

「松岡のやつ映研をやめるそうです。理由は、どうやらその中にあるようです」

「？」

由利先生はSDカードを眺めて、まあ眺めても中身は分からないのでカバンにしまった。

「あいつ、金森先輩はもう駄目だろうって・・・」

携帯で病院に確認を取るかと思ったら、由利先生は「そう」と言っただけだった。

「ところで先生たち、今帰ってきたんですか？ ずいぶん遅かったですね？」

もう4時だ。お気に入りの角谷と二人でドライブでもしてきたの

かと思つたら、どうも角谷は元気がない。

「吉田先生のお宅は巻町よ。片道1時間よ。それに話し好きの人でねえ、たーっぷり郷土の歴史を勉強させられたわ。そっちはどう？何か分かつたの？」

「分かつたと言えば分かつたような・・・」

あんまりしゃべりたくないような・・・

「どうする？報告会する？ 喉乾いちやったから、ファミレスでコーヒーくらい奢るけど？」

「ええ。そりゃあ是非」

というわけで、先生の車で近くのファミレスを目指した。馬木の報告は車の中で済ませた。母親にビデオを見てもらつてあの少女が葉子であることを確認した。後は・・・いいだろう。他人に聞かせる話ではない。由利先生も角谷も何も訊かなかった。

ファミレスでさつさとコーヒーを頼んで居座り体勢を作りつつ、

由利先生は自分だけフルーツパフェを注文した。

「先生、もう夕飯前ですよ？」

先生はクリームたっぷりのパフェを食べつつ、

「いいのいいの。どーせ夕飯なんてビールとおつまみでおしまいだから」

と、若い独身女性の生態を披露した。将来の生活習慣病が思いつきり心配だ。

「でね、」

と、唇のクリームをペロリと舐めつつ言う。

「桜野家の話だけど、今は会社経営で成功しているけれど、昔っからの大金持ちで、まあこんな田舎の大金持ちって言うと、田畑山林の土地持ちか、海の網元なわけよ。で、桜野家は網元の方」

「あみもとつてなんです？」

魚市場や旅館の名前でよく聞くが。

「漁に使う網の持ち主よ」

「網の持ち主が大金持ちなんですか？」

「そうよー、網って高いのよー。それに網って言うのはその海で漁をする権利と同じ意味でね。農家と言う地主と小作人の関係といっしょよ。網元は経営者で、雇い人である漁師たちを使って大儲けをしていたわけよ。それで青山市の海一帯を牛耳っていたのが桜野一族だったわけ。」

でもまあそれは昔の話。戦後の農地解放同様、網元もいつまでもその地位にふんぞり返っていることはできなくなって、市場を開いたり、旅館を営業したりして、事業に移行していったわけね。親分さんだからねえ、商才がなく没落していった網元も多いでしょう。その点桜野家の先代は才能があったんでしょうね、戦前から輸送から建築まで港湾関係の仕事でガッチリ基盤を作って、戦後の高度成長期には工業団地を開いて富を前にも増して倍増したそうよ。」

なるほど、かなりの大人物で地元経済への影響力は相当にあるだろう。

「そんなわけで桜野家は現在も県で十指に入る大資産家なのね。現在事業の中心は海外貿易になっているようなね。でも、以前と比べるとだいぶ評判は落ちてきているようねえー……。現在の当主がもう80過ぎて、跡取りがねー……。評判良くないみたい。」

馬木は言わないが、葉子の母の二人の兄の評判は外でもかなり悪いようだ。

「下手をすると三代で身代を潰す……。ってことにもなりかねないわね。」

「相当の資産なんでしょ？」

「大型倒産なんてやっちゃったら一気に傾いちゃうんじゃない？完全に一族支配の経営みたいだから。」

驕れる者も久しからず。桜野家の行く末も暗雲が漂っているようだ。葉子のお母さんに無理やりでも跡取りを生ませたかった父親の気持ちもまあ……。ほんの少しだけ分かる気がする。

「ところでね、これはあくまで噂だから、と吉田先生が冗談交じり

に笑って話してくれたんだけど、そもそも桜野家がこれだけ栄えたのは人魚のおかげなんですって」

「人魚？ 人魚姫の？」

「そんなかわいいものじゃないみたいよ。人魚のミイラって見たことある？」

もちろん実物は見たことないが、テレビで見たことはある。

「グロテスクだったでしょ？」

そうだ、まるで猿の干物みたいだった。実際あれは猿だのなんだの動物と魚をくつつけた作り物で、博物学作家のA先生によると江戸末期に世界貿易の輸出品としてせつせと作られていたらしい。

「だからね、人魚って言うと、昔の日本人にとってはそういうグロテスクなバケモノのイメージなわけよ」

「なるほど。で、桜野家がその人魚をどうしたんです？」

「漁の網にかかって引き上げたんですって。それを連れ帰って、神様としてお祀りしたんだそうよ」

「生きていたんですか？」

「船に引き上げたときには生きていたけれど、浜に着く頃には真っ黒になって固まっちゃったそうよ」

「どんな姿だったんです？」

「手足の生えた魚だったそうよ。顔が丸く大きくて、赤ん坊みたいだったって。深海魚の一種だったんじゃないかって先生はおっしゃってたけどね」

「大きさは？」

「さあ？そこまでは」

「で、それをお祀りしてから桜野家は栄えるようになった？」

「という話よ。しけで他が不漁の時でも桜野家の船だけは大漁だった、とかね」

「ふうーん・・・、なんか釈然としませんね。釣り上げちゃったから死んじゃったんでしょ？ 殺しておいて神様としてお祀りしたからって、御利益なんてあるんですか？」

「日本の神様なんてみんなそうよ。学問の神菅原道真だつて権力争いで都から追放して、死んじゃつてから祟りが怖いので神様に祭り上げて、今じゃポピュラーな学問の神様として慕われているってわけだもの」

「なんか現金ですねえー」

「いかにも、なんでもまあまあ、の日本人ばいわねー」。

ところで、神様は人魚なわけよ。人魚の肉が不老不死の薬っていうのは知ってる？」

「ああ、マンガで読みました」

郷土の誇る女流漫画家Ｔ大先生の作品だ。

「あのマンガでも人魚はグロテスクに描かれてましたねー」

「その人魚の肉についても伝説があるのよ」

「でもその人魚は真っ黒になつて固まつちゃつたんでしょ？」

「関係ないわ。そもそもミイラつて薬として売られていたのよ。漢方薬だつて蛇の干物だのイモリの黒焼きだのあるでしょう？」

「ああ、そうか。じゃあ、食べちゃったんですか？」

「畏れ多いわよねー。で、怖いからね、桜野家の当主は自分では食べないで、雇いの漁師に騙して食べさせちゃったんだつて。もちろんほんの少しね、もつたいたないから。ところが、食べさせられた漁師は魚に変身しちゃつて、しょうがないので海に放してやつたんですつて」

「ふうーん。それで？」

「それだけ。人魚の肉の話はそれでお終い」

「なーんだ。いかにも昔話つて感じですねえ」

「そうね。でもお、どう？ 関係ありそうじゃない？」

「何が？」

「変身しちゃうのよ？ 魚に？」

「だから？」

「あなた、あのバケモノの顔が何に見えた？」

「？・・・あ・・・」

ね？と由利先生は首を傾げた。ビデオに登場するバケモノの顔、そしてそれにそっくりな実際に変身してしまった女性たちの膨れ上がった顔。

「魚・・・それも深海魚みたいなヌルヌルした気持ち悪い顔・・・ですねぇ？・・・」

「でしょー？」

「じゃあ、この事件はその人魚の祟りなんでしょうか？」

「もしかしたら、そうかもねー」

「その人魚は、今は？」

「さあ？行方不明。もともと桜野家だけの守り神だから家の敷地内のどこかにひっそり隠して祀っていたらしいわ。だからもともと外の人間には公開されていないし、今現在あるのかないのか、ぜんぜん分からないわ」

「桜野家の家はどこにあるんです？」

「東の、久保田町よ。お寺みたいに白壁を巡らせて大っきな松の木が生えているお屋敷よ」

「ああ、あれ。ほんと、寺かと思ってた」

「でももともとはもつと西、関屋町、つまり、例のあの辺りが出身なんですって」

「例の、家・・・」

「そ。あそこだけ個人の土地になっていて変に思ったわよね？で、吉田先生に訊いたら、青山市の海岸で本格的に防砂林が整備されるようになったのは今から150年前、江戸時代末期のことなんですって」

「じゃ、その頃からずっとあそこは桜野家の土地のまま？」

「そうなんでしょうね。もともと家はもつと内陸に大きなものを建てていたんでしょうけれど。だからあそこは船小屋か、ちよつと海からは離れているから網小屋だったんじゃないかっておっしゃってたわ」

「ふうーん。でもなおさら変ですね？ たかが船小屋や網小屋なら

ちょっと場所を移動するくらいなんともないじゃありませんか？」

「そうよねえ。しかも、あそこはけっこう高台になっているでしょ？ もっと後になって土地を盛り上げてから林を整備したと思うのよ。それにも関わらずーっと桜野家が土地を維持し続けているとなると・・・」

「桜野家にとつてよほど大切な土地・・・ということですね？」

「そうね」

「でもその割にはあんななんのために建てたんだか分からない小さな家が一軒きりで放ったらかしにしているんだから、どうでもいいって感じですよね？」

「そうね。桜野家にとつてあの土地を持っていることそのものに意味があるのか、それともあるいは、誰かにあの土地を譲って掘り返されては拙い物でも埋めているのか・・・」

「でも、土地そのものは後から土を盛っているわけでしょ？今さら誰かが少しくらい掘り返しても変わらないと思うけどなあ・・・」

「じゃやっぱり大切な土地ってことになるかしら？」

「ですよねえ・・・」

あの家の閉ざされた部屋つてのは・・・なんだったんでしょう？」

馬木は思い出してまた身震いした。

「さあ？ 吉田先生もそこまではご存じじゃないわ。ただ古い住宅地図を調べてくださって」

由利先生は、えーと、と手帳を開いた。

「昭和36年・・・というと1961年、今から45年前には寺田という人が住んでいて、69年には空き家になって、73年、33年前から、77年、29年前まで千鳥という人が住んでいて、78年、28年前以降はずっと空き家になっているそうよ」

数字がいつぱいで頭が追いつかないが、気になるのは33年前、葉子の母が生まれた年から4年間住んでいた千鳥という人物か・・・  
そういえば、

「そういえば、あそこはやっぱり桜野家の土地に間違いないんです



か？」

葉子の母はあの土地と家に関してはまるで知らないようだった。

「ああ、そうよね。分からないけれど、わたしはそう見ていいんじゃないかと思ってるけれど？ 変でしょ、やっぱり、あんな土地？」

「そうですよねえ・・・」

「それとね、角谷君に言われて気になって調べてみたんだけど・・・話を聞く都合で馬木が由利先生と向かい合って座っている。角谷は馬木の隣だ。角谷は由利先生と同じ物を見て聞いてきているのでここまでほとんどしゃべっていない。由利先生に目で促されてようやくしゃべった。

「おまえ、朝からワイドショー見ていて気付かなかったかな？ 家の周りのハマナスの花、一回り広くなってなかったか？」

「さあ・・・？ 特に気付かなかったけど・・・」

由利先生。

「わたしもね、言われてみればそうかなと思って、ハマナスについて調べたのよ。ハマナスって地下で横に茎を張って、そこから別の株を芽吹かせるのよ。だから、外から見て2本3本に見える木が、地下でつながっている可能性があるの。極端な話、もしかしたらあそこに生えているハマナスが、実は全部つながった1本の木・・・、ってことも、まあ、なくはないかってことよ」

馬木は想像して気味悪く思った。

「それが・・・増えてるのか？」

角谷は頷いた。

「吉田先生のところでもテレビを見てたんだけどさ、やっぱり俺の目には増えているように見えた。もっとも、ハマナスはかなり増殖力の強い植物のようだけど、それにしても、なあ？」

謎の家を中心として生えている通常ではあり得ない真っ赤なハマナスの花が、実は全てつながった1本の木で、それが短時間に目に見えて増殖している・・・

何が・・・

「何が・埋まっているんでしょう？・・・」

そう考えるだろう。地下に埋まっている何かが、血のように真っ赤な花のハマナスを大増殖させているのだ。

「そうねえ・・・」

由利先生はほとんど食べ終えたパフェのグラスの底をカリカリかいた。

「人魚の死骸、かしら？」

三人揃ってうーん・・・と考えた。

「あり得ないことが起こっているんだから、その原因もやっぱりあり得ないものなんでしょうねえ。」

でも、何故今なんでしょう？ 人魚を釣ったのってもうずっと前なんですよ？ 昔話になるみたい。なんで今さらこんな祟りを起こすんです？」

「さあねえ？ 神様だったら、誰もお参りしなくなったことに腹を立てているのかしら？」

由利先生は店員を呼んでコーヒを注文し、角谷もついでにおかわりを頼んだ。馬木はもう十分だ。眠れなくなる。

「ま、これ以上考えてもしようがないわ。取りあえずこの話はお終い。」

今度は5年前の映研の部員たちね」

「分かったんですか？」

「吉田先生には昨夜お電話してご都合を伺ったのよ。そしたら青木さんが先生の顧問をされてた映研の部員だと知ってびっくりなさって。先生も顧問とは言っても名前だけで活動にはほとんどノータッチで、クラスも受け持っていなかったから青木さんが誰か電話で聞いて初めて知ったのね。それで当時の担任の先生方に電話して他の部員たちの情報を調べてくださったの」

再び手帳を見て、

「部長・・・青木雄二、が死亡。」

副部長・・・間宮浩、愛知県名護野大学理工学部3年、電話連絡付

かず。

金森勇一・・・五十嵐大学教育学部4年、現在入院中。

長谷川馨（男）・・・長野県森洲大学人文学部4年、留守電にメッセージ残す。

嶋村早苗・・・卒業後の記録なし、在学中の電話番号は使用停止。

以上5名。吉田先生はこの年で退職されているから後のことは分からないわ」

「なんだ、結局誰とも連絡は付いてないんですね？」

「夏休み中ですからね、就職活動で忙しいか、遊び回ってるのか？」  
「実家の方は？」

「えーと、間宮さん長谷川さんの実家に電話したけれど、実家の方でも連絡付かないそうよ」

「嶋村早苗さんは？ 翌年も映研は続けてたんですね？」

「顧問は現代文の樋口先生。電話で聞いたけど、映研は存続はしたけど自分たちで映画を作るんじゃなく、映画の批評文を載せた同人誌を作る活動をしていたそうよ」

「去年は俺たちもそうだったもんな。俺は自分で映画が作りたくって・・・」

「で、おまえが部長になったんだもんな？」

「うん。嶋村先輩って、どんな人だったんです？」

「大人しい地味な人だったそうよ。ま、はつきり言って暗い生徒だったって。その同人誌は樋口先生も簡単に目を通したけど他の部員が流行の恋愛ものやハリウッド映画の文章をかわいいイラスト入りで書いている中、嶋村さんは溝口健二なんかの古い日本映画や題名も聞いたことないフランス映画なんかの批評を書いていたそうよ」

「はあ・・・本格派・・・というか、浮いてたでしょうね・・・」

「読まないわよね、誰も」

暗い青春時代を送っていたようだ。

「でね、吉田先生にも聞いたんだけど、映画製作をやめちゃったのは前の年の文化祭で上映したビデオ映画があんまりひどい内容で生

徒会から上映中止処分を食らったせいもあるんですけど。先生も驚いて見てみたけど、確かにひどい内容だったって言うてたわ」

「どんな映画だったんです？」

「運動部員が部室で着替えていると、」

「そりや上映できないでしょう」

「男子よ。柔道部。ロッカーがガタガタって動いて、なんだ？と見ると、中からバーン！と変なお面をかぶった女子生徒が出てきてわあっと驚いて、で、お終い」

「なんじゃそりや？ どつきりテレビかい」

「そう、ただのいたずらの隠し撮り。怒られるわよね、ふざけるな！って」

「・・・でも、その変なお面って・・・」

「そう。吉田先生も思いだしてみたら、例のあのバケモノの顔だったって」

「・・・・・・・・・・」

「どういうことなんだろう？ バケモノの出ってくるビデオがもう一本あった？ 女子生徒がかぶっていたとなると、それをかぶっていたのは映研で唯一の女子嶋村早苗ではなかったのか？」

馬木は松岡が金森先輩を評して「本質は俺みたいに腐った奴だったことさ」と言っていたのを思い出して嫌あな気分になった。

あのビデオにはまだ隠された秘密がある！

車で校門まで送ってもらって由利先生とはそこで別れた。角谷と二人で並んで歩いていると、角谷はボソツと言った。

「おまえのせいだぞ・・・」

「何が？」

角谷は立ち止まって恨めしそうに馬木を睨んだ。馬木は驚いて慌てた。

「え？ なに？ 俺なんかした？」

馬木を睨んでいた角谷はふと表情をゆるめると、

「はあゝあゝ・・・」

と、世をはかなんだため息をついた。

「このゝ、おまえが余計なことを言うからな」

「なにになに？ なんなんだよ？」

「・・・・・・由利先生に告白して、ふられた」

「は？・・・ええゝっ!？」

ビックリした。

「な、な、な、なにいゝ？ おまえの好きな相手って、由利先生だったのゝ!？」

てつきり葉子だと思ってた。角谷はむっつり口を尖らせて言った。

「そつだよ。悪いかよ？」

「いえ、すみません。ぜんぜん悪くありません。悪くないけど・・・マジ？」

「マジだよ」

「・・・・・・」

角谷昌幸。こいつは女にもてる。名前に似合わず女の子みたいにサラサラの髪の毛をしてすっきりしたハンサムな顔立ちで、背がほどほどに高く、脚が長く、勉強もスポーツも嫌味でないほどにほどほどに出来て、性格はいたって良好で誰とでも仲良く付き合い、その八方美人ぶりを気に入らない奴でもいざ本人と向かい合うと思わずいい人になってしまっ一枚も二枚も上手の社交術を身に付け、おそらくこいつほどイジメに無縁な奴もいないだろう。これで女子にもてないわけがない。

ウーム・・・、と馬木は思う。こいつの唯一の欠点といえば、自分だ。何故か角谷は馬木とやたら仲良くなってしまった。女子たちから恨まれるくらいに。女子たちが大いに角谷に好意を持ちつつ今ひとつ具体的な行動で積極的になれないのは、角谷が常に馬木といっしょにいるからだ。実はホモなのではないかと疑われている節さえある。馬木も実は角谷の女よけに利用されているのではないかと

疑っている。

せつかくこれだけ女子にもてるのにぜんぜん誰とも特別のお付き合いをしようとしなのは誰かなかなか難しい本命がいるのではないかと思つてはいたのだが・・、それがまさか由利先生だったとは思ひもしなかった。

「でもさあ、由利先生なら、おまえのこと大のお気に入りじゃないか？」

「だからさ、俺はそれで良かったんだよ。俺だつて由利先生が俺みたいな子ども本気で相手にしてくれるなんて思つてなかったよ。大人になつて由利先生みたいな女の人とお付き合いできたらいいなあ、なんて、憧れていただけなのにさ。あゝ、くそつ、早まつたあゝつ！」

角谷は芝居ががつて頭をかきむしつた。

「こらあ、オットー、俺の幸せな青春を返せえゝ」

首を絞められた。もちろん冗談だが。  
「悪い悪い。悪かった。おまえつてさ、けつこう純情な奴だったんだな？」

思わず笑つてしまった。

「いいじゃんか、大人の由利先生なら若者のトチ狂つた一時の世迷い言くらいなんとも思わないよ」

「うるせー。俺はけつこう深刻なんだぞ」

「ごめんごめん。しかし由利先生かあー。憧れるか？あのナマの生態を見せつけられて？」

「いいだろ、好きなんだから」

頬を染めてやがる。かわいい奴め。しかし改めて考えてみると由利先生は本人は23歳を自称しているが「お姉さん」というのではない身近にいる一番若い「大人の女性」なのだと思う。だらしないのに全面的に目をつぶてやつてもいい美人だし。実は自分たちつてすごく幸せな男子なんだろう。

「青春だねゝ」

「うるせえ、バカ」

コッソリとパンチがヒットした。

一時、今の深刻な状況を忘れることが出来た。

## 第8話 骨

馬木は自宅マンション・・桜野家の豪邸マンションとはまるで別物のただの鉄筋コンクリートの箱・・に帰ってくるとさっさと風呂に入った。上がってきて7時のニュースを見ていたら愛知県名護野市の高層ビジネスビルの屋上で若い男が飛び降りようとしていて警察が思いとどまるよう説得中であるという中継があった。カメラは少し離れた地上から斜めにビルを見上げている。30階くらいあるのだろうか、かなりの高さだ。下からでは飛び降りようとしている男の姿は見えない。中継しているアナウンサーの周りには野次馬が集まっているが、ビルの下はもちろん立入禁止になっていて、パトカー、救急車が止められ、警官、救急隊員たちが待機している。地上は街灯がつき、ビルの窓も明かりが灯っているが、空ではまだ夕日の赤みが雲に反射している。男はビル内の精神クリニックに相談に来た市内の大学の21歳の学生だそうだ。

あつ、と言う声が思わずテレビから漏れた。小さくだが、中継するアナウンサーの背後で落下する男の姿が映ってしまった。

『落ちました。今、男性がビルから飛び降りたようです!』

カメラが一瞬地上を写そうとしたが、すぐにスタジオに切り替わった。

『たった今名護野市のビルから男性が投身自殺を図って飛び降りました。現在救急隊員が男性の下へ駆けつけ処置を行っている模様です。男性の生死は不明です。繰り返します、今日午後5時半頃、愛知県名護野市のビジネスビルで・・』

黒井医師は苦り切っていた。中谷志保の意識は戻らず、その原因もまったく分からないままだ。全国的に同じ症状の患者が発生し、しかもデータをつき合わせると1日3回きっちり8時間ごとに発症



している。そんな馬鹿な病気はあり得ない。テレビではあの茶髪少女の言っていたビデオの呪いだと騒いでいるようだが、こうなると黒井医師もそれを信じるしかないようだ。

これから紅倉美姫という霊能者が来ることになっている。担当医の自分を差し置いてどういう経緯で決まったのか知らないが、とにかく来るそうだ。上の方からそう言われた。

紅倉美姫はかなり評判の良い人物のようだが、医者として手放しに「はいどうぞ」と自分の患者を「霊能者」に引き渡すのはなんともしゃくだ。実際肉体的な症状を見せている以上、医者として、肉体的な原因を見つかるべく最後まで努力するべきだ、と思う。

黒井はレントゲン写真を見ながら考えた。

一つだけ、手がかりらしきものがある。

首の後ろ、頸椎から左に少しずれた位置に白い小さな影が映っている。5ミリほどの、長方形の板状の物だ。骨、だろう。黒井はこれを丸く肥大し、収縮した、頭蓋の残骸だと見ている。調べてみれば肥大していたときの状態が何か分かるかもしれない。

違うかもしれない。別に珍しい物ではない。例えば蜂に刺された場合、毒素が体内に残って骨化することはよくある。

どうだろう？と黒井は考えている。仮にこれが今回の病気と関係ないただのカルシウム片だったとして、それを取り除いてやるのは患者にとってもマイナスにはならないだろう。皮膚の表面からもう少しゴロゴロする感触がある。放っておけば膿を出す危険もある。現在7時30分。8時入院患者との面会時間が終わる。紅倉美姫が来るのは病院が落ち着いた9時30分の約束だ。

取ってやろう、と、黒井医師は決断した。

午後8時に東京都内某所にある住居より芙蓉美貴は自動車を発進させた。病院のある川崎市まで40分を見れば十分だが、紅倉先生はこれでけっこうせつかちで心配性なのだ。車は最新型高級ハイブ

リットカー。芙蓉が運転し、後部座席に紅倉先生と荒井ミイナが乗っている。

ミイナは昼過ぎから駅に迎えに出て芙蓉も住み込んでいる先生の自宅に連れていった。某高級住宅街の一等地に立つ広大なお屋敷だ。ここに紅倉美姫と芙蓉美貴は二人きりで住んでいる。自宅とは言え先生が所有する家ではない。先生が裏で相談に乗ってやっている某政治家が表には出せない資産として所有する物をただ同然の家賃で借りているのだ。

芙蓉がほとんど押し掛け弟子としてこの屋敷に来たときには、先生はこのだたつ広い家の中一人で飢え死にしそうになっていたのだから呆れる。先生には自分のような人間が必要なのだと強く感じ、以来3年献身的に尽くしてきた。先生は生活能力が限りなくゼロに近い人だった。

屋敷に連れてこられたミイナは呆氣にとられてキョロキョロしていた。そりゃそうだろう、自分だってそうだった、まるきり別世界だ。金なんて、あるところにはあるものだ。

荒井ミイナの相談については前日三津木ディレクターより電話があった。先生は快諾し、ミイナを自宅に招待した。先生は招いたミイナからあの番組とビデオが世間一般にどのように受け取られ、どの程度影響力を持ったものなのかリサーチしたいようだった。先生は人の心を見ることが出来る。話を聞くことによって自分がその番組を見ているように体験することが出来るのだ。

ミイナの訪問中に三津木ディレクターより電話があった。芙蓉も先生といっしょに朝からワイドショーを見ていたが、三津木ディレクターは朝昼午後と東日テレビの番組に出ずっぱりで、かなりきつく追及を受け、電話口では相当まいっているようだった。

電話で三津木ディレクターは先生に謝った。出演したワイドショーで彼は結局洗いざらい白状させられた。あのビデオが最初から作り物で、番組自体「ヤラセ」であったこと。しかし岳戸由宇はあれを本物だと断言し、どうやらそれは事実であつたらしいこと・・・。

岳戸由宇は別の局のワイドショーに出演し、自分の靈感がいかに真実を見抜いていたかを得意になってしゃべりまくっていた。

三津木ディレクターは「事実らしい」という発言を追及され、紅倉先生の名前を出した。先生は世間でダントツの信用度を誇る霊能者だ、司会者は身を乗り出して先生の言葉を尋ねた。話は先生がこの事件の解決に乗り出してくれるのかという方向に行き、三津木ディレクターは既に先生と岳戸由宇共に番組続編への出演を受諾してもらっていることを明かした。三津木ディレクターは電話で先生にしきりに謝っていたが、すべてテレビ局のシナリオ通りの展開だろう。芙蓉は腹立たしい。

午後の番組になると若い女性が突然ビデオそっくりのバケモノに変身してしまう奇病の話が出た。昨日ミイナから友人の話を聞いたときにはさすがの先生も驚いていたが、予想以上に急速に大規模に事は進行しているようだ。東日テレビの三津木ディレクターよりずっと上の人間から電話があった。特別番組を今週金曜日12日放送ということで調整したいがご協力願えますでしょうか？という低姿勢且つ強引な懇願だった。ずいぶん急な話だが、抗議や問い合わせで局の電話がパンク寸前だという。世間のパニックぶりが伺われる。先生は承諾した。岳戸由宇の方は、大喜びしているだろう。

帰宅ラッシュは収まって車はスムーズに川崎市に入ることが出来た。ナビの指示に従い、もう5分もかからないだろうというところで先生が突然鋭い声を上げた。

「止めて！」

芙蓉は内心驚きながら冷静に道路端へ車を寄せた。

「どうしました？」

後部座席を振り返ると、先生は目を濡れたように真っ赤に充血させ、ミイナはビビって泣きそうになっていた。

「間に合わない。美貴ちゃん、手を、」

先生が宙をかくように手を伸ばし、芙蓉は強く握った。

「お願い、掴んでいてね」

ぐつ、と喉をのけ反らし、先生は白目を剥いた。  
肉体を離れたのだ。

8時30分、黒井医師は中谷志保の首後部にある異物の取り出し手術にかかった。もちろん患者の両親に了解は取っている。二人とも8時前から紅倉美姫を待つて病院に入っている。緊急の手術に難色を示したが、実際に患部を見てもらって単なるサンプルの採取だということ納得してもらった。

通常この程度の手術は診察室で自分と看護士の助手が一人いれば十分だが、慎重を期して執刀助手を一人、看護士を4人、監督医を一人頼んだ。集中治療室は手術室も兼ねている。

患者を枕を抱かせて横に寝かせ、首左後部を上向かせた。念のため自分も助手たちも全員マスクと保護メガネを着用している。大げさだ。1センチもメスを入れる必要はない。たった5ミリの薄い板状の物質を皮膚の下から抜き取るだけだ。後処置は絆創膏一枚で済む。

「始めます」

ごく軽い局所麻酔を射ってある。この手術で危険が考えられるのは頸椎の側というだけで、それも万一手元が狂ってもメスが触れるような至近距離ではない。ラテックスの指先でもう一度感触を確かめて角度を定めてメスを入れた。先が極細の鉗子で異物を掴んで抜き取った。

いや、

ふと、黒井医師は長年の勤が発する警報を感じて寸前で手を止めた。緊張で手が震える。助手に脳波、脈拍を確認した。異常はない。助手たちが怪訝な顔をした。黒井はルーペで術部を慎重に観察した。既に半分白い四角片が露出している。組織との癒着はない。目で確認してもこれはただのカルシウム片だ。取り出すことになんの理論

的問題もない。黒井は、理性を優先させた。中谷志保の首から骨片を抜き取った。

瞬間、やはり抜くべきではなかったという強い思いがわき上がった。鋭く目を走らせて患者を観察する。黒井の経験的勘が何かを感じた。喪失感だ。医者としてもっとも味わいたくない類の。助手に確認する。データのなんら変化はない。しかし、ベテランの黒井には自分がとんでもない間違いを犯してしまった明らかな実感があつた。失敗だ、やるべきではなかった！しかし、何故だ？それが解らない。

細い鉗子の先の小さな白い物体を見る。かすかに血液が付着しているざらついた表面。もろい構造かもしれない。長方形と見たのはレントゲン撮影の角度によってで、実際は正方形の対角が時計回りによれてひし形になっている。これがなんだというのか？肥大した頭蓋の破片だと黒井は思っている。今現在の患者にとって意味のある組織とはとうてい思えない。しかし・

「戻す」

「は？」

助手たちは戸惑った。

「何故です？」

「いいから、急ぐぞ」

黒井は慎重に元あつた場所に骨片を戻した。出血はほとんどない。元通りだ。自分の不安が解消することを黒井は願った。

「先生、脈拍が・・・」

黒井は心臓を躍り上がらせた。脈拍、血圧、心電図、呼吸、全てがゆっくり低下していく。黒井の悪い予感当たった。

落ち着け、まだ危険な状態になったわけではない。この患者はもとと深いノンレム睡眠の状態が続いているのだ。手術によって一時的に活性化した身体がまた元の状態に沈静化しているのかもしれない。しかし・・・

あつ、と声が上がリ、助手が後ずさるのが目に入った。何事かと

振り向いた黒井は自身も思わずあつと声を上げた。

白い霧状のものが天井付近に広がり、ゆらゆら滑らかな銀色の光を発したかと思ったら人の姿を取り始めた。黒井は頭の中に強烈なテレパシーを感じた。

『判断は正しいです。決して彼女を動かさないように』

その白いものはすーっと、中谷志保の首に入ってしまった。

およそ10分後、白いものは志保の首から出てきた。そしてそのまま天井に立ち上り、消えていった。

15分後、紅倉美姫が到着した。至急点滴をしてほしいということとで黒井がベッドに寝た彼女と接見した。あの白い人型の主だった本人もあれに負けず劣らず白い肌に色素の薄い目をしていた。

黒井は彼女の助手の要望通り紅倉美姫に点滴を処置してやって、尋ねた。

「しゃべられますか？」

「ええ」

ゆっくり紅倉美姫は頷いた。

「さつきあなたは手術室に来られましたな？」  
頷く。

「・・・・・・」

黒井はなんと尋ねようか迷い、言った。

「彼女は、危険な状態だったのかね？」

「はい。もしあの骨を取り出したままにしていたら、おそらく数時間のうち亡くなっていたでしょう」

紅倉美姫は黒井に微笑んで言った。

「担当があなたで良かった。よく気付かれましたね」

黒井は青くなった。

「あれはなんなの？　ただの破片じゃないのか？」

「あれは・・・・」

紅倉美姫はひどく疲れた様子で考えながら言った。

「彼女の魂と肉体をつなぐアンテナです。肉体から取り外してしまつたら、魂は完全に肉体と切り離されてしまい、肉体もやがて生きるのをやめてしまったでしょう」

黒井は苦い顔で考えた。医者の自分がこんなことを当たり前のように考えているのは馬鹿馬鹿しいが、それが事実だ。

「中谷志保の魂はどこにいるのだね？」

診察室には助手の女と、志保の友人のあの子がいる。志保の両親も案内されてきて、助手が挨拶して招き入れた。紅倉美姫は

「こんなかつこうで失礼します」

と、弱々しく微笑んで頭を下げた。黒井は申し訳なく思った。紅倉美姫は黒井に向かって言った。

「さあ、それが問題なのです」

両親にも分かるように説明する。

「彼女、中谷志保さんの魂が肉体を離れてどこにいるのか？わたしは先ほど彼女を連れ戻せないか努力していましたが、駄目でした。彼女だけではなくおそらく同じ症状の他の女性たちでしょう、いっしょにいました。彼女たちのいるのは、この世ではありません」

母親は悲痛な顔で涙を浮かべ、父親は信じたくないように怒った硬い顔をした。紅倉は続ける。

「あの世とか、天国とか、地獄とか、そういう場所でもありません。わたしも驚いたのですが、彼女たちの連れていかれたのは、魔界です」

は？と悲痛な顔をしていた母親まで疑問を表した。友人の、荒井ミイナもだ。助手の芙蓉まで困惑している。紅倉はそんな一同を自分も困つたような顔で見渡した。

「分かりませんよね、魔界だなんて言われても。そう、その通りなのです、我々人間には理解できない世界です。まさにこの世ではない場所です。本来決してこの世に姿を現すはずのない場所に、お嬢さんたちは連れていかれているのです。申し訳ありませんが、今の

時点ではわたしにもどうすることもできません」

そんな！・・と怒りの感情が父親母親から発せられた。困った紅倉の手を取って、芙蓉は自分の手といっしょに見せた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

全員がその壮絶さに青くなった。黒井だけ先に見ている。紅倉と芙蓉の右の手のひらが共に真つ青に鬱血し、静脈が黒々浮き上がり、ぶつぶつ血が滲んでいた。紅倉が言う。

「芙蓉さんがわたしのアンテナになってくれました。でなければわたしもあちらに捕らわれたまま帰って来られなかったでしょう。とんでもないところですよ。力の法則がまるで異なっているのです。まともに行ったのでは、とても歯が立ちません」

母親が今度こそ悲愴に泣いた。父親が肩を励まし、尋ねた。

「先生。娘は、助からないのでしょうか？・・」

「いいえ」

紅倉は眉を強くして言った。

「助けます。なんとしても。ただ・・」

弱々しく頭を枕に沈ませた。

「少し時間をください。もっと調べて、準備をしなければ。何故あんなものが現れてしまったのか、原因を・・・・・・・・」

紅倉美姫は疲れ切ったように目を閉じ、そのまま眠ってしまった。

昨日からのインターネット及び今日昼からのワイドショーによってあの「ほんとうにあった少女霊ビデオ」の放送を見た全国の十代二十代の女性たちはパニック寸前に恐れおののいていた。ニュースでまでやっていた。原因不明の奇病と言うが、原因は分かっている、あのビデオのせいだ！ あんなもの見なければよかった！

女性たちは鏡で自分の顔を改めて見つめた。自分は美人だろうか？ 噂では綺麗でかわいい子が呪いにかかるという。あの女の子は



好きな男の子にブスと言われて世の美人たちを呪いながら首をくったという。だから顔があんなに醜くパンパンに腫れ上がるのだ。ああ、どうしよう、あたしってばどうしてこんなにかわいく生まれなきゃったのかしら？

和歌山県在住の島田園美14歳も恐れ戦く一人だった。

9時まで後、10分・・・5分・・・3分・・・2分・・・1分・・・30秒・・・20秒・・・10秒、9、8、7、6、5、4、3、2、1、9時！ 5秒・・・10秒・・・20秒・・・30秒・・・1分！・・・1分！・・・

5分まで待つてようやくほつとした。噂では夜9時朝5時昼1時それぞれきっかりに変身が始まるという。

「あー・・・よかったあー・・・」

安心したが、また朝5時のことを思つて憂鬱になった。朝5時じやあすっかり朝寝坊が癖になったこの頃では起きているわけない。せめて目覚めないままに意識を失つてしまふ方がまだましだ。園美は自分を慰めつつ居間に下りた。

居間では小学6年生の弟と父親がテレビでバラエティー番組を見て笑っていた。しまった、毎週楽しみに見ているのにオープニングを見損ねた。につくき呪い少女め！ 弟が首を反り返らせて姉を見た。

「よお姉ちゃん、呪いが怖くて震えてたんか？ だいじょうぶだよ、その顔じゃあ。バケモノも自分の仲間だと思つて素通りしてくれるよ」

「うるさい！」

まったく、すっかり生意気なかわいくないガキになっちゃつて。と思つたら父親までいっしょに笑っている。自慢の美人の娘でしょーが！？

園美も座布団にとつかと座つてテレビを見始めた。

「あははは」

あはは、バカだあ。そうよ、ビデオ少女の呪いなんて、どうせ何

かとデマがいつしよになって、分かってしまえばどうってことないのよ。．．．．紅倉美姫が本物だって言ってたのが気になるけど．．。

「あははは．．」

ふと、妙な胸騒ぎがした。時計を見た。9時10分。もう10分も経っている！　そうよ、もうだいじょうぶよ！　少なくとも今は．．．

「あははは．．は．．．．．」

園美はブルブル震えだした。なんでよ？　だって、もう10分も過ぎてるじゃない！　噂なんて当てにならない、この嘘つき！！！！！！

「ガアアアアアアアアアアッ！」

園美は変身し、島田家の団らんのひとときは地獄図と化した。

## 第9話 クトゥルー

8月9日火曜午前10時。馬木と角谷は青山高校別館のコンピュータールーム準備室を訪ねた。コンピュータールームなんて大げさで、ただのパソコン実習室だ。しかしここは時間外の生徒の入室は禁じられている。インターネットに接続されているので生徒たちがろくでもないホームページを閲覧しないようにするためだ。

準備室の責任者は由利絵梨佳先生。ほとんど由利先生の私室で、先生は眠そうな顔でコーヒーを飲んでいた。

「間宮浩さんが亡くなったそうよ」

「えー・・・と、誰でしたっけ？」

「5年前の映研の副部長よ」

「！」

馬木と角谷は思わず顔を見合わせた。

「昨日の夜名護野市で飛び降り自殺があつたの知ってる？ あれが間宮さんだったのよ」

今朝の新聞でも読んだが、名前は伏せられていた。

「もしやと思つて大学に問い合わせたら、やっぱり彼だったのよ」

由利先生は開いていたノートパソコンを閉じて馬木たちをじっと見つめた。

「金森さんも昨日病院で錯乱状態になって、脳溢血を起こして再び意識不明になってしまったわ。おそらくこのまま植物状態になって快復はないだろうということよ。」

さて、どうする？」

「どうするって？」

「こうなるともう洒落にならないわ。あなたたちもこの件から手を引きなさい」

馬木はノートパソコンが気になって訊いた。

「松岡の撮った写真は見たんですか？」

由利先生は答えない。

「一応教師として生徒を危険にさらすわけにはいかないわ。桜野さんのことは警察に任せなさい」

「先生はどうするんです？ 先生も手を引くんですか？」

「わたしに出来る事なんてないわ」

「手を引くんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

角谷が言った。

「いいですよ、手を引いても。ただし、由利先生が手を引くなら、です。やめますか？」

角谷に真剣に見つめられて由利先生は困ってため息をついた。

「桜野さんはわたしの生徒よ。ま、担任でもないし、授業は週1回だし、部活なんか放ったらかしだけど・・・でも、生徒よ」

「じゃ、続けるんですね？」

「・・・・・・・・」

先生は、困っている。角谷は引かない。

「先生がやめないなら、俺も続けます。何と言われてもね」

馬木も言った。

「俺はやめないですよ。まあ、出来ることもないけど。俺は・・・桜野のお母さんにも約束したし・・・」

裏切れない。由利先生はじい・・・っと二人を見つめて、折れた。「困ったなあ。正直なところ遊び半分だったんだけどね。わたしももう後に引けないわ。でも、後悔しない？ 本当に拙いわよ？」

馬木も角谷も頷いた。由利先生は「本当ね？」ともう一度念を押して、ノートパソコンを開くと馬木たちに向けた。

馬木はギクツと思わず腰が引けた。ディスプレイいっぱい女の顔が映っている。黒髪の若い女。しかし目玉を大きく剥き出し、口を半開きにしてカメラに迫り、まるでゾンビのようだ。その女の頭の向こうに別の女が同じゾンビの顔で覗き込んでいる。反対側にも「気持ち悪いですね。なんなんでしょう、この女たち？」

「バケモノに変わっちゃった人たちでしょうねえ」

「この人たちが？ でも・・・」

バケモノではないかと改めて見ると、丸く見開いた女の目がゆっくり動いて馬木を見た。3人同時に。

「ひゃあっ」

間の抜けた悲鳴を上げて馬木はひっくり返りそうになった。

「い、い、今、う、動いた・・・」

「写真じゃなく動画だったのか？ 由利先生はウンザリしたように言った。」

「分かってるわよ。そもそもね、この女の人たち、最初はもっと遠くにいたのよ。例のあの家、真っ赤なハマナスの花の中に立ってね。全部で7人いたのよ。それがわたしを見つけて、写真を開くことにだんだん迫ってきて、今マックス。幸いこの中からは出てこれないみたいね」

「で、出てこれないって、い、生きてるんですか？このパソコンの中で？」

「どうやらそうみたい。完全にバグっちゃってるわ。何をやっても消えないし、他のプログラムは一切使えないし、電源だけは落とせるけど、今朝開いたらご覧の通りよ。完全に占領されちゃったわ」

「うーん・・・」

「どうということなんだろう？」

「これは・・・魂ってことなんでしょうか？ 肉体の方は・・・意識不明で眠り続けているんですよね？」

「じゃあ、このパソコンから魂を取り出して返してやれば意識が戻るんだろうか？」

「どうなのかしら？ ちょっと違うような気がするのよね。逆・・・かな？ パソコン自体が彼女たちの意識を写し取っちゃった・・・って感じかなあ？」

由利先生はコンピューターの専門家らしい観測を披露する。

「ほら、動きがすごく鈍いでしょ？ これがこのノートパソコンの

限界って気がするのよね、7人分のデータを取り込んでやっているわけだから。これはあくまでも魂のコピーなのよ。魂自体ではないわ。魂ってどういうものか知らないけれどね。それにみんなおんなじ動きをしているでしょう？　これがパソコンの中で意識が統合されちゃっているのか、もともとそうなのか……。彼女たちは順番に連続して変身しちゃって、それ以降意識がなくなっちゃってるんだものねえ。魂がいつしよにどこかに連れていかれちゃっているんじゃないかしら？」

「……その7人の中に……。桜野は？……」  
「いなかったわ」

これは、果たして桜野の行方を捜す手がかりになるのだろうか？  
角谷が訊いた。

「例えば、このパソコンを壊しちゃって、そうしたら彼女たちに何か影響はあるんでしょうか？」

「高いのよー。さあ？　パソコンが死んじゃうだけなんじゃないの？」

ここに映っている彼女たちはあくまでデータだけの存在で、データが壊れてしまえばそれまでのことなのだろうか？　それにしては……この目玉は生々しい……。馬木の揺らめくのを追って、カタカタツと画像が四角く崩れて女たちの顔が動いた。角谷が言う。

「紅倉美姫に見せたらどうかなあ？」

知ってます？と目を向けると、由利先生は頷いた。

「そうねえ、彼女は本物、みたいだし……」

馬木も紅倉美姫くらい知っている。人捜し……というか死体捜しで有名な霊能者らしい。不吉だ。しかし……

「警察では桜野の行方をいくらかでも把握しているんでしょうか？」  
馬木が訊いたって教えてくれるわけない。由利先生ならあるいはと思うが……。駄目だろうか？

「どうなのかしら？　警察もいろいろやり辛いでしょうね」

まず桜野が未成年であること。有力財閥のお嬢さんであること。

殺人を犯して精神的にかなり危ない状態になっているであろうこと。未だ事件において桜野の存在は公表されていない。

しかしもう限界なのではないだろうか？ 馬木の心配は当初のものと変わってきている。葉子は単に巻き込まただけだろうと思われていたのが、どうやら背後に根深い因縁が潜んでいるらしい。葉子はその犠牲者なのだ。死んでいる・とは思わない。しかし間違はなく危険な状態だろう。にもかかわらず警察が見つけていないということは、精神のみならず肉体の危険も心配される。人混みに紛れているにしても、まったく誰もいない場所に身を潜めているにしても……。

「その霊能者に桜野の行方を捜してもらったらどうでしょう？」

「そうねえ。当てになるなら、ね。とにかく、事件からもう4日。時間的猶予はないわね。でも……」

「俺、もう一度桜野のお母さんに会って訊いてみますよ」

「そう。やっぱりお母さんの判断に任せるしかないわね」

馬木は再び桜野家を訪ねることになった。

「それじゃあわたしはもう少し間宮さんの自殺のことを調べて、長谷川さん嶋村さんと連絡が付かないかやってみるわ」

由利先生は角谷を気にする。

「お手伝いしますよ。なにができるか分からないけれど。いいですよ？」

由利先生は、うん、と微笑んだ。

「それじゃあ、お願いしちゃおっか？」

「どうぞどうぞ。俺たち3人仲間だもんね」

角谷は自分の居場所をそう定めて、笑った。

馬木が桜野家に電話すると来客中だと言う。午後から訪ねる約束をして、馬木は祖父母の家に向かった。

「やあ、お帰り」

祖父がニコニコ笑顔で迎えてくれた。両親が共働きのため馬木は小学校に上がるまで週5日はこの家に預けられていた。保育園から「ただいまー！」と帰ってきて「お帰り」と迎えられ、いまだに来るたび「お帰り」と迎えられる。三波。母方の祖父母だ。

居間へ行くと、

「やあ、ヨックン、おはよう」

「居たんですか、おじさん」

うん、と困ったように頷く。母の弟、賢造叔父さんだ。

「冷やし中華作るけど、食べるでしょ？」

祖母が訊いた。

「うん。食べる」

馬木は叔父に向き合う。

「今何やってるんです？」

「うん、まあ、いろいろ・・・」

はつきりしない。

この叔父は困った人だ。職業は一応アーティストだ。銀のアクセサリーを作って店に納入している。他にもいろいろやっているらしいが、はつきりしない。そんなもので生活が成り立つのかというと、成り立たない。こうしてしょっちゅう実家に食事を恵んでもらいに来ている。畑に囲まれた掘っ建て小屋でいまだきテレビもない生活をしている。もう42だ。当然独身。一週間くらい伸ばしっぱなしの無精ひげは真っ白。ガリガリに痩せていて、これで太っていたら紐で絞り上げて強制的にダイエットしてやるところだ。

馬木は一時期この叔父が大っ嫌いだった。父親の影響だ。父はこの叔父が大嫌いで、ゴミ、クズ、ダニ、「こういう奴が日本を駄目に出しているんだ！」ガン細胞だ！と散々悪口を言っていた。馬木は中学23年の頃が反抗期だったが、反抗期にはとかく怒りを誰かにぶつきたいものだ、馬木はこの叔父を標的にしてずいぶん手ひどく攻撃した。叔父は今と同じように困った笑いを浮かべるだけで、それがいつそう馬木の怒りに油を注いだ。



が、ある時ふと拍子抜けして白けてしまった。それで馬木の反抗期はあっさり終わった。困った人だが、今は怒りより哀れみを感じる。まあ、この人は駄目な人なのだ、先天的に社会になじめない駄目人間なのだ、と。

それに、馬木は子どもの頃叔父が大好きだった。週5日、ほとんど毎日遊んでもらっていた。おじいちゃんおばあちゃんや両親は誕生日やクリスマスにオモチャやケーキを買ってくれたが、金のない叔父は毎日段ボールや厚紙で遊び道具を作ってくれ、二人でいろいろ遊びを發明して毎日毎日大騒ぎしていた。馬木は小学校では工作がやたらと得意だった。叔父の作業を見ていたからだ。今はテレビのない生活をしている叔父だが、この実家にはビデオやレーザーディスクがごっそりある。「こわいぞこわいぞ」と白雪姫の魔女で馬木をすっかり恐がりにしてしまったのも叔父だが、楽しい面白いアニメや映画をいっぱい見せてもらった。好きに見ていいと言われる叔父のコレクションの中には馬木がいまだに恐ろしくてとも見られないホラー映画やホラーコミックがごっそりある。馬木が映研に入って自分で映画を作ってみたいと思ったのは間違いなくこの叔父の影響だ。

馬木の父は何かと人や会社の悪口を言うが、叔父が誰かの悪口を言っているのを聞いたことはない。馬木がどんなイタズラをしても叔父だけは絶対に怒らなかった。まだヨチヨチ歩きの幼い頃2階に行きたがる馬木を、叔父はいつも後ろからついてきた。なんでも自由にさせて、常に手の届く範囲にいた。今、馬木はまた叔父のことが好きになっているが、叔父がよく言うのは、

「ヨツくんはおじさんみたいにはなるなよ」

という言葉だ。いつも眉毛を下げて困った笑いを浮かべている叔父だが、その眉間にはくつきり縦じわが2本刻み込まれている。端から見ているよりは悩みもあるのだろう。

ふと、馬木は思い出した。青木先輩が「葉子は死んだ」と言った

のはどうやら叔父である葉子の父が死んで、自分と葉子の関係が切れてしまったという意味らしかったが、青木先輩にとって叔父さん自身はどういう存在だったのだろう？若すぎる葉子の母との結婚は人生のちよつとしたつまずきと映っていたのか、その後の人生こそ失敗と映っていたのか？2番目の奥さんとも離婚して挙げ句の果てに強盗事件に巻き込まれて死んでしまうなど、その叔父さんの人生もかわいそうなものだ。

もしかして青木先輩は叔父にそんな人生を送らせた葉子の母と葉子を恨んでいたのではないか？

いや、自分の父親ならともかく、叔父じゃあそこまで思わないか。よほど親しくしていたならともかく。

叔父に尋ねた。

「叔父さんはビデオ少女の呪いの事件って知ってる？」

「さっき見た。ヨツくん、第一発見者だって？たいへんだったね？」

叔父の小屋には電話はない。

「それもそうなんだけどさ。ビデオを見た女の人が同じバケモノに変身しちゃうって、どう思う？叔父さんこっぴどい得意でしょ？」

「そうさね、あの顔は海洋系だね？というと、クトゥールー神話かな？」

さすが。人魚の話をする前から海関係を連想している。

「クトゥールー神話って何？」

「本があるはずだぞ。分厚いアンソロジー。ま、読んでも退屈でしょうがないだろうけどね。」

クトゥールー神話ってのはたしか1920年代のアメリカの作家H・G・ラヴクラフトの創作した一連の暗黒神話シリーズで、ラヴクラフト以外の作家たちも書いていて、いまだに小説はもちろん、映画やアニメやゲームでも作り続けられているんじゃないかな？ネクロノミコンって聞いたことない？」

「なんか聞いたことあるような・・・」

馬木の最大の苦手としている類のものだ。

「そう。ネクロノミコンっていうのはそのクトゥルー神話に出てくる魔道書でね、それ自体もの凄い魔力を秘めているって代物なんだ。もちろん、創作だけどね」

「はあ。さすが詳しいねえ。それから？」

「本家ラヴクラフトの書いたクトゥルー神話にはだいたいのパターンがあつてね、主人公が何らかの偶然、旅行に出たり、古書店で古い記録を見つけたりして、太古にこの地球を支配していた暗黒の神々の世界に触れ、今は海底や氷の底の暗闇に封印されている異形の怪物を現代に呼び覚ましてしまい、それに触れて破滅する、で、その日記や友人の話として小説が書かれている、というものなんだ」

「ふうん」

「そこで今世間を騒がせている変身事件だね。クトゥルー神話的に解釈すると、何者かが封印されていた暗黒の神々の世界に触れてしまい、その力がこの世界に影響を及ぼし、そのような形で現れている。もしかしたら、その変身は古代の神々が現代に甦るうとしている前兆なのかもしれない・・・ってところかな？」

叔父はニコニコ笑っているが恐がりの馬木はだんだん寒気を覚えてきた。

「その暗黒の神々って、海の底に居るの？」

「そうだよ。深海の暗闇に潜んで、また外の世界を支配するチャンスを伺っているんだよ」

「人魚・・・」

「へ？」

「例えば・・・それが人魚として認知されていたり・・・」

「あり得るかな？ もともとラヴクラフトは海の生物が大嫌いで、人間が魚人になっちゃったり、暗黒の神がたこのバケモノみたいな姿をしていたりするからね」

馬木は怖くなった。

「それって完全な創作なのかな？ 何かヒントになった伝説や事件があつたわけじゃないのかな？」

「完全な創作みたいだよ。かなり神経症的な人だったみたいだから」「ふうん・・・」

恐がりな馬木はつい想像してしまう。ラヴクラフトこそ、禁じられた魔道書「ネクロノミコン」に触れてしまい、狂気の内にクトゥル―神話を創出させていったのではないか？・・・

「叔父さん。隠し部屋って聞いて何を想像する？」

「隠し部屋か・・・秘密の隠れ家か、秘密の隠し場所だね。よくあるのは暖炉の奥や本棚の裏に秘密の扉があるんだけど」

「扉はないんだ。もともとあつた窓もドアもふさがれてるんだ」

「そこで死体を発見したの？」

「・・・うん。背中合わせになつた押し入れの天井板をはぐつて、天井から覗いたんだ」

「そうか、それじゃあそこから出入りは出来るんだ？」

「まあ・・・出来ないことはないけど・・・」

「中の様子はどうなってるの？」

「さあ？・・・真つ暗な中であらうじて見える程度だったから・・・」

警察でも中の詳しい状態は発表していないと思う。犯人しか知り得ない事実とかもろもろ伏せているのだろう。叔父は考えて言う。

「推理小説でも天井裏で生活している男の話なんてあるからそこで人がひっそり暮らしていたことも考えられなくはないね。自分の意志でそうしていたのか、それともその家の持ち主が密かに監禁していたのか？ いずれそこで人が暮らしていたとすれば世間に対して決してその存在を知られたくない人物だろうね」

誰だろう？ この事件の関係者・・・桜野家の人間で、そういう人物がいるだろうか？

「あと考えられるのはね、過去にそこで悲劇的な事件・・・殺人事件が起きて、それを部屋ごと封印してしまった・・・海外物だと壁に

死体を塗り込めてしまっただけだね」

馬木はゾツとした。

「ま、そんな物が出てくればいくらなんでも警察も公表するだろう。ないんだろう？」

ない。

「じゃあ、隠し場所の場合だな。さっきのラヴクラフトの話じゃあそういうところから古い書物や日記が出て来るんだ。でも部屋丸ごととなると・・・、なんだろう？　ある程度大きい物かなあ？　うーん、分かんない」

馬木は思い当たった。桜野家の先祖が引き上げ、密かに祀っていたという人魚。その人魚が神棚が隠されていたのではないか？　でも、それをあんな安普請の家に放置しておくだろうか？　意外性はあるかもしれないが、どうもピンと来ない。あの場所に人魚が埋められているとすれば、それはハマナスのことから考えても地下だろう。

「ヨツくん、いやに熱心だね？」

叔父が優しい目で馬木を見て言った。

「好きな女の子でもできたの？」

どこから発想したのか、鋭い。

「頑張りなよ」

叔父は馬木のやろうとすることに決して反対しない。今も優しい目でただ微笑んでいるだけだ。

2時に桜野家のマンションを訪れた。葉子の行方で何か分かったか訊くと、今朝も警察から電話があったがまだ何も情報はないとのことだった。そこで馬木は紅倉美姫に搜索を依頼することを提案した。

「霊能者。面白そうね」

と、母親は楽しそうに言った。

「あたしはいいわよ。でもねえ・・・」

憂鬱そうにため息をついた。

「兄たちはあくまで桜野の名前が表に出ることを拒んでいるわ。午前中もそのことでね」

「お兄さんが来たんですか？」

「いいえ。会社の弁護士。兄たちはわたしのことを毛嫌いしているから」

天使の顔であっけらかんと言った。肉親に対する情愛はひとかけらもないようだ。

「でも・・・もう4日です。葉子さんの身を考えたら・・・」

馬木が決断を迫ると母親はあっさり頷いた。

「そうよね。そうしましょう。あたしも霊能者って見てみたいわ」  
この人もやつぱりずれている。まあ、良かったが。

「ああ、そうそう。一つ思い出したことがあるのよ」

母親は妖しく微笑んで身を乗り出し、馬木は赤くなった。

「あのね、雄二さんのお父さんにあたし、プロポーズされたことがあるのよ」

あははは、と華やかに笑った。

「プロポーズなんてはつきりしたものじゃなかったけれど、それらしいことをね。お兄さんも奥さんと離婚していてね、理由は知らないけれど。それで弟の不始末を償うってわけでもないんでしょうけれど、わたしとどうか、って」

それは・・・どうなんだろう？

「ま、それもそれで異常な話よね、弟の離婚した嫁を兄がもらうなんて。で、すぐにその話はなくなって、あたしもすっかり忘れていたんだけど、昨日部長さんと話してそういえばって思い出したの」

「はあ・・・それって青木先輩が何歳頃の話なんです？」

「そうね・・・、10か11くらいじゃなかったかしら？」

「両親が離婚したのはいつ頃なんでしょう？」

「んーと・・・、雄二さんが5歳の時って聞いた覚えがあるような？」

「5歳・・・」

まだまだ母親にべつたりの時期だろう。その頃に母親が突然消えた・・・自分を捨てたら・・・心に大きな傷を残すのではないだろうか？

「それでね、」

母親は顔を寄せて今度はちょっと深刻そうに言う。

「今朝の警察からの電話だけど、雄二さんの持ち物の中からあたしの写真が何枚も出てきたんですって」

「えっ、何枚も？」

「そう。それも日付が8年前から去年の物まであるんですって」  
さすがにちよつと気味悪そうな顔をした。

「それって・・・ストーカー・・・ですよ？」

「よねー？ あたしスポーツはまるつきりなんだけど、泳ぐのだけは好きでね、スポーツクラブのプールでよく泳いでいるのよ。そのプールで盗撮した物まであるんですって」

「うーむ・・・」

松岡といい青木先輩といい。

「困っちゃうわよねー。こんなオバサンをねー？」

「いえ、そんな」

真顔で否定して、馬木は思わず濡れた水着を着た葉子の母親の姿を想像して・・・真っ赤になってうつむいた。

「すみません・・・」

「うふふ、かわいいー」

そういえば今日は紗恵ちゃんもいないのだろうか？ 馬木は急に心細くなった。天使のようにあどけなく、同時に妖艶な、33歳のこの若すぎる母親が、4人も娘を生んでいるなんて、ある意味バケモノじみている。8年前というと、青木先輩は中学2年生か？ 思春期の異性への憧れが芽生える頃、青木先輩はすっかりこの魔性の女性に魅入られてしまったらしい。

なんだ、じゃあ青木先輩の関心があつたのはこのお母さんで、叔

父さんなんてどうでも良かったのか？　しかし、縁が切れて、それで青木先輩はどう思ったのだろう？

「お母さんは、青木先輩のそういう気持ちにはまったく気付いていなかったんですか？」

「ええ。ぜんぜん。子どもの頃から１０年以上も会っていないもの」

「ストーカー行為を受けていたことは？」

「それもまったく。あたし、そういう警戒心ないみたい」

「気を付けた方がいいですよ」

本気で心配になる。

「そうですか……。じゃあ、青木先輩からお母さんに接触はなかったんですね？」

その一方で葉子とは会っていたらしい。どういふつもりでいたんだろう？　なんだかすごく嫌な感じがする。

ともかく紅倉美姫に葉子の搜索依頼をすることにして、由利先生に電話した。結果、まず由利先生からテレビ局に連絡して、後、お母さんの方から正式に依頼するということにした。



## 第10話 第1遭遇（前書き）

\*ちよつと長いですが、後半に、出ます。

## 第10話 第1遭遇

夜7時、三津木ディレクターはアートリングを主体としたスタッフと共に紅倉美姫の屋敷を訪れた。今回の事件の最重要人物であるあのビデオ少女の母親から少女の行方を搜索してほしいと依頼があったためだ。三津木は驚き、飛びついた。母親の要望は「紅倉美姫さんに」お願いしたいということだったが、拙いことに、今ここには岳戸由宇が同行している。仕方がない、電話があつたとき由宇は局に打ち合わせに来てもらっていたし、共同で事件を解決するという約束で彼女を除け者にするわけにはいかない。

岳戸由宇がスタジオ外で紅倉美姫と行動を共にするのは今回が最初で、おそらく二度とないだろう。由宇は紅倉の壮麗なお屋敷を憎々しげに眺めている。

一同は芙蓉美貴によって広い豪華な応接間に案内された。ここで30分ほど打ち合わせをして少女の家のある新潟県へ向かう予定だ。残念ながら三津木は現地へ同行できない。こっちでいろいろやることがある。何しろ3日後の放送に間に合わせなくてはならないのだ、もう二度とやりたくはなかったがまた生放送ということになりそうだ。

現地取材のチーフはアートリング社長の等々力力（とどろきちから）ディレクター。背は高くないがプロレスラーみたいにパンパンに肉体の張ったひげモジヤの精力的なおっさんだ。彼を使うことに局内で問題視する向きが強かったが、紅倉美姫が彼にやってもらった方がいいだろうと意見してくれて、決まった。三津木としては気心の知れたやりやすい仲間だ。

アートリングの等々力社長と7人のスタッフ、東日テレビからディレクターとアシスタントディレクター2人、岳戸由宇と彼女のマネージャー加納夏美、そして紅倉美姫と芙蓉美貴、総勢15名が新潟へ向かい、さらに地元テレビ局のスタッフが加わる。大所帯だが、

電話で得た情報から取材は広範囲になり2班に分かれる可能性が高い。ちなみに岳戸由宇はマネージメントを芸能プロダクションに任せている。芙蓉美貴が揶揄するように本人もあくまで芸能人でいたいのだ。

紅倉美姫が登場した。いつにも増して色が白い。

「大丈夫ですか？ 昨日はたいへんだったようですね？」

紅倉美姫も芙蓉美貴も右手に包帯を巻いている。紅倉美姫はええと頷いてふらふらおぼつかない足取りでソファーに座ると大儀そうにはあとため息をついた。相当まいっているらしい。

「魔界、へ行つて来られたとか？」

「そうです。そのことをお話ししなければ」

紅倉は一同を見渡し、由宇に軽く微笑んだ。由宇はヒクリと眉を吊り上げた。

「今回の相手は人間ではありません。つまり、幽霊も悪霊も元は人間ですから。しかし今回の相手は、人間ではないのです。動物霊といたのとも違います。完全にこの世の物ではありません。そして一番理解してもらいたいのは、圧倒的に強力で、我々人間には決して歯の立つ相手ではないということです。性格的にも何を考えているのかさっぱり分かりません。つまり、・・・非常に危険で、命の保証は出来ない、ということです」

スタッフたちは青ざめた。何人かは既に紅倉と仕事をしている。不必要に人を怖がらせて面白がるような人間ではない。

「魔界の解説は番組用にとっておきましょう。しかし危険だからといって、逃げるわけにはいきません。わたしの認識が甘いせいでしょうやら既に犠牲者は多数出ているようです。これからもっと増えるでしょう」

一同固唾をのんで紅倉に注目している。由宇まで面白くない顔をしながら耳は集中している。紅倉は話す。

「とても悪い予感がします。我々のこの世界が、未来への不安に恐れ戦いています。一つだけ、光明があるとすれば、この悪い予感の

内にある個人の強い思惑を感じることです」

由宇は平静を装いながら、内心ギクリとしている。

「今回の事件の主体は魔界の存在ですが、それを呼び寄せている人間の意志を感じるのです。それをつきとめれば、もしかしたら事態を納めることが出来るかもしれません」

紅倉美姫ほどの人間の控えめな発言に三津木は強い不安を感じた。

「岳戸先生」

紅倉に呼びかけられて由宇ははた目にもはつきり驚き慌てた。

「な、なによ？」

「先生はもちろんご存じですが悪霊の本体というのは複数である場合がほとんどです。ですよ？」

「そ、そうよ。常識よ」

「そうですね。いかに悪霊怨霊といえど純粹に単体で人を呪い殺すほどの凄まじい力を持ったものはごく稀です。基本的に魂だけの霊より肉体を持った生者の方がずっと強いのです。ですから何か目的を持った霊は、仲間を呼び寄せ、取り入り、利用し、集団で強い力を発揮するのです。そこが霊に関する問題を複雑で理解しがたいものになっています。今回魔界を呼び寄せている意志も、単体ではないと思います。複数の元凶が存在し、それを操っている黒幕がいると考えられます。それを探り出さなければなりません。岳戸先生」

「なによ？」

「先生ほどの方に釈迦に説法のように申し訳ないのですが、どうぞくれぐれもお気を付けください。霊たちは一度既にこの事件に関わっている岳戸先生の強い霊力をなんとか自分たちの都合のいいように利用できないか狙っていると思います。彼らの本拠地に入ればきつとあちらの方から先生に接触してくると思いますから、どうぞくれぐれもお気を付けください」

「分かってるわよ、そんなこと」

由宇はふてくされて答えた。

三津木は局への帰りがてら由宇とマネージャーを東京駅に送っていくことになった。由宇がどうしても車での長距離移動を嫌がったためだ。幸い新幹線の最終にはまだ間がある。さらに由宇の我が儘・提案でスタッフも4名いつしよに行くことになった。たしかに由宇の周りでは何が起こるか分からない。カメラが一台あった方がいいだろう。三津木は紅倉に挨拶し、訊いた。

「岳戸先生の方は大丈夫でしょうか？ まあ、その、いろいろな意味で・・・」

三津木の苦笑いに紅倉も苦笑した。

「まあ、大丈夫でしょう。あれだけクギを刺しておきましたから」

「じゃあさっきのは嘘ですか？」

「いえ、そうとは言いません」

紅倉はスツと冷たい顔になって言った。

「言っではなんですが岳戸先生が靈に利用されやすいのは確かです。問題はどちらかというとご本人の方にあるように思いますが」

「はあ、すみません、同感です」

紅倉はニコツと笑った。

「ですから、あれだけ脅しておけば大丈夫でしょう」

三津木も安心して笑った。

「では先生、よろしく願います。事件も・・・由宇のことも・・・」

「はい」

三津木は紅倉の顔を見て泣きそうに顔を歪めた。頭を下げ、車に戻った。

新潟へは高速道路で5時間ほどの道のりだ。芙蓉の運転するハイブリットカーは2台のバンと1台の乗用車の後に続いて走っている。芙蓉と紅倉の二人きりだ。紅倉は免許を持っていないので運転は芙蓉一人で行う。等々力は芙蓉の疲労を心配したが、芙蓉は一人の方

が気楽でいいと言った。

「ごめんなさいね、美貴ちゃん、無理させちゃって」

後部座席で紅倉が申し訳なさそうに謝った。

「いえ、今日はわたしも朝が遅かったですから平気です。先生、眠くなったらどうぞ休んでください」

「うん」

芙蓉は紅倉が自分の運転する車以外では決して外出したがないのを知っている。芙蓉はそれをとて光栄に思っている。

到着は1時頃になるだろう。今日はそのままホテルで休み、明日の朝一番で現地スタッフが合流し、少女の搜索の開始となる。

高いビルが減っていき、住宅街を抜け、だんだん明かりが減っていき、やがてバイパスの外は真っ暗になった。

1時間近く走ったところで突然切つてあつたカーナビが点いた。

芙蓉は念のため切った。また点いた。後部座席へ呼びかける。

「先生」

紅倉は眠そうにうんと頷いた。

「いったん止まりましょう」

ウインカーで合図を送り、次のパーキングエリアに入った。車を降りてやってきた等々力にカーナビの異常を知らせた。さすが手慣れたもので既にカメラを回している。

「上信越道に入れと？」

一行は関越自動車道を走っている。上信越自動車道へはこの先の藤岡ジャンクションで分岐する。

「長野県経由で遠回りになりますね？ 先生、何か意味があるんでしょうか？」

紅倉は半眼になっているが眠いのではない。遙か遠くを見通しているのだ。

「助けを求めている人がいます。死のうとしています。死にたくない。死を選ばざるを得ないほどの恐怖に怯えています。行ってあげなくては」

等々力が暗い不安そうな声で訊く。もちろん演出だ。

「先生、それはこの事件に関係あるんでしょうか？」

「おそらく。彼を怯えさせているものの背後に魔を感じます。まだ遠くにいますが、迫ってくる気配を感じます。それがやってくる前に彼と接触しなければ」

「芙蓉さん、先導をお願いしますか？」

「先生、よろしいですか？」

「ええ」

芙蓉の車を先頭に再スタートした。大きくカーブして上信越自動車道へ長野方面へ向かう。芙蓉は時々バックミラーで先生の様子を見た。黒いシルエットがライトに照らされるたび半眼の瞳が宝石のように光った。

すっかり山の中に入り連続するトンネルをいくつも通り抜けた。バックミラーの中の先生の顔が微かに歪む。トンネルは霊が多い。先生の霊力を頼って寄ってくるのだ。特に今は遠方の意識を探るため霊波のアンテナをかなり広げている。雑音が大きく先生も頭が痛そうだった。

1時間半ほど走ってカーナビが路線変更を指示した。更埴ジャンクションから長野自動車道に入る。それまで矢印で方向を示すだけだった画面が目的地を告げた。

「先生。待本市だそうです」

先生は黙って頷いた。辛そうだった。

30分ほど走って市内に入ると突然カーナビが消えた。

「先生」

「大丈夫。場所は分かっています。五柱神社です」

「五柱神社？」

「大丈夫。彼はずっと迷っています。わたしたちが着くまで首をくくることはないでしょう・・・」

安心したように眠ってしまった。結局カーナビを動かしたのは先生御自身だったのだらう。大丈夫と言われても芙蓉は五柱神社なん

て知らない。結局またカーナビを点けて音声認識で目的地を表示させた。先生は実際はカーナビの使い方なんてご存じない。まったくの機械音痴だ。目的地は待本インターチェンジを下りてすぐの田圃の中だった。

五柱神社は田圃の中のこんもりした丸い丘の上にあるらしかった。赤い鳥居が立ち、その向こうに石階段が延びている。満月一步手前の月が西の空低く、巨大に黄色く、薄い雲が卵黄に混じった血液のように赤茶色に煙っている。木立の中は真っ黒だ。

車を適当に止めて、等々力始めスタッフたちがわらわら降りてきた。

「先生、ここですか？」

「はい」

芙蓉は先生に手を差し伸べたが、先生は大丈夫と制した。昼間はしよっちゅうけつまずいて転んでいるくせに、こういう暗闇では平気でスイスイ歩く。目もパツチリ開いてもう眠気も消えたようだ。

「あそこ」

先生の指さす先、茂みに隠すように中型のオートバイが置かれていた。

「居ますねえ」

等々力が感心して言った。

「どうしましょう、呼びかけてみた方がいいでしょうか？」

丘は昼間ならどうといったことのない広さだが、とにかく真っ暗な斜面なので人一人捜すのもたいへんそうだ。首をくくろうというのなら、まさか境内のすぐ脇ではするまい。

「そうですね。ごそごそ登っていったら何事かと警戒されるでしょうから」

そこで等々力が自ら声を出した。

「おい、誰がいるかー？」

返事はない。



等々力がもう一度呼びかけようとするのを先生は止めた。

「けっこうです。彼もわたしたちの存在に気付きました。ゆっくり登っていったって警戒を解きましょう」

一行は先生を先頭に鳥居をくぐり階段を上りだした。鳥居をくぐった途端にそれまで周りに聞こえていた蝉の音が消えた。まるでシェルターに入ったように外の音が遮断されている。ジャリ、ジャリ、と石段を踏む音が静かに響く。自然の森らしく樹木が濃密に空間を覆っている。ただ、真っ黒で、カメラ用の照明だけが限られた範囲を色のない白で浮き上がらせている。

「見ていますね。カメラは向けなくてください、左の、上の方です」芙蓉もその人物の意識を捕らえようと神経を集中させようとしたが、静かすぎる静寂が邪魔をして全然集中できなかった。

「聖域ですからね。彼は良い場所に逃げ込んだものです」

芙蓉の霊能力など先生の足元にも及ばない。

スタッフがわつと階段につまずいた。なんだろう、本当に静かで、声が吸い込まれるようだ。

「もうすぐですよ」

先生の声に励まされて先を見ると夜空が開いて、やがて奥に社殿が見えた。屋根の厚いなかなか立派な社だ。境内へ上がると手前と奥の左右、社を中心にした四方に小さなほころぎがあった。

「中心に天を統べる大神、四方に人界を守護する天使。わたしのためのような神社ですね」

先生は嬉しそうに言った。中央の社に歩み出てパンパンと拍手を打ち一礼した。芙蓉と等々力も倣った。

「さて、少しお話ししましょうか。」

まずあの少女の霊の映っているビデオには背後に恐ろしい魔界の存在を感じました。

そして放送された番組からは一人の女性の強い憎悪の念を感じました。

この二つはそもそも別のものではあったと思われませんが、今や一つ

に融合して凄まじい邪悪な力を得ています。あのビデオは放送以前に既に一つ、忌まわしい悲劇を引き起こしているようです。それがテレビで放送され、全国の無数の人々に対して見せ物にされたことによって憎悪の念が再燃し、魔界の力と融合して爆発したようです。さて、あのビデオを作った人たちは彼女にどんなひどい仕打ちをしたのでしょうか？ 青木さんにそのことを聞けなかったのは残念ですねえ。もうそのことを話せる人は一人しか残っていません。みんな、あっちへ逝ってしまいましたよ。ねえ、話してくれませんか？ あなた。彼女は今もひどく怒っています。あなたが最後です。もうあなたしか残っていないんですよ」

先生がつと視線を走らせた。等々力の顔を向けた方にカメラと照明が向く。ざわざわつと真つ黒な闇が動く。木々が白く浮き出す。ギクツとカメラが動揺し、戻る。幹の陰から幽鬼のように男性が立ち現れた。芙蓉はその背後の宙空に輪になったロープがぶら下がっているのを視た。

男はしばらくじつと闇の中にたたずみ、意を決したように天の開けた表に踏み出した。

「あなたは、誰です？」

憔悴しきつた神経質な目で先生に問うた。痩せぎすの二十歳くらいの学生風の男だ。先生は微笑む。

「そうか、あなたが紅倉美姫とかいう霊能者か？」

「とかいう、っていうのはちょっと心外ですが。わざわざ東京からあなたの助けを求める声を辿ってきたのですよ」

「なるほど、本物、ってことか。助けを求めていたか、俺が・・・」

男は自棄気味に笑った。口の端がえぐれたように真つ黒な陰ができた。

「ま、自業自得だよな、インターネットであのビデオが出回り始めてから嫌な感じはしていたんだ、あの野郎どこまでこいつで遊びやがるんだ、ってな」

男は、自身も悪鬼のようにどす黒い怒りを込めて言った。

「あいつ、とは、青木さんのことですか？」

「ああ、そうだよ。全部あいつのせいだ！　・ちつくしょう、なんで俺が最後なんだ？　あいつを最後にするべきだろう？　それとも、・・・俺の方をもつと恨んでいたってことか？　・・・」

「長谷川さん・・でよろしいですか？」

男・長谷川はニヤリと笑った。

「すげえな、名前まで分かるんだ？　それとも映研のメンバーを調べたのか？」

「いえ、そちらの調べはこれからの予定だったのですが。では、あなたは恨みの主が・嶋村・早苗さん・だと思っているのですね？」

「当然だろう」

「嶋村さんは今どちらにいらっしゃるんです？」

「え？」

長谷川はポカンとした表情になった。

「死んだ・んじゃないのか？　だって、お化けだろう？」

「悪霊の正体が死霊とは限りません。ということは、あなたは彼女の現在を知らないのですね？」

「ああ、知らないよ。卒業して・、いや、あれ以来彼女とはそれっきりだ。俺はてっきり・自殺でもしたんだと思っていた・・・」

「

長谷川は自分の出てきた森の方を見た。それが、・自ら命を絶つことが、自分に掛けられた呪いを解く唯一の方法と思い詰めていたらしい。

それほど恐ろしい思いをしていたのか？　等々力が訊く。

「いったいどうしてあなたは自殺しようなんて思ったんです？」

「テレビだよ」

長谷川は視線を宙に向けてボーッと憔悴しきって言った。

「いや、最初は電話だったか。はつきりしない。いきなり悲鳴が聞こえてきたんだ。いたずら電話だと思ったよ。でも、なんか聞き覚

えがあつてさ、すつげえ嫌な感じがして。2度目にかかつてきたときはつきり分かった。あれは、あのビデオの音声だ、って」

長谷川はブルツと震えた。目玉が異様な光を放っている。極度の脅えだ。等々が訊く。

「あのビデオって、女の子の幽霊が映っている？」

「いや、その後のだ」

「後の？」

先生がさえぎった。

「それについては後で。それで？」

「ああ……。順番がはつきりしないんだけど、チラチラテレビでも見るようになったんだ、その、早苗の映っているビデオを。ほら、視界の端っこでなんか怪しい影が見えるんだけど、振り返ると何も無い、って感じさ。何気なくテレビの画面が視界に入っていて、何か変なのが映っていたなって、後から思い出すとそれなんだ。何度も電話がかかってくるようになって……。ああちくしょう、頭がごっちゃだ、俺は誰がこんな悪趣味ないたずらしやがるんだって頭にきて、いや、どうせそれは青木の奴に決まってるんだが、ところがそれが彼女からの電話や実家からの電話までその悲鳴が聞こえて、だからそれは本当に電話から聞こえているんじゃないかって俺の頭の中で聞こえているんだろう、馬鹿やろう、いいかげんにしろ！って怒鳴り返してやったら、翌日大学で彼女に平手打ちされたよ。へへ、俺、もう頭がおかしくなっているんだ。間宮の奴がビルから飛び降りた気持ちがよく分かるぜ。自分の頭の中からは逃げ出せないかな。おかしくなつて、死ぬ方がましって思えてくるさ。へへ……。」

長谷川は顔を歪めて泣きそうになった。

「それはいつ頃からですか？」

「そうだな、半年くらい前からか。だがここ数日は特にひどい。あの番組を見てからだよ！」

先生は考えながら言う。

「でも半年前からなんですな？ その、……わたしはよく分からない

いんですけれど、インターネットのビデオっていつ頃から流れ始めたんです？」

「ああ・・・、そういえばそうだよ、実際どうだか知らないけれど俺が見たのは半年くらい前だ。それからだよ、その幻覚が始まったのは。だから最初はそれを見たせいでそんな幻覚を見たり聴いたりするんだろうつて思っていたんだ」

先生は考える。

「なるほど。手抜きでしたね。つい自分が苦手なものでそちらの可能性を見落としていました。」

さて、もつと話を聞きたいところですが、彼女が迫っています」

長谷川はギクリとして脅え、芙蓉もスタッフも緊張した。先生は等々力始め取材スタッフにクギを刺す。

「いいですか、ここから先番組のことは一切忘れて自分の身を守ることだけ考えてください。でないと、死にますよ」

先生は皆を社の濡れ縁に上げ、四隅の地面に銀の「天使」を置いた。高さ4センチほどの純銀製の天使の像だ。他の霊能者は結界を張るときに盛り塩やお札を使うが、天然の天才である先生は我流でこれを使う。先生も濡れ縁に上がってきて再度言う。

「カメラは禁止。当然照明もマイクも駄目。絶対にしゃべらないこと。息も、死なない程度に止めていなさい」

皆しゃがんで、背中を丸めた。

照明が消された。まさに墨を流したような暗黒に包まれた。月も既に沈んだらしく空さえ暗い。いや、星もない。真っ黒だ。重い。鉛の壁に包まれたような圧迫感を感じる。風もない。空気が湿ってぬれている。臭いが強い。湿った沼地の草いきれ。むせ返る青臭さ。なんだろう？ 世界が、違っている。

先生が手で皆を制した。ゆっくり、前方を示す。ぞわぞわと皆の背筋に怖気が走った。

遠く、人が歩いてきた。

世界が違っていることがはっきり分かった。あそこは階段のまだ

先のはずだ。その宙に伸びる道を、闇に浮かんだ灰色の人影がゆっくりゆっくり、やってくる。目が慣れたのか、周囲が青く浮かんできた。またも怖気が走った。別の森になっている。樹木がうねり、密生している。熱帯の森のようだ。生命力に溢れているようで、そのくせそこには死しか感じられなかった。無数の死が累積している。この森は、死の上に成り立っている。むせ返る臭気は、樹皮から染み出す、柔らかな地面からぐずぐず溢れ出す、大量の黒い血の腐敗臭だ。数人が思わず吐き気に口を押さえた。芙蓉は、慣れている。

灰色の人影がゆっくりゆっくり、近づいてきた。奇妙だ。両手を前に突きだして手のひらを広げている。髪が長い。細い体。女だ。ぺたり、ぺたり。裸足で歩いている。地面は半分固まって粘っている。ぺたりぺたり、ぴち、ぴち。四角い布に頭と腕の穴を開けただけの服とも言えない服。灰色。膝小僧の覗く裾は黒く汚れている。細い脚。ぺたりぺたり、ぴち、ぴち、ぴち。恐怖が限界に近づく。少女は目を閉じ、上向かせた顎をブツブツ何か呟くように小刻みに動かしている。恐ろしくて目を逸らすことさえ出来ない。少女は目をつぶっている。眼球がまぶたの下でぶるぶる動いているのが分かる。ブツブツ呟いている。スタッフの一人がガクリと前にのめり、芙蓉は慌てて押さえた。ぶつぶつ。おいでおいで。招いている。隠れたって分かるよ、おいで、出ておいで。芙蓉もつい先生の様子を伺う。先生の眼球は毛細血管に覆われ完全に黒目が失せている。

少女が立ち止まった。すぐ下、2メートルほどの距離だ。少女は不思議そうに小首を傾げた。開いた手のひらで空間を撫でる。目は閉じたまま、眼球だけ中で忙しく動き回っている。口がゆっくり開いていった。

「キュルキュルキュルキュルキュルキュルキュル」

テープの早回しみたいな甲高い音が大音量で流れ出した。あつとみんな頭を押さえた。人間の声ではない。脳内の一部をひどく刺激する魔のさえずりだ。

「キュルキュルキュルキュル」

やめてくれ！と思わず叫びたくなる。頭に指を突っ込んで脳味噌をかき回したくなる。

「キュルキュル」

気が狂う！

頼れるのは先生だけだ。皆の視線が少女から逃げて先生に集中する。先生は真つ赤な目を開いたまままるで眠っているように微動だにしない。

「キュルキュルキュル・・・」

少女は再び小首を傾げ、あきらめたように口を閉じ、ゆっくり後ろを向いた。ヒイ・・・ツと、皆いつせいに息を飲んだ。少女の黒髪の頭はパツクリ割れ、真つ赤な脳味噌らしきものが蠢いていた。

ぺたり、ぺたり、ぺたり、ぺたり・・・少女はゆっくり去っていく。足裏に赤黒い粘液が糸を引くのが見えた。ぴち、ぴち、ぴち。ぺたり、ぺたり、ぺたり。去っていく。

どれほどの時間が過ぎたのか、すっかり感覚が麻痺している。少女の姿が、ようやく闇に消えた。ほお・・・、とため息をつく。スタッフがカメラを構えた。先生の目に黒目が現れ、ギラリとスタッフを睨んだ。

「まだよ！」

遅かった。少女が猛烈な勢いで走ってきた。裾をからげ、赤く濡れて粘つく地面を激しく蹴って。迫る。顔。目は閉じている。まるで糸で縫われたように。しかしまぶたの上に血管が集まって赤い目のようになっている。口は、笑っている。黒い空洞が見えた。突き出した手が、バチン、と先生の結界にぶち当たった。見えない壁を押し、肩と首をカクカク激しく振り立てている。

「キュルキュルキュル」

喜びの声か？ 空洞の口を開いて顔を結界に押し付けた。グルグル動いていたまぶだが、ゆっくり、赤い糸を引いて開いた。

「ぎゃあ ああああああああああつ!!!」

先生は以前悪夢の予言の中でこう言った。「これは、なんでしよう？　花が見えます。真つ赤な・・、薔薇・・・。恐ろしい・・・。・・・。」それを今、芙蓉たちも見ている。

薔薇が花開いた。ただし、ひとかけらの美しさもない。それは肉の花だった。肉の襷が折り重なり、薔薇のように見えている。まぶたの下で蠢いていたものはこの肉の襷たちだったのだ。少女はもとも、とこの魔界の住人なのだろうか？ それとも魔界に取り込まれた、元はふつうの可憐な少女だったのだろうか？ 失った眼球の代わりに、内から肉襷の固まりが弾けだしている。瞬きの度、ぷちぷち、襷が跳ねた。赤い汁が飛ぶ。

大の大人たちが怯えてすっかり腰が抜けている。芙蓉も人のことは言えない。

「駄目ですね。このままでは全員魔界に取り込まれてしまう」

たが、声も出ず、手も動かなかつた。

女を後退させる。先生の全身から白い湯気が立った。すぐに赤く染まった。先生も血の汗を噴き出している。押す。後退させる。先生の後姿が、赤い霧で煙った。

芙蓉はようやく涙を流しながら呼びかけた。瞬間、世界が消えた。いや、元に戻った。冷たい、夜気。まともな世界の空気だ。

「先生！」



「先生、先生えー・・・」

芙蓉に抱きかかえられ、先生はぐったり力が抜け、口と鼻から血を流していた。

「ああ、先生、先生！　ああ、・・・先生っ！・・・」

先生を抱きしめた。守れなかった、自分は無力だ！

「美貴・・・ちゃん・・・」

「先生！！！」

先生は弱々しく微笑んだ。目は閉じたままだ。芙蓉はその目の開くのが怖かった。まさか先生まであの・・・

ゆっくり開いた。充血がひどいが、元の目だ。良かった・・・。

「さすがにまいったわ。動けない。また休まなければ・・・」

「休んでください！」

芙蓉は涙が溢れてきて、先生の顔を濡らしてしまった。等々力たちが手伝うと言うのを断って芙蓉は先生を抱いて階段を下りた。汗をかいたが、まともな運動の汗が嬉しかった。魔界に生身のまま入って、生還した。奇跡だ。生きている実感が限りなく喜びを溢れさせた。先生のおかげだ。芙蓉は改めて先生に感謝し、尊敬の念を新たにし、そして、愛しく思った。この方は特別だ。神の与えてくださった奇跡と救いだ。しかし、先生御自身は決して幸福ではない。自分が、力の限り先生のお世話をしていこう。

先生は待本市内の救急病院に入院した。全身に軽度のやけどを負っていた。内臓からの出血もあった。魔界の怪物との対決がいかに凄まじいものだったか伺われる。芙蓉は先生の手を握り、治癒力を高める気を送り続けた。自分の霊能力で人より優れているのはこれくらいだ。先生は「素晴らしい力ね」と褒めてくれるが、先生が芙蓉を弟子に決めたのは単に人物を気に入られたからだと芙蓉自身は思っている。それでも少しは先生のお役に立てる、今は。

等々力は困った。芙蓉の見立てでは紅倉先生は少なくとも明日の昼までは絶対安静だ。芙蓉も先生に付き添うと言う。等々力は眠る

先生に遠慮してそつと芙蓉にお伺いを立てた。

「我々はどうするべきでしょう？」

芙蓉は等々力の後ろの長谷川を見る。ひどいショックを受けているが、自分同様先生への感謝と尊敬を持ったようだ。

「あなたは青山市の出身ですか？」

「ええ。実家があります」

芙蓉は先生を見て考える。この際仕方ないだろう。それに先生にこれ以上危険な目に遭ってほしくない。

「では等々力さんたちは長谷川さんと青山市に向かって岳戸先生と合流してください。わたしと先生は先生の回復次第合流します」

等々力があからさまに不安そうな顔をする。

「だいじょうぶでしょうか、その、岳戸先生で？・・・」

だいじょうぶのわけない、と、芙蓉も思うが。

「岳戸さんに任せるしかないでしょう。彼女も、少なくともわたしよりは霊能力は上です」

「はあ・・・」

等々力も仕方なく頷く。いつもなら内心面白くなりそうだと無責任に喜ぶところだが、今回はかりはさすがにそういう気持ちにはなれない。岳戸由宇ではあれに對抗できない。我々は、死んでいる。

「ではできるだけ早いご回復を祈っております」

それがまいったくの本心だ。等々力は先生に深々礼をして、病室を出た。長谷川はまだ不安だ。

「・・・また、来ないだろうか？」

あれが。

「しばらくはないでしょう。向こうも相当痛手を負っているはずですから」

当てずっぽうだ。そうとしか言えない。芙蓉からも訊く。

「あれが、嶋村早苗さんですか？」

「いやあ・・・」

長谷川は困惑する。

「違う・・・ような気がする。子ども・・・だったよねえ？」

ような気がする、というのは芙蓉も理解できる。あれは人間の皮をかぶった怪物だった。人間としての個性はなかった。それに嶋村早苗が彼と同年代なら21、2歳のはずだが、あの少女はせいぜい15歳くらいにしか見えなかった。

違うのか？ 芙蓉も内心困惑している。では、あのビデオの少女か？ その彼女を捜しに我々は来たのだが・・・

「あなたもホテルに泊めてもらいなさい。岳戸先生に守っていただくように」

「岳戸由宇って、当てになるのか？」

「・・・・・・・・」

「頼むよ、早く来てくれよ」

長谷川も先生に一礼して、大いに心残りしながら病室を出た。

## 第11話 もう一本のビデオ

朝7時に朝食会を開いてそこで地元テレビ局のスタッフと合流した。いつも寝起きは不機嫌な由宇だが、今朝は特に悪い。6時にマネージャーの加納に起こされ、紅倉美姫が負傷したらしいと聞かされた。それはいい。機嫌が良くなった。だが寝不足と興奮でギトギトした等々力ディレクターから紅倉が事件に関係する重要人物を見つけ出し、魔界から守ったと聞かされて一気に不機嫌になった。その頃由宇は局持ちのワインをがぶ飲みしてぐっすり眠っていた。

『ちくしょう、あの女め』

と思った。由宇がアルコールを採ったのは自分の霊能力を抑えるためだ。あの女が悪霊に気を付けるようにと脅したから。その一方で自分はさっそく抜け駆けして手柄を立てやがって！ 由宇は、怖かったのだ。今回の事件が得体の知れないものだというのは由宇にも分かつている。上手くあの女を利用してやるつもりだったのに、計算が狂った。

等々力の報告を聞きながら由宇は不安で苛立った。それを自分に任せるというのか？ 冗談じゃない！

しかし、時間がたってだんだんいつもの調子が戻ってきた。みんな自分を頼っている。そうだ、わたしは神に選ばれた者なのだ！ 紅倉美姫がなんだというのだ、あの死体女。あの女の力は死者の世界のものだ。片足を墓穴に突っ込んだゾンビ女め！ わたしは違う！ わたしの力は神に与えられたものだ！ あんたじゃない、わたしが！ 神に選ばれた者なのだ！

由宇は思わず知らず口の端を笑わせ、みんなの不審の目を気にせず湯気の立つソーセージを頬張った。おいしいじゃない。わたしの力は生の力だ！ 食欲のない一同を放っておいてガツガツトースト

セットを平らげた。

「で、その長谷川馨って男の子はどうしているの？」

「睡眠薬を飲んでぐっすり眠っています。ここ数日ろくに眠っていません。なかつたようで」

「ちっ、呑気に寝てるんじゃないわよ。じゃどうすんのよ？」

「はあ。やはりまずは母親に話を聞かないと。それにあつちにはいろいろ裏事情を調べているブレインがいるようですし」

「ブレイン？」

「ええ。最初に局の三津木ディレクターに電話を掛けてきたのが少女の高校の先生で、由利絵梨佳先生という女性なんです。彼女は映画・映画研究同好会の顧問をやっています、少女も部員ですし、あのビデオを撮ったのがその元部員たちのようなんです。それで・

「なんでそんな大事なことに先に言わないのよ！」

「いや、でも・・・」

由宇は忌々しく眉を吊り上げた。分かっている、それが売りなのだ、関係者に会っただけでズバズバ隠された事実を言い当てる、スーパー霊能力者紅倉美姫の！

由宇は狡くニヤリと笑った。

「そっち。その先生に先に話を聞くわ」

VTRの中心は母親との対話になるだろう。先に事情を知っておいた方が有利・・・かつこよく映るだろう。

いけそうじゃない。由宇は俄然やる気が出てきた。紅倉が復帰するまでにせいぜい引っかけ回してやる！

由利絵梨佳先生も不機嫌だった。朝っぱらから電話で呼びつけられて・・・まあ謝礼は弾むと言うことだからそれはよしとして、なんなのこの豪華ホテルは！こんなところバイキングフェアでしか来たことないわよ！テレビの口ケってこんなに贅沢をしているの

？、と思つたら、どうやらこの先生の我が儘らしい。

岳戸由宇。何を勘違いしているんだかひらひらフリルの服を着ている。

「あのー・・・、紅倉さんは？」

そういう約束だったでしょうが？ ディレクターは困つて、岳戸は一瞬ムツとしたがすぐにニコッと気持ち悪く笑つた。

「紅倉さんはちょっとトラブルに遭遇して到着が遅れているんです。いえ、ちゃんと来ますのよ。でもー・・・、心配でしょ？生徒さん。わたしだって少しはお手伝いできると思うんですけど？」

先生朝食まだですの？どうぞどうぞなんつても注文してください！、と、食べ物に釣られている自分も自分だ。フレンチトーストを頼んだ。あー、おいしい。

絵梨佳は仕方なしに岳戸に自分の集めた情報を話した。ただし、全てではない。誰でも調べれば分かることだけ慎重に選んで話した。あのビデオは5年前に青山高校の映研部員が作ったこと。桜野葉子がそれを手伝っていたらしいこと。メンバーの一人金森が交通事故に遭い、さらに錯乱して植物状態になってしまったこと・・・。せつかく話してやっているのに岳戸はだんだん不機嫌になってきた。

「ちよつと先生えー。もつと面白い話してよ。何か隠していることがあるでしょう？」

ギクツ。いろいろありすぎて困つてしまふ。岳戸は意地悪く笑つてじいつと絵梨佳の目を覗き込んだ。

「センセ。あなた個人的な悩み事があるでしょう？ 相談に乗つてやつてもいいわよ。たとえばー・・・、年下の男の子との不倫とか・

「はあ？」

何言つてんだか、この女。腹立たしいことに自信満々だ。ちよつとはものが見えるらしいが、勘違いも甚だしい。

「けっこうです。・・・でもまあ、あなたの力を信用してお話ししましょうか。あのビデオとは別にもう1本のビデオが存在するらしい

んです。当時の映研の部員は5人。内一人が女の子で、どうやらその子がそのビデオでひどい目に遭わされたらしいんです。それでそもそもこの事件はそこが出发点なんじゃないかと思っっているんですけれど・・・」

岳戸はふうん・・・と何気ない振りをしながら頭の中で一生懸命計算を巡らせている。

「そう。それで、その子はなんという子なの？」

「嶋村早苗さん」

「嶋村早苗・・・」

何気なく呟いた岳戸の顔に驚愕が走り、恐ろしく目を見開いた。

「知ってるんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いえ、別人よ。なんでもない勘違いよ・・・」

とてもそうは思えない。この人は嶋村早苗を知っている。意外な接点だ。どこで彼女とつながるのか？

「それでその嶋村早苗さんなんですが、」

絵梨佳は岳戸を揺さぶろうと鎌を掛けようとした。今絵梨佳たちがいるのは長テーブルの置かれた食事会用の中ホールだ。そのドアをバーンと開いて一人の男が駆け込んできた。目が血走って殺気立っている。

「うわっ」

男は訳の分からない声を上げ、部屋を見渡した。絵梨佳と岳戸とテレビスタッフが撮影している。絵梨佳の声と顔には保護処理を施す約束だ。男は絵梨佳を睨み、岳戸を睨んだ。

「あ、あんただな、岳戸由宇ってのは？」

男はディレクターがおいおい落ち着けと止めるのを振り払って岳戸に詰め寄った。

「あんた、なんとかしてくれるんじゃないのか？ で、出たぞ、また、夢の中で。やっぱり彼女だ、早苗だ！」

早苗？ 嶋村早苗？ 岳戸はしらっと冷たい目で男を見た。

「なんとかって何よ？　あなたが約束したのは紅倉美姫でしょ？  
わたしの知ったことですか」

「な、なに？」

男はディレクターを睨んだ。ディレクターは慌てて岳戸に言う。

「先生、そりやないでしょう？　彼は魔界に狙われているんですよ？　今先生以外に誰に守れるって言うんです？」

「バー力。魔界の気配なんて全然ないわよ。夢でしょ？　夢よ、あなたが勝手に見た。わたしより精神科の医者にかかりなさい」

「夢・・・ただの・・・」

男は一気に力が抜けてへらへら笑った。へたり込もうとするのをディレクターに支えられて椅子に座らされた。絵梨佳は訊く。

「あなた、もしかして長谷川馨さん？」

男は疲れた目で絵梨佳を見た。

「あんたは？　テレビの人？」

「わたしは青山高校の映研の顧問をしています由利といいます」

「へー、先生？　いいなー、俺たちの頃にはこんな若くて美人の先生はいなかったなあ・・・」

男、長谷川馨はへらへら笑った。この男も癪にさわるが、逃げているという印象がある。そしてひどく怯えている。

「あなたは知っていますね、放送されたビデオとは別の、イタズラビデオがあるのを？」

長谷川は笑いを引つ込めむっつり黙り込んだ。真剣さの戻った目で絵梨佳に言う。

「あなたの方がよっぽど頼りになりそうだな。よく調べたな、そのビデオのこと」

「吉田先生に聞いただけよ。でも・・・わたしの印象では、あなた方、嶋村さんに無理やりあれをやらせたんじゃないの？」

バケモノのお面を付けさせて・・・。長谷川はもの凄く暗い目をした。

「無理やりって言えば、そうだよ。俺たちは早苗が気絶しているの



をいいことに、あのイタズラをしたのさ」

「ちよつとちよつと！」

岳戸が割り込む。

「なんの話をしているのよ？ わたしを無視して勝手に話を進めるんじゃないわよ！」

絵梨佳は無視した。ディレクターもカメラも無視する。長谷川が訊く。

「青木が死んで、間宮が自殺した。金森はどうしたんだ？」

「事故で入院して、そこで錯乱して植物状態になってしまったわ」

「そつか……。やっぱり最後は俺ってことか……。早苗の奴はそんなに俺を恨んでいたのか……」

長谷川は苦悩した。ひどく後悔しているようだが、脅えばかりでなく、どこか悲しげだ。

「俺と早苗はつき合ってた。つき合ってたって、いつしよに映画を見に行くくらいだったけどな。あいつ、変なのばかり見たがるから、そんなのにつき合ってたのは俺くらいしかいなかったもんな。でもあいつ、ふだんは無口なくせに映画を観るとぺらぺら嬉しそうに感想言ってたなあ。あんなデートでも、楽しかったのかなあ……。俺もけっこう幸せだったのかな？ 同じ趣味の女の子がいて。俺だって早苗以外にいつしよに映画見に行く相手なんていなかったもんな……」

幸せだったんだろう、と絵梨佳は思った。

「ところがだ、幸せな関係っていうのは邪魔する奴が現れるものだ。それが、青木雄二だった……」

長谷川の瞳に暗い憎しみの炎が灯った。

「あいつは何かと俺と早苗の仲をからかった。ガキだったんだよ。ま、俺もだったけど……」

あの幽霊の家のビデオを作った経緯は知ってるのか？」

「まあ。テレビ局に売り込もうってことだったんでしょ？」

「まあね。それだって本気で思っていたわけじゃないんだけどな。」

遊びだよ。

言い出したのはやっぱり青木だった。もうシナリオも用意していてね。俺は当然その幽霊を早苗にやらせるんだろうと思っていただけ、青木はすつごく嫌そうに否定した。誰があんなブスを使うかよ、ってね」

絵梨佳はそれぞれの卒業アルバムからメンバー5人の写真をコピーしてカバンに持っている。嶋村早苗は・・・、ひたすら地味な、若い女の子の輝きを少しも感じられない少し気の毒な顔立ちの生徒だった。

「幽霊の役でしょ？あのバケモノのお面の？　そういう意味なら・・・言っただけで打ってつけたたんじゃない？」

絵梨佳の失礼な言葉にも長谷川は特に反発するわけでもなし淡々と言う。

「いや、あいつの美意識が許さないんだってよ。美しい少女がバケモノに変身するところがいいんだ、って。実際、あいつの連れてきた女の子はかわいかったからなあ・・・」

ちよつと悔しそうだ。

「その女の子って、青木葉子さん？」

「ああ、たしかそう言ってたな、あいつのいとこだって。明るい子でマスクを付けて俺たちにもバアって脅かしてみせてたな。青木とは正反対だ」

「青木さんは暗い人だったの？」

「陰険。あいつ女の子にはけっこうもててたんだけど、もらったラブレターをクラスメートの前で平気で声に出して読んでいるような奴だった」

「最低な奴ね」

「だな。でもあいつ変なコネがあって・・・、そうだ、そもそもあのマスクだよ」

「バケモノのお面？」

「そう。あれはそのいとこの葉子ちゃんに合わせて作られたものだ

「つたんだが、作ったのは俺たちじゃない」

「じゃあ、売り物？」

「よく分らない。青木が用意したものだから。でもぴったりだったからな、特注品だよな。あいつはそういう変なグッズ、映画の小道具みたいなオブジェやフィギュア・ホラーとかSFとか美少女ものとか、そんなレアな物をどこからか手に入れてよく自慢してたんだ。自分で作ったって言うてたけど、嘘だね、あいつ絵は下手だったもんな。見栄っ張りの自慢しがかり屋だったのさ。くっだらねえ、見え透いてるのにな。俺はなんとかその出所を探ろうとしたが、駄目だった。そここのところに関してはあいつは口が堅かった」

「欲しかったのか、それが。けっきょく長谷川も同じヲタク仲間と言っことか。」

「ふうん。それで、嶋村さんだけ除け者にして男4人と青木葉子さんとあのビデオを作ったわけね？ それからどうしたの？ 金森さんの話ではわざわざ嶋村さんを心霊スポットと偽って現場に連れていって、幽霊を撮る振りをして、あらかじめ撮影しておいた「特撮ビデオ」を「本物」として彼女に見せたんでしょ？」

「金森の奴べらべらそんなことまでしゃべったのか？」

長谷川はフン、と侮蔑的に笑った。

「そう、試写会をやったんだ、どの程度引つかかるのか？とね。早苗は見事に引っかった。作った本人たちはあんな作り物にと思うが、早苗は実際に現場に来て、カメラをセッティングして、自分たちが撮ったビデオだと信じていた・・・、早苗はまさか俺がグルになって自分を騙しているとは少しも疑わなかったんだろうな・・・」

「あなたは どうして騙すことに荷担したの？」

「・・・特に・・・だって、あんなに見事に騙されるとは思ってなかったから・・・、ちよつとした悪戯だったんだ」

「それで？」

「早苗は異様に怖がった。根っから信じ切っているようだった。俺たちも最初は面白がっていたが、だんだん怖くなってきた。テレビ

じゃ10分くらいだったのか？オリジナルはまるまる1時間あるんだ、実際は40分までしか見なかったんだが、本物だって信じ切っ  
て見ているんだ、どれほどの緊張感を持っていたか、分かるか？」  
想像すると、怖い。その精神状態が。

「怖かったよ、早苗の、狂乱ぶりが。まさに泣き喚いていた。ほら、  
バケモノがアップで出てきて「何撮ってんのよお！」ってわめくシ  
ーン。早苗もいっしょになって悲鳴を上げて、おかしくなった・・・」

「・・・それから、どうなったの？」

「試写会どころじゃないよ、ビデオを止めて、泣き喚く早苗を押さ  
えつけて、いくらこれは作り物だ、俺たちが作った特撮だって言っ  
ても、女の子が見ている、顔がいっぱい映ってる、骸骨がいっぱい  
ある、って聞かなくて、そんな物映ってないのにな、見えちゃっ  
てるんだ、早苗には。それで・・・」

長谷川は口ごもった。顔が歪む。相当言いづらそうだ。

「それで・・・青木の奴が、バーカ、よく見る、これだよ、このマ  
スクだよ！って例のバケモノマスクを早苗に見せて、そしたら早苗  
はますます怯えて、嫌、嫌、って。青木は腹を立てて、作り物だっ  
て言ってるだろーが！って、早苗にマスクをかぶせたんだ・・・」

「早苗は・・・、気絶した・・・」

「・・・で、それから？」

「・・・青木はマスクを取って・・・、大笑いし  
た、なんだこいつ気絶してるぞ！って・・・」

そして、あのイタズラを思い付いたんだ・・・」

「ちよつと待ちなさい。たいへんなことをしてしまったっていう自  
覚はなかったの？ 泣き喚いて気絶したら、医者に診せなくちゃっ  
て、少なくともあなたは、思わなかったの？」

長谷川は、暗い、暗い、目をした。

「思ったさ、俺は。でも・・・、だんだんと醒めていつちまったんだ、早苗の泣き喚く姿を見ていたら、な。泣いて、鼻水とよだれを垂らして、駄々をこねて、・・・俺は、そんな早苗の姿を、醜い、と、思ったんだ・・・。」

「そう・・・。」

多分そう思ったのは周りの目のせいだろう。特に青木。おまえこんなブスとつき合っているのかと言われたら、つい、つき合ってなんかいいえよと言ってしまうのではないか。そして、じゃあ証明してみせるよ、と。悪質だ。

「あなた方が嶋村さんにしたイタズラってなんなの？」

「気絶した早苗を練習中だった柔道部の部屋に運んで、ロッカーに入れたんだ、マスクをかぶせたまま。そして、起きたときの様子を見るためにビデオカメラを隠してセットしてきた」

「結果は？」

「大成功だったよ。まさかあんなに上手くいくとは思わなかった。部員たちが練習を終えて帰ってきて、着替えを始めたところで早苗が目を覚ましてロッカーを飛び出したんだ。柔道部の連中はびっくり仰天した・・・。」

「・・・で？」

長谷川は弱々しい目で絵梨佳を見た。絵梨佳は許さない。嶋村早苗が彼ら4人を呪い殺すほど恨みに思う核心がそこにあるはずだ。長谷川は観念して白状した。

「柔道部の連中は驚いて、早苗を捕まえたんだ。目が覚めて暗い狭い場所に閉じこめられていた早苗は完全にパニックになっていた。飛び出したところに半分裸の男たちがいたんだ、その恐怖はどれほどだったことか。だが、男たちにそんな事情が分かるはずない。当然悪戯だと思うだろう。捕まえて、暴れる早苗を押さえつけた。早苗は必死でマスクを取ろうとした。だが取れない。首の後ろの紐をしっかりと玉結びにしていたからな。その様子を見て男の一人が言った、おい、脱がせてやれよ、と。そしたら一人が、じゃあ脱がせて

やろうぜ、って、早苗のスカートをめくったんだ。悪質だが、冗談のつもりだったんだろう。早苗は悲鳴を上げた。しかし呻くだけで声は出なかった。それで柔道部の連中もさすがにおかしいと気が付いた。早苗は・・・失禁していた・・・。また気絶したみたいに関動がなくなってしまった。連中は慌てて、ハサミで紐を切ってマスクを脱がせた。・・・俺も知らなかったんだが、早苗は猿ぐつわを噛ませられていたんだ・・・。部員がおい！おい！と呼んでも返事をしなかった。早苗の精神は・・・壊れてしまったんだろう・・・。

絵梨佳は、思わず長谷川をぶん殴ってやりたくなった。ひどい。あまりに酷すぎる！

「そうだな、恨まれて、呪われて、当然だよな」

長谷川の精神も半分壊れてしまっているようだ。絵梨佳は怒りのぶつけどころを搜した。

「なんなのよ、青木雄二って男は！ どうしてそこまでできるのよっ！？」

「だろう？ だからさ、なんであいつが最初なんだろう？ って思うんだよ。一番最後まで残して、怖がらせるだけ怖がらせて、苦しめるだけ苦しめて、それから殺せば良かったんだ。なんで俺が最後なんだろう？・・・」

確かにもつたいない。だが・・・

「青木雄二を殺したのは、嶋村さんじゃないかもしれないわよ」

「えっ？」

「いえ、呪いってどういうものなのか分からないけれど、少なくとも物理的に青木を殺したのは・・・、桜野葉子さんらしいわよ」

「桜野・・・葉子？」

「そう。青木葉子さんの現在の名前。搜索を依頼した、幽霊少女」

「彼女・・・なのか？・・・」

長谷川は困惑した。そして納得する。

「分からないが、青木ならどれだけ呪い殺される理由があってもお

かしくない。ろくでもない最低な奴だったからな。でも・・・、じゃあ、早苗じゃないのか？・・・」

「嶋村さんはその後どうしたの？」

「夏休みはそれっきりだ。2学期には普通に学校に出てきたよ。俺とはもうまともに口をきかなかったけれど・・・。でも表情は妙に明るくなった。やっぱり壊れてしまったんだろうと思ったが・・・、怖かったのは、あのビデオを文化祭に出展しようって言い出したときだ・・・」

「嶋村さんが、自分から？ そんなわけないでしょう！？」

「いや、そうなんだよ。だから怖かったんだ。作ったビデオの方は青木の奴がさつさとテレビ局に送ってしまった。こんな出来のいい物を高校生のガキども相手に公開するのはもったいないってね。だから、残ったのは早苗をバケモノにしたイタズラビデオの方なんだ。みんな早苗の真意を疑った。怖かった。だが早苗は言うんだ、せっかくのわたしの名演技をみんなに見てもらいましょうよ、って」

「どういう心理か？」

「演技・・・ということにしたかったのかしら？ 恐怖のあまり、それを、いや違うんだ、あれは全部嘘、お芝居の演技だったんだ、ってことに・・・」

「そうかもしれないな。俺には分からないが・・・」

分かってるだろう。青木たちにそそのかされてイタズラに加わった心理も似たようなものだ。

「青木は大喜びで乗った。あいつはあのビデオを見て大笑いしていたからな。だがさすがにあのままで人に見せられないから、早苗がロッカーから飛び出して部員たちがビックリするところまで力ツトしたんだ。それでも文化祭ではすぐに生徒会から上映禁止にされてしまったがな・・・」

「その後は？」

「それっきりだな。文化祭で俺たち2年は実質引退で、解散だ。早苗もやめるかと思ったら、頑張っ続けていたようだな」

「嶋村さんとは本当にもうそれっきり？ 3年生の1年間も？」

「ああ、それっきりだったな。ほとんど顔を合わせることもなかった。俺も、映画はもう見なくなっちまったし・・・」

「そう、おしまいなあ・・・」

「ああ、おしまいだ・・・」

長谷川にとつても高校生活は暗い最悪なものになってしまったのだろう。自業自得とはいえ、悪い友だちを持ったばかりに。青木雄二さえいなかったら彼の高校時代は甘酸っぱい青春の思い出でいっぱいだっただろうに。

「じゃあわたしから嶋村さんのその後を分かっているだけ教えてあげましょうか？」

「あ、ああ・・・」

「担任だった先生から聞いたんだけど、嶋村さんは大学受験に失敗して、浪人生活に入ったようだけど、その後はどこかに引越してそれっきり。一切足取りは掴めていないわ」

「そうか・・・」

「もし、嶋村さんが見つかったらどうする？」

「・・・・・・・」

「会いたい？ 会って、謝りたい？」

「・・・・いや・・・・・・・」

長谷川は一切の氣力を失って苦悩するだけになった。

「今さら許してもらおうなんて思わない。彼女も、許せないだろう。俺の彼女への罪は、一生消えないよ・・・・・・・」

絵梨佳は無言でいた。その通りだろう。人には決して許されない過ちというものがある、のだろう。人として、何があっても絶対やってはいけないことがあるのだ。

絵梨佳は改めて青木雄二という男への怒りを燃やした。こいつこそ諸悪の根元だ！と思う。何故一番最初に死んでしまったのか？生きていれば、罵詈雑言を浴びせて、いかに自分が最低な男か思い知らせてやるところだ！



「それで、」

すっかり抜け殻になってしまった長谷川はもういいだろう。絵梨佳は岳戸由宇に視線を向けた。

「あなたは嶋村さんとどこで会ったの？」

長谷川がピクリと視線を上げる。岳戸は不愉快そうにピクリと眉を上げつつ、白々しく言った。

「あーら、なんのことかしら？ わたしがいつ嶋村さんって人と会ったなんて言ったかしら？」

「とぼけるのは止して。あなた嶋村さんの名前を聞いた途端顔色が変わったじゃない？」

「顔色なんて変えてないわよ！ 小娘が生意氣にあたしを値踏みするような態度取るんじゃないわよ！」

明らかに怪しい。しかし岳戸はこれで完全にへそを曲げてしまったようだ。立ち上がり、言う。

「センセ、ごくろうさま。お話くださってありがとうございます。参考になりました。さ、どうぞお帰りを」

絵梨佳もむっとり岳戸を睨んでやった。やっぱりこの人は人間的に三流だ。ディレクターが取りなすように間に入った。

「や、由利さん、ありがとうございます。謝礼の方をお渡しいたしますのでこちらにどうぞ」

あらまあ、この場で現金をもらえるの？と、つい絵梨佳も誘惑されてしまう。ま、いいや、岳戸由宇なんて。廊下に連れ出された。

後ろで長谷川が岳戸に言い寄っているのが聞こえた。あんだ、早苗を知っているのか？と。岳戸は知らないって言ってるでしょ！と怒っている。

「すみません、岳戸さんはプライドが高くてちょっと短気なところがあった」

ディレクターはしきりと頭を下げた。

「すみません、いずれ紅倉先生がいらっしやいますので、申し訳あ

りませんがもう一度ご足労願えませんか？ いえ、ご都合がよろしければこちらからお伺いいたしますので」

「ご都合はよろしくない。学校も、もちろん絵梨佳の自宅も。」

「紅倉さんはたしかにいらっしやるんですね？」

「はい。必ず」

「じゃあ、桜野さんのマンションに行くんでしょう？ あちらがよければわたしもその時にお伺いして紅倉さんにお話したいんですけれど」

桜野家の家は豪華マンションの最上階だそうだ。ちょっと行ってみたい。

「はい、けっこうです。では、こちらから必ず、ご連絡いたしますので、よろしくお願いします」

絵梨佳は謝礼の入った封筒を受け取った。いくら入ってるのかしら？

やかましい長谷川を振りきって由宇は自室に帰り、三津木に電話した。出るなり、

「この馬鹿！ あんたなに寝惚けたことしてくれちゃってんのよっ！」

と怒鳴りつけた。三津木はなんのことか分からず戸惑っている。

「嶋村早苗よ！ あんた彼女が関係者なの知ってんでしょっ！？」

「嶋村早苗？ ああ、聞いた。あのビデオを作った映研のメンバーの一人だろう？ 彼女はビデオ製作には関係していないって聞いたけどなあ？」

「死ね、馬鹿つつっ！！！！！」

「イテテテ……。なんだよ？ その彼女がどうかしたのか？」

「嶋村早苗よ？ 分かんないの！？ ……まあ、分かんないでしょうね、ボケ。えーと……。なんて言ったかなあ？ 思い出せない……。」「なんだよ、怒るだけ怒って君も分からないのか？」

「どアホ！ えーと、名前が違ってんのよ」

そうだ、優れた霊能者の自分だからこそピンと来たのだ。凡人のあんたには分かるまい。

「ほら、2年くらい前に取材して、やめちゃったのがあるじゃない、若い女で、子どものことで・・・」

『・・・・・・・・・・』

息を飲むのが分かる。

『・・・峰谷早苗か！』

「そうそう、それよ」

『ま、待てよ、彼女が嶋村早苗なのか？』

「そうよ、間違いないわ」

由宇は確信を持って言った。

『おい、なに威張ってんだよ？ それじゃ・・・』

「なによ？ はつきり言いなさいよ」

このボケ。

『それじゃあ、君は、いや、俺たちは、最初からこの事件の関係者ってことになるじゃないか？』

「・・・・・・・・・・」

由宇は突然ギクリとした。出発前の紅倉の言葉を思い出したのだ。「霊たちは一度既にこの事件に関わっている岳戸先生の強い霊力をなんとか自分たちの都合のいいように利用できないか狙っていると思います」。それは、つまり、そういうことなのか？・・・

由宇は、額に冷たい汗を垂らした。拙い。それをばらされたら信用は失墜し、ことによったらこの事件の責任まで問われるかもしれない。拙い。考えろ、考えろ・・・

考えて、由宇はニヤリと笑った。

「ふっふっふ」

『なんだ、またろくでもないこと考えてるな？』

「ろくでもないわいよ。何を恐れる必要があるのよ、逆よ。彼女のことを知っているのはわたしだけなのよ？ 紅倉も知らない。

有利じゃない？」

『馬鹿だな、紅倉先生が出てきて関係者に会えばすぐに分かってしまうぞ』

「関係者って誰よ？ そんな人間一人もないわよ」

『君だよ』

「・・・・・・」

『君、そっちで誰かから嶋村早苗のことを聞いてそれで峰谷早苗のことを思い出したんだろう？ 紅倉先生が君と嶋村早苗をセツトで霊視すれば一発だぞ』

「拙いわねえ。ちつ、どこまでも忌々しい女め。あの女が来る前になんとか有利な状態を作っておかなくっちゃ」

『おい、もう止せ。紅倉先生は君の責任を追及するような真似はしない。先生を信じる。君は、・俺たちはもう、巻き込まれて、利用されているんだよ』

「ふざけないでっ！ 誰があんな女に頭下げるのですかっ！」

由宇は三津木のおいと呼びかける声を無視して携帯を切った。ふざけるな、誰があんな女に負けるものか、負け犬になんてなるものかっ！

由宇は峰谷早苗を思っ て薄ら笑いを浮かべた。どうしようもない不幸な女。人生貧乏くじの引きっぱなしだ。由宇には分かっている、ああいう人間は不幸が好きなのだ。自分から不幸を招き寄せている。先生、なんとかしてください、だ？ 嘘つけ、あなたは不幸が大好きで、不幸な自分がかわいくてかわいくて、快感なのよ！ だ・か・ら、自分というものを分からせてもっと不幸にしてやったのだ。感謝しなさい。

「ふふ、ふふふふふふ」

由宇は楽しくて楽しくて、思わず声に出して笑った。不幸な負け犬女。自分は絶対あはならない。負け犬になんてならない。負け犬になるくらいなら、

「死んだ方がましよ」

由宇は暗い瞳でじつと紅倉美姫の幻を睨んだ。

あの女は敵だ！

そう自分の霊感が言っている。

敵だ！ 滅ぼせ！ でないと、自分が滅ぼされる、自分が負け犬になる、と・・・。

## 第12話 対面

江戸由宇は桜野葉子の家を訪れた。午前9時30分である。

由宇もマンション暮らしであるが、精いっぱい頑張ったつもりでもこんな広くて豪華な造りの部屋ではない。紅倉といいこの家といい腹立たしい限りだが、まあいい、じきに自分もこれくらいのところに引っ越してやる。それに、こんな田舎ではどんないい家に住んでも意味がない。由宇はある種の軽蔑と優越感を持って桜野葉子の母親との対面に臨んだ。地元の名士の娘だそうだが、こんな田舎、高が知れている。

「あらー？ あなた誰？ 紅倉さんってこんなおばさんじゃないわよねえ？」

葉子の母親、桜野緑海（みみ）は起きたばかりのように幾分ふやけた顔であくびをしながら言った。由宇はカーツと顔を赤くし、等々力たちは青くなって慌てた。

「お母さん。電話でもお話ししましたが、こちらは紅倉先生の先輩の霊能者江戸由宇先生です。たいへん優れた霊能力をお持ちですのどうぞ安心なさってください」

「お母さん？」

母親はいくぶんムツと等々力を睨んだが、すぐにどうでもいいようにまたあくびをした。

「そうだったっけー？ あゝあ、紅倉美姫ちゃん楽しみにしてたのになー。ま、いいや。どうぞ勝手に入って」

なんて、腹の立つ女だ！ 由宇も人をムツとさせるのは自信があったが、この女には負ける。由宇は等々力を睨んだ。カメラは既に回っている。初対面の場面は大切だ。たいてい取材対象がかしまって「先生お願いします」という態度を取る。こんなに舐めた対応は初めてだ！ だいたいなんだこの若さは！ アルコールの臭いをプンプンさせて二日酔いのようなだが老けて見えるどころか自分よ

り若そうじゃないの！　これでアルコールが抜けたら完全に負ける。本当に4児の母なのか？　等々力が説明する。

「電話でも言いましたがお母さんの顔にはモザイクを掛けて声は機械的に変えますのでどうぞご安心してお話ください」

母親はキヤハハと笑った。

「ああ、あれ、オモチャみたいな声になるの？　あはは、おつかしい」

いや、この女は若いんじゃない、幼いのだ、頭の中身も。アル中で脳が縮んでしまっているに違いない。ひとしきり子どもみたいに笑うと、桜野緑海は冷めた目で言った。

「いいわよ、別に、顔出してもらっても。あたし、別にどうでもいいから」

等々力の方が慌てて言う。

「いや、そういうわけには。ご家族や学校の方も迷惑でしょうし。後からその、クレームを付けられましても困りますので・・・」

「あっそ。いいわよ、どうでも」

「はあ・・・。ところで他のお子さん方は？」

「三人とも実家に預けてます。約束を守ってくれないマスコミもあるようなので」

「は。もちろん、私どもは人権には十分配慮いたしますので・・・」  
等々力もやり辛そうに額に汗を浮かべている。部屋はクーラーがガンガンに効いて寒いくらいだのに。通常スタッフが先に訪れて取材し、ある程度体勢を整えてから霊能者が登場するのだが、今回は時間がなくぶつつけ本番だ。

由宇はかなりの敵意を持って桜野緑海の霊視に臨んだ。さてどんな因縁をほじくり返していじめてやろうか？　この家がおかしいのは玄関に立ったときから分かっている。

由宇は半眼になってじつと緑海の頭の向こうを見た。緑海は面白そうに笑っている。由宇は自分の意識を消して心の目を開かせた。そうイメージする。すると自然に視るべきものが見えてくるのだ。

浮かんできたのは、白の半袖シャツを着た若い男の姿だった。濃い髪がうねうねウェーブしている。眉も濃く、疑い深そうな目をしているくせに口の端がえくぼになっている。善良で正義感が強そうだが・・、抜けたところがある。あの由利という生意気な先生からイメーじされたハンサムな男の子とつながりが感じられる。由宇は思わずニヤツと笑いそうになった。なんだ、こいつら、同じ穴のむじなじゃないの。

「あなたは・・、とても恋の多い方そうですね」

「まあ、分かっちゃいます？」

「今気になっている男性は、とても若い人ですね。行方不明になっているお嬢さんにとっても近い方です」

「あらま。どうでしょう？」

由宇はじいつと緑海の背後を見つめ続ける。軽口に惑わされるものですか、すぐに尻尾を出させてやる。

「その男性はお嬢さんに強い好意を持っています、あなたはそれを承知の上でお嬢さんからその男性を横取りしようと思っている」

「横取りだなんて、ちよつとつまみ食いしちゃうかなーって思っているだけよ」

「道徳的に不潔だとは思いませんか？」

「恋って背徳的な方が燃えるじゃない？」

「そのように考える自分をおかしいとは思いませんか？」

「さあ？ わたし、最初っから変みたいだから」

由宇もさすがに腹立たしくなった。この女には最初から道德觀念が欠如している。

「あなたには淫乱の気があります」

緑海はキャハハと笑った。由宇は怒った。

「笑うとは何事です！ その淫乱が娘の不幸を生み出しているのです！」

そうだ、この母親が問題なのだ。

「娘さんはあなたから受け継ぐ淫乱の血に悩んでいます。自分の血



を憎み、あなたを恨み憎んでいます。言い寄る男を毛嫌いしながら女の性としてどうしようもなく惹かれる、その自分の淫乱な不潔さを憎み、悩んでいます。あなたが原因です！ あなたのその淫乱さが娘さんを苦しめているのです！」

そうだ、この淫乱淫乱淫乱！男狂いの色狂いめ！ 由宇は目の色が違ってきている。

「分かっていますか！」

由宇に睨まれ叱られ、さすがに緑海もしゅんと小さくなった。

「はい・・・」

「自覚なさい！ しかし、それもあなたばかりを責められません。あなたは淫乱に取り憑かれているのです。色狂いの怨霊です。あなたのその異常な若さを見ればはつきり分かります。その怨霊の正体を教えてあげましょう」

「はあ・・・ お願いします」

そうだ、最初からそうやって素直な態度を取ればいいのだ。

由宇は男の子の背後にさらに別の男性の姿を視ていた。この男は、知っている。

「殺された青木さんは、あなたに特別の感情を抱いていたようですね？」

「そうみたいねえ。わたしをストーカーしていたんですって」

「彼もあなたの淫乱の気の被害者です。彼を狂わせたのはあなたの淫乱の色香です」

「はあ・・・」

よしよし、だいぶ素直になってきたじゃない。由宇はさらに青木雄二の背後に憑きまとう影を視る。

「その青木を心の底から憎み恨んでいる女性の姿が見えます。青木自身自分のあなたに対する執着心が異常であると気付いていました。それでもなおあなたに惹かれてやまない自分の心を憎悪し、その憎悪はあなた以外の女性に対するひどい仕打ちとして発露しました。・女性

・女性の憎悪の源泉が視えます。女性と言うもはばかられる恥

辱です。彼女の恨みは深く、そう、青木雄二を殺したのは彼女の呪いです！ もっとも憎悪する青木を殺した彼女は・・・、青木をこのような人間にしたあなたという女性をもひどく恨み憎んでいます。あなたも、彼女に呪われています！」

緑海は蒼白の顔をしている。由宇は心の中でニンマリ笑った。恐れろ、悩め、わたしに救いを求めろ！

「彼女の呪いはあなたの娘さんを道具として使って遂行されています。彼女の恨みの気持ちが納まるまで、青木に関係する人間を皆殺しにするまで、あなたの娘さんも呪いの道具として使われ続けます。娘さんのあなたを恨む気持ちと彼女の憎悪がシンクロしているのです。二人は一心同体となっています。彼女の気持ちを治めなければ娘さんは救われません」

緑海は目に涙を滲ませている。ざまあ見ろ、後悔しろ！わたしを、馬鹿にしたことを。

「彼女の憎しみの源泉、それは今日日本中の若い女性を怯えさせている呪いのビデオです。あれは高校生の若者たちが面白半分につった特撮ビデオですが、撮影した場所が悪かったのです。その場所は、真正正銘、本物の心霊スポットだったのです。これについては後で現地に行つて調べますが、あなたの娘さんはこともあるうちにその呪われた場所で、死者を冒瀆する醜いバケモノのマスクをかぶってふざけた幽霊ごっこをしたのです。それがあなたを狂わせている淫乱の気の正体です」

緑海が蒼白の顔で辛そうに言う。

「あのー、葉子はわたしの淫乱を引き継いで苦しんでいるんじゃないじゃないですか？」

「黙って聞きなさい！ 5年前彼女はまだほんの少女でした。怨霊たちにとってその体は幼すぎて物足りなかったのです。そこで怨霊たちは母親のあなたに乗り換えたのです、娘さんが大人に成長するまで。怨霊たちは今あなたと娘さん二人の体に取り憑き、母娘の肉体と精神をむしばんでいるのです」

「まあ・・・、たいへん・・・」

う、とうつむいた。ざまあ見る。そろそろ救いの手を差し伸べてやろうか。せいぜいありがたがるがいい。

「しかし救いはあります。あなた方を憎んでいる女性は、生きています！ 恨みの気持ちが強すぎて生き霊を飛ばし、怨霊となっています。精神のみならず、肉体も。ベッドの上で苦しんでいる彼女の姿が見えます。彼女を救うことが出来れば、あなた方に掛けられた呪いも消えるでしょう！」

どうだ？

「残念ながら彼女の居場所までは分かりませんが、安心なさい、わたしが彼女に呼びかけ、必ずや恨みの気持ちを解きほぐしてやりましょう！」

「うつ、」

緑海は突然立ち上がるとキッチンに駆け込んだ。

「うつ・・・、ゲエーッ」

「・・・・・・」

水をジャージャー流して吐いている。やがてさっぱりした顔で帰ってきた。

「ハアー・・・。おほほ、ごめんなさいねー、昨日ちよっと飲み過ぎちゃった。あはは」

「こ、このアマ・・・」

由宇は怒りに奥歯をギリギリ言わせた。これほどコケにされたのは初めてだ！ 緑海は何も考えていない頭の悪い顔で言う。

「えーと、なんか話がごちゃごちゃしてよく分かんないんだけどー、わたしに淫乱のお化けが取り憑いてるの？」

「・・・そうよ・・・」

「別にいいわよー、お化けでもなんでも、若くて美人でいられるんならねー」

「・・・・・・」

「でも、」

緑海は由宇を見つめてニコニコと意地悪く微笑んだ。

「なんかさー、あなたからも感じられるのよね、あたしと同じ淫乱の気ってのがさ」

「・・・・・・・・」

「でもわたしほどじゃないみたいね。あなた、けっこう厚化粧でこまかしてるわよねー？」

「こ、この・・・、馬鹿にするのも大概にしまっ！」

由宇は激昂して立ち上がった。

「この低脳アホ女！ あんた自分の立場が分かってんのっ！？」

由宇は面白そうに微笑んでいる緑海を射抜くほど睨み付け、ソファに座り直した。落ち着け、このまま舐められっぱなしで終わってたまるか！

由宇は改めてじつと緑海を霊視した。高校生の男の子、娘桜野葉子、青木雄二、嶋村早苗……。えーい、こんなのじゃない、もつとこの女の胸をえぐるような心の傷はないか？……。見えてきた。男、男、男……。ほら見ろ、この淫乱女！ 娘、娘、娘……。・・・・。

由宇は気持ち悪くなってきた。緑海はニコニコ微笑んでいる。なんなんだこの女、本当にバケモノか？。もう視るのが嫌になってきた。この女には負ける・・・、

いや、なんだこれは？ これは・・・、子ども？ この女自身か？ だが、これは・・・、この場所は？。・・・

緑海がニイツと笑って、由宇はビクリとした。部屋が異様に暗い。全身にゾゾと鳥肌が立つ。自分のすぐ後ろに異様な黒い影を感じる。しまった、と焦った。入り込みすぎたのだ、この異常な女の精神世界に。背後の黒い影がゆらり、ゆらめいた。異様な臭気。腐敗した内蔵。イモリの腹のような柔らかな黒と赤のまだら。肩に手が置かれ、ヌーッと顔が寄せられた。耳の穴に、ねちゃっと湿った柔らかないものが差し込まれた。

「きちゃあつ！」

由宇は思わずガラにもなく若い娘のような悲鳴を上げて飛び上がった。おかげで元の世界に戻ってこられた。

「せ、先生、どうされました？」

「な、なんでもないわよ・・」

恥ずかしさを押し隠して再び座り直した。

「し、しかし先生」

「なによっ！なんでもないって言ったでしょ！？」

「し、しかし、その耳……」

「耳？」

自然と左耳に手をやった。幻の中でバケモノに舌を入れられた方だ。触った途端、

「イタツ！」

まさに刺すような激痛が走った。由宇は一瞬で恐怖した。

「か鏡！」

加納が慌ててバッグから手鏡を出して由宇に差し出した。彼女も怯えている。鏡を覗いて由宇は絶叫した。

「な、なによこれっっっ！！！！！！！！？」

由宇の左耳は青黒く鬱血し、頬までバリバリひびが入ったように青い血管が束になって浮き上がっていた。

「なによこれっ!？」

もう一度絶叫した。わたしの顔が、わたしの美しい顔が！！！！！！

感触が甦った。プチプチ弾けるような柔らかい濡れた粘着質の肉が、耳の穴に侵入してくる……。鼻腔に臓腑の悪臭が溢れた。

「うっっ」

由宇は転げるようにキッチンに駆け込み、さっき緑海が吐いたのと同じ場所に吐いた。腹に残っている物を全て吐き出し、横隔膜が痛くなっても胃液を吐いて吐いて吐きまくった。

「先生・」

「来ないでッ！」

蛇口をひねって吐いた物を流した。涙が溢れてヒックヒックとしゃくり上げた。ちくしょう、ちくしょう、こんな屈辱、あの紅倉にだつて与えられたことはない！ 口を濯ぎ、無理やり自分を落ち着かせた。居間に戻る。

「すみません。汚してしまつて」

「別に、かまいませんよ」

同情的に由宇を見ていた緑海が、フツと、薄い笑いを浮かべた。

「あなた、駄目ね」

由宇は黙つてうつむいた。マスカラが涙で流れてひどい顔になっている。緑海が言う。

「あなた、わたしのことをさんざん淫乱女つて言ってくれたけど、それって、あなたが見たいようにわたしを見ているだけなんじゃないの？ 安っぽいわね、あなた」

殺してやる、と思った。この女、絶対に許さない！・・・今に、今に見ている！・・・

三津木はさんざん迷つた挙げ句芙蓉美貴の携帯に電話した。ちょうど江戸由宇が桜野家を訪れた頃である。

「芙蓉さん？ 三津木です。先生のお加減はいかがです？」

「ええ。一応落ち着いて、今眠っています」

「そうですか。・・・あの・・・実は先生に話さなければならぬことがあるんですが・・・」

「今お目覚めになりました。代わります」

「紅倉です。ご心配おかけしました」

「いえ、とんでもない。あの・・・」

「これから江戸さんがひどい目に遭いますよ」

「は？」

「あの方にあの人の相手はちよつと無理なようですねえ」

「あの人って、桜野葉子の母親・・・ですか？」

『ええ。相手が悪すぎます』

「危険なんですか？」

『多少は。岳戸さんの悲鳴が聞こえます。ま、命を奪われるようなこともないでしょうが、出来たらあの人との対面は止した方が賢明ですね。まだ間に合いますよ。止めてさしあげたら？』

「・・・いえ、少しは危ない目に遭った方が薬になっていいでしょう」  
『そうですか。あなたがそうおっしゃるなら』

「・・・先生。彼女のためにも、恥を忍んでお話ししなければならぬことがあります。嶋村早苗のことです」

『美貴ちゃんにも聞かせて構いません？』

「もちろんです」

『では代わります』

『もしもし、芙蓉です。先生も聞いておられますのでどうぞ』

「はい・・・。嶋村早苗のことです。わたしたちは彼女のことを知っています。生きています。今は結婚して峰谷早苗という名前になって、新潟県の直越市にいます・・・病院に入院して・・・」

『続けてください』

「はい・・・。2年前のちょうど今の時期、7月の末のことです。峰谷早苗から番組宛に相談の手紙をもらいました。こちらの判断で岳戸先生にお願いすることにしました」

『何故先生ではなく岳戸さんをお願いしたんです？』

「・・・岳戸先生好みのネタだと思ったからです。わたしはその時点でその女性を単なる精神病患者と見なしていました。手紙の文章が非常にねちねちとした病的なものだったからです。そこで彼女が言うには、自分は今妊娠8ヶ月であるが、このお腹の中の子には悪霊が取り憑いている、その悪霊とは呪いのビデオから自分に乗り移ってきたものである、ということでした・・・」

『・・・』

「・・・異常、と思いますでしょう？ まるで悪魔憑きの映画だ。マ

タニティーブルーというやつだろうと判断しました。きっと妊娠中の不安な時期にそんな映画が何かに影響されてそんな妄想を抱いたのだらうと」

『そう判断するのは時期尚早だと思いますが？　ましてそう判断したのなら岳戸さんなんかには任せずに精神科の医者にご相談することをお勧めするべきだと思いますが？』

「そうおっしゃられると反論できません。焦っていたのだと思います」

『あなたがですか？　それとも岳戸さんが？』

「彼女のためにわたしが、です・・。芙蓉さん、あなたが先生の弟子になられてテレビに登場したのがその前の5月のことでしたね？」

『そうでしたでしょうか？』

「そうです。美人のあなたと先生のコンビはすぐに評判になった。

一方その頃岳戸先生はすっかり人氣が凋落して・・、わたしは彼女に起死回生のチャンスを与えてあげたかったです」

『そのために・・峰谷、早苗さんを利用しようとしたわけですね？』

「そう言われればその通りです・・話を進めます。

まずわたしとスタッフが彼女の元を訪れて取材しました。彼女の夫は長距離トラックの運転手をしていて、住まいは運送会社の小さな社宅でした。峰谷早苗はとても理知的な女性に感じました。言葉付きは丁寧で物静かでした。しかしわたしはやはり彼女の精神状態を疑いました。嵐の前の静けさともいったようなものを感じたのです。彼女の思い込みは相当なものでした。自分を冷静に観察しているようで、しかし一方そもそもその呪いのビデオの所在に関してはあやふやなところがあって、やはり妄想なのではと疑われるのです。

わたしは岳戸先生を彼女に会わせるべきか迷いました。岳戸先生に霊視させてどうなるか？　彼女の精神状態を悪化させてしまうのではないか？　しかし一方岳戸先生の・・大胆な霊視が劇的に彼女の思い込みを解消してしまう可能性もあるだらう。岳戸先生はあれ



でもお寺で修行されて、その、悩める者を救って感謝されるのをたいへん喜ぶといった善い性格も持ち合わせていますので、きちんと彼女を救うべく努力してくれるのではないかと期待し、・・頼むことに決めました・・・。

江戸先生は彼女に会うなり、

あなたの赤ちゃんはあなたを殺そうとしています。悪魔誕生の生け贄としてあなたの命を奪おうとしています。

と言い放ちました。さすがにわたしも拙いと思いましたが、もうどうにもなりません。峰谷早苗は、

赤ちゃんさえ無事に産まれるならわたしの命はどうなっても構いません。ただ、赤ちゃんを悪霊の餌食にはさせません。どうかわたしの命と共に悪霊も滅ぼしてください。

と、まあ、先生の霊視にすっかり乗ってしまったのです。上手く導けば彼女の思い込みを晴らすことが出来るとわたしは期待しました。こうなるともう江戸先生の独壇場です。水子の霊やら先祖の悪行の祟りやら、わたしには本当かどうか判断できない因縁を次々暴き立てて、

・・先生のすごいところはそれがビジュアルに現れるということです。ラップ音やポルターガイスト現象なんて当たり前で、霊視対象の方が呻いたり異様な体の動かし方をしたり、肌に文字が浮き出てきたり。峰谷早苗は面白いほど先生の言いなりに動きました。わたしは妊娠中の体を心配して先生に休憩を申し出ました。しかし先生も峰谷早苗も言うことを聞いてくれず、わたしは取材を中止すると勧告してようやく休憩を受け入れさせました。そこで・・悲劇が起こったのです・・・。

夫の勤め先から電話が入りました。ご主人が運送の途中で事故を起こして救急車で運ばれたということです。彼女は当然ひどいショックを受けました。現場は群馬県です、身重の体でもありますし、情報が入ってくるのを不安に思いながら待つしかありません。江戸先生は激怒して言いました、そら見る！大事な除霊を邪魔するから焦

った怨霊が旦那を襲ったのだ！周りの者皆崇りに遭い不幸になるぞ！と。峰谷早苗の強い希望で先生は除霊を再開しました。

虫の居所の悪い先生は徹底的に彼女をいじめました。彼女の過去のいちいちがどれだけ周りの人間を不幸にしているか説き、彼女の前世がいかに罪深いものであったか暴き立てました。峰谷早苗もそのいちいちに頷き、自分の罪を受け入れているようでした。わたしは、・二人を対面させたのを後悔しました。どうやってこの会見を穏便に終了させられるか、そればかり考えていました。しかしそのタイミングを掴めないまま・、突然峰谷早苗が苦しみ出しました。

彼女は、産まれる、と言いました。まだ8ヶ月です、いくらなんでも早すぎます。とにかく病院へ運ぼうとしましたが、岳戸先生はこの期に及んでまだ除霊が済んでないと怒りました。わたしは彼女を叱りつけて、とにかく病院へ運びました。診断の結果は・、まあどうということのないものでした。ただし医者には妊婦に無用の刺激を与えず、安静に保つようと厳重に注意されました。取材は中止です。そうでなくともわたしはもうすっかりこの件を放送するのをあきらめていました。

岳戸先生はまだ怒って喚いていました。峰谷早苗の方もそうです。悪魔の子が生まれる、先生に除霊していただかなくてはと賢明に訴えていました。わたしは責任を感じました。岳戸先生を叱りつけてとにかくなんとかしろと命令しました。でなければ、あなたとは今後一切仕事しない、と。考えてみればあの時の先生も相当異常でした。

岳戸先生は仕方なく峰谷早苗に言いました、わたしはこれから本山にこもって7日7晩あなたの赤ちゃんのために祈祷しましょう。ただし、あなたは仏に命を捧げる覚悟をしておきなさい、と。わたしは何故そんな余計なことを言うのかと腹が立ちましたが、峰谷早苗はそれでけろりと落ち着きました。彼女の問題というのも・わたしには理解できません。

夫の方も重体でした。命は取り留めましたが、後に障害を抱える身となってしまいました。それもこれも自分のせいに思えて、本当に申し訳なく思いました。彼のご両親とも相談して、早苗さんにはそれから出産後落ち着くまで精神科の医者をテレビ局持ちで・・・本当はわたしの金で付けることで納得してもらいました。本当は訴訟騒ぎにもなりかねなかったのですが、もともと早苗さんからの依頼だということに納得してもらいました。

峰谷早苗が赤ん坊を出産したのはそれからおよそ4ヶ月後のことでした。超遅産です。早苗さんがまだ悪霊が取り憑いているといつまでも頑張つて産もうとしなかったのです。異常な精神力です。早苗さんから何度も問い合わせの電話をもらっていたのですが、わたしは岳戸先生には取り次ぎませんでした。先生を電話に出せば、またどんなひどい事態になるか分かったものではありません。わたしは、大丈夫です、先生はしっかり山にこもられて祈禱をしてくださいましたからもう安心ですよ、と言いましたが、早苗さんは信じていなかったようです。その通り、先生は山になんて一度も行きませんでした。いつまでも頑張つて産もうとしない早苗さんに、最後はどうとう医者が強制的に帝王切開で赤ん坊を取り上げました。赤ん坊はまるまる太った健康体でしたが・・・早苗さんの方はすっかり駄目になっていました。ダメージがひどくてもう子どもはできなくなっていましたし、精神をやられていました。

お腹を切つて無理やり子どもを取り出したことで悪霊が子どもに憑くことだけは阻止できたと思つています。ただし自分の腹の中には悪霊が巣くつている、自分はこの悪霊を外に出さないために今後一切口を開かないのだと心に決めてしまいました。一切食事を拒否し、点滴だけで命を長らえているようです・・・いまだに・・・」

しばらくして芙蓉の冷たい声が言った。

『元は呪いのビデオから発しているのですね？ 今回の事件と符合しているのに、何故今頃になってやっと告白したのです？』

三津木は苦しく言い訳した。

「すみません・・・、思い出さなくなかった・・・のだろうと思います・。  
。わたしの生涯けつして取り消すことの出来ない罪です・。こ  
の上、それが別の事件に展開しているなど、決して思いなくなつ  
たのだろう、と思います・・・」

紅倉美姫の声が聞こえた。

『わたしに相談してほしかったですね。あなたの心はわたしにさえ  
その事件をひた隠しにしていましたね？ あなたがそれを忘れてい  
た、・・・とは思いたくありませんね』

「・・・すみません・・・」

『失敗しましたね』

「はい・・・」

『いえ、わたしがです。まんまと相手の計略に乗ってしまったよう  
です。岳戸さん、今悲鳴を上げていらっしやいますよ』

「は？」

『先ほどの時点ではやはり無理にでも岳戸さんを止めておくべきでし  
た。いいですか、岳戸さんを絶対にあの家に近づけてはなりません。  
これはわたしからの命令です』

「あの家とは、海辺の、事件現場ですか？」

『そうです。今度こそ取り返しのつかないことになりますよ。いい  
ですね？ わたしは明日まであちらに行けないかもしれませんから』

「では、先生・・・」

『美貴ちゃんに代わりますから場所を教えてください』

三津木は芙蓉に病院の住所を告げた。

再び紅倉美姫が言った。

『早苗さんのことは引き受けました。ですから岳戸さんの方はくれ  
ぐれもお願ひしましたよ』

「はい。必ず・・・先生、ありがとうございます。どうか、よろし  
く、お願いします」

三津木は立ち上がり、深々頭を下げた。

## 第13話 首（前書き）

\* 第12話後半と第13話前半を合わせてまとめました。内容は同じです。

### 第13話 首

由利先生は青木先輩の実家に寄って来るという。暇を持て余している角谷が馬木にたまには副部長に連絡しろと言った。沖浦の家はすぐ近所だが、どういう名目で訪ねていったらいいのか困るので電話をすることにした。

「もしもし、俺」

『あれ？馬木君？』

馬木は角谷の携帯を借りて掛けている。

「うん。えーと、元気？ バイトは？」

『バイトは午後。ちなみに、元気よ』

「あ、そ。それはそれは」

『・・・で？ 何？ なんか用？』

「いやあ、べつに、ただ、元気かなあ・・・と」

『そう。元気よ』

「ああ、そう・・・」

電話は苦手だ。

『そっちは？ どうなの？ 大丈夫なの？』

「うん、まあ、なんとか。いろいろあるって言えばあるんだけど・・・、おまえは知らない方がいいよ」

『あつ、そ。じゃあ掛けてこないでよ』

「うん・・・。ごめん・・・。あのさ、事件が終わったらやつぱり映画撮ろうぜ。また参加してくれるかなあ？」

『そうねー、ま、考えておいてやるわ』

「うん、頼むよ。えーと・・・、じゃあな。悪かったな、大した用もなく」

『うん・・・。ううん、ありがとう。じゃ、気を付けてね』

「うん、ありがとう。じゃあ、またな」

『うん。またね』

電話を切ると、角谷が呆れた顔を振った。

「ダメダメじゃん」

携帯を閉じるとかすみは顔を背けたままチラリと机の上を見た。

そこに、桜野葉子の生首が乗っている。

血の滴る本物ではない。作り物でもない。幽霊なのか、なんなのか、よく分からない。初めて見たときはびっくりした。母親を呼んだが、どうやらかすみ以外の人間には見えないようだ。幻覚なのかもしれない。でもはっきり実体を持って見える。実際にそこにあるのかないのか、触って確かめる勇氣はない。

そもそもは今朝の目覚めだった。

何か異様な気配を感じて目が覚めた。部屋はもう明るい、時計を見ると5時5分だった。枕元の目覚まし時計は6時45分にセツトしてある。今日も暑くなりそうだが寝苦しい夜を経てようやく朝のすがすがしさを感じられる時間だ。いやお腹の上に掛けたタオルケット一枚では寒いくらいだ。そう、寒い、体の芯から震えが来る。冷たい、怖気が体を支配する。

かすみはゆっくり部屋に視線を巡らせていく。6畳のフローリング。壁にぬいぐるみのマスコットがぶら下がっている。本棚に、MDコンポの乗ったタンス。テレビは昨日別の部屋に移した。テレビばかり見て時間を無駄にしないようにという名目だったが、本当は怖かったのだ、なんとなく。押し入れ。白い朝日の透けているサクランボの柄のカーテン。何もないが、何か居るという嫌な感じがしてならない。

ベッドに寝たままじいつと視線だけ動かす。1分、2分。朝日がじりじり部屋を暖めていつている気がする。汗が浮かんできて、気が付くと息が弾んでいる。心臓がドクドク大きく脈打っている。緊張感に歯がカタカタ鳴った。見られている感じがどんどん強くなっている。

ついに現れた。押し入れの前に立って無表情に冷たい視線をじっ

とかすみに向けていた。桜野葉子だった。白のかわいいワンピースを着ている。かすみは恐怖した。一般にはまだ知られていない、青木雄二を残酷な暴力で殺害したのが彼女であることを知っている。歯がカタカタ鳴り続け、顔がガクガク震えた。喉が凍り付いて悲鳴が出てこない。目をじっと見開いて葉子を見つめ続けた。

殺さないで、お願い。あなた、わたしから馬木君を取ったじゃない。

葉子が両腕を突き出して迫ってきた。恐怖で涙が溢れてきた。葉子は無表情だ。冷たい目がじっとかすみを見ている。手が、首に取り付いた。氷のように冷たく、それだけで息が出来なくなった。

嫌ああ・・・

突然葉子がビクンと跳ね上がった。後ずさる。

「彼女は違う。仲間にはならない」

「ビデオを見たじゃない？」

「自分で見たんじゃない」

「構わないよ。いっしょにしちゃえ」

「駄目よ。彼女はつながっていない。仲間外れだわ」

「そうだそうだ、仲間外れだ」

「あの子嫌い。入れないでよ」

「じゃ、殺しちゃえ」

「放っておきなさいよ、どうせ死ぬんだから」

「そうよ。彼女は、わたしたちの仲間ではない」

一人でしゃべっている。

多重人格者。ごく薄くだがいろいろな表情が入れ替わり立ち替わり現れている。怖い。見てはいけないもののように感じる。でも、何を言っているのだろうか？

意見が一致したようだ。かすみを殺す、または仲間に入れることはやめにしたらしい。

「行くわよ」

消えてくれるのかと思ったら、



又ツと、

「先輩」

顔をくつつくほど近づけ、ニタアツと笑った。

「わたしが来たこと誰にも言っちゃ駄目よ。言ったら、本当に殺すわよ」

べろんと舌で涙を舐め上げた。

「あはははははは」

笑い声を残して桜野葉子は消えていった。頬に甘酸っぱい匂いがする。・・・本当に、ここに居たのだ・・・。

放心して何気なく横向きざま机を見た。ギョツと目を見開いた。喉の奥で悲鳴を上げて手で口を覆って泣いた。机の上に桜野葉子の顔が乗っていた。首から上だけ。黒髪が机の上に広がっている。目は閉じている。肌は土気色をして紫色のまだらが浮いている。腐っている、と思った。生首が目を開き、ギョロツとかすみを睨んだ。「誰が腐ってるですって？」

かすみは、泣いている。生首はニタツと笑った。

「しゃべったら、殺すわよ。いいわね」

白目は灰色に濁り、歯は黒く汚れている。かすみは泣きながら必死で頷き、泣きながら、いつの間にかまた眠ってしまった。

目が覚めても生首はまだそこに居た。目を閉じて眠っているように。かすみはとにかく刺激しないように恐る恐る部屋を出ていき、汗と涙でべたべたの顔を洗った。顔を上げて鏡を見たとき思わず悲鳴を上げそうになった。かすみの顔しかなかった。でもひどい顔だった。まるで自分の顔じゃないように。崩れている。死んだら、こんな顔になるんだろうかと思って、また涙が出てきた。

ふと、首の後ろから白い紐が伸びているのに気付いた。手をやると素通りした。でも何か首の後ろで神経を触るようなヒヤリとした感じがした。紐は廊下につきずっと伸びていた。辿って部屋に入っていた。やはり紐は生首の下から生えていた。ギョロツと眼が開いて嘲笑うように言った。

「見張っているからね。ダーリンに言いつけたら、殺すわよ」

電話をしている間中葉子の生首はじいとかすみを見ていた。電話を終えチラリと見るともの凄い険悪な目つきになっていた。

「何も言っていないわよ」

つい弱気に言い訳する。生首は不機嫌に言う。

「ダーリンったら、わたしのこと全然心配してないみたいじゃない？」

「そんなことないわよ。あなたを捜しているいろいろ調査しているのよ」  
なんで自分がこんな生首に同情的な言葉を掛けてやらなければなら  
ないのだろう？ ふと思った。

「そうよ、馬木君たちはあなたを捜しているのよ？ あなた、今どこに  
いるのよ？」

生首は不機嫌に答えた。

「ここよ。先輩の目の前にいるじゃない？」

「体はどこよ？ あなた、本体じゃないでしょう？」

「うるさいなあー」

プイと横を向いた。かすみは変な気がした。

「どうして？ あなた、早く自分を捜し出してほしいんじゃないの？」

「……」

「見つけれちゃ拙いの？ まさか本当にあなたが青木先輩を殺したの？」

生首は威嚇するようにカーツと口を開いた。

「そうよ、わたしが殺したのよ！ 先輩も首もがれなくなったら大人しくしてなさい！」

「大人しくって、わたしバイトがあるんだけど・・・」

「いいわよ。勝手に行けば。ただし、先輩とわたしを結ぶ糸が切れたらあ・・・、魂抜けちゃうわよ」

やっぱりそうなんだ、とかすみはあきらめた。これは自分を監視

する監視カメラなのだ。そしてカメラのコードはかすみの魂につながれている……。どうやったら糸が切れるのか分からないが、外に出るのは危険なようだ。

誰かなんとかしてよお……。。

最初の登場が強烈すぎてすっかり神経が麻痺してしまったようだ。かすみはただただ迷惑そうにため息をついた。

そろそろ昼食にしようかと話しているところへ由利先生から電話があつて馬木と角谷はお馴染みのファミリーストランに呼び出された。

「自分の分は自分で払うこと、……と言いたいところだけど、呼び出しちゃったから奢つてあげるわ。ただし、一人400円以内！」

せこつ。二人とも一番安い日替わりランチを頼んだ。食べながら先生の岳戸由宇との対面の様子を聞いた。

「はあ、駄目ですか、あの人？」

「駄目ね、あの人」

そうなのか。まずまずの美人なのに残念だ。メインを食べ終えて、さて、と由利先生はデザートケーキを食べながら本題に入った。

「間宮さんのことはカクくんから聞いた？あつちはやっぱりガードがきつくて無理ね。嶋村さんの事件は長谷川さんから聞いたけど……ま、そっちは後でね。けっして楽しい話じゃないから。で、次の手がかりなんだけど……」

由利先生はバケモノのマスクが外部から持ち込まれたものであるらしいことを話した。

「で、その作者が作ったとおぼしいのがこれなんだけどね」

由利先生は携帯を開いて写真を見せた。ビキニ姿の女の子のフィギュアだった。何かアニメかゲームのキャラクターらしいが馬木は分からない。次の写真。今度は海外のSF映画の女性キャラだ。こ

うちの方がずっと出来がよく見える。ただ、

「携帯の画面じゃ小さくてよく分かりませんね」

「現物はこっちにあるわ、3体だけけど」

由利先生は大きなトートバッグを持ち上げて中身を見せた。透明ケースに入ったフィギュアが3体、確かにある。

「ここで開くわけにはいかないわね」

さっさとテーブルの下に押し込んだ。

「あのー、じゃあファミレスじゃなくて学校で話した方がよくありません？」

「うーん・・・まあ、そうなんだけどおー・・・」

珍しく歯切れの悪い返事。

「3人で狭い部屋でコソコソと・・・ねえ？　なんかちょっと拙いかなあ・・・と・・・」

角谷が顔を曇らせて言った。

「俺のせいですか？」

「いや、違う違う、けっして、ね？」

慌てて打ち消すところが怪しい。由利先生も気まずそうに横を向いて口を尖らせた。

「違うって言うのに、あの女、あつたまくるなあー・・・」

角谷を覗き見るようにして、

「分かった。アイスコーヒー追加。ね？それで機嫌なおして、ね？」

手まで合わせている。分かりました、いいですよ、と言いつつ角谷はやっぱりがっかりしている。由利先生は気を取り直して説明の続きをする。携帯の写真を見せながら、

「青木さんのお父さんをお願いして部屋を見せてもらったの。最後に家に帰ってきたのは去年の春ですって。就職の決まった報告にね。先週あの家に口ケに来たときにはなんの連絡もなかったそうよ。去年の春に帰ってきたときに部屋の大掃除をしていたそうよ。その時飾ってあったフィギュアやポスターなんかみんなきれいに片付けちゃったんですって。それでお願いして押し入れから引っぱり出し

てもらったの。全部で10体あったわ。以前はもつとあったようだけど、処分しちゃったらしいわ。どうしても捨てられないお気に入りだけ残したってことかしら？　それがこの写真のね」

みんな女性キャラのフィギュアだ。

「写真見ていて気付かない？」

だから小さすぎるのだが、まあそれは言わないことにして。

「明らかに作風の違ったものがありますよね？」

10体中4体は確実に、あと3体は微妙だ。はっきり分かる4体はいずれも実在の女優やポップスターをモデルにした写実的なもの。あと2体はアニメのセクシー系のキャラクターをかなりリアルに表現したもの、あと1体は最初のアニメのビキニ少女だが、これだけちよつと無理して作っている感じがして、よく分からない。この7体はいわゆる美少女フィギュアというものとはキャラクター的に異質な気がする。

「そうね。この作者があのでマスクを作ったと見ていいように思うんだけど？」

「ですね」

馬木も角谷も賛成した。どんなに写実的に作っても小さなフィギュア・・・20センチくらいのものだろうか？そのくらいではどうしても省略やデフォルメが出る。その癖がどこかあのマスクと共通するような気がする。

「ちなみに、やはり青木先輩自身ではないんですか？」

「お父さんの話ではせいぜい色を塗るくらいだったらしいわ」

「・・・お父さん、いかがでした？」

「そりゃあね、やっぱりすっかり気落ちしていたわ」

「でしょうね・・・」

息子を異常な暴力で亡くし、その以前に弟さんを強盗事件で亡くしているのだ。

「青木先輩は他に兄弟は？」

「ないわ。お父さんの方も兄弟は弟さんだけ。だから自分の家の血

を受け継ぐものというところ・桜野葉子さんしかいないわけね。ま、身内とも思えないかもしれないけれど・・・」

その唯一の子孫が殺人犯では、青木家も浮かばれまい。この家も桜野家同様呪われているのかもしれない。

それとも桜野家と関わってしまったから呪われたのか？

「で、どうします？」

「わたしはこの写真をネットに流して情報を集めてみるわ。君たちはね、これを」

お行儀悪く足でバッグをこちらに押し付けた。

「持って足で情報を集めること」

「足でねえ・・・」

その手の店を回ってみるか。

「こういう物は松岡が詳しいんだろっけだなあ・・・」

すっかり拒絶されてしまったから連絡しづらい。あきらめよう。

「ところでバケモノ騒ぎの方はどうなったんでしょう？」

「奇々怪々。魑魅魍魎（ちみもうりょう）がネットを跋扈（ばっこ）しているわ」

由利先生は心底ウンザリしたように言った。

「どこで誰が変身したって実名実住所で公表したり、写真や動画を掲載したりね、さすがにそういうのはすぐ削除されちゃうけど、無責任な憶測や噂が飛び交って、ほんと、ネットの匿名性って道德観が欠けているわよね」

「そんなにひどいですか？」

「ええ。こういう人たちが書き込んでいるんだか知らないけれど、悪質な嫌がらせや、面白半分にあおっていたり、独りよがりの価値観で社会を断じていたり、もう、見ていて胸がムカムカしてくるわ」

「世も末ですかねえ？」

「かもねえー」

先生は、はあ・・・とため息をついた。

「でも自分が変身するんじゃないかって怯えている女性も多にいる

でしょうねえ？」

「もちろんそういう書き込みが多いわよ。なんでかね時間が10分ずつずれているんですって」

腕時計を見る。ちょうど1時10分。

「今・・・、また一人女の子がバケモノに変身しちゃったわけね・・・」

しばし沈黙。

「こういう風に怯えている人を標的に悪意ある嫌がらせをするんだから病んでいるわよね。わたしだってその一人なのよ？　ね、わたしがバケモノに変身しちゃったらどうする？」

先生はお茶目に二人を交互に見比べて言うが、そうだ、先生だってあのテレビを見ているしこれだけ事件に深く関わってしまったているんだからその危険は十分あるんだ。変身するのは今のところ若い女性だけのようだ。馬木たち男どももある意味ネットの無責任な住民たちと同類なのかもしれない。が、

「絶対に助けます！」

角谷は力強い決意を込めて由利先生を見つめた。由利先生はポカンとして、照れくさそうに笑った。

「そ。ありがと・・・」

角谷の決意は揺るがない。こいつは、本気なんだ、由利先生に・・・。

絶対に助ける・・・。馬木は葉子のことを思つて、ちよつと自信を無くした。助けると言つて、どうしたらいいのか？　さっぱり分からない・・・。

「テレビの方は、なんか落ち着いてませんか？」

紅倉美姫の出馬が明らかになってからすっかり攻撃の姿勢がトーンダウンしたように感じる。あまり触れたくないような雰囲気がある。

「もう事件じゃなくなつてオカルト扱いになっちゃったからでしょうね。あんまりおかしいこと言つて後で評判を落としたくないのよ」

「でも変身しちゃう女性は・・・実際に増え続けているわけですよね？」

「そうね」

「いいのかなー、そんなんで」

世間は表立っては静観、というか、見て見ぬ振りをして、裏、ネット社会では匿名で怯えて感情的になったり悪質な嫌がらせが横行していたりするわけだ。

「ね、あのパソコンをネットにつなげちゃったら、どうなるんでしょう？」

「お化けパソコン？ さあ・・・考えると怖いわね」

そうになったら、もう誰も無責任な観客ではいられなくなるのではないだろうか？ それはそれでちよつとやってみたい気がする・・・

「駄目よ、つまらないこと考えちゃ」

「はーい」

「はあー。ほんと、早く来ないかなあ、紅倉美姫」

彼女が来れば、事態は一気に解決に向かう、のだろうか？到着が待たれる。



## 第14話 エクソシスト part 1

新潟県直越市へは長野自動車道から上越自動車道に入る。どのみち青山市に向かう道程だ。2時間ほどで着いた。港町だ。海沿いの道路を走るとキラキラ波が銀色に眩しく輝いている。

「窓開けていいかしら？」

「どうぞ」

芙蓉はエアコンを切った。先生は窓を半分ほど開けて風に髪をなびかせた。車内に潮の臭いが満ちた。

「気のせいかなあ、なんだか懐かしい気がするわ」

「先生は海の近くのご出身なんですか？」

芙蓉が先生の弟子になって2年余りだが、先生の過去についてはまったく知らない。

「うーん・・・いえ、よく分からない」

先生は背中をシートに落ち着かせた。

「親の因縁というのは子に受け継がれるものなのかしらねえ？」

「・・・・・・・・」

芙蓉は先生の両親についてももちろん知らない。先生は眩しそうに目を細めて海を眺めている。なんとなく寂しそうだ。

峰谷早苗の入院している病院に着いた。午後1時40分である。

ロビーの待合席で夫とその両親、そして1歳半になる娘が待っていた。三津木ディレクターに連絡させて来てもらったのだ。早苗の両親は現在福島にいるようで、いきさつは不明だがこちらの家族とは付き合いがないようだ。

「お呼びだてして申し訳ありません。紅倉美姫と申します」

芙蓉は先生と共にお辞儀した。

「まあここじゃあなんですから、部屋を借りてます。どうぞ」

夫の父親に案内されて病室の並ぶ2階の「応接室」に入った。父親はちよつと待っててくださいと出ていき、40代の女のお医者さ

んを連れてきた。表情は柔和だが、目の奥に鋭い光がある。

「こちら早苗さんの主治医の戸川先生。こちら・霊能者の紅倉美姫先生です」

「お名前は存じています。初めまして、戸川です」

二人は軽く握手を交わした。

「あなたは、私のような人間にはなかなか興味深い方ですね。わたし、精神科の医者です」

「先生は、私が早苗さんに会うのは反対ですか？」

「いえ。不謹慎ながら、楽しみです。早苗さんの治療の糸口でも与えてもらえたらと思っています」

表情は柔和だが、この精神科の先生は自分たちのような人間を快く思わない、いや、馬鹿にしているのだろう。しかし紅倉先生の方が人間的にずっと優れている。

「そうですね。私も早苗さんの苦しみを解いてさしあげられるよう努力します。そこで、まずはわたしと彼女だけで早苗さんにお会いしたいのですが、かまいませんか？」

「ええ。しかし、主治医として監視はさせていただきますよ」

「けっこうです。ご家族の方々にも様子を見ていただきたいのですが、可能ですか？」

「ええ。病室にはカメラが備わっていますから。カーテンは引かないでくださいね」

「承知しました。では、お願いできますか？」

「どうぞ」

戸川医師に案内されて出ようとすると、早苗の夫が言った。

「あんた、信用できるのか？」

「信用していただいて大丈夫です」

自信満々に答える先生を夫は疑り深い目でじつと見つめた。

「そもそも俺は早苗が霊能者なんかに関係するのは反対だったんだ。それを俺の留守中に勝手に押し掛けやがって、俺が事故って病院のベッドの上で目を覚ましたら、早苗のやつは俺よりもっとひどい目

に遭っているじゃねえか？」

先生を見る目に明らかな敵意が燃えている。

「俺は訴えてやるつもりだったんだ。それをおやじたちが恥の上塗りをするだけだからやめておけって」

今度は自分の父母に敵意を向ける。

夫、峰谷和夫、23歳。背が低く、痩せて、ギョロリとした目が非常に攻撃的な印象だ。事故の後遺症で左足を引きずっている。

「なああんた、もしこれ以上早苗をおかしくするようなことをしたら、ぶっ殺すぞ」

本気だと言うようにギリギリ恐い目で先生を睨み付けた。

祖母に抱かれる赤ん坊がフギヤーと泣きだした。あやしても泣きやまない。

「うるせえな、さっさと連れて行けよ！」

乱暴な夫の言葉を遮り、先生は赤ん坊に歩み寄り、微笑みかけた。  
「留美ちゃん、だったわね？ もうちょっと待ってね、もうすぐママにだっこしてもらえるわよ」

人差し指でポンと額を叩くとビックリしたように泣きやみ、不思議そうに先生を見つめた。先生の笑顔を見て、キャッキヤと笑い出した。

「どうぞ」

戸川医師が催促した。嫉妬、を芙蓉は感じた。

峰谷早苗の病室はナースルームのすぐとなりの個室だった。

「では、どうぞご覧になってください」

先生は言っ、病室に入った。芙蓉も続く。後ろで戸川医師の声が聞こえる。

「大丈夫ですよ、何かおかしいことをしたらすぐに止めさせますから」

峰谷早苗は、さぞや痩せ細っているかと思いきや、太っていた。もちろん健康的な太り方ではない。寝たきりでほとんど運動をせず、

点滴で血液に直接栄養を採り、ぶよぶよ肌がたるみ、無駄に太っていた。二人が入っていくとジロリと目が動いた。強い猜疑心が感じられた。意識はしっかりしてる。肉体的にどこも悪いところはない。「こんにちは。戸川先生から聞いてますね？ 紅倉です。こちらは助手の芙蓉さん。座ってもよろしいかしら？」

先生は峰谷早苗の右手に、芙蓉は打ち合わせ通り左手に丸椅子を出して座った。芙蓉の役割はまずは観察することだ。

先生は早苗の視線を捕まえて言った。

「あなたは青木雄二さんを殺しましたね？ 怒りと憎しみを堪えられず、つい思わず、殺してしまいましたね？」

早苗の目が静かになった。微かに笑ったように芙蓉は感じた。

「あなたは金森勇一さんも殺そうとしました。殺しきれないと病院まで追いかけていつてもつと悲惨な目に遭わせました。間宮浩さんも苦しめて苦しめて、自殺するまでに追いつめて、最後はビルから突き落としました。長谷川馨さんも殺そうとしましたが、わたしが邪魔をしました」

早苗は視線を天井に逸らしている。

「長谷川さんは、あくまで殺す気ですか？」

早苗は先生を見ない。先生は早苗を眺めて、フウン・・・と鼻の奥を鳴らした。先生の癖だ。

「あなたは特殊な例ですね。通常生き霊を飛ばす人は、魂がさまよっている間のことははっきりとは覚えていないものです。せいぜい夢の中のようなあやふやな記憶だけです。でもあなたの頭の中には彼らを殺した情景がはっきり記憶されています」

早苗はじつと動かないが、幾分緊張を強くしてきているのが見られる。

「あなたのお腹の中に巣くっている悪霊があなたにその力を与えているようですね。あなたを救うためにも、今起きている事件を解決するためにも、それを退治しなくてはなりません。今日ここでそれを消滅させます」

早苗はジロリと先生を見た。再び強い敵意を感じる。何故だろう？先生が自分を救いに来たのは分かっているはずだ。

「長谷川さんを殺すまでそれを手放すつもりはありませんか？彼を殺させるわけにはいきませんね。あくまで抵抗するなら、あなたを殺さなければなりません」

不思議と早苗は落ち着きを取り戻した。

「死は怖くないですか？むしろ望んでらっしゃる？」

また早苗は軽く笑った。達観した自分を誇っているのか？

「いけませんよ。生きることを嫌うのは、悪霊の思いつきです。あなた、自分の赤ちゃんもまだ抱いてあげていないのでしょうか？ほら、テレビカメラ」

先生は足元の天井からこちらを狙う監視カメラを指し示した。

「あの向こうでご主人と赤ちゃんが見守ってらっしゃいますよ。二人のためにも決心しなくては」

早苗は無表情になってカメラを眺めた。

「フウン……。困りましたねえ。あなたはご主人を愛してらっしゃらない。いえ、ご主人はあなたを愛していないと、そう思い込んでらっしゃる。最初から愛してなどいなかった、と。では、何故結婚されたんです？本当に自分を悲劇のヒロインにするためですか？」

芙蓉には先生が何を言っているのか分からないが、早苗は相当ムツとしたようだ。

三津木ディレクターがメールで送った資料によると、嶋村早苗は高校を卒業して大学浪人中の7月、青山市に出張中の峰谷和夫と知り合い、12月に結婚、和夫の勤めるここ直越市に引っ越してきた。この時点で両親とすっかり不仲になり、子どもが生まれてから現在に至るまでも会っていない。

「悲劇のヒロインですかあ……。あなた、本気でそんな幼稚なものに憧れているんですか？悲劇のヒロインって、幸せを望みながらそれが果たせないからはかなく哀れで、美しいんですよ？あなたは……。残念ですけどあまり美しいとは言えませんかえー……」

早苗は目を激怒させた。先生は優雅に美しく微笑む。

「あらごめんなさい。でもあなただつて本当は変身したくてご主人と結婚したんでしょう？ それまでの暗くて引つ込み思案の自分を変えたくて。少々強引なところのあるご主人なら、自分を変えてくれると、そう期待したんでしょう？」

早苗は怒りの目で先生を睨み続ける。

「でも驚いたのはご主人の方だと思いますよ。あなたのようなまじめで理知的なお嬢さんが、自分のような・まあその荒くれ者と、本気でお付き合いしてくれるなんてね」

先生は優しく微笑む。

「嬉しかったと思いますよ、とても。あの人は、あなたが思っているよりずっとまじめで誠実な人です。不誠実なのは、むしろあなたです」

今度は小さく睨んだ。早苗の目の怒りがたじろぐ。

「そんな誠実なご主人を利用してやろうだなんて、あなたは悪い人です。・なるほど、岳戸さんはあなたのことをよく理解してらっしゃる。あなたは、自分で好んで不幸になっている」

早苗はイライラした目になって、顔を背けた。先生の勝ちだ。芙蓉を見て早苗の顔に羞恥が浮かんだ。

「あなただつて嬉しかったはずですよ、ご主人の愛が。子どもができて幸せを感じたはずです。その幸せが、怖かったのでしょうか？」

早苗は誰も見ない。自分の殻に閉じこもろうとしている。先生は許さない。

「あなたは幸せだつたはずですよ。ご主人に愛されて、新しい命に恵まれて。あなたは変わったのです、昔の自分から。それが、嫌だったのでしょうか？」

嫌？

「あなたは昔の自分が醜かったからいじめられて、あんなひどい目に遭わされたと思っている。昔の自分が悪かったと思っている。新しく生まれ変わればもういじめられたりひどい目に遭わされたりし

ないと思っている。でも、本心はどうです？　あなたは、本当に変わりたいのですか？」

早苗はじいっと自分の中に引きこもっている。だが先生の声は届いているはずだ。先生が相手の心を視られるように、先生の声も相手の心に直接聞こえるのだ。先生は力を抜き、優しく話した。

「わたしは自分の意志で生きているではありません。神に生かされているのです。わたしは神の操り人形です」

これは先生がたびたび口にする言葉だ。芙蓉も日常的によく聞き、番組でも口にする。それを神と一体化し、自分を神と同等の存在であると誇示する態度だと批判する人もいるが、違う、と芙蓉は思う。だが芙蓉にもその言葉の本当の意味は解らない。

「これは哲学的な意味でも宗教的な意味でもありません。文字通りなんです。わたしは、一度死んで、女神さまに再生された人間なんです」

芙蓉も初めて聞く。思わず自分の役割も忘れて先生をまじまじと見た。先生は芙蓉にも優しく微笑みかけて話す。

## 第15話 エクソシスト part 2

「わたしはもともとから誰でもない人間でした。わたしはご覧の通り混血児です。父がロシア人だった・・のだと思います。母は・・という仕事知りませんが、おそらく夜の商売をしていたのでしょう。ロシア人である父は、不法滞在者でした。もしかしたら何か犯罪を犯していたのかもしれませんが。幼い頃わたしたちはずっと世間から隠れるように、暗いところをコソコソ逃げ回る生活をしていたように思います。友だちも・・覚えていません。いなかったのだと思います。それでもわたしは不幸ではなかったと思います。父も母も愛していたように思います。全てあやふやな過去形です。わたしは多分7歳の頃、死んだのです、火事に焼かれて。」

父も母も死にました。わたしも全身に大やけどを負って、とても生き長らえる状態ではなかったそうです。その時の苦しみは今も覚えています。わたしはずっと心の中で泣いていました。ただひたすら助けを求めているのです。死にたくなかったのでしょうか。

暗闇の中に美しい女神さまが現れました。女神さまはわたしに生きたいかと尋ねられました。わたしは生きたいと答えました。女神さまは自分の力を受け入れれば生きられると言いました。ただし、自分の力を持つことは人間にはとても苦しいことだと。わたしはそれでもいいと答えました。死にたくはなかったのです。女神さまは、では生きなさいとおっしゃり、わたしの中に入ってきました。

わたしは目を覚まし、生き返りました。焼けただれた全身もすっかり綺麗になっていました。しかし目覚めて一目外の世界を見た途端わたしの目はほとんど見えなくなっていました。世界が何かとてつもなく恐ろしいものに見えたのです。わたしはそのショックでガタガタ震えるばかりで口もきけなくなっていました。すっかり内に籠もってしまい、施設に入れられて、ずっと、孤独に過ごしてきました、15歳になるまで・・。



わたしは口もきけず、もともと誰でもなかったので、施設で勝手に美奈子と名付けられました。ミナシゴの意味です。15でようやく口がきけるようになり、本名は美姫だと名乗りましたが、実は本名ではありません。わたしが覚えている名前はサシャというものでした。わたしが名乗った美姫とは、女神さまの名前です。名前ばかりではありません、この顔も、体も、わたしが死の闇の中で見た女神さまそのものです。わたしはもうわたしという人間ではありません。女神さまに生かしてもらっている人形です。

それでもこの感情だけは自分のものだと思っています。怒りも、悲しみも、恐怖も、喜びも。だからわたしは生きています。生きているというのは、嬉しいものです」

……先生にそのような壮絶な過去があつたなどまるで知らなかった。芙蓉は顔を蒼白にして、目を赤く潤ませている。峰谷早苗も、顔をこわばらせ、目にうつすら涙を浮かべている。これが、本当の悲劇のヒロインというものなのだ。先生は現実に戻ってきて言う。

「整理してみましよう。あなたはあのビデオを見ましたね？」

早苗の顔が恐怖でこわばる。

「あなたはそこで恐ろしい物を見た。普通の人には見えていませんが、あのビデオは、あなたが見たとおりの物が映っています」

早苗は脅えながら、それでも自分の頭がおかしかったのではないと確認した。

「しかし、あなたが思っていたようにあなたはそこで悪霊に取り憑かれたわけではありません」

早苗の顔がそんなはずはないと再び意固地になる。

「いいえ、憑いていなかったのです。あなたが、今になって呼び寄せしまったのです」

早苗は再び先生に敵意を見せた。先生は慌てない。

「あなたの気持ちは分かります。あなたはあの悪夢を忘れようと自棄とも思える相当無理なこともしましたね？ それこそがあなたの

受けた傷なのです」

早苗は疑いながらも先生の言葉に耳を傾ける。

「霊障というものです。あなたはあのビデオに映り込んだ強い怨念に当てられて霊体に深い傷を負ったのです。さらに青木たちにひどい目に遭わされて、心に決定的な傷を負ってしまった。あの時点であなたは霊になど憑かれていなかった。しかし、そう思わなければ、あなたの心の傷があなたを引き裂いてしまふのを防ぐことは出来なかったのです」

早苗の目が真っ赤になって唇がブルブル震えた。その唇はもう一年半もの間一度も開かれたことがなく、糊できつく張り合わせたように薄くなっている。

先生は同情的な優しい眼差しで言う。

「心の傷とは受けたその時にはどうということもなく思われても、時間が経ち、後からはるかに深刻なダメージとなつて浮き上がってくるものなのです。早苗さん。あなたはとても苦しんだのでしょうか。自分を完全に否定するなど、とても悲しく辛いことです。でもあなたは勘違いしていますよ。ご主人は他でもない、あなたを、好きになつたのです。あなたは変わる必要なんてないんです。あなたはあなたのままでいいんです。もっと言ってあげましょう、あなたは何も悪くなかつた、醜くもなかつた、年頃の女の子がかわいくないわけないでしょう？ あなたは、何も悪くなかつた、あなたは一つも責められるようなところはなかつた、あなたは正しい、間違っていない。」

わたしの言葉と、青木雄二と、どちらを信じます？ ご主人と青木雄二と、どちらがあなたの味方です？」

峰谷早苗の目から涙がこぼれた。先生の声に怒りがこもり強く言う。

「あなたは悪くない。悪いのは全て青木雄二という悪人です！」  
「・・・・・・あ・・・・・・」

早苗の口が開き、老婆のようにかすれた声が漏れた。先生に視線

を送られ、芙蓉は早苗の喉に手を添えた。芙蓉の力である治癒の気を送る。

「・・・うつ・・・あ・・・ありが・・・とう・・・」

芙蓉も、泣いた。先生は微笑み、顔を引き締めた。

「これからが本番ですよ。早苗さんの中に巣くう悪霊をあぶり出し、成敗しなければ。」

もう一度訊きましょう、早苗さん、あなたは長谷川さんまで殺す気ですか？」

早苗は必死となって首を振った。

「い・・・いや・・・恨んだけど・・・あの人は、苦しんでいるはず・・・」

先生は頷く。

「そうですね。あの人の苦しみは一生続くでしょう。あなたが殺すまでもありません。他の人たちはどうです？金森は？間宮は？青木は？」

「・・・居なくなってほしかった・・・わたしの人生から、過去から・・・でも・・・」

「殺したいとは思わなかった。そんな風に関わることさえ嫌だった。そうですね？」

早苗は頷いた。

「あなたは優しい人です。つい自分が悪いのだと思い込んでしまつて他人に対して攻撃的になることなどなかった。まあそれがあなたの不幸なのですが。でも、あなたが殺したのですね？」

早苗は涙を流して頷いた。

「後悔していますか？」

頷く。  
「青木に関してはどうです？ あの人だけはさすがのあなたも許せないではありませんか？」

「・・・あの人だけは・・・憎い・・・」

「ですね。それが、彼は気に入らないのです」

早苗は疑問の顔で先生を見る。芙蓉も分らない。

「この世で青木雄二を最も憎んでいたのは間違いない。嶋村早苗さん、あなたです。青木自身それは分かっていました。だから彼は自分が殺されたとき、自分が殺されたのを、あなたのせいに、したのです」

早苗の顔に驚愕が走る。

「・・・わたしが殺したのでは・・・ないの？・・・」

「違いますよ。彼を殺したのは桜野葉子という少女です」

「でも、それはわたしが彼女の体に移って青木を殺したのでは？・・・」

「逆です。体に乗っ取られているのはあなたの方です。」

青木雄二というのはどうしようもなく最低の男です。まあ家庭環境的に同情すべき点もあるかもしれませんが、自分が不幸だからといって他人を不幸にする権利などありません。まして青木程度の不幸、世の中でどうといったレベルの不幸ではありません。世に不幸な人などいくらでもあります。青木はただのくだらないナルシストの変態です。マザコンの変態です。臆病者のシスコンでロリコンです。変態です。弱い者イジメしかできない腐れ外道です。あんなクソヤロウ殺された方が世のためというものです」

かつて先生の口からこれほど人をけなす汚い言葉が吐かれたのを芙蓉は知らない。顔つきまでまるであの江戸由宇のようだ。早苗までさすがの汚いのしりに顔をこわばらせている。先生は残酷に意地悪な目で早苗を見つめて言う。

「陰にコソコソ隠れて女の尻をつけ回すことしかできないストーカーの変態男。なんてみっともない。いつまでそこに隠れている気？」

早苗の顔が一瞬にして緑色に変色し、カァッ・・・と物を吐き出すように大口を開けた。実際ゴクリと喉が動いて何かが吐き出された。先生の顔がきりつといつもの美しい正義の味方になった。

「出てきたわね、青木雄二」

一瞬チラッと芙蓉に視線を送った。芙蓉は心の中で頷き、そっと、行動を起こした。

ドアがドンドン叩かれた。

「開けなさい！ 早く！ 即刻中止しなさい！ 警備員を呼びますよ！」

戸川医師のヒステリックな声だ。このドアはスライド式で鍵はない。外から開くはずだが、ドアを叩く音は一向に止まない。

『うるさい！』

外で悲鳴が上がり、物のぶつかる音がした。戸川医師が何者かに突き飛ばされ転倒したのだ。先生が冷静に注意した。

「危険ですよ。大人しくモニターで見ていてください」

先生はじつと早苗のベッドの上の宙を見ている。そこにもややめた黒い影が浮かんでいる。

「あなたの相手はわたしです。関係ない人に暴力を振るうのはやめなさい」

黒い影はスツと人の形になった。男だ。ギョロリと血走った目だけが出現した。

『つけ上がるんじゃない、女』

影、青木雄二の亡霊は先生に凄んだ。

『てめえ、いきがるとずたずたに切り裂いてやるぞ！』

「さて、あなたにそんな強い力があるんですか？」

目につき真つ赤な口が出現して笑った。

『馬鹿が。生身の人間が俺様の力に叶うわけねえだろ？』

先生は嘲笑った。

「あなたの力ではないでしょう？ 桜野葉子さんから授けてもらった力でしょう？ あなたなんてただの低級霊、ザコよ」

『うるせえつてのが分からねえかつ！』

影はブンと右手を振るった。黒い風が巻き起こり、先生の髪が揺れた。影の右手が、白く、立体的な質感を得ている。

『どうだ、驚いたか？』

先生はしらつと言う。

「何かしたの？ ハエがいるのかしら？ 嫌ねえ」

「このむかつく気取り女め！ 切り裂いてやる！」

影はまるでカンフー映画のように手足を無茶苦茶に振るった。先生の髪がなびき、ブラウスの袖が揺れたが、先生は平気だ。

「な、なんだよ、おまえ」

影は幽霊のくせにゼイゼイ言うように肩を揺らせている。黒い陽炎だった体が、すっかり白く実体化している。先生はさらに嘲り、あおる。

「相手が悪かったわね。わたしは江戸さんのような三流とは違うの。神に、勝てると思ってるの？」

影は凶暴に笑った。まるで鬼のように真っ赤な顔が実体化した。

「だったら俺は悪魔だ！ 生身の体に泣きを見させてやる！」

影、青木は先生の首に掴みかかった。ガツと掴み、白い喉に指をめり込ませていく。勝ち誇った凶暴な笑いが、驚愕し、哀れに情けない顔になっていく。

「うわ、うわ、わあああー・・・」

青木の白い手が真っ赤に燃え上がり湯気を上げている。

「ギャー、ウギャー、ギャーッ！・・・」

絶叫して全身を痙攣させる。肩まで燃え上がり、肘までボロツと崩れて、青木は悲鳴を上げて飛び退いた。

「ウギャー、イテエーッ、なんだよ、なんで死んでんのにこんなに痛てえんだよおおっ！？」

先生はスツと右手を伸ばして青木の顔を掴んだ。ジュツと泡が立ち、真っ白な煙が盛大に上がった。

「イギャアアアアアアッ！！！！！！」

顔から煙を噴きだしたまま青木は空中で転げ回った。顔をかきむしりたいのだろうが、腕はない。

「いい、いい、いてええー・・・。なんでだ、なんでこんなに痛てえ？」

ようやく煙が収まって、怯えきつた青木の目が先生に問うた。顔面の肉が無惨にえぐれて骸骨が覗いている。先生は冷たく言う。

「馬鹿ですね。神に触れたのですよ？ 魂が直接死んでいくのです。痛いに決まっていますでしょう？」

「魂が・・・死んでいく？・・・」

「死んで終わりと思ったたら大間違いですよ。あなたは閻魔大王に地獄に落とされるでしょう。地獄の責め苦は、こんなものではありませんよ」

先生はうつすら冷酷に笑った。青木は、恐怖した。

「ち、ちくしょうっ」

何かを搜してキョロキョロした。

「助力はありませんよ」

青木はギョツとした。

「結界を張りました」

そう、芙蓉が張った。例の先生独自の天使の置物を部屋の四方の隅にこっそり置いておいた。青木が芙蓉の存在に気付き凶暴に睨み付けた。

「あなたの相手はわたしと言ったでしょうっ！」

先生の鋭い一喝に芙蓉までビクツとした。

「その人に手を出したら、後悔しますよ」

青木はニヤツと笑い、芙蓉に躍りかかった。芙蓉も身構える。が、ミシツと青木の顔が歪み、目玉が半分飛び出した。

「ぎゃあっ」

天井にその顔を打ち付けられた。

「殺すなんて親切なことはしてあげませんからそのつもりで」

青木の顔面は半分崩れている。先生の恐ろしさがようやく骨身にしみて理解できたようだ。だが、まだ姑息な小ずるさが目に宿っている。

青木は早苗を見た。早苗は白目を剥いて気絶している。青木は笑い、早苗の腹に潜り込もうとした。

「動くなっ！」

ちよつと間の抜けた先生の命令。しかし青木は頭を下に早苗の腹に飛び込もうとした姿勢のままピタツと静止している。目が怯えて自分を縛る力の元を捜す。

四方に青い光を放つ4人の白い女神が立っていた。芙蓉の置いた天使の像から出現したらしい。芙蓉もその姿をはつきり見るのは初めてだ。4人とも先生に似ているが、それぞれに自分の個性を持っている。先生のしもべというより、協力者といった感じた。皆静かな目で青木を見ている。4人の発する青い光が対角にクロスし、交点で青木を捕らえている。これほどはつきりした結界の姿は他にないだろう。

「逃がしませんよ」

先生が言つと、罰か、ビシツと青い光が青木を打ち、青木はまた悲惨な悲鳴を上げた。先生の弱いものイジメも徹底している。

「あなたを閻魔大王に引き渡す前に、役目を果たしてもらいましょう」

早苗がボーツと目を覚まし、青木の姿を見つめてヒツと怯えた。

青木はまだ悪人らしく早苗を嘲笑った。

『よお、前にも増して醜くなったものだぜ。ははは・・・』

また罰を覚悟していたらしいが、先生は何もしない。

「まず事実確認をしましょう。早苗さんの恨みの心を利用して金森、間宮を殺したのはあなたですね？」

『ああ、そうだよ』

「長谷川さんも殺そうとしましたね？」

『ああ、そうだよっ』

「フツ、しくじりましたね？」

『ああ、てめえのせいだな』

「ですね。しかし、わたしも利用されただけです。早苗さんにね」  
えっ、と早苗は驚いた。先生は優しく言う。

「あなたは、長谷川さんだけはどうしても死なせたくなかったはず



です。そこで、自分が彼を殺してしまう前に、わたしに助けを求めたのです」

早苗は信じられない顔をした。青木が力アツと憎々しく凄む。

『そうか、てめえのせいだったのか！？』

早苗は全身で怯える。先生は早苗に寄り添い、肩に手を置いて言った。

「見てあげなさい、あの惨めな姿を。あの男はもはや無力です。あなたにはもう何も出来ませんし、あの男にはこの先、未来永劫、苦痛しかありません」

『このブスめ！ てめえ、子々孫々祟ってやるっ！』

先生は嘲った。

「無理ですね。あなたが現世に舞い戻ってくることは絶対にありません。現世においてあなたの存在は完全に抹消されます。あなたはもはやこの世界の何ものに対しても、完全に無力です」

青木は悔しそうに歯を噛みしめた。先生は早苗を励まして言った。  
「さあ、早苗さん。この男に一言言ってやりなさい」

早苗は張りつめた目でじいっと青木を見つめ、じわりと涙を滲ませて言った。

「わたしは・・・あなたが大っ嫌い、です！・・・」

青木は憎々しく嘲ったが、先生の冷たい視線を受けて弱々しくうなだれた。

先生は頷き、立ち上がり、言った。

「けっこうです。もうあなたに用はありません。閻魔様の下へ連行しましょう」

青木は最後の悪あがきに笑った。

『ハハハ、馬鹿め。おまえ、俺の全てを分かったつもりか！？』

「ええ。分かっています」

『馬鹿』

先生は青木を見下し、凄んで言った。

「分かっているんです。分かっていないのは、あなたの方です。あ

あなたは自分が主人公のつもりでしょうけれど、あなたなど、ただの脇役です。あなたこそ、なんにも分かっていないんです」

「さようなら。もう二度と会うことはありません」

「うわっ、なんだ、やめろ、やめてくれええっ！」

[illegible]

「終わりましたよ。あなたの悪夢は」

先生に訊いた。

「んでしょ？ わたしでなく……」

「どうしてでしょう？」  
わたしには金森さんたちを殺す動機があり

「ま、ありませんね。言ってみれば……ついんです」

「ええ。自分が殺されてしまって悔しいから、仲間を道連れにしてやろうと思った。ま、そういうくっだらない男だったのですよ、青

「でも……友だちでしょう？」

「そうね。あの人、他に友だちと呼べる人がいなかったのよ。他に殺してやりたいと思ひ付く人間がいなかったのね」

早苗はまだ納得できないようだ。先生も困ったように言う。

すつもりだったんですよ」

「わたしを・・・」

「ええ。あの男が一番嫌っていたのはあなたですから」

「・・・・・・」

「あなたは恨みを晴らして、殺人者としての絶望を抱えたまま自殺するのです。あなたは素直に死を受け入れたでしょう。そして死んでしまつてから全てを知つて絶望的な後悔の淵で絶叫するのです、青木への恨みと憎しみと悔しさを。あの男はそれを笑つて見物するつもりだったのです」

「・・・・・・」

早苗の顔が怒りで赤くなつた。

「なんつて・・・、ひどい男・・・」

「その通りです。今頃閻魔様に睨まれて真つ青になっていますよ」

「・・・閻魔様つて本当にいるんですか？」

「いますよ」

先生のニツコリ笑顔に早苗も釣られて笑つた。心底ほつとしたような笑顔だった。これまでの自分を振り返つて深いため息をついた。「でも、なんて恐ろしい体験だったことか・・・。青木はつまらない悪人でしたが、恐ろしい人でした・・・」

「それは違いますよ」

先生ははつきり言つて早苗は疑問の顔をした。

「あの男にあんな力があるものですか。あれは青木を殺した物の力です」

「青木を殺した者が・・・青木に力を貸していたんですか？」

「そうです。青木は悪魔の絶対的な力を与えられてその虜となつたのです。自分もこの力を使って人を殺してやりたい、と。青木もその物に利用されていた駒の一つ、哀れな犠牲者の一人に過ぎません。自分はその絶対的な力を与えられるために殺されねばならなかったのだと勘違いしていたのです。まるつきり道化ですね」

「そんな恐ろしい者つて、いったい・・・」

「それは彼らが邪魔で消し去りたかった者です。それが誰であるかは、あなたにはまったく関係ありません。あなたを殺したかったのは青木で、その者にとってあなたはまったくのついででしたから、あなたはもう安全です。どうぞ安心してください」

早苗は先生を信じて穏やかな顔で頷いた。

「さ、あなたの事件はすっかり終わりました。ここから先はご自分で決めて下さい」

先生は廊下に向かってどうぞと声を掛けた。ドアがすんなり開いて峰谷早苗の家族が立っていた。

「早苗」

夫が抱いていた娘を差し出した。早苗はおっかなびっくり受け取ったが、赤ちゃんが嫌がって泣いて暴れた。早苗は悲しい顔をして夫に戻そうとした。先生が割って入り、泣き喚く赤ちゃんの頭を撫でた。

「どうしたの？ あなたが会いたくてしょうがなかったお母さんよ？ ほら、よくご覧なさい」

赤ちゃんは早苗の顔を見て、また泣いた。でも泣き方が違う。小さな手で必死となって母親にしがみついている。早苗もいっしょに泣いて我が子を抱きしめた。心から幸せそうな顔だった。夫も涙ぐんで言う。

「もうハイハイもするんだぜ。おまえのオッパイを恋しがって夜泣きがひどくてまいってるんだ。これから、頼むからな」

早苗は涙でグズグズになりながら一生懸命頷いた。夫は先生にまっすぐ向き合って深々頭を下げた。

「先生。ありがとうございます」

「いえ。これからはあなた方次第ですからね、どうぞ頑張ってお幸せに」

先生も嬉しそうに微笑み、家族の後ろで怖い顔で立っている戸川医師に

「失礼」

と優雅に一礼して病室を出た。芙蓉も失礼と続く。

病院の建物を出て、芙蓉はさすがしく外の空気を吸った。

「思ったより早く終わりましたね。これなら夕方には青山市に着けますよ」

今時刻は3時になろうとしてるところだ。

「そうね」

「驚きました。まさか青木雄二が被害者ではなく加害者だったなんて」

「まあ嶋村早苗さんの件に関してはそうね」

先生は何故か浮かない顔である。

「結局わたしは敵の策略にまんまと乗ってしまったわ」

「でも先生は不幸な早苗さんを救ったじゃないですか？」

「そうね。わたしが彼女を放っておけないのも計算の内よ。長谷川さんと呼ばれたのも早苗さんを救いに立ち寄ったのも、そもそも青木雄二を泳がせておいたのも、みんな罠よ」

先生は自分に怒りを向けて言った。

「わたしは青木の霊を逃さないため、外の干渉を断つため、結界を張りました。それはわたしのアンテナも内に封じることになりました。その隙を、待っていたのです」

先生の暗い顔に芙蓉は不安になった。

「ご覧なさい」

先生は東の空を指さす。真っ青な晴天の遠く地平線近くが灰色に煙っている。

「今、魔界の口が開く」

軽く地面が揺れた気がした。しかしそれに数百数千数万倍する衝撃を芙蓉は感じた。

「先生ッ！」

先生は暗い顔で頷いた。

「やられました。明日まで着けないと言ったのは牽制のつもりだっ

たのですが、思った以上に岳戸由宇という人はやつかいな大馬鹿者ですね」

さすがの先生も忌々しく顔をしかめた。先生はそのイライラをふうつと吐き出し、静かな目に戻って言った。

「嶋村早苗に会って一つだけ収穫がありました。彼女は最初に金森殺害に失敗したとき一人の男の子に会っています。この子は重要です。桜野葉子の恋人です。彼を確保すれば、こちらの切り札になるかもしれません」

急ぎましようと言って、先生は駐車場と反対の方に歩き出して、芙蓉は慌てて先生の手を引いた。

「お世話かけます」

先生は苦笑して頭を下げた。

「いえいえ。急ぎましよう」

芙蓉はしつかり先生の手を握って歩き出した。

先生の手は汗でじつとり濡れている。

真夏の炎天下だが、先生の体温は異常に低く、ふだんめつたに汗をかくことはない。先生のいつにない緊張と焦りが感じられる。

東の空、遠くにオレンジ色の光の柱が立っている。そこに、恐怖が待っている……

## 第16話 中に居るもの

三津木は芙蓉紅倉との電話を終え、頃合いを見て等々力の携帯にかけた。

「桜野葉子の母親と会ったんだろう？ どうだった？」

「いやまいったまいった。ただ者じゃないなああの母親。岳戸さんがさ・・・」

由宇が紅倉美姫の言っていたどんなひどい目に遭ったのか聞いた。ちよつと薬が効きすぎだろうか？

「で、岳戸先生は？」

「一足先にホテルに戻った。立ち直るまでしばらくかかるんじゃないかな？」

それは好都合。三津木は等々力に力を込めて言った。

「等々力さん。いいか、絶対に岳戸先生をあの家に近づけるんじゃないぞ。いいか？どんなことがあってもだよ」

「え？ そうなのか？ なんで？」

「紅倉先生の厳命だ。いいかい、先生が自分でこれは命令だと言ったんだぞ、彼女をあの場合に近づけたら、今度こそ取り返しのつかないことになる、ってね」

「そりゃ怖いな。了解した。ところで先生は？」

「うん・・・。別の一件をお願いしている。等々力さん。あなたにも謝らなければならないことがある。また後で、ゆっくり話します。」

とにかく岳戸先生の方をよろしくお願いします」

「ちと荷が重いがな、分かった。抑えておくよ」

「すまないね」

謝りながら切った。等々力は三津木と由宇の関係を知っている。

三津木はさてと考えて、桜野卓蔵氏に電話することにした。桜野家当主で、葉子の祖父だ。3日前にあの家の撮影をお願いして、快く許可してもらった。それを取り消してもらおう。家主が駄目だと言

えば撮影は出来ない。まあ中に入れないだけだが。要は由宇が興味をなくしさえすればいいのだ。警察の方の許可はもらってある。紅倉美姫の名は強力だ。

「あ、もしもし。わたくし先日お電話しました東日テレビの三津木と申します。その節はどうも。あの実は御当主にお願いしたいことがございまして。は、取り次ぎお願いします」

電話に出たのは秘書・ではなく執事なのか。当たりの良い年輩の紳士だ。しばらくしてその紳士の慌てた声がした。

「ああ、三津木様。旦那様なんでございますが、それがその・・・、たいへんご立腹でいらつしやいまして」

「は？ 怒ってらつしやる？ なんでまた？」

「それが、あの家を他人に覗かせるなどんでもない、絶対にいかんと。警察が既に調べたことを申しますと、その・・・なんたることか！と、激怒されて・・・」

「はあ・・・。あのしかしそれは・・・」

「旦那様はそこで殺人事件が起こったこともご存じなく・・・、いえ、ご存じのはずなんですが・・・、その、たいへん申し上げづらいのですが・・・、少々呆けておられるようで・・・」

「は？ 呆けてらつしやる？ しかし、あの、先日はつきりと・・・」

「『そうなのでございますが・・・、どうやらその、その時点で既に呆けてらつしやったようで・・・』」

「・・・・・・・・・・」

桜野卓蔵氏は御年85歳。呆けてもおおかしくない歳だが、未だ名義だけとはいえいくつもの系列会社の名誉会長を務め、グループ全体に睨みを利かせているという。それが、実は呆けていた？

まあそれならそれでいい。本人が絶対駄目と言うなら由宇を近づけない十分な理由になる。

「分かりました。いったん撮影は控えさせてもらいます。すみませんが後ほどまた連絡させてもらいますので・・・」



突然電話の背後からうおおお・・・という咆哮が聞こえた。

「ど、どうしました？」

『あ、あの、旦那様が』

うおおという声が近づき、執事は電話口を離れた。旦那様、と慌てた声が聞こえる。三津木はじつと耳を澄ました。

旦那様、お気をしつかり。おい、何をしている、早くお医者様を！ ああ、晴美様、知世様、いけません。紗恵様、お二人を早く。

ああ、なんでございます、旦那様。は？は？ 緑海お嬢様でございますか？ いえ、こちらにはおいでは・・・。いえ、こちらはお嬢様の娘様方で。ああ、旦那様！

おおお、緑海よ、緑海よ。許せ、許してくれ。オレはおまえが怖かったんじゃ。ちゃんと守ってやったじゃろう？ なあ、守ってやったじゃろう？ 言うことはなんでも聞いた、な？ なんじゃ、なんでそんな目でオレを見る？ 嫌じゃ、その目は嫌じゃ。オレを見んでくれ。嫌じゃ、嫌じゃと言ってるじゃろう。いね。いねくなれ。もうオレはいらねだろ？ 勘弁じゃ、もう勘弁してくれ。く、来るな、あっち行け。

ああ、これ、知世様、いけません。

じーじ。あそぼ。きやはははははは。

い、いね・・・、う・・・、うううううう・・・、かつ・・・

だ、旦那様、旦那様！

三津木はじつと耳を澄まし続けた。ドタドタと足音が入り乱れている。大人たちの慌てた声に混じって少女のあどけない声が聞こえた。

あーあ、じーじ動かなくなっちゃった。かくれんぼかな？

馬鹿ね、離れなさいよ、お祖父様は死んじゃったのよ。

馬鹿って何よー。馬鹿は紗恵お姉ちゃんよ。あたし紗恵ちゃん嫌い。

何よ、あたしだってあんたなんか嫌いよ。

えーん、晴美お姉ちゃん、紗恵ちゃんがトモちゃんのこと嫌いだ  
ってー。

いいじゃない、別に、紗恵ちゃんなんて。

そうだよ。きやははは。

知世！ 晴美ちゃんも！

ばーか、ばーか、馬鹿紗恵。隠れるってね、鬼になることなんだ  
よ。

鬼？ 馬鹿ね、隠れたのを見つけるのが鬼でしょ？

ばーか。鬼籍って知らないの？ 鬼ってね、死んだ人のこと言う  
のよ。きやはは、ばーか、やっぱり知らないんだー？ きやはは  
はは。

ば、馬鹿っ！ な、なにがくれんぼよ？ あんたたち、おかし  
いわよ？

トモちゃんおかしくなんてないもん。ねー、晴美ちゃん？

そうだね。馬鹿におかしいなんて言われたくないわよね。

あ、あんたら・・・

やーい、馬鹿馬鹿、ばーか。きやはは。

いいかげんにしなさい！

・・・ぶったね？ 晴美ちゃん、紗恵お姉ちゃんがトモちゃん  
ぶった。

そうね、ぶったわね。

許せないよね？

そうね、許せないわね。

な、なによ、晴美ちゃん、知世？ な、なによ、嫌よ、何する気  
よ！？

こ、これっ、お嬢様方、何をしたらっしやいます？ さ、あっち  
へ行つてらっしやい。今お母様をお呼びいたしますから。ああ・  
ガチャンと受話器が置かれた。もうとっくに切ったと思っていた  
のだろう。相当慌てている。

しかし、今の子どもたちの会話はなんなんだろう？ 確か一番下

の知世はまだ5歳だ。鬼籍だなんて、祖父の家に預けられているせいでそんな言葉を覚えたのだろうか？　しかしそれを鬼とかくれんぼにかけて平気で笑っているなんて、幼児ながらちよつと異常ではないか？　母親も相当異常なようだが、娘たちもまた然りのようだ。・・・桜野卓蔵氏は死んだのか？　バタバタと、なんとも突然なことだ。これは偶然なのか？　いや、そうではあるまい。三津木は等々力にかけた。

『もしもし』

「もしもし、三津木です。今は？」

『我々もホテルに向かっているところ。取りあえずどこ撮ったらいのか分からないんで作戦会議』

「桜野卓蔵氏が亡くなったらしい」

『卓蔵って誰だっけ？』

「桜野家の当主、爺様だ。今電話中に突然倒れたらしい」

『そりゃあ、たいへんなんじゃないか？』

「でしょうね。そっちのBNTに情報渡すから、こっちの方にも状況教えてくれるよう頼んでおきます」

『よろしく。じゃあ・・・、こっちはどうすんだ？』

「海岸の家の撮影は卓蔵氏に拒否された。だから取りあえず撮影は出来ない。岳戸先生にもそのように言ってください。・・・卓蔵氏ね、どうやら呆けていたらしい」

『呆けて？　えーと、家のことは？』

「だから全然分かっていなかったらしい。殺人事件のこともね」

『ウーン・・・、そうなのか？　それを周りの人間たちは気付いていなかったのか？』

「ええ・・・、どうやらそうらしいんです」

『なんかそれもおかしくないか？』

「おかしいですよねえ？　おかしいって言えばね、今その実家の方で預かっている3人の娘たち、2番目の娘はまともらしいが、下の二人は・・・相当変ですよ」

『・・・嫌だなあ。俺もあの母親見ていてさ、すっごい若くて美人なんだけど、なんか気味悪くてね。おかしいよな、あの家族、絶対』

「ええ。ま、とにかく紅倉先生のおっしゃったように・・・」

『了解。岳戸先生は絶対あの家には近づかせないよ』

「よろしく。じゃ、また」

三津木は次に芙蓉の携帯にかけたが、『ただいま電話に出られません』とのことだった。運転中だろう。紅倉先生は携帯の使い方を知らない。仕方ない、先生には峰谷早苗のことをお願いしている。そちらに集中してもらわないと。

これからどうなるのだろう？ やはり事件の中心はこの異常な桜野家であるらしい。そのゆかりの謎の家に、いったい何が隠されているのだろうか？・・・

等々力たちがホテルに到着すると、岳戸由宇はまだ帰ってきていなかった。等々力は慌ててマネージャーの加納の携帯にかけた。電源が切られていた。どこにいる？と考えて、まさかこちら地元のBNTの撮影班に電話した。取りあえず人手は足りているので局に帰って情報収集を頼んである。ディレクターが出た。

「等々力です。今どちらです？」

『今事件現場の海岸の家に向かっているところです』

「なんだって！？ おいおい、勝手なことされちゃ困るよ。誰が・・・つて、おい、まさか岳戸先生か！？」

『はあ、そうですよ』

ディレクターに別に悪びれたところはない。

「い、行くな！ と、とにかくホテルに戻ってこい」

『は？ はあ。じゃあ戻りま・・・』

『等々力さ〜ん』

等々力はビクツとした。岳戸の声だった。乗っていたのか。いつもはスタッフとの同乗は嫌うくせに。岳戸はディレクターの携帯を

奪って話した。

『ふふーん、邪魔しようつたって、ダ・メ・よ』

「先生、ふざけてる場合じゃありません。駄目なんですよ。そうだ、家主から撮影許可が取り消されましてね、今三津木さんが交渉してるんです。ですからもうしばらく待つてください」

『あ、そ。じゃあ向こうで待つわ』

「駄目だ！ あんたは近づいちゃいかん！」

しまった、と思っただけしばらくの沈黙の後、岳戸が陰険な声で言った。

『あの女の差し金ね？』

やはり気付いていた。

「・・そうです。紅倉先生の命令だそうです。命令ですよ？あの人がある風に行ったことないでしょう？それに、家主の許可が取り消されたのも本当です。さらにその家主、桜野家の当主が急死したらいいんです。ねえ、戻ってくださいよ。おかしいですよ。行っちゃあいけない。あなたがそこに行ったら、なにかとてもない恐ろしいことが起こるんだ。ねえ、長い付き合いじゃないですか、頼みますよ」

『長い付き合いを言うんならねえ・・』

暗く怨念がこもっている。

『紅倉ごときにかしずいてんじゃないわよ！ 何よ、どいつもこいつも紅倉先生紅倉先生って！』

ヒステリックに叫んだ。

『馬鹿にするんじゃないわよ、ちくしょうっ！ みんなみんなあ・ぶっ壊してやるっ！』

「岳戸さん！」

駄目だ。切られた。あの母親に受けた屈辱ですっかり頭に血が上っている。

「くそー、どれだけ先行された？」

いったんBNTに向かったのなら距離的にはこのホテルの方が近

いはずだ。ただ、同じ市内だ、大した差はない。とにかく、急がねば。

等々力はスタッフをせき立てて現場に向かった。11時50分到着。となりのアパートの駐車場に止めさせてもらって野原に走った。岳戸たちの姿はなかった。とつくに着いていると思ったのだが・・・それにしても、・・・なんなんだろう、この景色は？

真っ赤なハマナスが空き地全体を占領していた。それどころかとなりのアパートまで、いやいや、道路を挟んだ向こうの松林にまで勢力を伸ばしている。間のアスファルトの道路はでこぼこに浮き上がってひび割れている。異常だ。

問題の家はというと、足場を組んで青いビニールシートで覆われているが、なんだろう、シートの向こうに黒い陽炎が立っている。なんとなくミシミシ音が聞こえてきそうだ。まさか岳戸たちは既にあの中に入っているのだろうか？

歩道にはまだ4社ほど撮影隊が粘っている。近くの人間に訊いた。「ここに岳戸由宇は来ませんでしたか？」

「いや、来てないよ。来るの？」

無邪気に喜んでいる。馬鹿、この状況が分かってんのか？しかし、すると岳戸たちはどこにいるんだ？ 等々力は再びディレクターの携帯にかけた。

「出るよ、出るよ。おつ、等々力だ！ 今、どこだ？」

ディレクターが答えた。

『海ですよ。そちらどこです？ 家の裏ですよ。来てくださいよ、ちよっとすごいことになってますよ』

「海？」

等々力は反射的に顔を上げた。家の裏の林を下りていけば砂浜だ。あれか、と思った。上空にカモメが数十羽群れている。

「行くぞ、砂浜だ！」

等々力は汗を流して走り、スタッフたちも追いかけて走った。他

の撮影グループまで仲間と顔を見合わせて追いかけてきた。アパートの裏手に林を通る道がある。坂道を駆け下りると波の音が聞こえてきた。白い砂浜と波の反射が眩しい。水着姿の海水浴客たちが砂浜に突っ立っていた。波打ち際に何か見ている。カモメたちが鳴き声もつるさく上空を群れ飛んでいる。いた、江戸由宇だ！ 相変わらず周囲から浮きまくっている。江戸のいるところを中心に海水浴客たちは気味悪そうに波打ち際を見ている。

「江戸先生！」

等々力は怖い声で呼びかけてハアハア息をついた。

「勝手なことせんでください！ 君らも！」

地元BNTのスタッフも叱る。

「わたしの指示に従ってもらわにゃ困る！」

命に関わる、ということを彼らは理解していない。BNTスタッフは不満を顔に表し、江戸は等々力をフンと嘲った。

「これを見て、それでもまだ撮影するなって言うの？」

なに？と等々力は江戸たちの背後の海を見た。白い。貝の群だ。

ハマグリだろうか、10センチ近くある大型の白い殻の貝がびっしり海中を埋め、波打ち際まで上り詰めている。幅2メートルほどで、ずっと沖の方まで続いている。まるで真つ白な道のようなのだ。

確かに異常な光景だが、これをどう捕らえるだろう？ 海中に白い道が出来ているのだ、見ようによつてはロマンチックと取られないこともない。しかし見つめる海水浴客たちの顔色は良くない。上空で群れ飛ぶカモメたちのみゃーみゃー言う鳴き声が不気味だ。港で見るカモメは旅情を誘って情緒があるが、大型の鳥を間近に大量に見れば、それは、怖い。そして何か強迫観念に駆られたように浜に乗り上げてきた白いハマグリたちはブクブク泡を吹きながら、パカッと開くとムツと鼻を突く臭気を発した。現れた実は緑色に変色して、腐っているようだ。カモメたちはご馳走を発見して寄つてきたものの、野生の直感でこの貝たちが食べては危険なものと分かっているのだろう。人間たちも感じている。見渡すとこの付近で海に

浸かっている人間は一人もいない。

他局の人間が勝手に岳戸にマイクを向けた。

「岳戸先生、この現象はいつたいなんなんでしょう？ あの殺人のあった家と、今起こっているバケモノ変身現象と、何か関係があるのでしょうか？」

等々力はムツとしたが、岳戸は等々力を後目に得意になってカメラに向かって答えた。

「当然です。ここに集まってきた数千数万の貝たちにはそれぞれ海で死んだ者の魂が乗り移っています。これだけの海の死者が集まってきたのです、これがただ事であるわけありません」

岳戸は嫌みつたらしく等々力に笑いかけて言った。

「紅倉先生によるとあの家は非常に危険で、近づいてはならない場所なんだそうです。その通りでしょうね、ご覧なさいここからでも家の上空に立ち上る黒い陽炎が見えます。間違いなく、今に恐ろしいことがおきます」

「先生、その紅倉さんは今どちらにいらっしゃるんです？」

「さあ？ どこなの？」

等々力に質問した。全員が等々力に注目した。等々力は、知らない。岳戸は哄笑した。

「おほほほほ。賢い人ねえ。危険だから近づかないのね、紅倉さんは。おほほ。とんだ臆病者じゃなくて？」

ギリリと岳戸の目つきが変わった。

「偉そうに。人に指図するんじゃないわよ。わたしがみんなばらしてやるわよ、あの家の秘密も、紅倉の正体も！」

噛みつきそうに歯をむき出して、ふと、瞬間的に岳戸の顔から一切の表情が消えた。カメラを覗いていた他局のカメラマンがヒツと悲鳴を上げて思わずファインダーからのけ反った。

「どうした？」

「い、いえ、今……。気のせいかな？・・・」

ファインダーを覗き直した。一瞬、女の顔が見えたのだ、後ろか



ら手を回して岳戸の顔の右半分を指で掴み、左の半分からぬつと顔を出して。そう、その女の顔は岳戸の顔から抜け出てきたのだ。真っ黒なストレートの髪に、岳戸よりずいぶん若い、20くらいの、真っ白な肌の女だった。その目が、岳戸の数千倍、怖かった。しかし今覗くファインダーにその顔はない。気のせいだったのか。しかしまるで魂の抜けたような岳戸のこの顔はなんだ？

「先生、どうされました？」

岳戸はスツと腕を上げ浜茶屋を指さした。一軒、畳敷きの休憩所の付属した大きな店がある。

「しばし休む」

言々と岳戸はさっさと一人で歩き出した。

「先生」

スクープを物にしたい他局のリポーターが等々力たちを差し置いて追いつがる。

「これからどうなるんでしょう？ 先生は何かおやりにならないんですか？」

岳戸に見られてリポーターは思わずひっと立ちすくんだ。しかし

岳戸はニヤリと笑って妙に優しく言った。

「しばし待て。じきに時が来る。面白い見物が始まるゆえ、しばし待ちおれよう」

時代がかった物言いをする、どこかいつもと違う貫禄を漂わせて浜茶屋に入った。アイスグリーンティーを注文して「美味であるな」と呑気に堪能している。マスコミスタッフは呆氣にとられつつ自分たちも浜茶屋でコーラやら昼食に焼きそばを注文した。岳戸は静かに満足そうな笑みを浮かべ海を眺めている。海中の白い道に、彼女は何を見ているのか？・・・

等々力は三津木に電話して現状を報告した。

「どうする？」

『なんとか岳戸先生をそこから引き離せないか？』

「駄目・・・なんじゃないかな？ いつもと違うよ。妙に芝居がかっ

ているが・・・ありやあ本物だな、憑かれちまってるよ。ありやあ・・・例のじゃないか？・・・」

『まさか！・・・あれ、か？』

「だと思っね、オレは」

三津木の震える息づかいが感じられる。

『・・・やっぱり、浄化されてなかったんだ・・・』

三津木の恐怖が等々力にも理解できる。等々力も目撃者の一人だ。  
「それについて紅倉先生は何か言ってるのか？」

『いや・・・先生はそれについてはいつさい何か言ったことはない・・・』

「そうか・・・やっぱり、駄目だ、っていうのが解っているんだろ  
うな・・・」

『・・・・・・』

それ、とは、心霊アイドルリポーターだった岳戸由宇、当時の美崎優、を襲った怨霊のことである。あの事件は等々力たちの間でタブーになっている。優が岳戸由宇として再デビューする直前お世話をしてれていた霊能師の先生が40代の若さで心臓発作で亡くなっているが、等々力たちは決して口にしないが由宇が殺したのではないかと疑っている・・・

それが、今、由宇の表面に現れた！？

あの紅倉美姫でさえ被えないとあきらめている、等々力たちが出会った悪霊の中でも最悪最強の怨霊だ！・・・

「紅倉先生が言っていた悪霊の中の黒幕っていうのは、あれのことなのかな？」

『そうかも知れませんが・・・分かりません・・・』

「どうする？ 先生とは連絡つかないのか？」

『今は・・・駄目だ・・・』

「そうか・・・どうする？」

『・・・待つ、しかないだろうな、紅倉先生を・・・』

「・・・間に合うか？」

『分からん・・・』

「そうだな・・・俺たちは見ていただけしかないな・・・」

つくづく無責任だと思う。基本的にただの面白半分の野次馬根性だ。これも現実。そう思ってたカメラを回しているが・・・、言い訳だ。俺たちは何かとんでもない面白いことが起きるのを期待している・・・。今、間違はなくそれが起ころうとしている・・・、起きてから後悔するのは目に見えているのだが・・・。

由宇は暗闇の中に居た。もちろん心の中でのことだ。目は見えている。真昼の眩しい太陽に照らし出される、突如海中に現れた白い道を眺めている。しかし、それを見ているのは由宇ではない。由宇の中に居るもう一つの人格だ。

又イ姫。

由宇が生きている中で唯一絶望的な恐怖を抱く名前だ。

違う、とずうっと思っていた。自分の中にいらっしやるのは仏様である、と、ずうっと思っていた。いや、そう思おうとしてきた。

それを今、完全に否定されている。

『何をそのように恐れておる？』

由宇は震え上がった。又イ姫は笑った。

『考え違いをいたすな。わらわはそなたの味方じゃ。そなたに力を与え、そなたの欲しい人生をくれてやっておるであろうか？』

そうか？そなたのだろうか？わたしが望んだ生き方なのか？

『わらわは味方じゃ。安心いたせ』

信じようとする。しかし足の底からわき上がってくるガタガタ言う震えはどうしても止めようがない。

『よいわ。震えておれ。わらわがそなたに力を与える。そなたはわらわの望むように事を行えばよい。それがそなたの望みでもあるのじゃ』

何を望む？

「あ、あ、．．」

震えを押し殺して問う。

「あなたは、あの家に潜む物と手を組むつもりですか？」

そんなことを自分は望むというのか！？

『かの物はわらわに国を与えと言つておる』

「それをお信じになるのですか？」

『信じるわ。かの物が望むのは今の世を終わらせることのみ。その後生まれいづる世に興味は持つておらん』

「では、あなたもこの世を終わらせることをお望みなのですか？」

『決まつておろう。なんならわらわが死の前に味わった屈辱と苦しみをそなたもう一度味わつてみるか？』

瞬間的に由宇は滂沱（ぼうた）の涙を噴き出させた。一切の力が抜け落ちた。

「お、．．．．．」

おつしやるままにいたします．．．．．」

又イ姫は満足そうに頷いた。

『それでよい。わらわの望みはそなたの望みじゃ。共に手を取り合つていこうではないか』

由宇は恐ろしい。何が恐ろしいと言つて、絶対に抵抗できないことが恐ろしい。心の自由がないことが恐ろしい。自分と又イ姫の心が重なっていることが恐ろしい。自分と又イ姫が同じ人間であることが一番恐ろしい。又イ姫は自分に語りかける、絶対に背けないことを知りながら。

『新しい世でわらわは国を持つ。その国の主君にそなたがなるのじや』

「わたしが、王．．、女王に？．．」

『そうじゃ。女の治める女王国じゃ。ふふふ、気に入った男を好きだけ身近に侍らすがよい。全てそなたの物じゃ』

「わたしの物．．」

『そうじゃ。好きであろうが、男が？』

ほほほほ、ほほほほ、ほほほほ・・・

女たちの笑い声がエコーして起こった。いったい何人の女が由宇の体に巣くっている？ 自分の心は、そのどれほどを占めているのか？

『好きなだけ男を抱けばよい。新しい世では、それが理となる』

「ことわり？」

『今の世の理は終わる。女が男を支配するのが理となる。男は女に奉仕するだけの奴隷となる。男がそれを喜びとするのじゃ、どうだ、楽しかるうが？』

女たちの笑い声。由宇はどうしようもない恐怖と嫌悪感を感じる。それではまるで・・・、由宇が見たあの母親の心の中ではないか？

『どうした？ それがなんだと言うのじゃ？ そなたもそれを望んで、行ってきたではないか？』

由宇は思い出す、自分の日々を。夜の、生活を。ああ、嫌だ、不潔だ！ そんなことを自分が望むはずはない、操られているのだ、この女たちに！ 自分じゃ、ないっ！！！！

助けて・・・

由宇の心に無数の細くしなやかな手が絡みつく。心がとろけていく。抵抗できない。

『楽しめ。男の性など、われらの食い物じゃ。食らえ』

由宇の心は抵抗できない。舌なめずりする。食べたい、男が！・・・

由宇は涙を流した。彼女は、心の底から男を憎みきっている。彼女の心に一片の愛も残っていない。

三津木さん・・・。

その由宇の最後の思いまで、由宇の中の女たちは食らいつくした。空っぽになった由宇の心にヌイ姫は冷たく言った。

『そなた気付いておるか、そなたの魂に糸がつながれておることを？』

「いと？・・・」

『伝心の系じゃ。あの紅倉とかいうおなご、小賢しや』

「べにくらみき……」

由宇の心にどす黒い怒りがふつふつとわいてきた。ヌイ姫は喜んだ。

『そうじゃ。あの者、女のくせにこの世の味方になって我らの邪魔をいたす。いずれ、懲らしめてやらねばならぬな』

「……紅倉美姫！……」

『焦るな。まだかの物の力が手に入っておらぬ。待つのだ。あの者、いざとなれば命を懸けて我らの邪魔をいたすぞ』

「邪魔など、出来るものですか！」

『するぞ。あの者には出来るのだ。だから邪魔じゃ。あやつめ糸を伝ってこちらの動きを探っておるが、逆にわらわもあやつ動きがよつ分かるわ。あやつもすぐに我らの邪魔ができなくなる。その時を狙って行っぞ』

「はい！」

もはや由宇の心に少しも迷いはなかった。この世を滅ぼして新しい国の女王となる。すべてを、我が物にする！

ニタリと、由宇はヌイ姫と同じ笑みを浮かべた。

## 第17話 黒い柱

1時間以上が過ぎた。何事が起きるのかと見守っていたマスコミスタッフにも疲れと飽きが見え始めた。この砂浜に一般人の姿はまばらとなった。海に入ろうとする者もない。

呑気にお茶を飲んでいた由宇が嬉しそうにニタリとした。

「時来たり」

突然、猛烈な勢いで上空を舞っていたカモメたちがいつせいに海面向かって突っ込んでいった。狂ったように貝をついばみ、殻を砕き、はみ出た肉を食らった。カモメたちは繰り返し繰り返し海に突っ込み、貝を食いまくった。やがて、バタバタと落ちだした。痙攣を起こし、血を吐いて動かなくなった。それでも生きているカモメたちは貝を食い続け、同じ運命を辿っていく。何かが、彼らの野生の勘を狂わせている。

「あははは」

哄笑して由宇は立ち上がった。

「見なさい、鳥たちも自ら死を望んでいる。この世の終わりを知ったのよ！」

鋭い目つきで丘の上を仰ぎ見た。

「行くわよ。永遠に語り継がれる瞬間を見たかったらついてきなさい！」

口調はいつもの由宇に戻っている。しかしまとうオーラは圧倒的だ。もはや何人も逆らうことを許されない。等々力もゾロゾロ連なる一行に混じって歩き出した。三津木ディレクターにすまんと謝りつつ、もはやどうすることも出来ず、自棄だ、全部この目で見てやる、カメラに収めてやろうと思っている。

背後の砂浜には腐った貝を食って中毒死したカモメたちが山となっている。今度はそのカモメをカラスたちが寄ってきてむさぼり食っている。いずれ彼らも食らっているものと同じ運命を辿ることだ

ろう。白く焼けた砂浜が汚れ、悪臭の湯気を立てている。地獄だ。林の中は蝉たちが狂ったように鳴き立てている。ボトリと地面に落ちた。なおジージー鳴いてクルクル回り、ようやく動かなくなつた。いかに短い生を燃焼させているにしてもこの耳を圧する音量は異常だ。

「なにやってんのよ」

先頭を歩く由宇が振り返って叱った。

「あんたらが先に行かないで誰がわたしを撮るのよ？」

等々力は慌ててスタッフを引き連れて由宇の先に走った。坂道だ、等々力は振り返り振り返りして上った。木枝をくぐり抜けた強い陽光がまるでスポットライトのように由宇の顔を照らし出した。目の力が異様に強い。等々力は初めて由宇を美しいと思った。鬼神の如き。

林を抜けようというところであつとカメラマンがこけた。

「何やってんのよ、馬鹿！」

由宇はかまわず追い越していく。あおりの画になる。逆光が神々しくもある。カメラマンをこけさせたのは赤いハマナスだった。こんなところまで侵攻している。見ればアパートの駐車場のアスファルト、土台のコンクリートまで、張りだした根に押し上げられてひび割れ、めくれ上がっている。わずか1時間ほどで、凄まじい繁殖力だ。

由宇が歩くと割れ目から芽が息吹き、あつという間にトゲトゲの茎を伸ばし、緑の葉を茂らせ、つぼみを膨らませてパツと音を立てて真つ赤な花を咲かせた。次々血の花を咲かせながら由宇は歩いていく。

「何してる、追うぞ！」

呆然たる面持ちのスタッフをせき立てて等々力は由宇を追った。再び前に回って正面から捕らえる。力強く自信に満ちた顔はもはや別人だ。ついに家の敷地に着いた。あの世の景色だと等々力は思った。燃えている、真つ赤に。その紅蓮の炎になぶられて家を取り囲



む青いシートがバサバサ揺れている。その上空に立ち上る陽炎はますます濃く黒くなっている。

さあ、神の憑いた江戸由宇は何をするか？

しかし由宇は家を見てじっと沈黙した。沈黙が長く続く。等々力が不審に思ってよくよく見ると、脚が震えている。

「先生・・・」

顔が、唇が真っ青になって、歪んでいる。土壇場で元の由宇に戻ってしまったらしい。チャンスだ！と等々力は思った。今を逃して由宇をこの場から引き離す期はない！

「先生、離れましょう」

カメラを無視して由宇の腕を掴んだ。力ずくでも連れ出そうと思った。ドスン！と、腕に重い物が落ちて等々力はショックで頭がしびれた。自分の腕が切り落とされた幻覚を見た。それは幻覚であったが、腕は固まって動かない。裸の腕が見る見る青く鬱血していく。ゆらゆら、黒い武者の亡霊が見える気がした。刀を構えている。等々力の腕を噴き出した血がぬらぬら滑らかな刃を流れ落ちていく。せ、せんせえ・・・」

ボタボタ汗を滴らせて苦しい声で言った。由宇は泣きそうな顔をしている。さっきまでの自信満々の顔とは対照的だ。この顔は等々力によく知っている。美崎優であった頃の顔だ。よく心霊スポットでいじめてこんな顔をさせたっけ・・・。

「優ちゃん、逃げるんだ・・・」

ドスツと武者の刀が等々力の胸を突き刺した。

「優ちゃん・・・、に・・・、逃げろおお・・・」

等々力は崩れ落ちた。流れていく視界の中で美崎優の涙を見た。

「ごめんよ・・・」

視界が暗くなって、等々力は意識を失った。

「等々力さん？・・・」

由宇はしゃがんで手を伸ばそうとした。その手を真っ白な女の手

が取った。由宇は戦慄した。黒の絹地に豪華な金刺繍の着物を着ている。顔を上げるのが怖い。

「由宇」

耳に声を聞いて由宇はビクリと顔を上げた。又伊姫の美しい顔が微笑んでいた。

「ぬ、ぬい・・・、又伊姫様・・・」

又伊姫は由宇を立ち上がらせると家を指さし優しく言った。

「さあ、我らが城を打ち立てようぞ」

嫌だ、と由宇は強く思った。ここで従ったら自分は確実に地獄に落ちる。

臨兵闘者皆陣裂在前、

りんぴょうとうしゃかいじんれつざいぜん、えいつ！

由宇はこれでも仏教の修行を積んでいる。心に炎をまとう愛染明王様のお姿を抱いて助けを求めた。しかしその心を又伊姫の細くしなやかな指が撫でた。

「わらわこそがそなたの愛染明王じゃ。望むまま全てを受け入れよ」  
細い指が優しく由宇の膨らみを撫でる。逆らえない。由宇は受け入れた・・・

「社長！」

等々力と付き合いの長いサブチーフが等々力を抱き起こそうとした。由宇は等々力の丸い腹を蹴った。

「この役立たず。肝心なところで熱中症なんかになっちゃって」

「は？ あ、そうか・・・」

サブチーフは由宇の乱暴に眉をひそめながらもその説を受け入れ、とにかくもADに重い体を担ぎ上げさせた。

「さつさと車に連れていきなさい」

「は、はい」

由宇以外に又伊姫の姿は見えていない。由宇は再び自信を取り戻した顔で家に向き合った。

「禍々しい気を感じます」

等々力に代わってサブチーフが指揮してカメラがしっかりその晴れ舞台を撮る。

「惨劇の記憶が刻み込まれています。この地で命を絶たれたのは青木雄二さんばかりではありません。過去より延々累々と積み重なった人々の恨みの念が訴えてきます。地下に埋め込まれた怨念が重石に抑えられて成仏できずに苦しんでいます。あの家は重石です。あの家こそ元凶です！取り除いて地下の霊たちを解放しなければ忌まわしい呪いは次々に犠牲者を生み出していきます。家を、破壊せねば！」

目を爛々と輝かせ、自分の言葉に酔って、言い放つ。

「破壊せよ！解放せよ！」

A Dがヒツと怯えた声を上げた。灰色の人間たちがぞろぞろ周囲に集まってきている。なんのコスプレか、男たちはちょんまげを結って粗末な着物を着て、女たちは頬被りをして髪を結っている。背の低い、痩せた男女たちだ。

「あ、足・・・」

古典的に、彼らは足が透けて無かった。幽霊たちだ、真夏の太陽が照りつける真っ昼間から。

「ひ、ひい・・・」

悲鳴を上げつつカメラは彼らを撮った。こんなに間近にはっきり幽霊を撮った映像など、今度こそ真正正銘、ないだろう。別の局スタッフはやはり等々力組ほど根性が座っていない。身の危険を感じて逃げ出そうとした。立ち止まり、震え上がった。道路のこちらからあちらからぞろぞろ灰色の昔の幽霊たちが集まってくる。女性スタッフは悲鳴を上げて頭を抱えてしゃがみ込んだ。幽霊たちはゾロゾロその脇を通り過ぎていく。彼らは家の周りのハマナス畑に集まっていく。

「せ、先生！」

「あはは、あははははははは。解放だ、解放しろ！」

由宇は完全に行ってしまったている。

「嫌あく、もうこんな人の担当嫌よあく」

目立たぬようにそれでも頑張っつてついでにきていたマネージャーの加納が泣きながら携帯電話を押した。サブチーフが訊く。

「どこへ？」

「紅倉先生よ！ 他に誰がいるのよ！」

「はは・・・はっ！」

由宇が目玉を剥き出して加納に気をぶつけた。彼女はヒイツとひっくり返る。投げ出された携帯電話から女の「やめてー、はなしてー！」と泣き叫ぶ声が聞こえた。地獄だ。

集まった幽霊たちは乏しいながら何か期待を込めた表情で家を眺めている。彼らを従えて由宇は両手を掲げ、言う。

「解放だ、崩れろっ！」

突如ゴオツと風が唸り、家を囲む青いシートがバリバリとめくり上がり宙に舞った。いっしょに黒い粉が舞った。家は半ば以上崩れていた。表面が細かく動いてる。トタンがガバガバぶら下がっている。柱に蠢いている無数の白いものは、シロアリだった。自然の驚異が、今この瞬間家を一軒倒壊させようとしている。ボロツと、露出した柱が折れた。連鎖的にどんどん倒れていく。スカスカになった柱が屋根を支えきれず、傾き、ガラガラと瓦が雪崩を打って落下した。足元から根こそぎ傾げ、バリバリ、グシャン！と、家が倒れ、もうもうと木屑のほこりが舞った。

「あははははは、解放だ！」

幽霊たちも喜んで万歳万歳と両手を上げた。

「あははは・・・はは・・・は・・・」

由宇は白目を剥いて転倒した。サブチーフが這い寄ると由宇は気絶してなお笑っていた。

「撤収！ 撤収だ！ 逃げるぞ！」

駄目だこりゃ。もう手におえん。サブチーフも昨夜紅倉美姫といっしょに神社にいた。昨夜の出来事は悪夢のようであったが、これ

はもう大スペクタクルだ。こんな面白い見せ物はないが、身が保たない。

「逃げる逃げる！」

由宇を肩に担ぎ、加納を引き立たせて走った。幸い幽霊の群は彼らになんの興味も示さない。由宇の言うふたが開いたということなのか、彼らはハマナスの中に歩んでいた。灰色に覆われた土地が、また赤くなっていく。幽霊たちは進む内どんどん背が低くなっていった。階段を下りていくのではないらしい。ザクリザクリと低くなつていき、ドサリと倒れ込む。鋭いトゲたちに肉をこそげ取られ、力尽き倒れるようだ。それでも彼らの進軍は止まらない。後から後から幽霊たちは押し寄せる。コスプレの時代考証は江戸時代から明治に移ったようだ。年頃も子どもから老人まで様々だ。これはなんなのか？ まさかこれだけの人間がこの地下に埋められていたわけではあるまい。第一彼らは外からやってきて、あそこへ向かつているのだ。逆だろう？

スタッフはアパートの駐車場まで逃げてきた。先に等々力を担いできていたスタッフが青い顔で立ち尽くしている。

「う、撮せ」

等々力が呻きながら言った。生きていた。バンの後部シートで座席に手をかけてなんとか起き上がった。痛みで顔が青黒くなっている。

「た、他局に負けるな。俺たちの番組だあ・・・」

番組のため、テレビマンの意地。それもある。だが、この様子を紅倉先生に見せなければ。勇気を得た等々力組力メラマンたちが力メラを構えた。

等々力は車体を伝いながらBNTのバンに向かった。由宇がかつぎ込まれている。

「岳戸先生。大丈夫ですか？」

肩を揺すつても意識を取り戻さない。等々力はそこにあったペットボトルの紅茶を顔に振りかけた。由宇はうわっとビックリして目

を覚ました。

「な、なにすんのよっ！」

「先生！今の事態が分かってますかっ！？」

「え、なに？　なによ？」

等々力は由宇を車の外に連れ出しその光景を見せてやった。驚いて呆然としていた由宇だったが、やがて嬉しそうに笑い出した。

「可笑しいですか？」

怖い顔で睨む等々力にまったく反省するところなく言った。

「素晴らしいじゃない！　弥勒菩薩様の下生（げしょう）よ！」

「は、なに？　みろくぼさつ？」

由宇は嬉々と言う。

「この無知な罰当たり。この亡者の群をなんだと思うの？　皆救済を求めて集まっているんじゃない？　弥勒菩薩は救われなかった亡者を救済に現れてくれる未来仏よ！」

等々力もオカルトのプロだ、思い出した。

「弥勒菩薩つてのはたしか釈迦の死後56億年だかの未来に現れるっていうんじゃないか？」

今は56億年どころか1億年もはるかにたつてないだろう？

「56億年が何よ！　終末よ、地獄の口が開いてこの世が終わるのよ！　だから今弥勒様は現れてくださったのよ！」

なんとというご都合主義。でたらめだ！

「だからその地獄の口を開いたのは先生でしょう？　なんとかありませんか？」

由宇はアハハと笑って、等々力を睨んだ。

「バーカ。そもそも人間ごときに地獄にふたをしたり口を開いたり出来るわけじゃない」

今度は責任回避か。等々力は虚しくなった。すっかり元の岳戸由宇に戻ってる。おそらく自分が最悪の悪霊に操られていたことなんて覚えていないのだろう。その憑いている霊とセットで岳戸由宇というキャラクターは成り立っているのだ。しかし、とも等々力は思

う。忘れていい。思い出さなくてもいい、と。あの時自分が見た彼女の涙は、あれも本物だったはずだ……。由宇はすっかり興奮して得意になって言う。

「全ては御仏のご意志よ。わたしなど小手先の箸に過ぎないわ!」  
その通りなのだろう・・・。

突然、

ドンッ!

衝撃が突き上げた。爆弾でも落ちたようだ。地震だ。ドンドンドンドンドン!!! 震度7級の大地震が起こっている!

「うわあッ」

バンが跳ね上がり、危うくスタッフを押し潰しそうになってひっくり返った。ゴゴゴゴと地の揺れる轟音に混じってパリンパリンガラスの割れる音がした。皆地面に這いつくばった。必死になって頭を抱えた。樹木の裂け軋む音が悲鳴のように上がった。ゴゴゴゴゴゴ・・・

ようやく揺れが収まった。恐る恐る立ち上がって辺りを見渡すと自動車が数台ひっくり返り、アパートの窓はほぼ全てガラスが割れていた。脅えながら外を覗いている人影が見えた。

「・・・・・・・・」

圧倒された。地面が無くなっている。家の建っていたハマナス畑が、完全にえぐれて深い穴になっている。アスファルトの道路はひび割れて宙に浮き、海側の林は全て倒壊してはるか下まで流されていた。無数にウヨウヨしていた幽霊たちはすっかり姿を消していた。

「あれは、なんだ?」

大穴の中に、ちょうど家が建っていた辺りに、木の塔が立っている。地下に埋まっていた建造物が土が流れて現れたのだ。土の支えを失って、グラグラ揺れて、崩れた。崩壊するとき、その内部に階段がグルグル巡らされているのが見えた。

等々力は走った。痛みなど、もう忘れた。

「社長、危ないですよ！」

「俺は見たんだよ、あそこに何かがあるか！　今しかねえ！封鎖されたら、もう見るチャンスはねえぞ！」

カメラマンも走った。みんな追いかけていく。由宇も、白いヒラヒラドレスとハイヒールを忌々しく思いながら、後を追った。

「うりゃ！」

崩れた急斜面を転げ落ちないように気を付けて滑り降りた。

「社長、待って、撮らせてください」

カメラマンの到着を待つて等々力は散乱する木材を慎重に踏み越えていった。古い木材だ。黒く水が染み込んで、グズグズになっている。太い毛がたくさん生えている。ハマナスの根だ。こんなに深くまで伸びていたのか？　10メートルはある。がれきの中心に小さな部屋があった。そこは崩れておらず、下部が地面に埋もれていた。そこにびっしり根が集中している。等々力は近づき、覗き込んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉を失った。

「どけ！　どきなさい！」

由宇がスタッフをかき分け、等々力をどかせて、それを見た。カメラを振り返り、さも自分の手柄であるように胸を張って言った。

「見なさい！　これこそが、元凶！　バケモノの正体よ！」

少女が逆さまに突き立っている。すっかりほこりにまみれているが白のワンピースを着ている。ずたずたに裂かれ、裾はめくれ太ももが露出している。逆さの太の字に広げた手足に大量の根が絡まり、それが少女の逆立ちを支えていた。そして、

少女の頭は黒い物にすっぽりはまっていた。頭部がまるまる飲み込まれ、白いうなじが覗いていた。

少女の頭を飲み込んだ黒い物、それは、奇怪な姿をした黒いミイラだった。人のようである。首があり、長い髪の毛が生えている。



しかしその顔はグロテスクな深海魚のようで、まさにあのビデオのバケモノの顔だった。裸の上半身は人間の女のように乳房があり、腕があつたが、首が長く異様になで肩だった。長い首は少女の頭部を飲み込んで丸く膨れている。下半身は、魚のようだった。大きな鱗が覆っている。尻尾にひれもある。だがカエルに変体する途中のオタマジャクシのように強靱な太ももの脚も生えていた。やはり鱗に覆われ、足にひれがついていた。

人魚。しかしそれは童話の中のロマンチックで美しい姿ではなく、もつと生物としてリアルで、太古の昔の恐竜の仲間のようなだった。そして、何より見る者を戦慄させるのが、腹部だった。丸く膨れた腹が裂け、そこから同じ顔をした子どもたちがはみ出していた。3匹。膜の張った大きな目をして苦しそうに口をあえがせたかっこうで黒く固まっている。この人魚は母親なのだ。

しかし、しかし、この状態はいつたいなんなのだろう？ いったい何者が無惨にも少女の頭を怪物のミイラの口に突っ込むような真似をしたのだろうか？ いったいなんのために？ 殺人事件のあった家だ、警察の鑑識が念入りに調べたはずだ。この地下へ下りる階段が何故発見されなかったのだろうか？

「せ、先生・・・」

等々力が恐る恐る訊いた。

「いったいどうでしょう？」

由宇は余裕綽々の顔で言った。

「かわいそうでしょ、引き抜いてあげたら？」

いいのだろうか？ まさかこの状態でこの少女が生きてはいまい。現場保存をしなくていいものだろうか？ ミシッと地下室の板壁が軋んだ。ここも崩れそうだ。

「ちゃんと撮ったな？」

カメラマンが頷く。

「手伝え。ミイラごと運び出すぞ」

等々力とスタッフ3人が地下室に下りた。根がびっしり張ってい

てクッションとロープになる。人魚のミイラは床に腰掛けたかっこうになっている。現代人とはば変わらない大きさだ。せーの、と4人でミイラを持ち上げようとしたが、ミシツとした重量がかかって持ち上がらない。根に押さえられているせいだろうか？

「おい、誰か車からノコギリ持ってこい」

スタッフが走り、取りあえず缶切りセットのナイフで根を切ろうとしたが丈夫でまるで歯が立たない。ミシリと音がして土がポロポロ崩れてきた。

「社長、拙いですよ、生き埋めになっちまう！」

等々力はイライラ状況を観察した。地下室は約3メートルの高さ。埋まってしまったら、掘り出すのはそれなりにたいへんだろう。この穴自体全体が崩れてこないとも限らない。

「仕方ない、口を開かせてとにかく女の子だけでも運び出そう」

等々力はミイラの頭と下顎に手をかけた。ミイラは思ったより肉の重みと弾力が残っている。

「いいか、引っ張り上げるよ」

他の3人が少女の体を掴む。

「せーの」

等々力は両手に力を込めた。亡者に斬られた腕が燃えるように痛い。

「ちくしょう・・・」

思った以上にミイラは頑丈だ。いったいどうやって口を開かせて少女の頭を突っ込んだのだろうか？

「うおおお・・・」

血管を浮き上がらせて思い切り力を入れた。ミイラなんかもう碎けたってかまうものか！

動いた！ と思ったら、それは予期せぬ逆の動きだった。

「うわあっ！」

少女の体を掴んでいた3人も悲鳴を上げて飛び退いた。

ブチ、バキバキッ。

ミイラが、少女の首を噛み切った。

ミイラが、動いた、自分で。

少女の体が根に引つ張られてまるでロケットのように打ち上げられた。ドスンと地上スタッフの真ん前に降ってきた。皆悲鳴を上げて飛び退いた。少女の体に、当然首はついていない。食われてしまった、ミイラの怪物に。

ミイラは、ゴクリと少女の頭を飲み込むと、様子が変化してきた。表面に水気が現れてきた。カサカサに乾いていた目玉に黒目が浮いてきた。

「まさか・・・」

甦ろうというのか？

「に・・・」

等々力は戦慄して叫んだ。

「逃げる！」

4人は慌てて根をたぐつて這い上がった。地上に這い上がると等々力は首のない少女の体を脇に抱えてカメラマンを怒鳴った。

「もういい！ 逃げる！ ここから離れるんだ！」

「社長、見てください！」

「なに？」

振り返って等々力はまた驚いた。ミイラが黒光りしてどろどろ溶けていつている。甦ろうとしていると思ったのは自分の勘違いか？

「なんだ、この臭いは？」

生き物の臭いではない。これは・・・

「ガソリン？」

溶けながらバケモノは床下に染み込んでいつている。黒いシミが広がっていく。ゴゴゴゴ・・・とまた足元に不穏な震動を感じた。

「に、逃げるぞ！」

今度はカメラマンも従った。他のみんなは、由宇も含めて、とっくに逃げ去っている。下りてきたのとは反対に斜面が崩れて流れた砂浜へ。等々力は叫んだ。

「逃げる、もつとだ！ 走れ走れ！」

立ち止まっていた皆がまた走り出した。バケモノより首なし死体を抱えて喚いている等々力が怖い。

ドンツ！、と音がして、空に真っ黒な柱が立った。石油が、噴出したのだ。一気にガスの臭いが充満した。

「走れ！走れ！走れ！」

皆砂浜を必死になって走った。黒い飛沫が降ってくる。真夏の炎天下、ガスが充満し石油の降り注いだ林に火の手が上がった。あつと言う間に燃え上がっていく。アパートの辺りにも黒い煙がわき真つ赤な炎が立った。

「ちくしょう」

等々力は海にジャブジャブ入った。鳥たちの死骸がウヨウヨ浮いている。地獄だ。まだ危険だ。浜に上がってとにかく走って走って走りまくった。

天をもうもうと黒煙が立ち上り、下から赤く照らし出している。

大火事だ。付近の住宅、病院も危ない。

「なんてこった……」

ようやく仲間たちのところに追いついて、海水浴客たちといつしよに等々力も呆然たる体でこの大スペクタクルを眺めた。まさに人知を超えたこの世の物とも思えぬ光景だ。

等々力の抱える首なし死体に気付いてようやく海水浴客たちが悲鳴を上げた。

そうだ、まさに地獄の景色だ。しかし、地獄はまだほんの入り口が開かれたに過ぎないのだ……

## 第18話 生き人形

「あれ？ 今地震なかったか？」

「さあ？ 電車の振動じゃないか？」

「そうか・・・」

地震かと思ったのだが、馬木と角谷は今JR駅近くの線路脇の道路に面して小さな店の連なる商店街に来ている。昼に由利先生から青木先輩の形見のフィギュアを押し付けられてから2軒その手の店を回ってきたのだが特に収穫はなかった。この小さな店が一番マニアックそうだ。

入ると、店の名前「トイストリート」の由来か、入り口は狭いながらずつと奥があつて予想外に広い店だ。居るだけで赤面してくる嬉し恥ずかしな代物がずらりと並んでいる。一番奥の倉庫の手前で小机に向かつて帳面を付けているおじさんに声をかけた。

「すみません」

「はい、いらつしやいませ。なんでしょう？」

丸メガネでプラモデル少年がそのまま大人になったような50過ぎのにこやかな人だ。店長だろう。

「ちよつと見てもらいたい物があつて。これなんです、どうでしょう？」

馬木はトートバッグから3個の透明ケースを出した。店長はほいほいと机の上に並べて一つずつ手に取って眺めた。

「あー・・・なるほどねえ」

嬉しそうにニヤリとする。

「これ、君たちが作ったの？」

「いえ。これを作った人を捜しているんです。心当たりありませんか？」

「うーん・・・ちよつと分からないなあ」

「そうですか」

なんだ、もったいぶって、がっかりだ。馬木の様子を見て店長は笑った。

「ご期待に添えなくてごめんよ。たしかに珍しい方だね」

角谷が言う。

「珍しい方ってことは、タイプのまったくないってわけでもないんですか？」

店長はまたさっきのニヤリとした笑いを浮かべた。

「そうだね。こういう勘違いしたフィギュアを作る素人ってけっこういるんだよね。おっと失礼。これ、君たちが作ったんじゃないんだよね？」

店長は面白そうに3体のフィギュアを眺めて嬉しそうにしゃべる。  
「なかなか良くできているよね。でもねえ、フィギュアファンというのは芸術的な彫刻作品が欲しいわけじゃないんだ。あくまでそのキャラクターを自分の物として所有したいんだよ。キャラクターを勝手に解釈して変えちゃあ駄目なんだよ」

見てごらんよとずらりと居並ぶアニメのキャラクターたちを示す。  
「ほらね、みんなちゃんとそのキャラクターの顔をしているだろう？　こういう風にね、作家の個性が全面的に出ちゃった物って、好まれないんだよ」

「でも、これは実在の女優でしょ？」

角谷に示されて店長はアメリカのSFシリーズの女性フィギュアを取り上げた。

「スタートレッカーのボーグレイディーね。まあこれなら売れるかもね。でも、大した値段は付かないな。熱狂的なファンはいるんだけど、絶対数が少ないからね。ははは。これが日本のアイドル女優のキャラクター物なら売れるんだけどね。リアルなものじゃないんだよ。やっぱりね、その、女優のファンでなきゃ欲しがらないから。どんなに良く綺麗にできていても、例えば、名前も知らないようなプロのモデルじゃあ誰も欲しがらないよ。キャラクターなんだよ、あくまでね。ファンはそのフィギュアを通して自分とそのキャラク

ターの物語を再現して楽しむんだよ。ま、子どものおままごとと似たようなものだね。フィギュアのファンは20代30代の男が中心だから、もっとこう、ラブアンドセックスな面が強いけどね」

「はあ・・・」

ちよつと馬木たちには理解できない世界のようなのだ。

「じゃあ・・・つまり、これは全然ダメ？」

「そうだね・・・」

店長は3体のフィギュアを眺めて唸った。

「需要があるとすれば・・・そっちのほうかな？」

裏側の通路にのれんで仕切られたコーナーがある。紺色ののれんにはピンクのハートをバックにセクシーな女性のマンガが「子どもはダメよ」と投げキッスをしている。店長が言い訳のように言う。

「まあ、露骨に子どもはダメっていうのはうちじゃあ扱ってないけれどね、アニメのキャラなんかでも露出の強すぎるのはやっぱり子どもには見せない方がいいよね？」

3体のフィギュアは特に露出が過激なわけではないのだが。

「まあ需要があるとすればそっちの方かなと思つてね」

「つまり、リアルにエッチな物を作れば、まあ売れるかな？ということ？」

「そういうこと。キャラクター物に比べればうんと需要は小さいけれどね。完全にマニア向けだね」

「はあ・・・」

マニア向けって、アニメやゲームのロリコンキャラと健全な成人女性のフィギュアとどっちがマニアがよく分らないが、それがフィギュアの世界らしい。なんだかこの作者が浮かばれない気がする。やはり作者に心当たりがないということなので馬木たちは礼を言つて出ることにした。帰りがけチラツとのれんの中を覗いてみたが、やっぱりアニメ系のフィギュアばかりだった。この世界でもやっぱりこのフィギュアは異質だ。

駅の駐輪場に自転車を止めてある。歩きながら角谷と話した。

「このフィギュアってそんなに駄目なのかなあ？」

「良くできているとは思うけどねー。でも本質的なところですれているらしいというのはあの店で十分分かったな」

「そうだな」

この作者は自分の作ったバケモノマスクが世間をこれだけ震撼させている状況をどう思っているのだろうか？　ざまあ見るとほくそ笑んでいるのだろうか？

駐輪場は駅の反対側なので階段を上がって構内を歩く。中心地の駅なのでけっこう広い。歩いていくと思いがけず賢造叔父さんに出くわした。

「あれ、叔父さん、お出かけですか？」

「うん。長陵まで行ってきた。きのう久しぶりに新聞見たら仏像展の記事が載ってただろう？　で、近代美術館まで見に行ってきた」

「へー、けっこうなご趣味ですねえ。で、どうでした？」

「うん、面白かったよ」

叔父は目を輝かせてしゃべりだした。

「鎌倉時代の肖像彫刻が2体あってね。あ、そうだ、君たち秋に修学旅行で奈良京都に行くんだろう？　だったら絶対奈良の国立博物館は見てきなさい。素晴らしい彫像がたくさんあるから。いやあ、鎌倉時代の日本の彫刻は間違いなく世界一だね。運慶快慶は知っているだろう？　東大寺の金剛力士像ね。あの力強さと存在感と写実性とデザイン性、うーん、素晴らしい！　でもねえ、もつとすごい彫刻作品があるんだぞ。興福寺には絶対に行つて来なさい。世界美術史上最高の肖像彫刻があるから。」

おっと、せっかく見てきたんだから我が郷土の仏像彫刻の話をしてないかね。驚いたね、新潟にもあんな素晴らしい肖像彫刻があったんだね。やっぱりね、鎌倉時代の物なんだよ。えーと・・・、名前なんか全然覚えてきてないけれど、座像と立像と2体お坊さんの肖像彫刻があつてね。ところがさあ、みんな駄目だね。見方がまるつき



り分かってない。

そうそう、閻魔様の像もあつてね。これをさあ、みんな上から見ちゃっているわけだよ。閻魔様だからね、どつかとあぐらをかいて座っているわけだよ。台の上に載せて展示してるんだけど、この台が低くてね、みんな閻魔様の顔を上から見ちゃってるわけだよ。考えてみたまえよ、ふだんはお寺の本堂に飾つてあるんだよ？ それをどうやって見る？ 正座するだろう？ 床の上で。すると、台の上の閻魔様を見上げることになるんだよ。するとだね、閻魔様の怖い顔にがっと思われることになるんだよ。そこで我々俗世の人間は震え上がってへへ・・つと、日頃の罪を顧みて反省するってわけだ。閻魔様を上から見下ろしちゃう駄目だよね！。

で、その2体の肖像彫刻の方ね。座像の方は胸くらいの高い台に乗っているんだけど、これを正面から距離を計って見るとピタツと目が合うんだよ。薄い皮膚に骸骨の浮き出たおじいさんなんだけどね、本っ当にそこに居るように感じるんだよ。見てるんじゃないかと思われてるんだよ。目の力が向こうの方が数段上だから。なんかお説教されそうでね、あはははは。

立像の方は辻説法って感じかなあ。こっちは丸いお地藏さんみたいな顔の若いお坊さんなんだけど、ちよつと上向きで念仏を唱えているんだ。こっちはね、斜め下から見ると天井のライトが玉眼、ガラスの目玉ね、それに当たって生気が宿るんだよ。これまた本当にそこに立って居るようだね。存在感があるっていうより、まったく生きているんだよね。両方とも黒くて彩色はされていないんだけど、これを彩色したら江戸時代の生き人形になるんじゃないか？ 不思議と彫刻の方は鎌倉時代だけなんだよね、これだけリアルで力強いもの。その前も後も、精神的なものかなあ？ 彫刻としちゃあぜくぜんつまなくなっちゃうんだよねえー・・」

叔父さんはべらべら一人でしゃべって一人でウンウンと感心した。ようやく、おつと、と現実に戻ってきて、

「君が角谷君かな？ ヨツくんがお世話になっています」

と角谷ににこやかに挨拶した。角谷も挨拶して、おいとトートバッグを示した。

「叔父さん、それだけ彫刻が好きなら、フィギュアなんかどう？」

「好きだよ。物によるけどね」

「これなんかどう？」

通路の真ん中で開くわけにもいかないので丸いベンチの並ぶ休憩所に連れていって3体のフィギュアを見せた。見た瞬間叔父さんはへえーと声を上げて見入った。

「面白いね。なかなかよくできてるじゃない。気持ちはいよく分かるねえー」

店長と同じようにほろ苦く笑った。

「やっぱりフィギュアとしては駄目？」

「まあ売れないだろうね。かわいそうに。不遇の内に彫刻刀を折ったって感じじゃない？」

「折った？ もう現役じゃないってこと？」

「だってこれ、もう56年前のキャラクターばかりじゃない？」

「ああ、なるほど」

でも店には昔懐かしいキャラクターもいっぱいあったような気がするが・・

「最近フィギュアもつまらなくなっちゃったよね。みんな印刷になっちゃったからね。ペタってきれいにアニメ目のシールを貼っただけの顔なんて全然面白くないと思うんだけどねえ。ファンはそっちの方がいいのかなあ？」

叔父さんは思いつきり立体的に彫り込まれた異質のアニメ美少女の顔を見てしみじみ言った。

叔父さんと別れて歩き出して角谷が言った。

「おまえの叔父さんでなんというか・・、美人だよな？」

「まあ・・、そう言うかなあ？」

叔父は外に出ると化ける。女の人が一変化粧して別人になる

ように。ただいつもの無精ひげを剃るだけなのだが、顔つきが変わる。たしかにもともと女顔なのだが、造りがどうこうというより、キャラクターが余命幾ばくもない「薄幸の美女」っぽくなる。年を取ってガリガリに痩せた分美人度は下がったが、男っ気が抜けてますます女性度は上がった気がする。

馬木は角谷に子どもの頃の叔父さんとの思い出を話した。

「へえー、なるほどねえ。おまえがどこかお坊ちゃんっぽいのはあのおじさんが原因か」

「なんだよ、お坊ちゃんって」

「褒めてんだよ。おまえって人の悪口言わないだろう？ そのくせけっこう怒りっぽくて、それでいてお人好しで抜けたところがあるんだよな」

「悪く言ってるじゃないか」

「あはは、悪りい。でもそういうところが女子にもてるんだぜ？」

「はあ？ もてるのはおまえだろう？」

「バツカだなあー。そういうところがお坊ちゃんなんだよ。俺にキヤーキヤー言ってるのなんか表面だけだよ。おまえクラスの女子にもけっこう隠れファンが多いんだぜ？」

「うっそだあー」

絶対信じられない。

「へへ、バーカ、そう思ってる。おっと、電話だ。お、由利先生だ。もしもしー、角谷です。え？ テレビですか？ いや俺たち今駅を出るところなんですけど・・・、火事？ 海岸の林で？ 分かりました、えーと、待合所に行ってみます」

なんだ？

「なんかたいへんらしいぞ。テレビのあるところに行くぞ」

駅の中に戻って待合所に入った。満員だ。みんな深刻な顔で大型のテレビに見入っている。特別報道だ。海岸で火事が起こっている。もうもうと黒煙が上がり防砂林がかなりの範囲で燃えている。付近

の病院では患者の搬出作業が殺気立った雰囲気の中行われている。

「おい、ここって・・・」

金森先輩の入院している五十嵐大学付属病院だ。すると燃えているのは、あの家のある辺りか？

『火災の起きる数分前この辺りに局地的にマグニチュード8クラスの大きな揺れが観測されており、それによって起きた防波堤の丘の崩落によってできた大穴から石油が噴き出し、気温34度の炎天下の中、林の中で何らかの発火があり、充満したガスと霧状の石油に引火し爆発的に火災が広まったと見られます。現場は5日前にテレビのオカルト番組の取材後にスタッフの一人が殺害された家のある林の中です。その家を中心に崩落が起こり、突如石油が噴出したと目撃報告があります』

やっぱり。

『局地的な地震の原因として、震源はごく浅く地中に埋没した不発弾の爆発によるのではないかとの見方もありますが、揺れは1分近く続いたとの観測から専門家からは否定的な意見が出されています。繰り返してお伝えします。先ほど3時ちょうど新潟県青山市の海岸で防砂林の火災が起こり、火は今も勢力を増して燃え広がっています。市は付近の住民に対し速やかな避難を勧告しており・・・』

「たいへんだ・・・」

なんという展開だろう。呪いの力とはそんなに強大なものなのか？

『火の出る前、崩落現場から地下に埋まった少女の遺体が発見されたとの情報もあります』

「え・・・・・・」

一瞬にして頭がショートした。真っ白になって、何も考えられない・・・・・・

かすみは結局今日もアルバイトを休んで家にいた。消防車と救急車のサイレンがやかましく鳴り続けている。

「ちよつと、かすみー、テレビ、たいへんよ。火事よ、すぐその  
関屋浜で」

母親に呼ばれて窓から外を覗いていたかすみは頭を引っ込めた。  
2キ口は十分離れているが、ここまで黒煙は流れ、きな臭い臭いが  
している。

「火事だつて」

すっかり慣れてしまつて机の上の葉子の生首に話しかけたかすみ  
はさすがにヒツと息を飲んでおののいた。生首が白目を剥き、叫ぶ  
ように口を開いて静止している。

「ちよつと、葉子ちゃん？ またわたしを脅かそうとしているの？」

おーいおーいと小さく呼びかけて、反応がないので震える指でそ  
つと頭に触つてみた。

「ひつ・・・」

ちよつと触れて、急いで指を引っ込めた。固形物の感触はないが、  
ぬるつ、というか、べちゃつ、というか、湿り気が感じられた。気  
持ち悪く思いながら指を嗅ぐと生魚の臭いがした。

「葉子ちゃん・・・」

呼びかけても生首は恐ろしい表情を浮かべたまま固まっている。

「かすみー、分かつてるー？ 火事よー？ ここまで火は来ないと  
思うけど、逃げる準備はしておくのよー？」

かすみは生首を見守りながら後ずさり、ダダダツ、と階段を駆け  
下りた。

等々力たちは事情聴取のため警察署に連れていかれた。事故の検  
証のため録画したビデオテープの提供を求められた。拒否したが、  
速やかな提出を強制された。等々力が事件に関わったのは2度目だ。  
しかも今回は少女の首なし遺体を抱えていたのだ。協力を得られな  
いのなら事件の容疑者扱いに切り替えると暗に脅された。結局逆ら  
えずテープを提供した。が、

そこは抜け目ない、等々力は重要なテープを選んでADの一人に託して事前に現場から逃走させていた。まず紅倉先生が三津木ディレクターに連絡すること。火災のせいか現場で携帯電話は使えなかった。今は使用が禁止されている。そしてテープを紅倉先生に見てもらって、急ぎ東京へ持ち帰ること。番組はもうあさってなのだ。ここで命がけで撮影したテープを警察なんかには没収されてなるものか！

等々力は事情聴取の最中に倒れてそのまま警察病院に収容された。ひどい高熱だった。当然だろう。腕と胸が真っ青に内出血していて、その体で遺体を抱えて全力疾走したのだ。よくここまで保ったものだ。

岳戸由宇も病院のベッドで寝かされていた。こちらは興奮状態が高じて意味不明のことを大声で喚き、相当感情が高ぶって医師が危険と判断し、鎮静剤を射って休ませているのだ。

現場にいたスタッフの内二人がいなかった。一人は警察が到着する前に脱出したADと、もう一人は岳戸のマネージャーの加納だった。彼女は崩落した穴に下りてこなかった。それ以降彼女の姿を見た者はいない。そのまま逃げていけばよし、もしうろろしていて火災に巻き込まれてしまったなら・・・哀れだ。

さて、使命を持って逃走したADは宮野忠男という。

宮野は等々力にテープを詰め込んだジュラルミンケースを託されると砂浜を走った。丘の上の防砂林を焼く火の手は早く、パニックに陥って逃げまどう海水浴客たちに混じって走って走って走りまわった。消防車のサイレンが鳴り響き、ようやく火の広がりが弱まると黒煙をかいくぐって林を横断して住宅地へ逃れた。表通りへ向かいながら携帯で三津木ディレクターに電話した。つながった。

状況を説明して指示を仰いだ。芙蓉さんから電話があったという。向こうでの仕事が片づいて急ぎこちらに向かっていると。分かり易いところということで駅向こうのファミリーレストランを指定され

た。そこで紅倉先生と合流して、ホテルを予約しておくからそこで先生にビデオを見てもらい、終了しだい今夜か明日朝一番の新幹線で戻ってくるように、とのことだ。芙蓉さんの携帯にメールを送っておくからじきに携帯にかかってくるはずだ、と。

タクシーを捕まえて駅に向かわせた。シートにもたれかかってようやくほっとした。

「お客さんたちテレビの人？」

お客さんたち？　こっちの方言でそういう言い方をするのだろうか？

「ええ、まあ」

「すごいことになっちゃったねえ。お客さんたち逃げてきたの？　ドラマ？　映画？　あれじゃあ撮影できないよねえ」

なぜドラマや映画の撮影だと思う？

「たいへんだつたるうけどさ、お願いだから血糊なんかでシート汚さないでね。あれ、ちゃんと落ちるの？　俺もちよつとビツクリしちゃったからね。シートに血がべっとりなんて、他のお客さん乗せられないからねえ」

いったい何を言ってる？　チューブラーベルズの着信が鳴り響いた。

「はい」

「宮野さんですね？」

紅倉先生だ。

「今すぐタクシーを降りてください。できるだけさりげなく、急いで」

「・・・・・・・・・・」

駄目だ・・・遅かった。宮野も見ってしまった、ジュラルミンケースに土と血に汚れた腕が置かれている。ゆっくり目を動かすと、となりに青い顔をした髷を結って粗末な着物を着たお百姓さんが乗っていた。

「う、運転手さん。そこでいい。止めてください」

「はいー」

ウーウー、シャンシャンシャン、と消防車の迫ってくる音がする。  
「すみません、ちょっと待ってくださいね」

消防車の行きすぎるのを待つ気だ。早く、早くしてくれ！

ドン！、とフロントガラスに何か降ってきた。

「うわああっ！」

血まみれのお百姓さんだった。両手を広げてフロントガラスに張り付いてじっと運転手を見ている。運転手は慌ててブレーキを踏もうとしたが、

「ひいいいいいっ・・・」

宮野も見た。運転席の足元にうずくまって別のお百姓さんが運転手の足を掴んでいた。

「くそっ」

ケースを肩に掛けていたせいで右側に乗ってしまった。宮野は一か八かドアを開けて道路に飛び降りようとした。

「があっ」

「うわあああっ！」

となりのお百姓が恐ろしい顔で襲いかかってきた。宮野は思った、オレ、これ、前に撮ったぞ。

キイイイツ、とブレーキ音を軋ませながらタクシーは前の車にぶつかって反対車線に飛び出した。大きな消防車が突っ込んできて、タクシーは転げて大破した。運転手も宮野も即死だった。

馬木の両親は共働きの今日は共に帰りが遅い。馬木は一人夕食を取り、テレビのニュースを見ていた。

火事は3時間後に山林火災用の科学消化剤をヘリコプターで大量に撒いてようやく収まったそうだ。死者が出ていた。50軒以上全半焼する大火事になり、現在3人が死亡、7人が行方不明になっていた。3人の死者の中に金森先輩が含まれていた。大学病院も一部



が焼けたが、避難が早かったので人的被害はなかった。ただし、金森先輩だけ何故かまったく顧みられることなく病室に置き忘れられ、そのまま煙に巻かれて窒息死した。病院長が何故こんな事態が起きたのか原因究明を徹底して行くと苦しい顔で会見している。

火災の原因となった石油が噴き出したのはやはりあの家のあった場所だった。その前の局地的地震で完全に崩落していた。石油の噴出は4時間経った今も勢いは衰えたものの継続的に続いている。新潟県には青山市からおよそ60キロ離れた出雲崎町に明治時代に本格的な掘削の始まった油井があり、その沖で海底油田が世界で初めて開発された。しかし青山市の地下で石油の埋蔵が確認されたことはなく、今回の石油噴出が地下から湧出したものか、人為的に貯蔵されていたものか不明である。

土地の所有者である桜野卓蔵氏は地元で有数の資産家であり実業家である。入院中の氏に代わって不動産会社社長の息子が記者会見を開いている。長男が次男が知らないがこれが葉子の母の兄の一人だ。大きな丸い頭がはげ上がり、メガネをかけた奥まった目が白目がちでいかにも情がなさそうだ。しかしマイクに向かって話す顔はどこか嬉しそうだ。

「亡くなられた方、ご遺族の方には心より弔意をお送りします。あの土地は我が桜野家先祖伝来の土地であり、もともと漁師であった我が先祖が漁の安全を願って神社を建立した場所と聞いています。神社は既にありませんが、神聖な土地として代々受け継ぎ、守ってきたものであります。やはり何か特別な意味のある土地であったのでしょうか、地下に石油鉱脈があったと分かる話は何も伝え聞いておりません。土地の崩落が不発弾によるものとの話もあり、いずれにいたしましても我が桜野家及び桜野不動産の管理能力の外であったとどうかご理解願いたく存じます。もちろん責任の所在はともかく、被害に遭われた方々への経済的支援というものは考えております。どうぞご理解ください」

「わき出した石油の所有権はどうなるのでしょうか？」

「それは当然我が家の土地ですから、全てとは言わないまでも所有権の一部は共有するものと考えます。被害者の方々への補償もありますし、その点は速やかに確定していただくよう関係機関には望みます」

「開発には桜野グループが当たるわけですか？」

「当然そうなると思います」

「ところで崩落した家で殺人の被害に遭った青木雄二さんは桜野一族の一人という話がありますが？」

「それは違います。殺害された青木さんと桜野家はなんの関係もありません」

「家の崩落現場から、つまりあの家の地下室から少女の遺体が発見されたという情報もありますが？」

「ニユースは時間を延長して続けられる。」

「当方では承知しておりません」

「5日前から行方不明になっているお嬢さんではないかという話もありますか？」

「勝手な噂をでっち上げないでいただきたい。コメントは控えさせてもらいます」

「今回の地震と大火事も一連の呪い騒動の一環という見方もありますか？」

「コメントするようないいでもないでしょう」

会見の中継は終わり、スタジオで専門家を交えて事件の推移や被害の具体的な様子などが検証された。

角谷から電話がかかってきた。

『よお、オット。大丈夫か？』

「なにが？」

『おまえ死にそうな顔しながら帰っていったじゃないか？ 事故にでも遭わないかって心配してたんだぞ』

「そりゃどうも。死んでないよ」

『けっこうでした。なあ、あんまり思い詰めるなよ。まだそうと決まったわけじゃないんだから』

「ああ・・・」

『由利先生も調べてくれてるからさ。当時現場に取材を受けたテレビのスタッフがいたらしいんだ。そっちの方に当たってるみたいだから』

「うん・・・」

『大丈夫なんだな？　じゃ、また明日な。それでいいんだろ？』

「うん、また明日な」

そうと決まったわけじゃない。

発見された死体が葉子と決まったわけじゃない。

じゃあ、誰だっというんだ？

葉子が死んだ。

自分はそんなにショックを受けているだろうか？

死にそんな顔をしていた？

そうか、やっぱりそれだけショックを受けていたんだ。でも、ショックを受けていなければいけないように思う、この後ろめたさはなんなんだろう？

葉子が死んで、ほっとしているような気持ちはないか？

葉子は自分が思っていたような少女ではなかった。彼女が無事生きて戻ってきて、元通りの関係に戻るかという・・・正直なところ自信はない。

面倒を嫌う、自分が思っていたのとは違う葉子を嫌う気持ちがなかったか？

ショックを受けてほっとしている自分が嫌だ。純粹に彼女の死を悲しめない自分が嫌だ。・・・。

ふと、唐突にある言葉が甦った。

「いいんだよ、これで。人形は魂を吸うからね。あんまり本物そっくりに作らない方がいいんだ」

叔父さんの言葉だ。なんで今こんなことを思い出す？ あれはいつ言っただろう？

そうだ、馬木が小学校に上がるとき、それを記念しておじいちゃんに叔父さんが馬木の人形を作ってプレゼントしたのだ。今もおじいちゃんの机の上に飾ってあるはずだ。黒いランドセルをしょって、黄色い帽子をかぶって、まん丸の顔でニッコリしている。

馬木がそれを見て似てないとクレームを付けたのだ。

「いいんだよ、これで。人形は魂を吸うからね。あんまり本物そっくりに作らない方がいいんだ」

その時叔父さんがそう言ったのだ。

そうだ、叔父さんは粘土彫刻はよくやっていた。叔父さんの部屋にたくさん並べられていた。女の人の像ばかり。「おじさん、エッチー」と言ってからかったから、裸像が多かったのか。騒いで棚から落として一つ割ってしまった。その時も叔父さんは全然怒らないで、代わりに泣きまねをして、言った。

「あーあ、プラスチックだったなら割れなかったかもしれないね」

馬木がいつぱい持っていたハンバーガーのおまけのオモチャ人形のことを言ったのだろうが・・・

プラスチック素材で作ったことがあったのではないか？ つまり、フィギュアだ。

嫌だ、何故今そんなことを思い出す？

昼間叔父さんがさんざん熱弁していたじゃないか、展示されていた肖像彫刻の素晴らしさを。もし叔父さんがフィギュアを作るとしたら・・・やはり青木先輩が持っていたああいうフィギュアを作ったんじゃないだろうか？ いや、

・・・・叔父さん本人だったんじゃないか？

この作者は不遇の内に彫刻刀を折ったと言っていた。あれは、自分自身のことを言っていたんじゃないか？

それじゃあ、あれが叔父さんの作ったものだったとしたら・・・

あのマスクを作ったのも叔父さんで、それじゃあ、叔父さんは青木先輩や、葉子を、知っていたのか？

「なんだよ、それ・・・」

馬木はどういう訳か強い怒りを感じた。裏切られた気がした。葉子に、叔父さんに。信じていたのに、心から！・・・。。そうだ、葉子が好きだった。好きで、好きで、すっかり有頂天になっていた。なんだよ、遊びだったのかよ？ 反抗期には叔父さんに当たり散らした。それは馬木の甘えだったのかもしれない。叔父さんは馬木が何をしても絶対に怒らなかった。馬木にとって叔父さんは馬木が絶対安心して逃げ込める避難所だった。ある意味自分の父親や母親より信じていた。

「ちくしょう・・・」

裏切られた。裏切り者！

馬木は「友だちのところに行く」と書き置きを残して出かけた。自転車で、叔父さんの小屋へ。

## 第19話 お化け

叔父さんの小屋は遠い。自転車で40分たつぷり掛かる。

サッカースタジアムを中心としたスポーツ公園がある。その向こうに広がる田圃と草原の、さらに奥だ。

スポーツ公園脇の道をひたすら走る。夜だ。予想外だったのは、右の歩道を走っているが、車道を対向車が走ってくるとヘッドライトが目に入り、さらに垣根の影が真っ黒にできて、足元がまったく見えなくなるのだ。もちろん自転車のライトはつけているが、小さな楕円の光ができるだけで頼りないことこの上ない。すぐそこにぽっかり穴が開いているんじゃないかという不安に駆られる。早く反対側に渡りたいが広い道路で案外交通量も多く、まだしばらく横断歩道はない。

公園はまだ増設整備中だ。アルミの塀が立ち並び、まったく街灯のない地帯に入った。車が走ってこなくても真っ暗だ。不安に思っていたら、ガツン、と前輪が何かに衝突して急激に速力が鈍った。パンクだ。工事中の道路の穴を塞ぐ鉄板が渡してあるのだが、衝撃軽減用のマットがずれている。なんてついてない。馬木は自転車を降りて呆然とした。

どうしたものか？ 叔父さんの小屋はまだまだ先だし家に帰るにまずいぶん来てしまっている。周囲に交番もなかったように思う。自転車を引いて歩きながら、公園の方を見た。たしか公園事務所がある。これだけ広い公園なんだから夜間警備員がいるかもしれない。パンクの修理道具がないか、予備の自転車でも借りられないだろうか？ タクシーなんか乗る金は持ってきてないし、ここからの移動手段がない。

しばらく歩いて公園の端近くまで来た。ここに事務所があるはずだが・・・あった、が、明かりがまったくついてない。外れた。もう一つサッカースタジアムの近くにもっと大きな事務所があったは

ずだ。あつちなら、多分……。しかし広い公園をかなり歩かなくてはならない。仕方ない、家まで歩いて帰るよりはましだ。自転車はとも引いていけないので近くの駐輪所に置いて覚悟を決めて歩き出した。

公園内に入るところに電話ボックスがあつた。人が入っているように見えたが、近づいていったらいなかった。照明でできる陰とバツクの樹影のせいだろう。

子供用のグラウンドや池に滝のある庭園を過ぎ、橋を渡りずうつと続く一本道を歩く。左手に様々な樹木が植わり、その向こうは大きな潟だ。右手は、何も無い。土が盛られ重機が入っている。あのにつきパンクした工事箇所がこの囲いの外だ。植物園ができるんだそう。

この道は、暗い。ポツリポツリとしか照明灯がなく、樹木の暗がりだらけだ。どこに何が潜んでいるか分からない。考えてみたら馬木は人一倍恐がりなのだ。よくも夜にこんな寂しい場所に来られたものだ。怒りに駆られて飛び出したが、今恐がりの性質が怒りをすっかり萎縮させてしまった。

ああ、暗いなあ。嫌だなあ、嫌だなあ。

誰かいないかなあ。でもいたらもつと怖そうだ……

照明の中に人影が浮き上がって心臓が飛び上がった。女の人だった。髪が長く、白い半袖ブラウスに白いスカートをはいている。靴は黒いハイヒールだ。

どこから出てきたのだろうか？

ああ、トイレだ。木の陰から建物が現れた。馬木も尿意を催してトイレに入った。が、明かりがつかない。壁を探ってスイッチを入れたが、つかない。元が切られているらしい。やめようかとも思ってたが一度催した尿意は抑え難く、ぼんやりざらざらした視界の中で便器を見極め用を足した。

用を足しながら思った。女性用トイレは明かりがつくんだらうか？ あの女性は、こんな暗がりの中、個室で用を足していたのだろ

うか？ 想像してゾツとした。だいたいどこからこのトイレまで歩いてきたんだ？ 一本道で一方は湯、一方は塀に囲まれた工事現場だ。おしつこが手に引つかかった。膝が震えている。洗面台で手を洗いながら、前の鏡を見るのが怖かった。入り口に近いので多少は明るい。でも、鏡を見て、そこに何かが映っていたら……。馬木は恐がりなのだ。こんなところに来たことを心底後悔した。

外に出て歩き出した。トイレの照明灯から離れまた暗い道に入った。急に蝉が鳴き出してビクツとした。蝉というのは昼夜関係なく鳴くものだろうか？

次の照明灯の明かりが見えてきた。近づいていくと、またその中に白い女の後ろ姿が浮かび上がった。どこから現れた？ さっきより距離が近い。まるで馬木が来るのを待っていたかのように……。左手に展望台の建物がある。なんだ、ここに上がっていたのか。そういえば雲一つない星空だ。周りに高い建物も明るい光もない。星を見るにはいいだろう……。でも、若い女が夜一人でこんなところに来るか？ さっきは黒いと思ったハイヒールが、実際は真っ赤だった。

馬木は決めた。この女についていこう。また消えられてビクビクするのは嫌だ。

何もない空き地の向こうにサッカースタジアムが見えている。しかしあそこに辿り着くまでまだ数百メートルある。馬木は意地になって女の後をつけていった。距離は10メートルまでないだろう。歩きたびスカートにお尻の動きが浮き上がった。まるでストーカー気分だ。そうだ、幽霊がこんなにセクシーなわけない。だいたい足があるじゃないか、しっかりと……。。

また照明の届かない暗がりに入った。女の白い背中が暗く沈んでいく。馬木は慌てて歩を早めた。見失ったら怖い。女の足も早まったような気がする。馬木はさらに急いで、女の足も早まって……。。

馬木はふと我に返った。何をやっているんだ？ 向こうも怖いんだ、怖がらせてどうするんだ？ 足を止めて、ほっとした。なんだ、



やっぱり普通の人だったんだ。ちよつと夜の公園の散歩を楽しんでいただけだ。恐い目に遭つて、これで夜の一人歩きはこりこりだろう。女の姿は、もうない。馬木はゆっくり歩き出した。

また照明灯の下に来た。もうスタジウムもずいぶん近づいてきた。意気揚々としたところ、ギクリと背中に冷たい水をかけられたように震えが走った。今通り過ぎた茂みの中にじつとこちらを見る女の顔があつたように感じた。怖い視線だつた。鋭い敵意を感じた。馬木は今度は背中にじつと恐怖を感じながら歩いた。ストーカーされて怖かつたのだろう。でもあの敵意はなんだろう？ 怖いならじつと気付かれないようにやり過ごせばいい。あれではまるで・・・、刃物でも持つて襲いかかつてきそうだ。ああ、また暗がりに入る・・・。振り向くべきか振り向かないべきか？ 足音が聞こえないかとじつと耳を澄ましながら歩く。ジャリッ、ジャリッ、と自分の足音しか聞こえない。いない。ついてきていない。きつと反対方向に戻つていったんだ。もうすぐだ、もうすぐ木立を抜けて照明灯のたくさん立つ明るい広場に出られる。ピチャン、と渦の方から水音が聞こえた。フナでも跳ねたか？

前方からまた人影が現れて馬木は絶望的な気分になった。白いブラウスとスカート、赤いハイヒール、あの女だ！ スズンズンこちらに向かつて歩いてくる。なんだ、今手に持った物が光ったぞ？ ナイフ？ 今照明灯の真下を通つた。陰が黒くなる寸前女の表情が見えた。馬木を睨んでいた。殺してやる、と、その顔が言つていた。馬木はガクガク震えて、足が止まった。女が走り出した。腕を振り上げて、ナイフを振りかざして。

「う、うわ・・・」

腰が抜けそうになりながら馬木は元来た方に逃げようとした。

『振り向くな！』

頭の中で強い声がした。

「え？・・・」

一瞬の躊躇の内に女がすぐそこまで迫っていた。恐ろしい形相で

ナイフの狙いを馬木の顔に合わせている。ムツとするきつい薔薇の香水の匂い。その裏からあの忘れようとしても忘れられない死臭がにじみ出てくる。

「ひい・・・」

声の警告を無視して振り返ろうとした。体を半分反転して、目だけ女の顔を見ている。その女の顔を突き破って手が伸びてきた。

「ひゃあああつ」

馬木は今度こそ完全に後ろを振り向いた。

女？・・・がいた。がさがさに崩れたミイラの顔で馬木に抱きつこうと両腕を開いていた。白いブラウスを着ていた。

「ぎゃあああつ！！」

死ぬ、心臓が止まる。馬木の顔をすり抜けて腕が伸び、ミイラ女の顔を張った。

「ギヤアアアアアアアツ・・・」

恐ろしい悲鳴を残してあつと言う間に数十メートルを吹っ飛び、そのまま闇に消えていった。

馬木はガタガタ震えながら、気が付くと後ろから肩を抱かれていた。背中に柔らかい膨らみが当たっている。

「ええっ！？」

慌てて飛び退いた。

「あ、あ、あなたは？・・・」

知っている！だが、これほど人間離れして美しい人を見たのは初めてだ。

紅倉美姫！ 星空のわずかな光を反射して大きな瞳が不思議な色に輝いている。

「先生。大丈夫ですか？」

後ろから追ってきたのはアシスタントの芙蓉美貴だ。

「まったく、先生はどうして暗闇だとも足が速いんです？」

文句を言いながら無事な様子にほっとして笑顔になった。こちらこそ最上級の美女だ。

「こちらが桜野葉子さんの彼氏ですか？」

「そ。馬木オット君、よね？」

「良人ですけど」

紅倉の美しい笑顔に馬木もほっと笑顔になった。紅倉美姫が言う。  
「あなたが見ていたのは影よ。あなたの頭が見ていただけ。本体は  
ずうつとあなたの後ろからついてきていたのよ。あなたが彼女の後  
ろ姿に近づくのといっしょに近づきながらね。あなたは彼女に取り  
憑かれる寸前だったのよ」

馬木は改めてゾツとした。

「彼女は、何者だったんです？」

「どうということのないふつ々の浮遊霊よ。ちよつと悪い奴にそそ  
のかされちゃったのね」

幽霊はあんまりふつうとも思えないが・・。

「でも、・・紅倉さんは何故ここへ？」

紅倉は表情を曇らせて言った。

「一人は間に合わず救えませんでしたからね。今度こそはと一生懸命  
さがしたんですよ。間に合って良かったです。あなたも、叔父さ  
んに呼ばれて来たんでしょう？」

「え？・・・・・」

紅倉はさらに同情的に言う。

「残念ながらあなたの叔父さんはもう駄目です。既に亡くなられて  
います」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・。

何も、考えられない。

「残念です。事件の背景を明かす重要な生き証人の一人だったのに。  
また、先を越されてしまいました」

「・・叔父は・・」

やっとの事で声を絞り出した。  
「助けられなかったんですか？」

紅倉は気の毒そうに言う。

「とても静かで、救われない心の人だったようですね。最後の最後まで誰にも救いを求めることはなかったわ」

・・やっぱり、叔父さんはそういう人だったんだ。何でもかんでも一人でうじうじ考えて、人に迷惑をかけないつもりで大迷惑になっている。

「どうします？」

紅倉が訊いた。

「叔父さんの最期を見ますか？」

馬木は、頷いた。

「では行きましょう。送ります」

振り向いて歩き出した途端に紅倉はこけて芙蓉に助け起こされた。せんせ。ごめんごめん。

スタジアムの明るい広場に出て馬木は訊いた。

「葉子は、やっぱり死んだんですか？」

紅倉はしばらくの沈黙の後言った。

「たぶん。しかし彼女の死はあやふやではつきりしません。肉体は死んでしまったようですが、魂は、どこともつかないところを浮遊しているようで、見えません」

肉体は死んだけれど魂は生きているなんて言われてもまるで実感できない。葉子は、死んだのだ。

駐車場に止めてあった紅倉の車で叔父の小屋に向かった。

車内にはやはり強烈な薔薇の香水の匂いと、あの、臭いが漂っていた。

「ごめんなさいね」

紅倉が言った。

「え？」

「におい」

「いえ……。すみません……」

運転する芙蓉が恐い目で睨んだ。

「あの・・・、怖いんです。その・・・」

「ああ、青木の死体を発見したのはあなただったんですね。もつとそっちの方をきちんと調べておくべきでした。今回は失敗ばかりです。」

「どうやらわたしよりあなたの方がいろいろ詳しいようですねえ。明日は先生にお会いしてお話をお伺いさせてもらいます」

紅倉美姫は超A級の霊能力者なのだ。そうか、人の心が分かっってしまうというのは辛いことが多いのだろう。この人間外の美貌もその能力と共に精神的な経験が大いに関係しているのかもしれない。

叔父の小屋は田圃と畑に囲まれた草原の中に一軒だけポツリと建っている。カーテンを閉めた窓から明かりが漏れている。こんなところでも電信柱を立てて電気を引いてくれるのだから親切だ。馬木がここに来たのは3度くらいしかないが、記憶より伸びている気がする。建て増したらしい。

ドアをノックして呼びかけた。

「叔父さん。良人です。叔父さん」

返事はない。馬木は悲しくなった。

ドアは開いた。形ばかりの玄関に靴を脱いで板の間上がる。紅倉と芙蓉もついてくる。小さなキッチンに4畳の畳敷き。机に道具のいっぱい並んだ棚の作業部屋。その奥に記憶にないドアがある。建て増し部分だ。ここに、叔父さんがいるのだろう。靈感なんてなくても分かる。

ノブをひねって、ドアを開く。

「叔父さん?・・・」

いったいどれが叔父さんだか一瞬分からなかった。56人の裸の女たちといっしょに叔父さんは溶けていた。生き人形。この部屋は叔父さんの最もプライベートで醜い心の世界そのものだった。女たちはまさに生きているように良くできていた。見事な物だ。この女たちに囲まれて、叔父さんはどんな生活をしていたのだろうか?

質素そのものの貧乏な小屋にそれだけ場違いに立派なベッドが置かれていた。そこに布団に入って少女が寝ていた。目の前にいる誰かに微笑んで。葉子だった。それが本人なのか人形なのか馬木には判断が付かなかった。

叔父さんは人形にまみれて溶け崩れている。その首にロープの輪が巻かれているが、もう一方の端も輪になって投げ出されている。天井の梁が折れている。首を吊ったものの木が弱くて支えられず落下したようだ。それでは叔父さんの死因はなんだろう？ 叔父さんの崩れた顔はだらしなく恍惚の表情を浮かべていた。こんな叔父さんの顔は見なくなかった。最低だ。汚らしい。

つんと鼻を突く臭いが充満している。馬木が恐れていた臭いではない。ガソリンだ。床に黒いシミが広がっている。折れた梁からボタリボタリと黒い液体が滴っている。

叔父さんが首を吊ろうとした辺りを狙ってビデオカメラが三脚に据え付けられていた。その上に「ヨックくんへ」とメモが張り付けられていた。

## 第20話 告白

「どうでしょう？」

馬木は横にのいて入り口を開けて紅倉に訊いた。紅倉は入らずに左手を開いて突き出した。

「美貴ちゃん。人形とビデオカメラを。急いで」

芙蓉は返事もせずさっさと部屋に入るとベッドから葉子・・・の人形を抱き上げた。人形は苺プリントのかわいいパジャマを着ていた。芙蓉はビデオカメラを三脚ごと掴むと馬木に突き出した。馬木が受け取ると芙蓉も「急いで」と急かした。ぐらつと叔父さんの顔が動いた。馬木を見ている。生きていたのか！？

「早く、逃げ、な、さい。罠だ。もう、保たない・・・」

「急ぎなさい！」

芙蓉に押されて馬木は部屋を出た。

「先生」

紅倉は頷き、ゆっくり後退しながら腕を降ろした。叔父さんの顔がぼつと燃え上がった。

「叔父さん！」

「急ぎなさい！」

馬木も走った。良かった、最後にいつもの笑顔の叔父さんを見られて・・・。

紅倉は芙蓉に手を引かれて助手席に乗り、馬木は葉子の人形といっしょに後部座席に押し込まれた。葉子の人形は硬いプラスチック製だった。車が発進すると小屋から火が漏れだした。すぐにバチバチ燃え上がり、走る車を追って炎が地面を燃え広がってきた。車に乗り込むとき既に地面からガソリンの臭いが立ち上っていた。車は舗装されていない砂利道を走り、やがて炎は後方に下がっていった。夜陰に赤い炎の海は幻想的だった。叔父の小屋ははかなくもあつてなく崩れ落ちた。

マンションに送ってもらって、馬木は夜中一人で叔父さんの遺言ビデオを見た。

翌日夕方4時、馬木と角谷と由利先生はホテルの紅倉美姫の部屋に招待された。テレビの撮影隊が使っているのは別のホテルだ。彼らはこちらでの撮影を終え一部を残して東京に引き上げた。あちらでは徹夜でVTRの編集作業だそうだ。

紅倉の部屋は芙蓉といっしょのツインルームだった。紅倉は馬木たちにケーキと紅茶のルームサービスを取ってくれた。由利先生は感激して大喜びで高級ホテルのスーツを堪能した。馬木は今日の午前中の約束をキャンセルして、昼間先生と角谷が何をしていたのか知らない。興味もわかない。

「昼間石油のわき出た現場を見してきました」  
紅倉が報告する。

「火が消えてから昨夜の内にコンクリートを流して穴を塞ぎましたが、今もじわじわ周囲の土にしみ出ています。あれは人為的に貯蓄されていたものではありません。あれは・・・太古の世界からやってきたものです」

「石油って大昔の生物や植物が化学変化してできたものですね？」

由利先生に紅倉は曖昧に頷いた。

「まあそういうことです。異常なのは・・・もうニュースで見えますね？」

由利先生も角谷も頷く。馬木は知らない。午前中母と一緒におじいちゃんの家に行っていた。叔父の焼死体が見つかったのだ。ただし骨までグサグサに焼けこげていたので本人との確認はできていない。よほどの高温で焼けたようだ。おじいちゃんもおばあちゃんもがつくり落ち込んでいた。慰めようがない。由利先生が説明してくれる。



「全国各地で同じように石油がわき出てきたのよ。ここほど大量ではないけれどね。山とか沼とか、お寺や神社の境内からわき出たところもあつたわ。北は北海道から南は沖縄まで、30力所くらい発見されているけれど・・・あの感じだともっとたくさん、全国の土地にくまなくわき出ているんじゃないかしら？」

目で紅倉に問いかける。

「そうですね。今は出ていないところでもやがて日本中のあらゆる土地からわき出てくるでしょう。こうなるともう石油成金だなんて喜んでいられませんね」

この皮肉は葉子の伯父に向けてのものだろう。

「バケモノに変身しちゃった女性も計算じゃあ18人になってるはずよね？ やっぱり何か関係あるんでしょ？」

「それはまた後のお楽しみ。明日の夜の番組をお待ちください」

紅倉はニツコリ微笑んで宣伝した。

「ところで・・・」

深刻な顔を馬木に向けて遠慮がちに訊いた。

「叔父さんのビデオは、どうかしら？ 見せてもらえるかしら？」

馬木はちよつと恨みがましい目で紅倉を見て訊いた。

「あなたはビデオの内容をもう知っているんじゃないですか？」

「ええ、だいたいのところは。あなたには辛い内容ですね。無理に見せてもらわなくてもいいですよ」

角谷も気を使って言う。

「そうだぞ。無理しなくていいぞ」

「いや、いいよ。おまえと先生なら、見てもいいよ」

馬木はテレビに古ぼけた8ミリビデオカメラをつないで、再生ボタンを押した。

画面に覆い被さるように叔父さんの体が映った。三脚にセットしたビデオカメラの録画スイッチを入れたのだ。後ずさり、腰から上

で画面に収まる。その頭の上に輪になったロープがぶら下がっている。背後には裸の女たち、叔父さんといっしょに溶けていた生き人形たちが立っている。叔父さんはカメラに向かって、馬木に向かって、話しかける。

『えーと……。このビデオの第1発見者がヨツくん、馬木良人君であることを望みます。……。迷惑だらうけれど、ごめんね、賢い君ならたぶん勘づいただろう』

叔父さんは子どもの頃から何かと「ヨツくんは賢いねえ」と褒めてくれた。

『えーと、そうです、わたしが君が持ってきたフィギュアの作者で、あのマスクを作ったのもわたしです。』

うーん……。きのうおじいちゃんの家であの心霊ビデオについて話したね。あのお化けのマスクについてそ知らぬ振りをしていたわたしを怒っているだろうね？　ごめんね、まさかね、君が直接あの事件に関わっているとは思ひもなかったんだよ。ちょっとした野次馬根性だろうと、そう思い込んでいたんだ。それにあの事件そのものをわたしはあまり深刻に受け止めていなかったんだ。あのビデオが作り物だつていうことは知っていたからね。何を悪ふざけしているんだらうと呆れ返っていたんだよ。もうずいぶん長く世間と隔絶した生活を送っているからねえ。

今日あのフィギュアを見せられてね、内心ギョツとしたんだ。恥ずかしかつたんだなあ、あんな物を作っているだなんて。でも、君はもつと深刻だったんだね。駅の待合室でテレビを見ている君を見たら。たまたまね、せつかく出てきたんだから駅ビルの書店でも寄つていこうかと思つたんだ。わたしは……。ヨツくんが何故あんなにひどいショックを受けているのか分からなかった。ニュースを見て、愕然とした。まさかね、君たちが知り合いだったなんて……。君のショックを受けた様子から単なる知り合いじゃなくより親しい仲だったなんてね、驚いたよ。ごめんね。

君は、発見された少女の遺体が彼女であることを知っていた。わ

たしも知っていたんだよ。

彼女・桜野葉子は、わたしの女王様だったんだよ。

恥ずかしい限りだけれど、わたしはご覧の通りの男で（と背後の人形の美女たちを示す。画面に映っているのは2体だが、いずれもタイプの違う最上級の美女だ）生身の女性にはまるつきり駄目な惨めな男だ。わたしは葉子ちゃんのオモチャになって、命令されることはなんでも喜んで従っていた。知り合ったのは彼女が7歳、小学校2年生の時だ。だから彼女にとってわたしとの関係は純粋に子ども遊びだったんだよ。しばらくは、ずっとね・・・。

こうなったからには告白しよう。そもそもわたしは桜野緑海と愛人関係だったんだよ。葉子ちゃんのお母さんだ。女性はまるつきり駄目だなんて言っておいて矛盾だらけに感じるだろうがそもそもは緑海さんがわたしの女王様だったんだよ。わたしは彼女の成すがままでね。そもそもは・・・、

もうずいぶん昔のことだ。わたしはこう見えて小学校の頃はけっこう活発な男の子でね、夏休みにはほぼ毎日海に泳ぎに行っていた。ある時、小学校6年生の時だ、いっしょに遊びに来ていた友だちが近くにお化け屋敷があると言い出した。防砂林の中の、そうだよ、あの家だ。

・・・これはあの人のプライバシーに関わることで、話すべきではないと思うんだが、今起こっていることを考えると、わたしの知っていることを話しておくべきだろう・・・。

その家から人間とも猫とも鳥ともつかない奇妙な声が聞こえて来るんだそうだ。人は一応住んでいるらしいが朝と夕方に通ってきて30分ずつくらいいてすぐ出ていくそうだ。なんでそんなことを知っているかというとその隣が大学の寮でその友だちの従兄弟が入っていたんだ。ある時その家から男の叱りつける声が聞こえてきた。ちゃんと面倒をみる！と。するともう一人、この家に通ってきている年寄りの声が、勘弁してください、恐ろしくてとても耐えられませんが、と謝っている。叱っていた50代の男が、いいか、ちゃんと

見ているんだぞ、と怒りながら出て行って、謝っていた老人も夕方、それから1時間ほどしてやっぱり出てしまった。夜になって真っ暗になってからも奇妙な声はその家から聞こえてきたそうだ。

友だちがその家を覗きに行かないかと言いだした。いったい何が居るのか見てやろうぜと。わたしは賛成したと思うかい？ 賛成したんだよ。わたしは何かが閉じこめられていると思ったんだよ。解放してやろうと、正義のヒーロー気取りだったんだね。冗談のつもりですっかり引いちゃってる友だち二人を引き連れてわたしはその家に向かった。

家に入るのは簡単だった。老人はいつも玄関脇の植木鉢の下に鍵を置いていたんだ。わたしは一人家に入ると友だちに外から鍵をかけさせた。代わりに裏口の鍵を開けて万一の時のための逃走路を確保してね。友だちにも来いって言ったけど怖じ気づいて来なかった。わたしはかまわず家の中の探検を始めた。

家に入ったときからおかしかった。生臭い魚の臭いが家中に立ちこめているようだった。真夏なのに窓は全部閉め切っていた。生き物を閉じこめておくには最悪の環境だ。わたしはおーい誰かいませんかー？と小さく呼びかけながら家の中を歩いた。どうやら2階が怪しいということで階段を上がっていったが、どうもそれらしい部屋はない。しかし生臭さは鼻をつままないではいられないほどひどくなっている。どこかに隠された監禁場所があるに違いないと思った。部屋の押し入れを開いたとき、懐中電灯が置いてあった。臭いは最悪にひどい。どこかに入り口があるだろうと思ったら、あの声が聞こえたんだ。キュルキュルキュルキュル、って、テープを早回しするような、奇妙な声が。わたしは押し入れの壁をコツコツ叩いた。そしたらドシンと何かがぶつかってきた。誰かいるんですか？と訊いても返事はない。どこに入り口があるんだろうと考えて、思い付いたのが天井だ。ふふふ、江戸川乱歩だよ。上の段に上がって天井板をめくったら、もう臭いがひどいんだ。それでもここまで来たら好奇心が勝っている。となりの部屋の天井板を探したら、一力

所はぐれる。板をよけて、懐中電灯で照らした。

部屋の中はひどい有様だった。魚を食い散らかした残骸が部屋中に散らばっていた。一度も掃除なんかしたことはないんだろう、老人はここからエサの生魚を投げ入れて、それつきりだ。照らしてみたら壁には窓があるのに外から外壁でふさがれていた。わたしは何を飼っているんだろうと、懐中電灯の光を下に向けておーいと呼びかけた。押し入れの下からガサガサガサツと出てきたものを見てわたしはひっくり返りそうに驚いた。5歳くらいの裸の女の子だったんだ。まさか人間がいるとは思わなかった。わたしは子供心にこの劣悪な状態で監禁されている少女に哀れみを感じて、監禁している大人に怒りを感じた。

が、こちらを振り仰いだ少女の顔を見てわたしは悲鳴を上げた。少女には、目がなかった。眼球のない肉が瞬きするたび蠢いた。怪物だった。少女はわたしを見上げてキュルキュルキュルと鳴いた。魚みたいに丸い口には小さな尖った歯がいっぱい生えていた。

人間じゃなかった。バケモノだった。

わたしは逃げたそうとしたが、躊躇した。顔はバケモノでも、姿は人間だ。何かの病気かもしれない。ならばなおさらこんなところに閉じこめておいていいわけない。わたしは迷った。警察に通報しようか？ でも無断で家に入ったことがばれてしまう。少女は押し入れの中板に手は届くがよじ登ることはできないようだった。目が見えなくても感じるのだろう、わたしに手を伸ばしてきた。わたしは彼女をここから連れ出そうと決心した。彼女を裏口から連れだして、彼女が勝手に家から抜け出てきたことにすればいい。そして警察に連絡するんだ。

わたしは天井に這い上がってとなりの押し入れに下りた。彼女の手を握るとぬるつとした。汗というより粘液という感じだった。生魚のぬめりかもしれない。抱き上げると彼女はわたしにしがみついていた。外へ出るんだと言い聞かせて天井裏に押し上げた。ところが彼女は嫌がって戻ろうとする。怖がっているんだろうと思った。

この様子では生まれてからずっとこんな風にして閉じこめられていたんだろう、外の新鮮な・・・とも思えないが、彼女にとっては初めての外気だ。わたしは大丈夫だからと言い聞かせて無理やり彼女をとなりの部屋に下りさせた。

彼女が怖がっていると思うたのは間違いだった。彼女は、光が駄目なんだ。彼女は床をバタバタ駆け回った。わたしは怖くなった。とんでもない間違いを犯したかもしれないと泣きそうになった。わたしは慌てて彼女を抱き上げて元の部屋に戻そうとした。ところが彼女は突然もの凄い力でわたしにしがみついて、わたしのＴシャツの中に潜り込んできた。海から来たからね、海水パンツにＴシャツを着ただけの姿だった。子どもとはいえ裸の女の子にぴったり肌を密着されて抱きしめられているんだ、わたしは怖いながらも妖しい気分になった。しかしそれも彼女が無理やりシャツの首から顔を出してわたしに顔をくつつけると吹っ飛んだ。正面からまさに密着だ。彼女の口から強烈な生臭さがわたしの口の中に流れ込んできた。あれが一応わたしのファーストキスだ。強烈な生臭さを味わいながらしかしわたしは何故かうつとりしたような気分になってきた。彼女の舌から甘い唾液が流れ込んできたのだ。バケモノの顔の彼女に、わたしは女性の性を感じた。次に恐怖が襲ってきた。わたしの目に彼女のまぶたの中の肉襞が覆い被さってきたのだ。肉襞はわたしのまぶたの奥に入り込んできた。脳天に強烈なショックを受けて、訳の分からない視覚がなだれ込んできた。あれは、人間の感覚ではなかった。少なくとも目で見る視覚ではなかった。わたしはショックで半分気絶していた。すると、今度は下半身が異様な感触に包まれた。わたしは・・・彼女の胎内に射精してしまったのだ・・・。

意識が戻ってきて、ぼんやりした視界の中で彼女が変身していくのが見えた。目が現れた。肉襞の中に透明なガラス玉が現れ、白くなり、黒目が現れ、わたしを見た。ぺちゃんこだった鼻がつんと尖ってきて、丸い魚の口だったのが閉じて、柔らかな唇が盛り上がった。ニツと笑うとふつうに白い人間の歯が揃っていた。わたし

は取り込まれたのだと思った。彼女はわたしを取り込んで、人間になったのだ。

変身した彼女は、とてもかわいい女の子になっていた。彼女は甘い息でわたしにキスし、裸の体をこすりつけ、わたしの股を撫で回した。わたしは彼女を振り払い、逃げ出した。泣いていたと思う。ショックで、訳が分からなくなっていたんだろう。家を逃げ出して、それからどうしたのか覚えていない。ふふふ、わたしが女性が駄目になったのがよく分かるだろう？

彼女と再会したのはそれからずうつと後、今から10年くらい前だ。わたしはもう30を過ぎていて、すっかり引きこもりの生活を送っていたが、それでもまだ世間とのつながりは持とうと努力していた。ある地域のイベントにボランティアスタッフとして参加していて、そのイベントに彼女が客として現れたんだ。もちろんわたしは彼女がああの時の少女だなんてまるで気付かなかった。彼女はわたしを見るなりかなり積極的に迫ってきて・・・、かなりお酒が回っていたようだったけど、それでわたしが彼女のお世話係を押し付けられたんだ。彼女はまだ23歳だが既に二人も娘がいるとのことだった。彼女は何故かわたしがやたら気に入ったようで、イベントが終わるまでずうつと待っていて、わたしは誘われるまま彼女とホテルに入った。

女性とホテルに入るなんて初めてのことだった。彼女はとても慣れたようで、わたしは成すがままにリードされていた。わたしは彼女を遊んでいる女と軽蔑しようとしたが、できなかった。彼女はひどく情熱的で、わたしはすっかり彼女に溺れていた。幼い頃の悪夢の性体験を忘れるようにわたしも精いっぱい積極的に彼女を抱いた。

彼女とはその一度きりの関係かと思ったが、彼女はたびたびわたしに連絡してきて、ひと月に1度、多いときには週に2度も3度もホテルで会った。この小屋だからね、電報が来るんだよ？ ははは

は・・・。

彼女と会う内、彼女の生い立ちを知るようになり、わたしはどうとう彼女、桜野緑海があの家少女だったことを知った。その時のわたしの驚愕。計算するとあの時緑海はまだ3歳だったらしい。しかし緑海はあの家で子どもの頃育てられたらしいということは知っていたても自分がバケモノであつたことは覚えていないらしかった。だったらいいだろうとわたしは思うことにした。彼女がいったい何ものなのか知らないが、人間としての彼女はかなりひどい人生を歩んでいるらしかった。だったら、彼女を人間にした者として彼女の慰めになれるならそれでいいじゃないかと。当時彼女は2番目の夫と離婚したところで、その後二人の夫と再婚してそれぞれと二人の娘を生んだが・・・告白しよう、その二人の娘の父親はわたしだ。君が会えば分かるだろう、二人の顔にははつきりとわたしの特徴がある。いや、顔に関して言えば緑海自身わたしと似たところがある。特に目は、わたしとそっくりなんじゃないか？ 君も彼女に会えば気付くだろう」

馬木は気付かなかつた。叔父さんの告白で初めてそういえばそつくりだと思つた。しかし葉子の母を好意的に感じたのは叔父さんに似ていたからかもしれない。

「緑海とわたしは兄妹のようなものかもしれない。二人の娘たちがどこかおかしいのは、そのためかもしれない・・・」

さて、葉子ちゃんのことだ。君には本当にすまないと思う。緑海は、次女の紗恵ちゃんは連れてきたことはないが、長女の葉子ちゃんをよく連れてきた。葉子ちゃんが3番目の夫になじまず、暴力を振るうんだそうだ。それもあり洒落にならないほどの。たしかに葉子ちゃんはかなりのかん坊だったが、わたしにはなついた。なつきすぎるくらいに。緑海は葉子ちゃんがテレビを見ている隣で平気でわたしとベッドを共にした。小学校の2年3年の頃だ。わたしたちが何をしているかなんて分からなかつただろうが、葉子ちゃんは緑海に嫉妬しているのか後でわたしにやたらとじゃれてきた。わ



たしは拙いんじゃないかと緑海に言ったが、緑海は笑っているだけだった。

わたしはいっそきちんと結婚した方がいいんじゃないかと・・そう言える立場でもなかったんだが、一応プロポーズをした。だがそれは緑海に断られた。最初の夫で懲りた、と。わたしという愛人を持つのは父親に対する復讐でもあったのかもしれない。

しかしこの中途半端な状態はわたしたちに悪い影響を与えた。わたしと、葉子だ。わたしは愛人という日陰者の惨めさと、愛する女が他の男と夫婦生活を送っている嫉妬心に、屈折し、ますますいじけていった。葉子も、やはり子どもだ、母の二重の男関係にだんだん疑問を持つようになっていった。それに葉子は新しい父親たちにはまったくなじめず、一方でわたしにはひどくなっていた。わたしたちは夜会うことはなくなっていたが、昼間はよく会って、はた目には本当の親子のようにデートするようになった。

そうだ、あのマスクだったね。あれは葉子がわたしの小屋を訪ねてきて、お化けのマスクを作ってくれて依頼したんだ。まったく惨めなことにね、わたしは葉子からお小遣いをもらって生活していたんだ。葉子が小屋に遊びに来るようになって、わたしが以前作っていたフィギュアまがいの彫刻を見つけて、知り合いにこういのが好きなのがいるから作れば売って上げると言われて、注文を受けて10体くらい作ったのかな？ お金は葉子から受け取っていたから誰が買ってくれたのかは知らない。でもそのお化けのマスクはその知り合いの高校生の注文だったことだった。

葉子が10歳、小学5年生の時だったね。本物の心霊ビデオみたいな怖いビデオ映画を作るから、リアルで、一目でギョッと恐怖するようなマスクを作ってくれてことだった。マスクは葉子がかぶって、葉子が幽霊役をやるという。わたしが真っ先に思い浮かべたのは葉子の母親、緑海の子どもの頃の姿だった。かなり悪趣味だが、当時わたし自身緑海に対するイライラした気分があって、つい、そういう物を作ってしまった。まあ一応アレンジは施したがね・・。

映画の内容に関してもいくつかアイデアを出してイメージボードを描いてやった。葉子も面白がっている考えて、わたしが具体的な画にしてやったものもある。まさかそれがあんなビデオになるなんて思わなかった・・・。

出来上がったビデオをダビングして葉子が持ってきてくれた。わたしの小屋にはアンテナはないがモニター用のテレビとビデオデッキはあるんだよ（確かにあの部屋にあった）。ビデオを見て、わたしは青くなった。ホラービデオとしてなかなかいい出来だったが、何より驚いたのはその撮影場所だ。あの家のあの部屋だったんだからね。聞けばそこは今は廃屋になって若いアベックたちのラブホテル代わりになっているという。そこがどんなに恐ろしい場所だったか、まるで知られていないんだ。そういうみだらな気分させる力があるそこにはあるのかもしれない。そのとなりの隠された部屋に昔子どもだった母親が生活していたなんて、葉子もまさか知りはいだらう。ニコニコ得意になって自分の演技を自慢していた。考えてみれば、あの時からか、葉子のわたしに対する態度が変化していたのは・・・。

葉子が中学生になってもわたしとの関係は続いていた。わたしと緑海との関係も続いていた。わたしは母娘と本当の妻でもなく娘でもなく、中途半端で背徳的な関係をズルズル続けていたんだ。その間緑海はわたしとの間に二人の娘を生んでいた。わたしの惨めで屈折した気持ちはますます病的にひどくなっていた。そんなわたしに葉子は娘としてではなく一人の女として迫ってくるようになった。緑海と同じようにわたしを支配的に扱いたがったから、母親への対抗意識が強かったのかもしれない。ちょうどそういう年頃だったのだらう。

異常な関係だ。葉子は13、14歳、わたしはもう40間近だ。そんな関係がいいわけない。わたしはだんだん葉子を遠ざけるようになっていった。そうすると今度は葉子は夜遊びをするようになり警察に補導されることもあった。わたしたちは呪われているのだと

強く思った。あがけばあがくほどズルズル深みにはまっていく呪いの底なし沼だ。葉子はイライラしてわたしを暴力的に扱うようになっていった。わたしはそれを葉子がわたしや緑海との異常な関係を悩み、解消したがつているサインと感じた。わたしも潮時だと思った。わたしは緑海と話し合い、二人との交際を全面的に打ち切ることにした。緑海は承知した。もっとも、その後もこつそり、つい最近も、密会は続けていたが。彼女は若い、驚くほどに。わたしはもうボロボロでミイラみたいにカサカサなのにねえ。彼女はいつまでたっても若いままだ。

交際打ち切りを葉子は怒った。わたしをひどく殴りもした。それでもわたしは大人としての最後の道徳心から彼女を説得した。彼女は一応納得し、その代わり一つ条件を出した。自分の生き人形を作り、自分の代わりに恋人にすることだった。わたしは既に何体かそういう人形を作っていたからね。（背後の人形を示して）こういう人形を作ったのはもともとは純粹に本物の人間そのもののリアルな人形を作ってみたいという気持ちからだだったんだ。作っているうちにだんだん変な方向に反れていったがね。わたしは葉子をモデルに彼女の5年後くらいを想像して人形を作った。人形が出来上がると彼女は自分の目の前で人形を恋人にする行為を要求した。ひどく残酷な仕打ちだったが、わたしは従った。彼女はその様子を眺めて、残酷に嘲笑った。いいわ、許してあげる。これからせいぜいそのお人形さんをわたしの代わりにかわいがってあげてね、と。そうして彼女はわたしの元から去った。

ヨッくん。君には本当にすまないと思う。しかしこれだけは誓う、わたしと葉子ちゃんの関係は決して許されない背徳的なものだったが、最後の一線だけは越えていない。わたしは君たちの関係が純粹なものだったと信じる。彼女は呪われていたんだ。残念ながらわたしたちはその呪いから抜け出すことはできなかった。葉子ちゃんが死に、その未来を奪われてしまった以上、彼女の一生を狂わせてしまった当事者としてわたしもはや生存を許されるべきではないだ

ろ。卑怯な手だが、死を以てわたしのこの世での罪を清算させてもらうことにする。

さようなら、良人君。以上のようにわたしはろくでもない汚らしい人間だったが、人間とは二面性を持つ存在だと思う。いや、もっと多面的で、複雑で、バラバラな存在なのだろう。わたしの君に向けての愛情は部分的であるにしろ、純粋なものであったと信じてほしい。何よりわたしは君にわたしのような人間にはならないでほしい。前向きに、正しい人生を歩んでほしい。わたしの存在が君の人生に暗い影を落としてしまうことを心よりお詫びする。すみませんでした。

では・・・、テープの再生を止めてくれたまえ。これから見苦しいものを見せなければならない。君は見る必要はない。ビデオカメラを止めるべきだが、万が一、わたしの死因に疑問が生じた場合の証拠として録画を続けることにしよう。できたらその必要のないことを願う。

いいかい？ 止めたかい？ 止めてくれよ。さようなら」

馬木は止めない。昨夜も止めなかった。これから叔父さんの身に起こる恐ろしくもおぞましい出来事を、見た。

## 第21話 接続

叔父さんは足場の台を上がり、さすがに顔をこわばらせ、迷いながら、首をロープの輪にかけた。目を閉じ、覚悟を決めて台を蹴った。瞬間グツと顔が膨れ、体を痙攣させたが、ミシツと音がして体在下がり、ドドツと下に落下した。ロープもいっしょに落下する。叔父さんはゲホンゲホンと咳き込み、その頭だけが画面の下にチラチラ見えた。

「ゲホン。あー・・・、苦しい、死ぬかと思った。ははははは、死ぬつもりで死ぬかと思っただけではないな。はは・・・。あれ？おかしいな、この小屋そこまでボロくなってるか？」

上を見上げる叔父さんの顔が見えた。

「梁が折れてやがる。まいったな、せつかくの死ぬ気が萎えちゃうじゃないか。ははは・・・。最後の最後まで駄目な奴だな、まったく嫌になるぜ」

叔父さんはぼやきながら立ち上がるうとしたが、反射的に目を閉じて顔をしかめた。目の下を拭って、上を見てまたうつと目を閉じた。上から何か滴っている。指についた液体の臭いを嗅いでつぶやく。

「ガソリン？ 嫌だなあ、焼死はもつと苦しそうだ・・・」

立ち上がって画面の上を調べる。

「なんでこんなところからガソリンが染み出してくるんだろう？」

上を向いて調べている叔父さんの背後で人形の女たちが動いた。目を動かし、顔を動かし、体を動かし、叔父さんに向かって両手で抱きついてきた。

「わっ、なんだ！？ おい、まさか！・・・」

生きているがごとくりリアルな女の人形が裸で叔父さんに抱きつき、顔を寄せ、頭を抱いて唇を重ねた。もう1体が跪き、叔父さんの服の中に手を差し込んでいった。

「うつ、うつ、こら、やめる・・・」

叔父さんはズボンを引き下げられ、二人の裸女ともども転倒した。その上からさらに3人の女たちが覆い被さっていった。女の生き人形はベッドに横たわっていた葉子の生き人形の他に5体いた。

「うつ、わっ、ああ・・・。こら、やめろって、ああ・・・。」

ははは、そうか、俺はもう死んだのか？　ここは天国か？それとも地獄か？　ははは、ああ、いい・・・。」

画面の下で何が繰り広げられているのか？　声がするばかりでときおり女たちの頭と肩だけが見える。激しく叔父さんを奪い合っているようだ。叔父さんの喜悦とも苦痛ともつかないうめき声が続ぎ、やがてうおおっ、と言う咆哮が上がった。

「イタッ、いてて、やめてくれ、痛い、苦しい、ああ、裂ける、入ってくるな、うわああっ、溶ける！　つながる、なんだこの感覚は、これは、女の・・・、うつ、うつ、ぎゃあああああああ・・・、・・・あああ・・・あああ・・・あ・・・あ・・・。」

悲鳴が、最後には明らかに歓喜の震え声になり、それきり静かになった。これで記録は終わりだ。叔父さんは長々40分以上しゃべっていた。叔父さんが沈黙してから10分ほどして60分テープが切れる。そして馬木たちが溶けて崩れて、プラスチックの女たちと一体になった叔父さんを発見するのだ。

馬木は、テープが切れるのを待たず再生をストップした。

重苦しい沈黙が支配した。

「えーと・・・、その・・・。」

由利先生が言葉を捜しながら言った。

「つまり、今回の事件の中心人物は桜野さんのお母さんっていうこと・・・よね？」

ね？ね？と角谷や紅倉に確認する。その他の点については触れないことにしようよ、と。紅倉が頷く。

「そうですね。その点は間違いないでしょう。問題は、何故今なの

かという必然性なのです」

馬木も頷いて言った。

「俺は叔父さんを信じる。その、俺の知っている葉子を信じるってことだ。なあ、葉子はあるビデオやあの場所のことを知らないようだったよな？ あれは、演技じゃないって思うんだ。理由は分からないけれど、葉子は自分の参加したビデオ撮影のことをすっぱり忘れ去ってしまったと思うんだ。それを思い出させる何かが起こったんだと思うんだ。それがなければ、誰も不幸になる必要はなかったんじゃないかって、そう思うんだ・・・」

角谷も由利先生も同情的に頷いた。馬木が続ける。

「もう一つ、あのビデオにはやっぱりダビングしたテープがあったんだ。叔父さんが持っていたのか、葉子が持ち帰ったのか分からない。けれど、青木先輩だって他にもダビングしたテープを持っていたかもしれない。あれはもともとパソコンで画像編集した映像なんだろう？ パソコンからならいくらでも画像劣化なしにビデオテープにダビングできる。青木先輩ってかなり見栄っ張りで自慢したものの性格だったみたいだから、実はけっこうあちこちにばらまいて自慢していたんじゃないか？ ネットに流れた映像が、青木先輩本人が流したものかも知れないし、俺たちの知らない第三者が流したものかも知れない。それも事件にとって必然だったのか偶然だったのか知らない。でも、それによって何か狂ったんじゃないか？ 異常だよ、今起こっていることは、どれもこれも・・・」

紅倉が頷いて解説する。

「悪霊というのは集団である場合が多いです。一つの霊現象が、実は複数の霊体は何重にも重なって起こしていることが多いのです。それぞれの霊体にとって動機はそれぞれです。たまたま全体で同じ方向を向いてしまった場合もありますし、一つの強力な霊体のリーダーシップによって方向性を決められている場合もあります。今回の事件もそれぞれの強い動機を持った霊が活動して個々の事件を起こしています。ただ明らかに全体を統率している意志があります。」

しかもかなりの狡賢さで全体をコントロールしています。その首謀者が何ものなのか？桜野緑海さんなのか、それとも別にいるのか？まだはつきりしません。そこで、由利先生」

「はい？」

「先生はそのヒントになる物をお持ちくださっているんじゃないでしょうか？」

「ヒント・・・ああ、そうそう、そうです、これです」

由利先生はカバンからあのノートパソコンを取り出した。

「えーと、分かっちゃってるんですね？これが何か」

紅倉は頷いて先生からパソコンを受け取った。受け取った方がいいかどうかやって開いたらいいのかそれさえ分からない。芙蓉が手を出して開き、電源を入れた。

起動画面が乱れ、ザザ・ザ・ザ・とゾンビのような女たちがフラフラ蠢く映像がディスプレイ全体に現れた。

紅倉はじつと画面を見つめ、なるほど、と頷いた。

「そうです、わたしはすっかりこの可能性を忘れていました。もつと世の中のことを勉強しなくてはなりませんね。この事件の首謀者、それはまさに、この機械です」

紅倉は自信満々にノートパソコンを指し示したが、みんなはあ？と首を傾げた。

「ちよつと失礼」

紅倉はいきなり手を伸ばして由利先生の首の後ろを触った。

「このゴロゴロする物はいつ頃からあります？」

「え？ なんです？」

角谷の質問に由利先生は答えながら考える。

「ああ、なんかね、首のここんとこに硬いゴロゴロした物ができちゃっているのよ。そうねえ、1、2ヶ月前くらいからかしら？よく覚えてないけれど」

「どうです、その頃あなたは既にパソコンであの映像を見ていたんじゃないませんか？」



「えー、さあ？ 時期は分からないけれどたしかにテレビ放送前にインターネットであのビデオ映像は見ています。それでテレビ放送を楽しみにしていたんですよねえ・・・」

「首のそのゴロゴロした物が女の人から女の人へ渡り歩いている妖怪の道しるべになっているのです」

「ええっ!？」

「やだ、どうしよう!？」と由利先生は急に慌てて首の後ろを探った。  
「だいじょうぶ、消してあげます」

紅倉は再び由利先生の首に触ると揉みほぐした。

「はい、消えました」

「あら、ほんと。へー、簡単なものですねー」

「ありがとうございますう、と由利先生は嬉しそうに紅倉の手を両手でしっかり握った。お礼を口実に紅倉のハンドパワーを少しでも分けてもらおうとしているに違いない。

「じゃあ、テレビを見た人が必ずしもバケモノに変身しちゃうわけじゃなくて、ネットで映像を見た人が変身しちゃうんですか？」

「インターネットで下準備をして、テレビがスイッチになったのでしょうね。一般公募のオーディションを開催して、インターネットで応募を受け付けて、テレビで審査を行ったのでしょうね。選ばれた人は災難ですが」

由利先生が心外らしく言う。

「合格の基準はなんです？ なんでわたしは選ばれなかったんです？」

「せんせー」

角谷が呆れて睨んだ。先生はまだだつてーと言っている。紅倉は笑った。

「楽しい人たちですね。さあ？ 明確な基準は分かりませんがあなたが選ばれなかったのはきつと彼らのおかげでしょう。あなたは彼らのおかげで事件の核心にかなり近づいてきている。それは敵にとつて予想外のことだったでしょう。今さら危なくてあなたには近づけ

なくなつたんですよ。うかつに近づけば、わたしに捕まる危険性がありますから」

紅倉は何故か不敵な微笑を浮かべた。

「そっかー、君たちのおかげだったんだー」

由利先生は感激の面持ちで馬木と角谷を見た。

「俺たちが危ない事態に先生を巻き込んだとばかり思っていたのにねー」

角谷としては由利先生の感激の眼差しを独占したいところだろう。あつ、そうだ、と由利先生は紅倉に言った。

「じゃあわたし、桜野さんのお母さんには会わない方がいいですね？ あなたといっしょに会わせてもらう約束だったんですけれど」

「そうですね。取材の方ももうめちゃくちゃですし、あの人のことだから、あなたを誘惑して仲間に引き入れようとするかもしれないよ」

「誘惑？ まあ！」

先生は頬を押さえて恥じらう振りをした。

「冗談でもありませんよ。あの人の感覚はもう相当狂ってきています。今回の事件の一番の被害者は彼女かもしれませんね・・・」

紅倉は考えて、芙蓉に言った。

「桜野緑海さんをテレビ局にご招待しましょうか？ ここに残していくのは不安です」

「だいじょうぶですか？」

芙蓉は不安そうだ。

「岳戸さんがいますよ？ あの二人を会わせたら、また」

「いずれにしても危険は同じです。それならいっそ一力所にまとめておいた方が対処もしやすいでしょう」

「先生の負担が大きくなりますよ？」

「仕方ありません。放っておくわけにもいきません」

話はまとまった。桜野緑海も東京へ行く。たぶん。馬木は訊いた。「葉子のお母さんは・・・悪い人なんですか？ あの人は、本気で

娘のことを心配していたと思うんですけど・・・」

他の人にはそう見えなかったかもしれないけれど、馬木にはそう思えた。まして自ら娘を死なせるような真似はしないだろう。

「危険ですが、悪い人ではないでしょう。かわいそうな人です」

「救ってあげられますか？」

紅倉は悲しそうな目で馬木を見つめ返した。

「そうですね、今度は後悔のないようにしたいものです。が、確かな約束はできません。今回は敵があまりに強大すぎます。全力を尽くすことは約束しますが」

紅倉にしても辛いところらしい。彼女は馬木たち凡人と違ってある程度未来が見えているのだろう。紅倉は未来を視て切なそうに言った。

「まったくなんという世の中になったことでしょう。この戦いに勝利はあり得ません。被害をどの程度に抑えられるかという虚しい勝負です。こんな救いのない世の中にどうしてなってしまったのでしょうかねえ・・・」

「俺は・・・」

馬木も切ない気持ちで言った。

「どうしたらいい？何ができるんでしょう？ 葉子のお母さんは俺に言ったんです、葉子を決して裏切らないでくれ、って。でも、当の葉子は死んでしまった。今さら、葉子のために何ができるんです？・・・」

紅倉は明確に言った。

「彼女を地獄に落とさないようにすることです。彼女が今だ危険な状態であることに変わりありません。

あなたに一つ任務を与えましょう。悪霊との対決です。先生とあなたにはそのサポートをお願いします」

「任務って、なんです？」

「では、これからその場所へ行きましょう」

紅倉は芙蓉に頷いた。

由利先生のちょっとしたきれいになった古いカローラに先導されて紅倉のピカピカの新型高級ハイブリッドカーは青山高校に向かった。馬木は紅倉の車に同乗させてもらって、角谷にはちよつとしたサービスだ。正直なところ今二人といっしょにいるのは辛い。どうしても同情的な視線が気になる。

学校の職員駐車場に止めて、どこに向かうのかと思ったら沖浦の家だった。沖浦の家は学校のすぐ近所だ。

由利先生が呼び鈴を鳴らした。母親に青山高校の教師を名乗り、沖浦を呼んでもらった。下りてきた沖浦は青い、何かに怯えた顔をしていた。

「沖浦さん。だいじょうぶ？」

「はい……。あの、なんの用でしょう？」

時刻はもう7時近い。怪訝に思うのも無理はない。先生の後ろの馬木たちに視線を向けて何故かますます怯えた顔になった。

「どうしたんだ？ 何かあったのか？」

「あ、あの……。いえ……。なんの用？」

紅倉が馬木をどかせて顔を見せた。

「こんにちは。初めまして」

「あなたは……。紅倉……。美姫さん？」

沖浦の脅えは更にひどくなった。紅倉は優しく微笑んで言う。

「大丈夫ですよ、彼女は、あなたには何もできません。あれはただのはつたりです」

「な、なんのことを言ってるんです？」

「居るんでしょう？ 彼女、桜野葉子さんが？」

沖浦も驚いたが馬木たちも驚いた。

「あなたの考えていたようにあれはただの監視カメラです。でも、彼女はしくじりました。スイッチを切る前に本体の方の電源が落ちてしまったのです。手を広げすぎたのが失敗の原因ですね。おかげ

でこちらはようやく先手を打つチャンスに恵まれました」

「な、何を言ってるんです？・・・」

「あなたの机の上に居るんでしょう？大きく口を開けて、葉子さんの生首が」

沖浦は大きく目を見開いて、わっと泣き出した顔になった。由利先生は馬木をチラッと見たが、仕方ないという顔をして沖浦の肩を抱いてやった。沖浦は先生に抱きついてわっと泣いた。母親が驚いて出てきたが、

「すみません。実は、クラブの後輩の生徒が亡くなったんです」と説明した。

「事件の可能性が高いですのでくれぐれもご内密に」

と念を押して。母親は紅倉を怪しみつつ奥に引っ込んでいった。聞き耳を立てているに違いない。紅倉は沖浦に手を差しだした。

「さ、出てらっしゃい」

沖浦はおっかなびつくりその手を取り、つつかけを履いて一步玄関を出た。

「はあー・・・・・・・・・・」

大きくため息をついた。

「怖かったでしょうね。もう大丈夫ですよ。あなたに危険はありません」

紅倉は沖浦の首の後ろでクルクル指を回し、それに気付いた沖浦はビクツと怯えた顔になったが、紅倉は安心させるように微笑んだ。「あなたには見えますね？ ご覧の通り糸を切ってもあなたは平気です。はったりだったんです。これであればわたしの手の内です」

沖浦は今度こそ心底安心した顔になってまた泣きなくなったらしい。角谷がドンと馬木の背中を押した。馬木は沖浦の間近に向かい合って、ドギマギした。

「あの・・・、もう大丈夫だってさ」

「うん・・・」

沖浦は小さく頷いて握り合わせた手をちよっぴり前に出した。馬

木が握ってやるとポロポロ涙をこぼしながら微笑んだ。

かわいいな・・・。

馬木は葉子に悪いと思いつつそう思った。

一方紅倉は・・・。

紅倉は沖浦の首から引き抜いた霊体の糸を自分の首の後ろにつなげた。じつとその先にあるものへ意識を侵入させていく。

紅倉の顔色が変わった。じわじわ驚愕が広がっていく。

「まさか・・・・・・・・・・」

彼女の信じられないという呟きに皆が不安になって注目した。紅倉は接続を断って険しい顔を上げた。

「あり得ないことですが・・・、葉子さんは生きているかもしれませ  
ん・・・・・・・・」

馬木も、沖浦も、凍り付いた。

## 第22話 嵐の前の

翌日。朝8時20分発の新幹線で発つというので馬木は青山駅に桜野緑海たちを見送りに行った。東京へ行くのは緑海と下の娘二人・8歳の晴美と5歳の知世の三人だ。次女の紗恵は祖父の家に残るという。

三人は黒の喪服を着ていた。なるほど、晴美と知世はよく似ていて、叔父さんに似ていた。母親の緑海も、言われてみれば叔父さんそっくりの目をしている。なんで今まで気付かなかったのか不思議なほどだ。

「喪服ですね？」

「ええ。こんな暑い中、ほんと、いやになっちゃう」

緑海はゆったりめのワンピースを着て、代わりに胸元を小さなリボンで止めたスーツを着込んでいた。縁なしの帽子もかぶっている。

「その喪服は葉子さんのためですか？」

見つかった死体が葉子だとはまだ発表されていない。

「いえ。父が死んだの。葉子のことはまだないしょ」

こんなかつこうでも緑海は不謹慎なほど美しく輝いている。8月12日金曜日。上りはそれほどでもないが新幹線ホームは既に帰省客で混雑してきている。その大勢の人々の目が場違いとも思える喪服の美女と美少女たちに注がれていく。

「僕も、叔父を亡くしました。突然の火事で、おとといの夜、急死しました」

馬木もワイシャツに黒のパンツをはいている。

「そう。お気の毒に」

「僕宛の遺書があったんです。あなたとの関係も書かれていました」

「自殺なさったの？」

「ええ」

「ひどい人ね」

「ええ」

馬木は緑海と見つめ合っている内に悲しさと寂しさが耐えられないほどにこみ上げてきた。

「あなたは僕が叔父さんの甥だっけ知っていたんですか？」

「ええ」

「あなたも、ひどいじゃないですか？」

「ごめんなさいね」

目を細めて微笑んだ。笑い方まで叔父さんにそっくりじゃないか。  
「僕もあなたに謝らなくちゃ。僕は、けっきょく、葉子さんのために何もしてあげられなかった」

「そうなの？ あの子は今もあなたのことが大好きだと思っただけ？」

「葉子も・・・僕と叔父さんのことを知っていたんですか？」

「知っていたでしょうねえ、当然」

緑海は悪意のない笑みを浮かべて言う。

「わたしとしてはね、都合が良かったのよね。あの子があなたとくっついてくれば、わたしは賢造さんと堂々仲良くできるから」

「葉子にとって僕は叔父さんの代わりだったんですか？」

「代わりと言えば代わりかしら？ いいじゃない、若くてピチピチの男の子の方がいいに決まっているもの。わたしだってあの子がいなければあなたに乗り換えちゃおうかなー、なーんて思っちゃうもの」

この人は最初からこんな変な人だったか？ 紅倉美姫の言っていたようにこの人も崩れてきているようだ。

「言っただけいいのかな・・・。紅倉さんが葉子はまだ生きているかもしれないって言っていました。どうなんですか？ 遺体の確認はされたんですか？」

「ええ。あれは間違いなく葉子でした。もっとも、顔はなかったけれど」

馬木はビクツとした。



「顔が？なかった？・・・」

馬木は幼い娘たちを気にした。質問しておいてなんだが、いいのか？そんなことをここで言って？

「それでも葉子だったと言い切れるんですか？」

「ええ。母親ですもの。これでもあの子は溺愛していたのよ？」

信じられない。叔父さんの話ではそうは思えない。

「指紋もあの子のものに間違いなかったわ。それなら信じる？」

「信じたくありませんけれどね」

妹たちの視線が気になる。子どもの澄んだまん丸の瞳でじつと馬木を見つめている。妹、知世が言った。

「ママ。この人がパパのお気に入りのお兄ちゃん？」

馬木は驚いたが、緑海は優しく微笑んで言った。

「そうよ。この人が本当のパパの自慢していた良人さんよ」

「へー」

姉妹揃って好奇心丸出しで馬木の顔を穴の開くほど見つめる。

「なんかふつうだよね？」

「けっこー期待外れだね」

それは紗恵ちゃんにも、初対面の時緑海にも言われた。母娘姉妹揃って失礼な親子だ。だが。

「知っているんですか？父親のこと」

「ええ。わたし、この子たちには隠し事ができないのよねー。わたしたち天敵同士なのよ、ねー？」

ねー？と三人仲良く首を傾げた。たしか緑海は葉子以外の娘たちを愛せないと悩んでいたのではなかったのか？言ってることはともかく見た目はひどく仲がいいじゃないか？緑海は馬木の疑問の眼差しに妖しく微笑んで答えた。

「わたしたち三人は母子以上に対等な関係なのよ」

知世が愛くるしい顔でにくつたらしく言う。

「葉子ちゃんは好き。紗恵ちゃんは嫌い」

晴美も大人びた冷酷な微笑で言う。

「そうね。紗恵ちゃんはおわたしたちの仲間じゃないわ。半端な出来損ないよ」

「あらひどいわねえ。あれでもわたしの娘よ？」

「あんなの産まなきゃよかったのよ」

「あらあら。かわいそうな紗恵」

笑っている、母娘三人で。馬木は今までで一番ゾツとした気分になった。

東京からわざわざ迎えが来ていた。

「そろそろ時間です。乗って待つてください」

緑海は頷き、馬木を見た。

「なんならあなたもいつしよにこない？　そうしてくれたらわたしたちは楽しいんだけど？」

「いえ……。僕はこっちでテレビを見ています」

いつしよに行ったらこの母娘たちに何をされるか怖い。

「そ。残念。じゃあしょうがないけれど……。もう一度言うわよ、葉子を裏切ったら、許さないわよ」

目がギラツと本気の光を放った。一瞬で元の微笑に戻る。馬木は確信した、この人はもはや自分が怪物であることをはっきり自覚している。それを積極的に肯定している。

「じゃ、さようなら」

「バイバーイ」

三人は列車に乗り込んだ。馬木は出発まで待つて走り去るのを見送った。行ってしまつてほつとした。

そうだ、馬木はこちらでテレビを見ている、沖浦と、角谷と由利先生といつしよに。

昼2時、岳戸由宇がテレビ局入りした。三津木は報告を受けて楽屋に向かった。昨夜新幹線で帰京した由宇はその足で高級ホストク

ラブに向かつてかなり派手に豪遊したということだ。霊能力のテンションが高まっているのだろう。

由宇の控え室のドアをノックした。

「失礼します」

ドアを開けるなり由宇が迫ってきて部屋に引き入れられた。いきなりがつつくように唇を重ねてきた。濃厚なキスをしながら、三津木は由宇の新しいマネージャーを見た。大学出たてといった感じのかわいい男の子だ。唇の周りが赤い。口紅がついたのか、激しく吸われて腫れているのか。さすがに三津木も気分が悪い。由宇を引き離して言った。

「江戸先生。落ち着いて、場所柄をわきまえてください」

由宇は唇を舐めながらニイッと笑った。妖艶な、ゾツとするほど美しい笑顔だった。

「協力しなさいよ。気分が最高にハイになっちゃってしょうがないのよ。うふふふ、代わりに今夜の番組は任せてちょうだい。最っ高に素敵なショーにしてあげるわ!」

なおも絡みついてくる由宇を振りほどきながら三津木は言った。

「それはそれは。大いに期待していますが、先生、今の状況が分かっているんですか?」

「うーん、もう、つれないわねえ。任せてって言ったでしょう? 分かっているわよ、何もかも、ね」

由宇の笑顔に三津木はゾツとした。これはもはや由宇であって由宇ではない。完全に乗っ取られているのだ、どの誰とも知らない大昔のお姫様に。

悪夢が甦る。

もう以前の優に戻ることはけっしてないのだろうか?

三津木は気を取り直して確認した。

「バケモノに変身した人は現在21名。つい先ほど東京都内で確認されています。すべて13歳から27歳までの若い女性です」

由宇が眉をヒクリとさせた。

「27歳までが若い女性？」

冷静さを崩さない三津木の顔にプツと吹きだした。

「あはは。いいわよ、どうぞ、続けて」

「そして、今や日本中石油で溢れかえっています。全国150カ所以上で湧出が確認されています。石油に道路が浸かつて避難勧告の出た自治体が40カ所あります。もっと増えそうです。完全にパニック状態です。」

さらに、世界各地の油井で急激に噴出圧が下がって産出量が激減しています。パニックは世界中に広がっています。日本が地下から石油を盗んでいると、日本を悪役にしたデマが飛び交っているようですが・・・、あなたが否定もできませんね。迷惑なことです。石油が湧いて大喜びどころか、このままでは世界中、いや、地球中の石油が日本に吸い出されて、日本の国土は石油浸し、日本人は日本に住めなくなる。

最初に石油の噴き出した青山市のあの海岸、大量のコンクリートで穴を塞いだにもかかわらず、周りの土地からどんどん染み出して海にまで流出しています。どれほどの被害になるか、地元では顔を青ざめさせているでしょう。

それが今に全国に広がる。

日本はおしまいだ。世界も無茶苦茶になる。石油しかない砂漠の金持ち国が、本当に砂だけの貧乏国に成り下がる。そいつらに兵器を売って稼いでいた軍事大国も大損だ。フン、いい気味だが、今に世界中が血眼になって日本に軍隊を送ってきますよ、この石油は俺のものだ、ってね。なんて馬鹿げた話だ、天然資源最貧国のこの日本が、石油で世界中から恨まれて攻め滅ぼされるなんてね」

由宇はウンザリした顔をしている。

「演説は終わった？」

三津木もつい熱くなつてしゃべりすぎたと反省した。

「ま、そういうわけです。これはもはやお化けだの呪いだのというチンケな話じゃなくなっているんです。まさに日本滅亡、いや、世

界滅亡の危機を迎えているんです。今夜の番組は日本中、いや、世界中の注目を集めているんです。

先生、覚悟してください。最初に石油を噴き出させたのは、先生、あなたなんですよ！ 先生は日本中、いや、世界中の人間から吊し上げを食らう羽目になるかもしれませんよ！？」

「あら怖い」

由宇はまったく恐れることなくニヤニヤした笑いを浮かべている。「ねえ、そんな怖いこと考えないで、今を楽しみましょうよお？」

なおも絡みついてくる。黒のタンクトップから伸びた白い腕がほんのり汗ばんで女の臭いを発散させている。

「やめてくれ。優ちゃん！ 本当に君は君でなくなってしまったのか！？ 下手をすれば、殺されかねないんだぞ！？」

由宇は喉をのけ反らせてケタケタ笑った。

「あはは・・・あーおかしい・・・あなた、本気でそんなこと思っているの？ 日本が滅ぶ？ 世界が滅ぶ？ あはは。やーねー、そんなこと、起きっこないじゃない？」

クスクス笑いながら三津木の目を覗き込んだ。

「三津木さん、疲れているのよ。みーんなただの偶然、ただの事故よ。すぐに落ち着いて元通りになるわ。ね？」

「そう・・・だな・・・はは、まったく、俺もどうかしてる」

ね？と由宇はニツコリ笑った。三津木も力無く笑い返した。

「それじゃあ3時からスタジオでリハーサルを行いますので、先生、お願いします」

「はい」

三津木は廊下に出て、細く残したドアの隙間から中をうかがった。由宇は新人マネージャーに襲いかかり、彼氏是由宇の成すままにされている。

「いいのよ、楽しみなさい。今だけよ。今夜、全てが終わる。この世の何もかもが。そして、新しい世界が始まる。わたしの王国が！」

由宇はマネージャーの顔を胸に押し付けたまま三津木を振り仰い

だ。

「全ての力は我が手の内にある。紅倉美姫など、もはや恐るるに足らん」

三津木はそつとドアを閉めた。

青山高校にはおよそ50世帯が避難している。あの海岸の家から半径1キロ圏内の全世帯に避難命令が出ている。命令の範囲は更に拡大しそうだ。青山高校のある学校町には小中高校合わせて6校ある。その6校全てに避難家族が収容されている。別の地区の学校公民館も避難場所に当てられ、自主的に避難してきている家も合わせておよそ1000軒の家族が避難している。こういう地域が全国にある。

馬木たち4人は幸い危険な地域から離れている。一番近いのがかすみの家だが、かすみの家は青山高校のすぐ近所だ。避難地域には当たっていないが、馬木たちはボランティアとして由利先生を手伝って青山高校に集まっている。ボランティアとして活動するのは必要とされていることだが、本当の目的は夜7時から4人揃って視聴覚室でテレビを見るためだ。事件発生の現場の一つであるここで見るのがふさわしいだろう。かすみ以外には見えないのだが葉子の生首は昨夜の内に紅倉さんが風呂敷に包んで視聴覚室に運んでくれている。今机の上に風呂敷は開いて置かれている。何もないその上に葉子の生首が恐ろしい顔をして居ると思うとゾツとする。

体育館で夕食のお弁当を配り終わると、かすみは家に帰り、馬木と角谷は通りの定食屋に行つて夕食を取った。由利先生は教務室でもろもろ受け継ぎをしている。

7時10分前、馬木、角谷、由利先生、かすみは視聴覚室に集まった。避難家族は体育館、武道場、一部教室に収容されている。そのうち体育館にもテレビが2台運び込まれている。災害情報用に設置されたものだが、7時からはどうなのだろう？ 多くの人が紅倉

さんの番組を見たがると思うが、一部頭の固い人間からくだらないものを見るなと反対されるかもしれない。こんな狭いところでも人間同士の醜い争いが展開されそうだが、それも予期して2台テレビを運び込んでいる。小さな子どもがいる家族は武道場の方に収容している。この手配は由利先生によるもので、さすが情報分析系と他の先生から褒められていたが、多分それは見当違いの意見だ。由利先生は人間のことをちゃんと見て考えているからそういう気配りができるのだ。先生が顧問で本当に良かったと思う。

「いよいよね」

ちよつと疲れ気味の由利先生が元気を出すように言った。

「さて、じゃ、もう一度紅倉さんからの注意事項を確認しておくわよ。」

まず、葉子さんの首から半径2メートルには決して近づかないこと」

葉子の生首が載っているらしい風呂敷を敷いた机はテレビの前にある。紅倉さんがテレビを通して監視しているとのことだ。そして馬木たちは一番後ろの列の開けっぱなしの出口の方に寄って並んで座っている。席順は出口側からかすみ、馬木、角谷、由利先生だ。

「紅倉さんから指示があつた場合直ちにこの部屋から逃げ出すこと。馬木君は沖浦さんを守ること」

角谷がすかさず、

「じゃ俺は由利先生を守ります」

と宣言した。

「はいはい。わたしも一目散に逃げるからあなたも脇目を振らずに逃げることに。それと、紅倉さんから渡されたお守りはちゃんと持っているわね？」

全員胸のポケットから取り出した。7センチほどの銀の女神の像だ。けっこう重くて、高価そうだ。

「決して体から放さず、万が一の時にはその女神さまに強く救いを念じること。もしかしたら女神さまが直接助けてくれるかもしれない」

いからって」

女の子のかすみが言う。

「女神さまが助けてくれるって、本当に本物の女神さまかしら？」

「そうなんでしょうね。紅倉さんはよく自分は神の操り人形だって言ってるから。その神様なんでしょうね」

このメンバーで一番紅倉さんの番組を見ているのは由利先生だ。

「以上だけど・・・、忘れていないわよね？」

「オットは？」

角谷の指摘に由利先生が頷き、馬木を真剣な眼差しで見た。

「馬木君は、分かっているわね？」

馬木は頷く。かすみが不安そうな目で見つめた。

馬木は紅倉さんに忠告された。

あなたは多分危険な目に遭うと思います。危険から遠ざけてあげたいけれど、あなたは敵と戦うための唯一の切り札なのです。すみませんが、勇気を持って相手と向かい合ってください。

と。紅倉さんは昨夜の内に芙蓉さんの運転で東京に帰った。本当は馬木と葉子の生首をいっしょに連れていきたくたらしい。断念した理由はよく分からない。芙蓉さんが言うにはそれでは先生の負担が大きすぎるとのことだ。代わりに叔父さんの作った葉子の生き人形を持っていった。関節が仕込まれているのでふつうに座席に座ることができる。外から見たのでは人形とは分からないだろう。

紅倉さんは芙蓉さんをこちらに残していきたくたらしく、さんざん迷っていたが、結局これも断念した。先生には芙蓉さんが必要なのだ。だいたい芙蓉さんなしではどこかで迷子になってテレビ局にたどり着けない危険もある。

6時58分。

『緊急検証、ビデオに映った少女は何者か！？ 今日本中で何が起きているのか！？ 二人の美人霊能力者がその全てを謎解きます  
！！』

いよいよ、始まる。



## 第23話 「緊急検証！ 幽霊少女は誰だ！？」

『皆さん今晚は。金曜スペシャル特別緊急企画、緊急検証、ビデオの少女の正体は！？ 今日本中で何が起こっているのか！？』

紅倉美姫VS岳戸由宇、二人の美人霊能者が徹底解明！  
司会の熊野宏です。

今日本中が騒然としています。おとといから始まった石油噴出騒動。今現在避難所でこの番組をご覧になっている方も大勢いらっしやと思います。今日もテレビでは朝からこの事態の科学的な解明が試みられています。残念ながら明確な原因を探り出せずにいます。被害は現在進行形でじわじわ広がり続けています。社会的、国際的な危機的状況も進行しています。一刻も早い原因解明と事態の収拾が求められています。

こういうことを言っでは叱られるかもしれませんが、この天変地異を多くの方がこう思っでいらっしやるでしょう、これは神の怒りである、または、悪の魔王の降臨である、と。いずれにしろ人知を超えた事態が進行しているのです。この人類の危機に対抗しうる我々人類に残された最後の希望、さっそくお迎えしたいと思います。

これまで数々の怪奇現象を鋭い霊能力で解決してこられたお二人、美人霊能力者としてもお馴染みのこのお二人です、

岳戸由宇さん、

紅倉美姫さんのお二人です』

女性アシスタントの案内で岳戸由宇と紅倉美姫が登場する。派手な演出はない。スタジオセットも敢えて前回と同じ物を使っている。紅倉美姫には芙蓉美貴が寄り添って手を引き、席に着かせる。自分も紅倉の斜め後ろに座る。岳戸と紅倉は丸テーブルに向かい合って

座っている。セットの真ん中。前から見ると後方の司会者やゲストが隠れてしまうが、これも敢えて、今回は完全にこの二人が主役で、二人の対決という形で番組を進行させる。

江戸由宇は紫のジプシーのような衣装。相変わらずきつめのメークだが、今回はそれがぴったりはまっている。

紅倉美姫は白のパンツに白のゆったり柔らかなシャツ。相変わらず化粧づけは丸でないが、ナチュラルでありながら人間離れた美しさだ。アシスタントの芙蓉美貴は黒のスーツ姿で、こちらにもトップモデル並の美貌だ。江戸は不敵な笑みを浮かべてまつすぐ紅倉を見つめている。紅倉相手にいつにない余裕だ。一方の紅倉は珍しく緊張して幾分かわばった表情をしている。

『江戸先生、紅倉先生、よろしく願います。』

まず大枠の確認をしたいのですが、今起こっている石油噴出騒動、そして現在まで21人の被害が確認されている若い女性の変身病。この二つは関係しているのでしょうか？

まず江戸先生、いかがでしょう？

『その通りです。2つの事件は密接に関わっています。これは異世界、・・紅倉先生の言葉を借りるなら魔界からの侵略攻撃なのです』『魔界からの侵略ですか？ それは紅倉先生もそうお考えなのですか？』

『はい』

『・・分かりました。ではその二つの事件は、まさに先週この時間に放送しました少女霊ビデオを発端としたものなのでしょうか？』

江戸が答える。

『そうです。しかしあのビデオはきっかけに過ぎません。魔界からの侵攻はそれまでに周到に準備されたものだったのです』

『紅倉先生はいかがお考えでしょう？』

『わたしの見方はちよつと違います。一連の事件は偶発的なものだったと思います。それを招いてしまう状況が出来上がってしまったということだと思います』

『なるほど。魔界からの侵略という点では一致していますがお二人の見方には微妙な違いがあるようです。』

事件はここまで実に複雑怪奇な展開を見させていただきました。番組第一部ではまず事件の発端となりました先週の番組、「本当にあった少女霊ビデオ」、この番組に発生した謎について検証したいと思います。』

CM。

CM明け。タイトル「少女はいつたい誰だったのか!? 番組AD殺人事件の真相は!？」

「さてここから事件の発端となつたいいわゆる少女霊ビデオと、当番組ADが殺害された事件から順を追って事件の推移を検証していこうという構成を準備していたわけですが、紅倉先生からそれについて提案があるということですね?」

「はい。せっかく準備していただいた段取りを壊してしまつて申し訳ないのですが、今現在の状況から逆に事件を辿つていった方が分かり易いと思うのです。わたしたちがいつたい何を敵として相手にしているのか、その正体を知らなくてはこれらの事件がさっぱり理解できないと思うのです」

「なるほど。たしかに我々には今いつたい何が起こっているのか事態がまるで理解できないでいます。いいでしょう、実はこれだけの事件をわずか2時間の番組で検証できるものなのか、肝心の結論が尻切れトンボに終わるのではないかと心配していたのです。結論を教えてくださいあればありがたいです」

紅倉が正面の岳戸を気にして言う。

「岳戸先生、それでよろしいでしょうか?」

「ええ、かまいませんよ。では、先生、お教えますか? 先生のおっしゃる魔界とは、どういうものなのですか?」

紅倉は頷き岳戸に向かって話し出す。カメラは紅倉の背後から、岳戸の背後から、交互に二人の表情を撮し出す。

「魔界とは、一言で言えば人間以前の世界です。

人間が誕生する以前にもこの地球には長い長い生物の歴史がありました。はるか以前に滅び、今は土の中の化石にしか記憶されていないそれらの生物にも、わたしたち人間と同じ生きている時間があり、生活があり、心があつたはずです。それらの生きていた時間、心といったものは、今現在完全に失われてしまったのでしょうか？

わたしや岳戸先生は霊能力者と呼ばれる存在です。霊能力とは、ふつうの人間の五感ではキャッチし得ないものをキャッチし、見たり、聞いたり、感じたり、五感に置き換えることのできる能力です。わたしたち霊能力者からすれば、そういう世界、いわゆる霊の世界とは、在るのが常識なのです。普通の人にはそれが見えないというだけのことなのです。

霊の世界とは、いわゆるお化けです。幽霊や、魂や、あの世、死後の世界のことです。それが見えない人にも、文化的な知識としてそういう存在を想像はできるでしょう。信じる人もいるでしょうし、信じない人もいるでしょう。いずれにしてもその想像するところはだいたい共通しているでしょう。つまり、霊の世界も、わたしたち人間の世界だということなのです。

では、もし仮に、わたしたち人間が何らかの原因で一人残らず死に絶えてしまったら、霊の世界はどうなるのでしょうか？

霊を信じる人は、死後の世界もあの世に存在して、霊、魂は永遠に続くと、そう思っているではありませんか？ だからどの宗教でも天の国の永遠を詠い、死後神の下に召されるようにこの世での正しい生き方を説き、信じる者は神の下に永遠を思い自らの生き方を律しているのではないのでしょうか？

では、わたしたち人間が滅び去った後、新しく文明を持つ生物が現れたとして、彼らは、わたしたちの霊を見ることがあるでしょうか？ 彼らの目指す永遠なる天の国は、わたしたちの思い描く永遠の天の国と、同じ世界なのでしょうか？

わたしは、違うと思います。

わたしは、人間の幽霊は数限りなく見てきましたし、犬や猫、猿や馬の幽霊なども多く見ました。でも、マンモスや類人猿、恐竜の幽霊など見たことがありません。過去無数に存在したはずの彼らの霊を、わたしは見ることがないのです。彼らには霊となるべき魂がなかったのでしょうか？ わたしは違うと思います。彼らにも魂は宿り、彼らなりの死後の世界が存在したと、思います。

わたしは人間以外の動物の霊もたくさん見てきました。しかし、一寸の虫にも五分の魂という言葉がありますね？ ことわざとしての意味はともかく、そこには全ての生き物には魂が宿っているという世界観が込められているはずです。しかしどうでしょう？ 一寸つて、3センチくらいですか？ 3センチの虫に人間とまったく同じ魂が宿るものでしょうか？ ゴキブリに人間と同じ魂が宿っているなんて、考えたくありませんよね？

人間には人間の、動物には動物の、虫には虫の、それぞれの魂があるのだと思います。それぞれは魂の種類が違うのです。だからキツネ憑きと呼ばれる動物霊が憑依した人間は人間の行動が取れず、さりとて動物としてもおかしくなってしまうのです。それぞれの魂と肉体に互換性はないのです。

そうして考えてみれば、はるか過去に滅び去った生き物の霊や、彼らの死後の世界が、現在生きているわたしたちにキャッチできないのも道理でしょう。彼らの魂とわたしたちの魂はまったく互換性がなく、彼らの霊界とわたしたちの霊界は完全に断絶しているのです。

と、言うておいてなんですが、実は、まったく接点がないわけでもないのです。

話が飛躍しますがこの国には神がいます。

あらひとがみ様のことはありませんよ。神、としか言い様のない物のことです。

日本人は古来神との関わりの深い生活をしてきて、土地的にも神との交わりの多い国でした。仏教到来以前の日本オリジナルの土地

神への信仰はもちろん、政治ももと神との交流によって行われていました。外敵を討ち滅ぼす神風などもそれら土地神の助力を頼んだものでしょう。

現在わたしたちはふだんの生活の中でそれら神を意識することはありません。多くの人間が迷信として軽蔑し、その存在を無視しています。ですが、古来の知識を伝承し、彼ら神々の力を利用しようと試みる人々は、一部ではありますが、厳然と存在し、彼らは、国の中心に位置しています。長い歴史を見て、この国の運の良さは、実は、それら神と彼ら神の力を味方に付けようと秘術を以て活動している人々の努力に依るところが大きいのです。

が、それも一つのエピソードに過ぎず、残念ながら彼らも今度の事件を食い止めることはできませんでした。なにしろ相手はその神そのものなのですから、仕方ありません。

そうです、神とは、つまり、魔界の物に他ならないのです。

神、とはわたしたちの生きる現世と魔界が交わった点に生ずる異次元のパワーです。それは軋轢であり、きしみであり、歪みであり、本来目に見えない物です。が、たまたまそれが物の形や、生き物の姿として現世に現れることがあります。神社のご神体がそうであり、昔から妖怪と呼ばれる奇妙な姿をした生き物がそれです。それらは人知を超えた不思議な力であり、理解しがたい奇妙な存在です。現世のわたしたちの尺度で測れないのが道理、もともとわたしたちの世界とは相容れない魔界の物なのですから。日本とは、古来よりそうした魔界との接点と交流の多い不思議な土地なのです。

ところで、魔界が既に滅んでしまった旧世界の霊界、あの世であることは理解してもらえたと思いますが、旧世界のあの世とは、どこにあるのでしょうか？

それにはまずわたしたちの死後の世界観を考えなければなりません。一般の人たちはあの世はどこにあると考えているのでしょうか？この地球上にあるのでしょうか？空の雲の上にあるのでしょうか？それとも地球を飛び出した宇宙にあるのでしょうか？まあ具

体的にどこかという結論はさておき、イメージ的には遠い場所と考えているのではないでしょうか？　そこで宇宙という一つの答えが出てくるわけですが、考えてください、宇宙、つまり地球の外という概念は人類誕生から今日までの長い歴史の中のほんの最近のことではありませんか？　地動説以前にも天という概念はあったわけですからあの世がこの地上を離れた空のかなたの高いところという考えはあったでしょうが、では、人類以前の生き物の死後の世界はどうだったのでしょうか？

人類以前の文字も文明も持たない生き物が、天、地球の彼方の外の場所という概念を持っていたとは思えません。もつとやってしまえば、彼らに死後の世界という物が存在するという考えそのものがあつたかどうか怪しいものです。

では彼らにやはり霊界がなかったのかというと、それも違うと思います。魂という物が存在する以上、そしてそれが永遠である以上意識しようとするまいと、魂自体は死後もどこかに存在しなければなりません。天という概念を持たない魂が行き着くところ、それは結局、自分たちが生きて、見て、感じていた、この場所にしかないのではありませんか？　つまり、彼らの死後の世界は、自分たちの生きていた現世と、まったく重なり合っていたのです。

今生きている現世のわたしたちが天国が自分たちの生きているまさにこの場所に重なり合って存在しているなんて、ふつつ考えないではありませんか？

わたしなりの死後の世界、天国のある場所についての結論を言いましよう。わたしたちの天国はどんだんこの地球を離れて宇宙の彼方を目指して移動しているのです。天国という物を作っているのは、他でもない、わたしたちの魂そのものなのです。わたしたちの魂の集合体、それがすなわち天国なのです。

この考えの正否は取りあえず置いておいてください。今問題なのはわたしたちの天国は天、空の彼方にあるが、魔界、彼らの死後の世界は場所的にはまったくわたしたちの今生きているこの世界と重

なり合っているということです。

魔界はここに在ります。

霊の存在になっっている彼らをわたしたちはお互いに意識し得ないというだけのことなのです。

彼らの世界は、目に見えない、この世に存在しないだけで、実はとてつもなく巨大な物に成長しているのです。なにしろ魂は永遠で、彼らの現世は既に失われ、新たな肉体に転生することができないのですから。ほんのちよつとの接点にわたしたちが神と恐れる巨大なパワーが生じていることでもその強大さが分かるでしょう。もし、彼ら魔界がこの現世に存在として出現し、重なり合ってしまったら、わたしたちの世界に勝ち目はありません。わたしたちの現世は、確実に滅びます」

CM。

CM明け。司会者。

「紅倉先生のたいへんな力説でした。たいへんな説で、わたしたちにはにわかには信じがたい話なのですが、魔界というのはそれほどのパワーを持っているのですか？」

「はい。彼らの魂はわたしたち人類の魂よりはるかに長い時間を過ごしているのです。その霊界もより強力な物へと成長しています」

「つまり、進化しているということですか？」

「そうです。肉体を失って文明を築く能力はありませんが代わりに生き物としては驚くべき独自の進化を遂げています。わたしたち現存の生物からすれば革命的というべき劇的な意識改革です。肉体の存在ではありませんからね、常に観念の改革がその姿となって現れるのです」

「それで、それが現在起こっていることとどう結びつくのでしょうか？」

「ああ、すみません、喋りすぎました。

そうですね、彼らは大昔の存在なのです、彼らのかつての肉体が



現在の現世でどうなっているかという？」

「化石、ですか？」

「それがもつと時間が経つとどうなります？」

「石油！ですか？」

「そうです。圧力によって化学変化を起こし、どろどろに溶けて、今現在は石油の姿になっています。地底深く眠っていた石油が地表に噴き出しているのは魔界が現世での姿を取り戻そうとしている活動なのです」

「しかし先生、我々はふだんから石油を採掘し、燃料や工業原料として様々に利用していますよ？」

「問題は魂の在りかなのです。別に魔界は石油の中に存在しているではありません。霊界としてわたしたちの現世とまったく隔絶しているから安定してこの土地に存在してこられたのです。彼らは今、その均衡を壊し、今、自分たちが再び現世の主となろうとしています」

「ううむ・・・、恐ろしい事態が進行しているのですね。しかしいったい何故そんなことが起こってしまったのでしょうか？」

「そうです」

紅倉美姫はじつと岳戸由宇を見つめた。退屈そうにあくびさえしそうにしていた岳戸は紅倉の強い視線を受けて面白そうにニツとした。受けて立とうという。二人の対決が本格的に始まる。

## 第24話 魔物

VTR。

海岸の家に向かって「破壊せよ！ 解放せよ！」と叫ぶ岳戸由宇。家に殺到する無数の昔の亡者たち。崩壊する家。大地震。出現した大穴。地下室らしき構造物。・・・。

司会者。

「この場所での後とんでもない物が発見されて問題の石油噴出になるのですが、ここでいったんVTRを止めてここまでの出来事の解説をお訊きしたいと思います。」

岳戸先生。いかがでしょう？」

司会者は幾分非難めいた目で岳戸を見る。

「これは仏の救いです」

岳戸はカメラに向かって自信たっぷりに言った。

「この世の終わりに当たって約束された弥勒菩薩様の下生が行われたのです。見なさいこの亡者たちを、皆粗末な身なりで瘦せて疲れ切った顔をしているでしょう？ 弥勒様はこの世で未だ成仏できずにさまよう亡者たちをお救いくださるたいへんありがたい仏さまです。わたしたちがこのような光景を見ることのできたのはたいへん光栄なことです」

「VTRには家の崩壊する様と大地震の様子しか映っていませんで、その弥勒様のお姿を確認することはできないように思うのですが？」  
「当たり前です。御仏のお姿など人間たちが自分の心に従って見たいように見るものです。ありがたい仏のお姿が、人間の作った機械になど記録されるものですか」

「はあ・・・」

紅倉美姫が発言する。

「見たいですか？」

岳戸がヒクリと眉を吊り上げた。司会者は身を乗り出すように言

う。

「それはもちろん。我々にも見る事ができるのですか？」

「ええ。お見せしましょう。家の映っているVTRを回してください」

VTR。殺到する亡者たち。周りを覆う青いシートがめくれ上がって崩壊寸前の姿を見せる家。モニターを見る岳戸の表情が険悪になり、司会者、ゲストたちは息を飲み、女性アイドルが悲鳴を漏らす。

家の周りに青い鬼火が舞い、家の崩壊と共に地中から真っ黒な裸形の巨人が現れる。巨人の体は亡者たちの顔によってできている。皆が怒りの形相で叫んでいる。巨人は両手を高々振り上げると地面に打ち下ろす。打ち下ろす。打ち下ろす。地面は真っ赤なハマナスの花に覆われているが、それがドロドロに溶けて溶岩のように煮えたぎっていく。逃げ出すカメラ。大地震が起きる。

ゲストの中年俳優がたまらず言う。

「またヤラセじゃないのかい？」

紅倉が視線を向けると俳優のとなりに青白い顔の老人が現れる。わき起こる悲鳴。俳優は驚愕して呟く。

「じいちゃん・・・」

老人はスッと消える。

面白そうに眺めていた岳戸が険悪な目つきに戻る。紅倉が言う。

「大黒天。ヒンドウ教の破壊神シヴァ。・・・を気取ったただの悪霊です。本当のシヴァはブラックホールなんですが・・・、まあそれはいいです。とにかくこれはただの破壊欲求に取り憑かれた怨霊の集合体です。岳戸先生もおっしゃったとおり彼らは歴史の中で虐げられてきた者たちです。彼らの人間社会に対する絶望をあおって破壊衝動を全開にさせたのです」

司会者。

「しかしこれはもの凄いの数の、幽霊たち、ですね？ 彼らが皆世界を破壊させたいほど人の世というものを恨んでいるのですか？」

「彼らはこの地域一帯に限定されたまだまだ一部の霊たちに過ぎませんが、彼らの破壊欲求は江戸時代の打ち壊しのように即物的なものです。世界そのものを滅ぼしてしまおうなんていう深い認識はありません」

岳戸が怒りの反論をする。

「それは違うわ。紅倉先生らしくもない甘い見方ですわね。彼らは深い絶望に打ちひしがれ、もはや自分が人間であることにすら絶望し、拒否しているわ。彼らは、あなたの言い方に従うなら、人間を捨てて魔物になりたがっているのよ」

紅倉。

「たしかに。わたしは人間に希望を見いだしたがっているのかもしれませんがね。今の人間の世が彼らに希望を示してあげられないのはとても残念です。その今の世の状態が今回の事件を引き起こしたのです。」

わたしは先ほど天国はどんな地球を離れて遠いところへ向かっていると言いました。では地獄はと言うと、地獄はどんなわたしたちの地球へ近づいてきているのです。いいえ、わたしたちの地球がどんな地獄へ落ちていっていると言うべきでしょう。一つ結論を言えば、魔界の侵攻を許した原因、それは今の世が魔界に非常に近い状態になってしまったからなのです」

薄笑いの岳戸。

「そうよ。だからわたしは正しいのよ」

紅倉。

「あなたはどちら側につくのです？」

「え？ なに？」

「あなた自身は人間につくのか、それとも魔界につくのかと訊いているのです」

「わたしは・・・」

思わず言葉に詰まる岳戸。皆の視線が集中する。紅倉の静かだが強い視線。憎々しげに紅倉を睨む岳戸。ふと我に返り軽やかに微笑

む。

「わたしはもちろん人間の味方よ。当たり前じゃない、わたしは人間ですもの」

「それなら何故彼らの破壊行為を煽るようなことをしたのです？  
かるうじて薄く両者を隔てていた壁を、あなたが決定的に壊してしまったのではありませんか？」

「地獄の口が開くのはもはや時間の問題だったのよ！ 地獄を招き寄せたのがこの世なら、それは人間の罪よ！ これくらいの目に遭わなければ、人間には自分たちのやっていることなんてまるで分からないじゃない！？」

「人が死んでいるのですよ？」

「それが人間の罪でしょう？ 自分たちの罪をよく見つめるがいわ」

司会者。

「ちよつと整理しましょう。人間の世界と魔界が非常に近い状態になっていたのですね？ その均衡は非常に危ういもので、その特に薄くなっていた場所を岳戸先生は敢えて破壊した、言い方が悪ければ、破壊に手を貸した、ということですね？ わたしからもお尋ねしたいですね、岳戸先生、今回の事件で大勢の方が亡くなっておられます。その方々が人間の罪を背負って死ななければならなかった正当性はあるんですか？」

皆が岳戸を非難の目で見る。岳戸は彼らの視線を見回し、居丈高に言い放つ。

「そうやって自分たちの罪を認めず、他人に責任をなすりつけて自分を正当化する、そういう態度だから魔界が現れるんでしょうがっ！？」

不愉快に黙り込むゲストたち。司会者が負けずに言い返す。

「しかしそれは先生、あなたにもそのまま返ってくる言葉なんじゃありませんか？」

不敵に居直る岳戸。

「そう思つてなさい。どちらが正しいか、じきに結論が出るわ」

司会者は紅倉に助けを求める。

「紅倉先生、いかがでしょうか？」

紅倉。

「岳戸先生は正しいです」

あら？という顔で喜ぶ岳戸。紅倉。

「しかし、正しいことがすなわち良いこととは言えません。それは仏の教えにもあるんじゃないですか？」

岳戸、無言。

「仏教を一言で言えばそれは、許し、です。罪を犯した者を許すのも一つ、許しを願ひ出て許しを受け入れるのも一つ。すなわち、自分が正しくても敢えてそれを忍んで相手に許しを求めることで平和な状態を保つ。」

日本仏教はおそらく世界で最も俗な宗教でしょう。歴史的に様々な宗教の神を眷属に受け入れ、その教えをも集合してきました。最も節操のないあやふやな宗教として軽蔑されるかもしれませんが、それこそが最も賢い人の有り様でしょう？

仏教は最も人間哲学的な宗教でもあるでしょう。その骨子に宇宙創生と終焉の科学的見解と類似を持ちながら、それを魂の輪廻転生と結びつけ、さらに人生観や日々の生活態度に実践していこうと思案する。仏教には多くの教典が存在し、それははつきりと人の手によつて書かれたものです。つまり人間が神の道を辿るために具体的にどうすべきなのかを考えているのです。それは難解で、明らかな相違もあり、迷いもあります。一つの教典にも決定的な答えはありません。自分で考え努力する、結果、一人に一つずつしか結論はないのです。全ての人間に共通する真理など、最初から存在しないのです。仏教が他宗教に対して最も優れている点、それは、自らをも完全ではないと最初から認めていることです」

岳戸はじつと押し黙り目を怒らせ唇をブルブル震わせている。岳戸は一応仏教徒であり、一方紅倉は日頃から無宗教家を自認してい

る。だめ押しの一言。

「この世に絶対的な正義など、絶対にはいんです。それがこの世です」

「うるさいっ!!」

江戸、激昂。思わず立ち上がり紅倉に指を突きつける。

「だから駄目なのよ！ そんなでたらめな世界、滅んでしまえばいいのよっ!!」

はっとうろたえる。開き直り、スタジオ中を敵に回して攻撃する。

「ごまかしよっ！ 自分たちの弱さや利己性や卑怯さや無知や間違いや暴力や罪を！、適当にごまかして無かったことにしているだけじゃない！ おまえもおまえもおまえもおまえも！、自分は無関係だなんて顔をして、被害者面してるんじゃないわよっ！ 分からない？ 難しい？ 馬鹿が！ その馬鹿がお前たちの罪なのだ！ 見て見ぬ振りなど許さん！ 知らないなんて許さん！ 自分たちの罪を見る！ あの恨みに満ちた亡者たちを見る！ みんなお前たち馬鹿者どもの犠牲者だ！ この世など、歴史など、しよせん勝者の物だ。敗者は無視され、忘れられ、捨て去られる！ 許さん！・・絶つ対に、許さんぞ!!」

額に青筋の浮かんだ江戸の剥き出しの怒り。静まり返るスタジオ。紅倉。

「何が、そんなに許せませんか？」

「馬鹿。しよせんおまえも馬鹿の一人だ」

「では、あなたはどなのです？」

「なにがよ!？」

「あなたは、賢かったのですか？ あなたも、ただの敗者に過ぎないではありません？」

「なにを!!」

「あなたこそ、自分を正当化しているに過ぎません。たしかにあなたに罪はありませんでした。でも、あなたのやっていることはただ

の仕返しでしょう？ あなたは、仕返しの相手を間違っています」

「間違つてなどおらん！ 皆のうのと生きておる罪人どもの末裔じゃ！」

「泥棒の子は泥棒ということですか？ それとも親の不始末を子どもに償えと？」

「やかましい！ 皆我らの犠牲の上に成り立っておる社会ではないか！？ そこにのうのと暮らしおって、それが罪でなくて何が罪じゃっ！？」

「では、もう許してくださいませんか？」  
「なに？」

「世界が滅びるのですよ？ 皆もう十分怖がっています。死の恐怖を十分味わっています。あなたの怒りはもう十分伝わっています。もう、許してくださいませんか？」

「・・・・・・ふっ、」

小さく、やがて大きく、笑い出す岳戸。

「愉快よのう。殺されるとなったらあっさり命乞いか？ あははははは、これは愉快じゃ」

あはははははは・・は。

ギロツとカメラを睨む岳戸。アップ。白目が黒く汚れて血走っている。顔色も妙に白くぬめぬめしている。

「苦しめ。恐れよ。お前たちはこれから一人残らず、死ぬ」

騒然となるスタジオ。思わず逃げ腰になる女性アイドル。岳戸に睨まれて腰が抜けたようにへなへな座り込む。

「わたしは怖かった。許しを請うた。誇りも捨てて恥辱を受け入れた。どれほど惨めで悲しかったか。貴様らはわらわの人の心を全て踏みにじった。あげくに、わらわは首を落とされ、ひとかけらの尊厳もなく他の死体といっしょに穴に投げ入れられ埋められ、踏みつけられた。

わらわは、もはや人間ではない。鬼じゃ。

わらわを鬼にしたのは、貴様ら、人間どもの心じゃ！！」



カツと真つ赤な口を開くと犬歯が異様に長い。獲物を狙って目をギョロリと動かす。

「お待ちなさい」

紅倉。

「今暴れると番組が終わってしまいます。謎解きはまだまだ残っていますよ」

岳戸、紅倉を睨んで、吹き出す。

「うつふつふつふ。さすがに肝が据わっておる。よかるう、つき合ってやる。全て解いてみよ」

座りなおる岳戸。背筋をピンと伸ばし両手を膝の上に揃えてお行儀いい。

「ありがとうございます。では」

美人FBI捜査官と食人鬼博士が対峙するような異様な画面。

「次のVTRをお願いします」

CM。

CM明け。

地震によって出現した大穴の底に地下室らしき木組みがある。等々力ディレクターが駆け下りていき、カメラが追っていく。多くのスタッフも。ハマナスの長大な根っこが密集して絡み合っているその中に何か見える。突然モザイクが掛かる。「どきなさい！」と岳戸が割り込んでくる。「これがバケモノの正体よ！」と得意になって叫ぶ。モザイクで画面では確認できない。ここでブツツとVTRは切れる。司会者。

「残念ながらこれ以上の映像はお見せできません。非常に衝撃的ですし、誠に残念ながらこの先のVTRを持ったスタッフが事故にあってテープが消失してしまいました。しかしイラストで紹介しましょう」

極力図式的に描かれたイラスト。

「あの空き地にはもともと大量のハマナスが群生していました。そ

の根がおよそ地下10メートルの地下室まで到達し、その根に支えられるようにして一人の少女の体を逆立ちさせていました。少女の顔は外からは確認できませんでした。何故なら、少女の頭部はそっくり謎の怪物に飲み込まれていたからです。その怪物の姿は、CGで再現しました。ご覧ください」

CGで再現された怪物の姿。司会者。

「伝説に登場する人魚のようですが、ご覧の通り非常にグロテスクです。人間と魚と恐竜を混ぜ合わせたようです。鱗もあります。上半身は人間のような肌をして乳房もあります。ほ乳類のようであり、お腹には3匹の子どもがいます。腹が割けているのはもともとこういう構造なのか、後から裂かれたものなのか分かりません。顔は、皆さんもうお気づきでしょう、あのビデオに登場した少女の幽霊の顔によく似ています。」

あらかじめ申し上げますが、この奇妙な生き物が本当に生物なのか、誰か人間が作った物なのか判断はできません。ただ、ここにこうして置かれていたというのは事実です。

このVTRの続きをお話ししましょう。取材スタッフは現場が崩れて埋まってしまうのを恐れて少女とバケモノを収容することにしました。バケモノの体は黒く、ミイラ化しているように見えました。なんとか両者をいっしょに持ち上げようと試みましたが不可能でした。仕方なく少女のみ収容しようとなりました。少女の顔はバケモノの口にすっぽり飲み込まれています。この口を開かせようとしたが、非常に硬く、力を込めたところ驚いたことに突然バケモノの口が閉じてしまいました。少女は首を噛み切られ、遺体は宙に跳ね上げられ、外に放り出されました。念のため申し上げておきますがこの時点で少女は既に死体となっていました。バケモノのミイラは急に表面に汗をかき始め、溶けだし、ドロドロになって地面に吸い込まれていきました。そして、そこから大量の原油が噴き出したのです。

さて、何からお訊きたらいいのでしょうか？ 岳戸先生」

岳戸は余裕の表情で紅倉にどうぞと手を振る。

「では紅倉先生」

「先ほどの続きを話しましょう。魔界の話です。このミイラがいったい何ものなのか？ よろしいですか？」

頷く岳戸。

「では。」

魔界とここ現世の接点で不可思議な物が出現すると話しました。多くは目に見えないパワーですが、たまたまご神体や妖怪といった姿を得るということです。

この人魚らしき物はその魔界のもの、いわゆる妖怪です。それかなり魔界の住人に近い姿を残しています」

司会者。

「魔界からここ現世に迷い出たということですか？」

「そう言っていていいでしょう。魂の本体なのか、その情報だけがこちらにコピーされたものか、判然としませんが、おそらく本人も分からないでしょう。しかしこうして肉眼で見えるのですから肉体の構成物質はここ現世の物です。魔界の住人の情報がかなりダイレクトな形で、おそらく深海の魚に、伝えられ、このような生き物が生まれてしまったのでしょう。しかしかなり危ういバランスの下で生まれた生物ですからこの形を維持するにはかなり限定された条件が必要だったでしょう。それが、あの場所だったのでしょう。おそらく彼女自身がテレパシーであの土地の持ち主に情報を伝えてあの場所に安置させたのでしょう」

「このお腹は、母親ですねえ？」

「そうですね。魔界の生物について説明しましょう。」

魔界の生物たちはもともとは大昔の恐竜といった生物たちでした。しかし彼らは滅んでしまい、魂の転生の叶わなくなった以降は天国、彼らの魂のネットワークの中で肉体を伴わない観念の進化を進めていきました。

わたしたち人間にとって驚異なのはその繁殖方法です。わたしたちは男女の肉体の交わりと遺伝子の結合の組み合わせによって新しい個性の子孫を得ます。彼らも男女の肉体の交わりによって種を得るのは同じです。が、決定的に違うのは、魔界は完全な女性優位の世界なのです」

岳戸はニンマリ嬉しそうな笑いを浮かべている。

「魔界にあつて成体、大人同士のセックスは、女性が卵を形成するためのスイッチに過ぎないのです。しかも女性はこの時点で一切男性の遺伝情報は受け付けません。胎内に宿した卵は、完全な女性のコピーです。あの姿に見られるように彼らはほ乳類の性質を得ています。女性は赤ん坊を産みますが、それは成体の形状ではなく、はつきりと幼生、つまり子どもの姿をしています。両生類、オタマジヤクシとカエルを思ってもらえばよいでしょう。

魔界の子どもが大人になるには、2通りの方法があります。1つは、母親から独立して男性になること。つまり魔界の子どもたちはみんな女性なのです。そして子どもである限り常に母親とつながり、その保護を受けています。

そしてもう1つの方法は、・・・わたしたちの常識、倫理観では受け入れがたいことかもしれませんが、自分の父親となるべき男性を見つけて、肉体的に交わり、その遺伝情報をコピーするのです。

おそらく非常に強い嫌悪感を持たれると思いますが、考えてみてください、わたしたち人間は素材としての自分は完全に両親に決定されています。母親が誰と結婚して、父母からどういう遺伝情報を受け継ぐか？これを子どもが自分で選ぶことはできません。しかし魔界では、子どもが親から受け継ぐのは100パーセント母親の遺伝情報だけです。自分の選んだ父親から遺伝情報を受け継ぎ、成体

へと変体するわけですが、どうやらこの段階で子どもは自分の持っている母親の遺伝子の何を捨ててその部分の父親の遺伝子を受け継ぐか、かなり自由に選択できるようです。極端な話、全遺伝情報を入れ替えることもできるようです。

魔界の子どもは幼生から大人に変体するときに、なりたい自分に自分で素材から作り替えることができるのです。

そう考えればそれはとても魅力的なことではありませんか？　なりたい容姿に、なりたい頭脳に、なりたい能力に、なりたい性格に、自分で選んでなることができるのです。

この説明を聞いて、魔界に魅力を感じる人も多いのではありませんか？」

ゲストたちは釈然とせずどこか居心地悪そう。

「しかし人間の価値観からしても一つ決定的に魔界を受け入れられない点があります。天国はそもそもお互いのネットワークで構成された世界なのです。この魔界の生命の進化はその影響を強く反映しています。人間社会で男性が支配的なのは明らかに男性の方が腕力的に強いから、暴力的だから、です。魔界で女性が支配的なのは魔界には物質的な肉体が無く、肉体も純粹に精神によって形作られ、親子関係の強固な女性の方が圧倒的にネットワーク上で強い立場にあるのです。逆に、ネットワークの結びつきが強すぎて、母親は子どもに対して支配の度合いが強すぎ、ネットワーク同士の縄張り争いが強く、ネットワークを外れて個人でいる個体は非常に立場的に弱いのです。

繁殖、成長の仕組みでは圧倒的に個人の自由が強いですが、社会的には圧倒的にネットワークに縛られているのです。

魔界にも良い面悪い面があり、しかし、どちらも今の人間にはとっくに受け入れられない仕組みなのです。

しかし、どうです？

今の人間の社会はそういう方向に強く傾いていませんか？一方では家族や地域に邪魔されない個人生活が求められ、一方では他者との付き合いはネットワークの結びつきが重視され、そこから外れるとイジメに遭う。

ここに一つ面白い例があります」

芙蓉がノートパソコンを開く。カメラが撮す。モニターにパソコンのディスプレイが映る。しかし上半分はモザイクがかけられている。ゆらゆら蠢く女たち。

「これはわたしの友人がたまたまコピーしてしまった魔界のネットワークの一部です。映っている女性たちは魔物の顔に変身してしまった女性たちの魂の影です。

どうでしょう？ わたしは機械にはまったく疎くてすっかり見落としてしまっていたのですが、パソコンや携帯電話のインターネットって、魔界の仕組みに似ていませんか？ 機械的な仕組みばかりでなく、そのネットワークを介した個人の関係性もです。最近ではインターネットの匿名性を利用した悪意ある中傷や、個人攻撃のイジメなど、とても醜い流行があるようですね？

ここでまた一つ結論を言いましょう。

魔界をこの現世に近づけた主犯は、インターネット上の悪意溢れる中傷サイトです。

今回わたしは一つ大きな勘違いをしていました。たびたび説明してきたように人間に災いを成す悪霊とは、単体ではなく、悪意ある霊たちの集合体である場合がほとんどなのです。その中に集団を引っ張るリーダー的な主犯格の怨霊がいるのです。今回もその主犯格の怨霊を捜してきましたが、結局見つかりませんでした。それも道理、特定の主犯格はいなかったのです。

事の発端はインターネット上に公開された動画ファイルでした。もう皆さんご存じのあの少女の幽霊を撮したビデオ映画です。これは大いに話題になり、面白がられ、悪意ある憶測と創作でネットが充たされました。そこに、霊たちが集まってしまったのです。

この世を恨み、いつそんな世の中壊れてしまえと思っている悪意ある霊などいくらでもあります。霊たちは一つのオカルトサイトに集まりネットワークを構築し、更に別のオカルトサイトや中傷サイトとネットワークを組み、広大なネット世界に巨大なネットワークを作り上げていきました。

わたしは今回ごとく先手を取られ、事態の進行を止めることができませんでした。わたしはどれほど頭の切れる賢い怨霊が黒幕に隠れているのだろうと思っていましたが、そんなものはいなかったのです。代わりに、悪霊たちはネットワークした無数のコンピューターという巨大で高速回転の頭脳を持っていたのです。わたしなど凡人が叶わないわけです。

しかし、今回の悪霊が最もたちが悪いのは、そもその原因を作った者たちにまったく悪意がなかったことです。いいえ、匿名というたちの悪い隠れ蓑の中で彼らは面白半分にあつぽの悪意を大量に無責任に垂れ流してきたのです。そこに悪霊たちが大量に入り込んで日本中を覆う巨大な悪の怪物になってしまったのです。岳戸先生のおっしゃるとおりです、無知で無責任な、決して罰せられることのない表面的な善人たちが、この事態を招いた犯人たちなのです。彼らは今もこの事態を面白がって楽しんでいるでしょう、自分が直接被害に遭っていないからね。わたしでさえ思います、こんな無責任な世の中、潰れてしまえと！」

紅倉も珍しく怒気を含んだ声で言い捨てた。しかしまた落ち着きを取り戻して言う。

「人間たちに大いに反省してもらうとして、しかし、わたしはあなたと違ってこの事態を放置することは出来ません。被害は平等に、なんの罪もない、例えば幼い子どもにも及ぶのですから。」

今回の事態を招いた悪霊は強力でした。しかし、かと言ってやはり魔界を出現させるほどの力は持ちませんでした。どんなに近づいてもやはり両者を隔てる壁は強力ですから。その一点を破った力、それはやはり特別なもののなのです」

得意満面の岳戸。

「あなたでさえ、それは不可能です」  
ムツとする岳戸。

「もともと両者の中間に位置した存在。その存在無くして二つの異世界が混じり合い融合するなどありえません。

出てきてもらいましょか、桜野緑海さん」

慌てるカメラ。段取りを無視してゲストコーナーから現れる桜野緑海。喪服。CM。

CM明け。困惑顔の司会者。

「えー・・・、たいへんな事態になってしまいました、本人の了承を得ましたので直接登場してもらいます。

あの、幽霊少女のお母さんでいらっしゃいます、  
桜野緑海さんです。

よろしく願います」

正面に背中を向けて、紅倉、岳戸のテーブルに着いた桜野緑海。

「よろしく願いまーす」

非常に若い声。場違い。

「あのー、あなたは非常に深く事件に関わっていらっしゃるわけですが、全てお話くださってよろしいんでしょうか？」

「いいですよー」

「あの、非常にプライバシーに関わる、未成年のお子さまのことも話題にしなければならぬわけですが・・・」

「いいですよー。どうせもう死んじゃってるんですもの」

「はあ・・・、そうですか。では願います。えー、紅倉先生」

「はい。緑海さん、あなたには4人の娘さんがいらっしゃいますが、次女以外の3人は魔物ですね？」

「そうよ。3人ともとってもかわいいわたしの娘よ」

「つまり、あなたのコピーですね？」

「違うわよ」



「すみません、長女の方は旦那さんとのハーフですね」

「いいわよ、葉子で」

「では。あなたが最初の夫と愛し合って生まれた葉子さんはあなたの性質、魔物の魂を受け継いでしまった。まるで愛していなかった2番目の夫との間の次女は不幸中の幸いあなたの性質をまったく受け継いでいなかった。三女四女は愛人との間に生まれた娘で、その愛人とは、あなたの成体になるための父親でもあった人です」

「うふふふふ。あーあ、いいのかなー、テレビでそんなことばらしちゃって？」

「責任は全てわたしが負います」

「ちょ、ちよつと待ってください」

司会者割り込む。

「それでは、その、この人は、魔界の方なんですか？」

「そうです」

「そうみたいねー？」

カメラ回り込み緑海を撮す。ニコニコ笑って少女のようにかわいらしい。紅倉。

「この人は母親が愛人を困う夫への復讐のために隠し仏に願掛けして産んだ娘です。ほぼ純粹な魔物といっていいでしょう。母親の行った願掛けとは、つまり、あの家の地下室に眠る人魚の腹から赤子を抜き取り、それを食べ、自分の娘としてこの世に生まれ変わってくるようにということです」

青ざめるスタジオゲストたち。

「あなたにそもそも父親はいなかった。義理の父親もそれを知っていた。それでもあなたを娘として育てたのは名家の外聞を気にしてと、魔物の生存するための強力なテレパシーに操られていたためです。産まれて、幼生だった時期のあなたは本当の母親の眠る海辺の家に隠して育てられた。不便な2階の部屋に隠されたのは、もちろん外から隠すためと、母親との距離、外界との距離のバランスを取るためです。あなたの母親の魔物は体はミイラ化しても魂は生きて

いた。彼女もまたこの世界で生きることを探索していたのです。あなたは本当の母親である彼女にとっても実験材料だったのです」

「あらひどい」

「そうですね、ひどいですね。でもあなたは母親に勝利した。最終的に母親のネットワークを乗っ取り、彼女をネットワークから追放した」

緑海、ニッコリ。

「若い女性たちを襲う魔物への変身病。あれは、あなたの母親があなたから逃げ回っている痕跡ですね？」

「ま、結果的にね。頑張るわよねー。ま、どうせこの世が魔界に飲み込まれたら、あの人なんかすぐに捕まえて消してあげるけれどね」

「彼女も自分のネットワークを構築するのに必死ですよ？」

「フン。人間なんか使ったネットワーク、オリジナルのわたしたちに叶うわけないでしょう？」

突然椅子をはね飛ばして岳戸が立ち上がる。顔が真っ青。

「な、なんだと？ おまえではなかったのか？」

ニヤニヤ面白そうに岳戸を眺める緑海。

「さっき紅倉さんが説明していたわよねー？ コンピューターの悪霊ネットワーク？ うふふふ。ネットワークに関してはね、わたし、プロなの。主犯はいないって言ってたけれど、そうね、はじめはね。でも、今じゃぜんぶわたしのものよ。魔界の縄張り争いで、そういうものなのよ。いったん乗っ取ったら、それはぜんぶ、自分の物になるの」

「それでは、わらわの手に入れた力は・・・」

「残念。人間たちのただの妄想の固まり。偽物よ」

「おのれ！」

岳戸の目が真っ赤に燃えて全身から黒いオーラが立ち上り、放電しながら緑海を襲う。芙蓉がとっさに紅倉を守って床に転がる。

「死ね！」

黒いオーラに包まれ、激しく放電し、緑海の姿は見えない。怒り

に満ちた岳戸は突き出した手に力を込める。放電が激しくなり、ス  
タジオは揺れ、照明が明滅する。

「死ね！死ね！死ねえっ！！！」

しかし緑海を覆うオーラが急速に薄れていき、それは緑海の手  
ひらに丸く収縮していく。現れた緑海は無傷であら残念と微笑ん  
でいる。

岳戸は愕然と目を見張り、

「い、いやじゃ！・・・」

恐怖する。

「バイバイ。あなたは、いないわ」

「いやあああああっ！！！」

「危ない！」

紅倉の右手の放つ白い光が岳戸の体をドーンと後ろに突き飛ばす。  
そこに取り残されるように出現したヌイ姫の霊体に黒いオーラの固  
まりが撃ち込まれる。

「ぎゃああああああっ！！！！！」

ブスブス焦げながら消えていくヌイ姫。

「おのれおのれ・・・、わらわの悲願をようもようも・・・」  
消滅。

「あらま。ま、いかしら、どっちでも」

緑海はニツコリ笑って挑戦的な目で紅倉を見る。紅倉は芙蓉に支  
えられて立ち上がる。

「さあ、楽しい謎解きを続けてくれるかしら？　今度はあ、葉子ち  
ゃんのお話かしら？」

## 第25話 謎解き

「あなたはネットワークから母親を追い出した。しかしあなたには姉妹があつたはずです。あなたはあなたを産んだ人間の母親が本当の母親の胎内から取り出して食べた魔物の赤ん坊の生まれ変わりです。あなたの本当の母親の胎内にはあと3人の胎児がいた。その3人とは、あなたが産んだ3人の娘たちでしょう？」

緑海は頰杖について面白そうに聞いている。紅倉は続ける。

「あなたは人間の母体を借りて生まれた魔物です。あなたの妹たちはあなたを母体としてこの世に転生してきた、よりこの世に適合した完全体として。しかし最初に生まれた葉子さんは魔物と人間のバランスがまだ上手く取れていなかった。なによりあなたが人間として人間の男性と心から愛し合つて生まれた人間の娘だったからです。だからあなたの母親はより完全で安定した肉体に娘たちを転生させるためにあなたが完全体になるために選んだ父親の種を使って娘たちを生ませた。おかげで下の二人こそがあなたの母親の目指した人間の肉体に生まれ変わった魔物の完成形です。・・・」

「どうしたの？」

「・・・あなたは、どうしたいのです？」

紅倉は泣き出したいような顔をして緑海を見つめた。緑海は口許を微笑ませながら、目はひどくすすさんで暗く沈んでいる。

「さあ？ どうしようかしら？」

「あなたは、いつ自分の正体を知りました？」

「さあ？ いつかしら？ つい最近のような気もするし、ずうっと前から知っていたような気もするし」

「あなたが結婚生活を邪魔され異常な状況下で4人もの娘たちを生む羽目になったのは家の事情もさることながら、あなたの母親がそう仕向けたのが主たる原因です。あなたの母親は娘たちを送り出し

た後自分もこの世に転生して来るつもりであなた方と精神のネットワークを維持していました。あなたは・・・母親に精神をコントロールされて娘たちを生み、破滅的な人生を強いられたのです。

しかしあなたの母親は自分のことだけ考えてあなたを犠牲にしているつもりはありませんでした。人生や、愛に対する価値観がまるで違うのです。ですが、人間の肉体を持っているあなたにとって、母親はやはり魔物以外の何ものでもありませんでした。あなたは、辛かったでしょう？」

緑海はじつと暗い目をしている。もう口許に微笑みもない。

「あなたは魔物として生まれましたが、成体になるときに父親から遺伝子をコピーし、人間として大人になりました。あなたは自分で魔物ではなく人間を選んだのです。しかしネットワークを接続した母親はあなたが純粋な人間になることを許さなかった。そのためあなたの精神は常に不安定な状態を強いられた。あなたは母親を憎んだ。復讐してやろうと思った。

一方で母親も、・・・彼女はもととあいう生き物なのです。人間たちにバケモノとさげすまれようと、彼女からすれば人間の方こそ精神的にも社会的にも幼稚な未開の種族です。その侮蔑には怒りを感じたでしょう・・・そう、あのビデオ映画です。自分の姿を見せ物にしてバケモノと嘲り、笑い物にした、くだらない娯楽です。彼女は許し難く思いました。そして娘のあなたも、魔物の精神を拒否して、常にイライラと刺々しい精神状態にあった。母親は、理解できなかったでしょう。母親はあれでも娘のあなたを愛していたのです、彼女なりの価値観で。

彼女は人間を憎むようになった。全て人間の未熟さが原因だと決めた。そして、自分たち家族のために、自分の本来の世界、魔界の出現を願った。

そして人間たちも魔界に近い精神を持つようになり、両者の距離はグッと近くなった。彼女はこの機会を逃さなかった。

母親が願ったのは魔界です。

「あなたが願っているのはなんですか？」

「そうね、何もかも全部ぶっ壊しちゃう事かしら？　日本中を覆う石油に火をつけてやろうかしら？」

「あなたが望む物は最初から決まっています。娘、葉子さんです」  
「・・・・・・・・」

「あなたが自分が魔物であることを知ったのはごく最近、この数日中のことです。葉子さんが消え、異常な事件が続き、あなたは内心不安で、改めて疑問を感じていました。何故自分たちはこんなに変なのだろう？」と。あなたはその答えを自分の中に見つけました。

フウン、・・・そうですか、やはり岳戸さんと接触したときですか。岳戸さんにあなたも気付かなかったあなたの正体をあぶり出された・・・まったく罪な人です。

魔物の能力に目覚めたあなたは元凶である母親を追った。彼女は魔界出現の呼び水、巫女となるべき娘たちを求めて日本中を飛び回り、ネットワークを構築している最中だった。つまり本体を離れて生き霊の状態だったのですね。

フウン、・・・そうか、そのためですね、葉子さんを必要としたのは。母親のネットワークを離れて外部に新たなネットワークを構築するためには肉体的により強固なアンテナが必要だった。だからあのような形で葉子さんを自分の手元に呼び寄せ、合体し、利用した。あの夜のことを解説しましょうか。

一週間前、番組放送中に起きた出来事です。

まず、葉子さんは自分がかつてあの家に行ってお化けビデオを撮影したことをすっかり忘れていました。何故かというと、母親、あなたではなくあなたの母親のことです、に忌まわしい記憶を禁じられたのです。その後母親は葉子さんの精神への介入を強めていき、彼女をコントロールするようになった。きっと葉子さんには記憶にない行動がたくさんあったと思いますが、それは母親が葉子さんの脳を乗っ取って行った行動です。母親は、だんだん自分の言うこと

を聞かなくなってきたあなたの代わりに、葉子さんに自分の現世への生まれ変わりになるべき肉体を生ませる気でいたのではないでしようか？

彼女は葉子さんを通じて現世の情報を集め、状況の整った半年ほど前から計画を準備していった。彼女にとって思いがけずあのビデオが計画に役立ちました。そして一週間前、テレビの生放送を利用してとうとう計画が実行された。彼女はインターネットであらかじめ印を付けておいた女性の下へ生き霊を飛ばすため、アンテナとして葉子さん呼び寄せた。

わたしはあの放送を見て、生放送中にあの家に現れた葉子さん、戸の陰から部屋を覗き込んだり、崩れた階段の下から目を覗かせたりしたのを見て、それが死霊なのか生き霊なのか、それとも生きた実体なのか、判断が付きませんでした。それは母親が葉子さんの肉体を通じてテレビ電波を強烈に・ハッキングというんですか？強ちに電波に介入していたからなのです。実際は、葉子さんは放送が始まった頃地下室の母親の元へ呼び寄せられ、先ほど説明されたような無惨な、魔物に頭を飲み込まれて逆立ちしている、という姿になっていました。母親にしてみれば自分の娘を再び胎内に戻したという認識だったでしょう。彼女の生きるという意味合いはわたしたちと相当ずれているのです。

ちなみに、地下室へ下りる階段はあの家の崩れた階段の下の地面にありました。何故それを警察が発見できなかったかというと、あの異常繁殖したハマナスのせいです。前夜の内は何もなかった地面が、わずか一夜のうちにすっかりハマナスの根と茎に覆われ、まさかその下に階段が埋まっているなどさすがに優秀な警察の鑑識さんも思い及ばなかったのです。

放送後の深夜、スタッフの青木雄二さんがあの家に忍び込みました。青木さんはあのお化けビデオを撮影した張本人です。彼は押し入れの奥の隠し部屋に気付いていました。が、秘密癖の強い彼はそのことを誰にも言いませんでした。特別な秘密としていつか誰かに

自慢してやるために大事にとって置いたのです。そのチャンスが巡ってきました。彼も番組中に現れた葉子さんの行動を不可解に思い、その謎を解いてやろうと思いました。彼は一人あの人に忍び込み、押し入れからとなりの隠し部屋に入り、そこへ、母親に操られ、完全に怪物となり果てた葉子さんが地下室から上ってきて、秘密の知られることを恐れて、殺されました。

ここで一つ問題なのは、その頃、深夜2時頃、母親は生き霊となつて変身病の第1の犠牲者の体内にいました。その後も母親は継続的に女性たちの肉体に渡り歩いていました。その間にもビデオの関係者たちを巡って事件は起きていました。そちらはそちらで主体となる悪霊が別に存在していたのですが、そのバックに魔界の存在がありました。実際に魔物が現れたこともありますし、魔物の力を持った何者かが能動的に手助けしていたはずで。一度はたまたま女性から別の女性に渡り歩く途中で母親が事後処理に介入してきましたが、その他の事件では、おそらく、魔物の力を使っていたのは葉子さんだと思われます。この点からいかに葉子さんが母親のネットワークに深く取り込まれていたか想像できます。

緑海さん、あなたの話に戻しましょう。

江戸さんに心を覗かれ自分の正体を知ったあなたはネットワークを辿って母親を追跡し、彼女が何をしたか、彼女が娘葉子さんを奪い、命を奪った事を知った。あなたは激しく怒った。心が張り裂けそうに悲しみ、愛する娘を殺した母親を憎んだ。その怒り、憎しみはネットワークを通じて母親にも伝わった。

彼女は一つ大きなミスを犯しました。下の二人の娘たちです。彼女たちは人間の体を持った魔物として完璧に安定した存在です。母親は彼女たちをあなたよりずっと魔物に近い存在として容易に仲間に取り込めると安心しきっていた。ところが、二人は肉体的な母である緑海さんとのつながりの方が遙かに強かった。精神世界である魔界の者である母親には、肉体的な結びつきの強固さが理解できて



いなかったのです。

二人も、まずまず好意を持っていた姉を殺した母親を嫌い、緑海さんの協力要請に素直に従った。彼女たちはもはや魔物ではないのです、言うなれば、新しい人類なのです。彼女たちはあなたにそっくりな美しい容姿をしています。魔物である魂の母親など、彼女たちにはただのバケモノでしかないのです。特に姉妹の結びつきは強く、二人のタッグはネットワークにおいて強力に支配を強めていきました。

母親は焦りました。まさか自分が娘たちから攻撃されるなど思いもしなかったのです。考え、保身のための策を取りました。葉子さんを人質にしたのです。葉子さんの肉体は死んでも、魂はネットワークの中に生きています。あなたはますます怒り、母親への憎しみを新たにしました。

あなたは母親を滅ぼし、葉子さんを取り戻すために行動しました。これは半分成功し、半分失敗しました。あなたは母親の計画を乗っ取り、岳戸さんと彼女に取り憑いている強力な怨霊を利用し、魔界の扉をこじ開けさせた。

現世と魔界が溶け合う一点で、あなたは死した葉子さんの肉体を現世に甦らせようとした。あなたは既に乗った母親の魔物の肉体とあなたの胎内をつなげ、魔界が現世に実体化する現象を利用して自分の胎内に葉子さんの肉体を甦らせようとした。でもそれは半分しか上手く行かなかった。なかなか計算通りには実体化現象が進まなかったのと、あなたの人間の肉体の限界のせいです。

今あなたのお腹の中には、魔物が飲み込んだ葉子さんの頭だけが入っています」

スタジオがヒッツ・・・と凍り付いた。

緑海は大事そうに自分の喪服のお腹を撫でて微笑んだ。

「そうね、ちよつと無理があつたわね。でも、あの子を醜い魔物として魔界に生まれ変わらせるよりはましよ。わたしはあの子を取り戻す。そのためにはなんでもする。この世だろうと魔界だろうと、

必要なら全部滅ぼしてでも」

決意を秘めて目が異様に光を発した。さすがの紅倉も恐ろしそうに眉をひそめた。

「そのためには、決定的に欠けているものがありますね？」

「そうね。肉体はなんとか大事な頭だけ確保したけれど、魂が入っていないわ」

「葉子さんの魂は見つかりませんか？」

「残念ながら。あのバカ女をいいところまで追いつめてはいるんだけど、人間の脳って案外やっかいな要塞になるのよね。下手に入り込んでこっちが閉じこめられて潰されたらたまらないし。でも、葉子は連れていないようなのよね。一体どこに隠したのかしら？」

「もし、」

紅倉は静かな目で言った。

「もし葉子さんの魂を取り戻すことができたら、この事態を納めるために協力していただけますか？」

何故か芙蓉が紅倉を恐い目で見たと。緑海はニツコリ笑って言う。

「ええ、それはもう。葉子ちゃんさえ取り戻せたら、わたしは欲しいものなんて何もないわ」

「約束ですよ。では、わたしがあなた方のネットワークに入ってあなたのお母さんと直接対決しましょう」

「先生駄目です！」

芙蓉が強く止めた。

「危険すぎます。先生の霊力は肉体に宿ったものです。肉体を離れて魂が剥き出しになれば、おそらく、先生は強くありません」

紅倉は弟子芙蓉に寂しそうに微笑んだ。

「そうね。多分魂そのものはあなたの方が強固でしょうね」

「先生は、優しすぎます。激しい感情を剥き出しにして攻撃的になっている怨霊がウヨウヨしているネットワーク世界なんて、絶対先生を行かせられません！」

「でもね、美貴ちゃん」

紅倉は芙蓉の手を取って両手で包み込んだ。

「やっぱわたしができるしかないのよ。あなたには無理。他の誰にもね。今や魔界の現世への浸食は誰かの思惑がどうのという段階ではなくなっているわ。もはや純粋な化学変化の状態に近いわ。それ自体人間の力では、魔界の力でも、止めることはできない。はつきりと二つの世界は違うのだと両方に示せる者が必要なのよ。それは、彼女、緑海さんをおいて他にはないわ」

緑海はニツコリ笑って傍観者になっている。芙蓉は彼女を忌々しそくに睨んだ。紅倉が「美貴ちゃん」と呼びかけた。

「サポートをお願いね」

芙蓉は紅倉を悲痛な目で見つめた。

「わたしが何かできるでしょうか？」

「いつも通りよ」

紅倉は弟子を安心させるように包み込んだ手を優しく撫でた。

「こうしてわたしの手を握ってわたしのことを思っていてくれればいいわ。そうすればわたしは自分の肉体を見失わず、霊力の供給を受け続けられる。きつと、ここへ帰ってこられるわ」

「本当に？ 本当に帰ってきてくれますか？」

紅倉はとろけるように優しく芙蓉に微笑んだ。

「ええ。あのね、わたしがあなたを弟子に選んだのは・・・、やっぱいいいわ。ないしょ」

「教えてください。気になります」

「だーめ。帰ってきてからね」

「約束ですよ」

「はい。約束します」

手を握り合って見つめ合う二人。

あの・・・と遠慮がちに司会者。

「紅倉先生。そろそろ時間の方が・・・」

時刻は8時30分になろうとしている。

「そう長くは掛かりません。靈魂同士の戦いですからね、それ自体

は一瞬で済みます。10分ほどでしょうか？」  
「そうですか。では視聴者の皆さんにはここでCMをご覧いただきます」

CM中。調整ブース。

三津木ディレクターはスタジオディレクターに紅倉にインカムを渡させて彼女と話した。

「先生。本当に大丈夫ですか？」

「はい。・・・と言いたいところですが、さすがに今回は分かりません。でも、仕方ありません」

「そこまでしてくれなくても・・・とも言えませんか。すみません、先生にばかり」

「いえ。ああ、岳戸さんは気を失っているだけですから、・・・面倒なのでそのまま気絶させておいてください」

「そうします」

「等々力さんの方はどうです？」

「ええ、地元クルーといっしょに学校の取材に出ています。表向きは避難の様子を伝えるということ」

「あの人もタフですね。必要のないことを願いますが、いざというときは彼に頼みます」

「伝えてあります。ご安心ください」

「こっちもギリギリの人員ですからね、クライマックスです、頑張ります」

「はい」

「わたし、しゃべり過ぎちゃいましたね。時間は、大丈夫かしら？」

「大丈夫です。その点は任せてください」

「ごめんなさいね」

「とんでもない。じゃ、そろそろ、お願いします」

「はい」

「先生。ありがとうございます」

『頑張りましょう』

CMはたっぷり4分間流す。スポンサーとの契約を破って後半はほとんどCMを流していない。上から放送内容をなんとかしろとさんざん圧力をかけられているが、無視した。苦情の電話が殺到しているそうだが、知ったことか。三津木はかつてに放送時間の延長を決めている。テロップを流してしまえばもう中止もできまい。

三津木は今回限りで首になる覚悟を決めている。今回の事件の要因に自分の責任もかなり含まれる。それに今起こっていることを思えば、自分の首を掛けるなんてまるでどうといったことはない。それより申し訳ないのはやはり紅倉美姫に対してだ。彼女は何故このような運命を持って生まれてこなければならなかったのか・・・。

## 第26話 中から出てくる

CM明け。スタジオには四方をカーテンで覆ったベッドが運び込まれている。バックからライトを照らされると正面の白い布に横たわる少女のシルエットが浮かび上がった。紅倉美姫。

「これが問題の少女葉子さん・・の生き人形です。製作したのは緑海さんの愛人、つまりあなたの大人になるための父親であり下の二人の娘さんの実際の父親であつた人です。彼は残念ながらおとこの夜亡くなつてしまいました。彼を殺したのもあなたのお母さんです。すね？」

緑海。

「そうね。でもあの人の魂も母に捕らわれているわ。もしかして葉子の魂といつしよにいるのかしら？ 母は彼も人質にしたつもりなんでしょうね。死人を人質になんて、まったくずれた人よね」

「彼も救い出しますか？」

「いいわ。さつさと成仏させてあげてちょうだい」

「分かりました。さて、この生き人形は葉子さんが彼に作らせたそうです。もちろんそれは葉子さんを操って母親がやったことでしょう。彼女はいずれ彼を葉子さんと結婚させて自分の肉体を生ませるつもりだったのでしょね」

「外道ね」

「です。ね。さすがに葉子さんの体はまだ母体として未熟だったので成熟するまで彼の心をその人形でつなぎ止めておくつもりだったのでしょ。彼もちよつと精神的に異常なところがあつたようですよ。らね」

「失礼ねえ。わたしの彼で、父親よ？」

「ごめんなさい。この人形をネットワークできますか？」

「ええ」

「ではお願いします。わたしもここから入って、ここに、あなたの母親を連れてきたいと思います。彼女のオリジナルの体は失われてしまっていますのでね。ところで・・・」

突然ベッドの後ろのカーテンが開かれ小さな影が二つ侵入してくる。

「あ、葉子ちゃんだ」

「さっすがパパね。葉子ちゃんそっくり」

女性ADが慌てて二人を捕まえようとする。緑海の末の娘たちだ。緑海。

「いいわよ、その子たちはそこに居させて。わたしより二人の方が力は上よ」

三女晴美。

「そうよ。ママよりあたしたちの方が強いわ」

四女知世。

「そうそう。お姉ちゃん、あたしたちが手伝ってあげるよ」

「そうね。お姉ちゃん弱そうだもん。トモちゃんがネットワークを開いて、あたしがお姉ちゃんといっしょに行ってあげるよ。ネットのたいていの奴らはあたしたちの言うことに逆らえないもん」

晴美がカーテンから出てこようとして、紅倉が押しとどめるようにいっしょにカーテンに入る。

「まあ、ありがとう。心強いわね」

芙蓉が紅倉の後に続き、背中から耳元に囁く。

「先生、信用して大丈夫ですか？」

知世。

「あたしたち、葉子ちゃんを助けるんだもん！」

晴美。

「そうそう。弱っちい奴は黙っててよ」

「はいはい、お願いね。でもこのお姉さんも強いのおお？ 美貴ちゃん、お願いね」

「はい・・・」

緑海もカーテンの中に入ってくる。

「それじゃあ行く？」

「ええ。お願いします」

緑海が葉子人形の頭を両手で押さえ、右手を知世が握り、知世を晴美が握り、晴美を紅倉が握り、紅倉を芙蓉が握った。晴美と紅倉ががつくりベッドにうつ伏せになった。二人でネットワークに入ったのだ。

沈黙するカーテンの中。司会者。

「では今現在の日本各地の様子を中継でご覧いただきます。こちらで何か変化があったときはすぐに切り替えます。ではまず・・・」

調整ブース。クレーンカメラで上からカーテンの中を撮した映像がある。三津木は指示もそっちのけでその映像に見入った。紅倉も晴美もうつ伏せになったまま動かない。

「美姫ちゃん・・・生きるよ・・・」

三津木は思い出す、紅倉美姫との出会いを。

あれも6年前の夏だった。ある地方都市の児童保護施設・・・孤児院でひどい怪奇現象が続発しているというので三津木はスタッフ2人と事前取材に訪れた。

その孤児院は公立の物で、例えば教会などの民間の善意で運営されているものではなく、冷たい印象のある、言ってしまうえば問題児を集めてまとめて見張っているような、少年院なんかと大差ないような施設に三津木には感じられた。

怪奇現象とは、幽霊たちが集団で当たり前のように多数目撃されていた。壁に血のようなしみが浮き出て人の形を描いていた。人がいなくなった瞬間に部屋の家具の配置がガラリと変わっていた。大きな鐘の音のような重低音が絶えず耳を圧迫していた。子どもたちが毎晩のように悪夢を見て悲鳴を上げて目を覚ました。等々。

原因は、すぐに分かった。17歳の少女3人が相次いで自殺した。遺書があった。イジメをわびる内容だった。イジメの対象になって



いたのは同じく17歳の少女、紅倉美姫だった。

彼女を一目見て三津木は戦慄した。

美姫は部屋の隅に一人膝を抱えて座っていたが、真夏でクーラーも無いというのにその部屋は異様に寒かった。

美姫は恐ろしく美しい少女だった。白く、間違いなく欧州系白人種の混血。

人形のように無表情の顔が三津木を見た途端、般若のように恐ろしく一変した。途端に、三津木の頭に強烈なイメージがわき上がり、暴走した。これまで取材で遭遇した数々の心霊現象、その霊能者には見えていても三津木には見えなかったものが、見えた。恐ろしいものだった。美崎優との肉体関係も見えた。いったい誰の主観なのか、恐ろしく生々しく、体が一気に力アーツと熱くなった。そして見た、美崎優がああ現場で視たものを・・。

三津木は悲鳴を上げて部屋を転がり出た。悪魔だ、魔女だ、と思った。この少女は人の頭を狂わし、破壊する。

しかし最も破壊されているのは少女本人だった。三津木は部屋に這い戻るとデジタルカメラで悪魔少女を撮った。見てまた戦慄した。少女の顔の真つ白な肌いっばいに真つ青な静脈が浮き上がっていた。肌の表面は染み出した血でところどころ赤く濡れていた。部屋の異様な冷気の正体も判明した。部屋いっばいに白い人影のようなものが詰まっていた。

しばらく避難した後部屋に行ってみると紅倉美姫は鼻血を流して失神していた。

職員に話を聞くと紅倉は7歳くらいで火事の現場で保護された後ここに送られてきたが、それから8年間、15歳になるまでろくに口もきけず、完全に自分の殻に引きこもっていた。ようやく自分の名を名乗り、なんとか他の子どもたちと共同生活を始めたが、あの通りに非常に美人なので男子からも女子からもちよっかいを出す者があった。職員の中にも。その頃からおかしな事が起きるようになったが今ほどひどいものではなかった。すると今度は彼女はイジメ

に遭うようになった。今までちやほやしていた者が手のひらを返したように彼女を冷たく扱った。職員の中にも。彼女は再び自分の中に引きこもるようになり、そんな彼女を更に攻撃した者たちは、自分で死を選ぶほど恐ろしい思いをすることになった。怪奇現象は爆発的に増え、ここはもはや悪魔の館のようになってしまった。どうかなんとかしてほしい！・・

三津木は当初この事件を岳戸由宇に任せようと思っていた。当時岳戸由宇は絶好調で、番組も高視聴率を記録していた。が、三津木は由宇に任せるのをやめた。そろそろ由宇の能力の正体を怪しみだしていたし、この少女を番組で見せ物的に扱うべきではないと強く思った。彼女を第2の岳戸由宇にしてはならない！

三津木は取材抜きで美姫と向かい合った。彼女には一人の人間としてふつうに生活することが必要だと感じた。一方彼女のこの強力すぎる霊能力は決して彼女にふつうの人生を送らせはしないだろうとも。

三津木は思い切って逆療法を試してみた。心霊現象に困っている相談者の取材に美姫を同行させたのだ。自分と同じように悩んでいる者がいると理解すれば自分自身に対する見方考え方が変わるのではないかと考えたのだ。

これは思った以上に成功した。相談者の家に居着いていた悪霊は美姫に立ち向かってきた。美姫は、それをあつさり大人しくさせた。紅倉美姫は霊に対しては恐ろしく強かった。相談者に感謝されて、あんまりあつさり終わってしまったって番組にはならなかったが、美姫は自信をつけた。自分の中の力と折り合いがついたのだろう、人間的に急激に強くなった。

一年後霊能者として番組に出演するようになってからは間違えるように明るく美しく優しくなった。

三津木は美姫の笑顔を見るたび自分の由宇に対するやり方がいかに間違っていたか思い知った。その後も三津木は由宇と共に峰谷早苗の件で間違いを繰り返した・・。

紅倉美姫は神が地上に与えた奇跡だと思う。三津木にとっても生涯の宝物だ。ただしそれは由宇のように自分の物になる宝物ではない。誰の手にあってもけつして誰の物にもならず永遠の輝きを放ち続けるダイヤモンドのようなものだ。そしてその輝きは美姫自身にも持て余すほど強力すぎるのだ。

一人の人間としての紅倉美姫は決して強くはない。だが彼女は自分の内なる力を受け入れたのだ。今その力が美姫を死の危険に近づけている。これが神が彼女に与えた使命なら、三津木は神を憎む。

自分の命と引き替えにできるものならば・・・

しかし神は自分の汚れた命など決して欲しがりはいらないだろう。

紅倉美姫は特別の人間なのだ。不幸なことに。

「死ぬなよ、生きてくれ」

三津木は再び祈るしかない。

しかし、神は残酷だ。魔界の神なら、なおさら。

三津木の見つめる映像の中で晴美だけがむっくり体を起こした。

「4カメ、音上げる！」

むっくり起き上がった晴美は知世とニヤニヤ笑い合った。

「先生！」

芙蓉は紅倉の異変を感じて呼びかけた。紅倉の体がブルブル震えている。握った右手が熱を帯びて大量に発汗している。芙蓉の手にもチクチク刺すような痛みが伝わってくる。

晴美は握っていた紅倉の手を放してポイと捨てた。緑海が驚愕し、信じられない顔で言った。

「晴美、どういっつもり!？」

「何をした!？」

芙蓉も紅倉の両手をしっかりと握って晴美と、いっしょにニヤニヤしている知世を睨んだ。晴美が言った。

「そのお姉ちゃん、神様の操り人形なんだって？」

それは紅倉自身が日頃からよく言っていることだ。

「じゃあさあー」

晴美はかわいい顔をニヤニヤさせて言う。

「その糸をちょん切っちゃったらあー、どうなるのかなあー？」  
うっ、と震えながら紅倉が呻いた。

「先生っ！！」

「ぎゃあああああああつ！！！」

ガバツと身をのけ反らせて紅倉が叫んだ。白目を剥いて、あああああああああああああ、と震えながら叫び続ける。

「先生！　しっかり！　早く戻ってきて！」

手が、熱く、痛い。ブスブス針が突き刺さってくる。

「先生えっ！・・・」

呼びかける声が悲鳴に変わった。芙蓉自身激痛で顔がひきつる。  
晴美と知世がニヤニヤ笑って眺めている。

「お姉ちゃん。あんまり頑張らない方がいいよ。でないとーお姉ちゃんも死んじゃうよ」

「こ、この・・・、バケモノども！・・・」

「キヤハハハハハハハハ」

「キヤハハハハハハハハ」

悪魔だ。

「晴美！　知世っ！」

「ああもう、ママもうるさいなあー。そうだ、おじちゃん」

晴美と知世が上から撮すクレールカメラを見た。三津木を視ている。

「面白いから日本中、うっん、世界中の人間に見せてあげようよ。ね？」

三津木は迷った。これは、なんなんだ？　紅倉美姫は、負けたのか？　だが、勝ったのは、誰なんだ？！

バサバサツとベッドを覆うカーテンがはぎ取られた。今でも十分ビビっているゲストたちがあんぐり口と目を開いて魔女たちを見た。  
「ほら、見なさい人間たち！　あんたたちの希望の火が、消えるわ

よ」

テレビの中継映像がスタジオ映像に切り替わった。ブースでは何もしていない。

「や、やめろ！ 映すな！」

三津木は悲鳴を上げて苦しむ美姫の姿を見て叫んだ。しかし。

「だ、駄目です、反応ありません！」

「くそ、なんてこった・・・」

スタジオだけではない、上の番組編成室でもまったくコントロールが利かなくなっていた。東日テレビは何者か、・・・魔女姉妹に、乗っ取られた。同時に宇宙空間に浮かぶ全ての通信衛星も。スタジオの映像が強制的に世界中のテレビ局に送信され、強制的に各家庭のテレビに映し出された。何が映っているのか、具体的な内容は理解できなかった。しかし何か恐ろしい悪魔的なことが行われていることははっきり伝わった。

「ぎゃああああああああっ！！！」

叫ぶ紅倉の顔から白い湯気が立ち、やがてそれは黒くなっていった。紅倉は苦し紛れに腕を振り回し芙蓉をはね飛ばした。芙蓉は転げ、両手をかばいながら起き上がった。手のひらが焦げて真っ赤な裂傷が幾筋も走っている。

「先生！・・・」

芙蓉は涙を流した。

「・・・」

もはや声にもならず、紅倉の肌は水膨れが弾け、血が真っ黒に燃え上がり、・・・、やがて、無惨な焼死体となって固まった。

「先生・・・」

芙蓉は自分の無力を涙をこぼして悔しがり、ギリッと、怒りの目を晴美知世姉妹に向けた。

「おおおまえたち・・・先生に何をした？・・・」

二人はヒヒツと蔑み勝ち誇った笑みを浮かべた。

「なあーんにも。あのお姉ちゃん、自分で思っているほど強くなかったんだよ。ママたちが警戒するほどの人間じゃなかったね。ちょっと悪そうな奴らのたまり場に誘い込んだら、・・イヒ、よってたかって食べられちゃったみたいだね」

笑う晴美を芙蓉は涙を溜めた目でじつと睨んだ。

「そんなはずない、先生がそんな下等な霊どもに負けるはず無い！」  
「だからあ」

知世が楽しそうに言った。5歳の幼女だ。

「操り人形の糸を切っちゃったの。人間の魂なんて、弱っちいもんだね？」

芙蓉はギリギリ二人を睨んだ。

「・・・・・殺してやる」

「え？　なあに？」

「このバケモノども！　殺してやるうつ！」

芙蓉はダツと一歩踏み込むと大きく腰をひねって回し蹴りを放った。8歳、小学2年生の晴美の体が吹っ飛んだ。床をツーツと滑って止まった晴美は、体はうつ伏せに、首は折れて完全に後ろを向いていた。ちょうど青木雄二の死体のように。

「あーあ」

知世はしらつとした横目で姉の死骸を見た。

「壊れちゃった」

芙蓉の怒りは治まらない。子どもを殺した後悔もない。

「おまえも壊れる！」

次の蹴りを繰り出そうと身構えたとき、

「ケケケケケケケケケ」

後ろからバサリと晴美に抱きつかれた。芙蓉も思わず心臓が飛び出そうになった。

「ケケケケ」

背中にとらんと垂れ下がった首が笑って、グリグリ音をさせて元通り起き上がった。しっかり芙蓉の首にしがみついて芙蓉に頬をす

り寄せた。

「お姉ちゃん、よくもやったね？　ほんと、お姉ちゃん強いねえ。でも、お姉ちゃんの首もあたしみたいに元通りになるかなあ？」

ガツと頭を掴んだ。

「い、イタ・・・」

芙蓉は声を出して、晴美の腕を掴んで引き離そうとした。しかし晴美の小さな手はもの凄い力でギリギリ芙蓉の頭を押さえつけた。ミシミシ頭の中で音がした。駄目か・・・と思った。悔しい・・・。「いいかげんにしなさいっ！！」

ドンツ！と衝撃波が走りスタジオの照明が瞬いた。

それまで呆然としていた緑海がそれまで見せたことのない怖い顔で娘たちを交互に睨んだ。本気で怒っている。

「どういづつもりなの？」

ドスの利いた声で脅すように言う。

「あんたたち、葉子をどうしてくれるのよっ！？」

晴美が芙蓉の頭から手を放して、代わりにぎゅっとおんぶの形でしがみついた。姉妹揃って同じ冷たい目で母親を眺めた。

「あーあ、やんなっちゃうよね、ママったらそうやって葉子ちゃん、葉子ちゃんって。ママは葉子ちゃんだけが大事なんだもんね」

「えーんえーん、トモちゃん悲しいよぉ」

「つまらない泣きまねなんてしてんじゃないわよっ！　あんたたち、葉子をどうするつもりよ！？」

「ちえっ。ねえ晴美ちゃん、葉子ちゃんどうだったあ？」

「駄目ね。すっかり悪霊化してもう手に負えないわ」

緑海が恨みを込めて言う。

「晴美・・・だから紅倉美姫に頼んだんじゃない？」

「あ、そっかー、人間のことは人間に任せるってこと？　なーんだー、そっかー、そうだよなー、葉子ちゃんは人間だもんねー？　ママもそう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あたしたちは違うもん。ねー？」

「ねー？」

「だからね、本当は葉子ちゃんはどうでもいいの。あたしたちママと手を組むことにしたんだ」

「ママ？」

「ああ、ママのことじゃないよ。お化けのママの方。キャハハ」

「そうそう。だからね、ママももういないや」

「なんですってえー？・・・」

「だからあ、その葉子ちゃんの体、ママにあげてね？」

「なんですって？」

突然ガバツと葉子の生き人形が勝手に起き上がった。顔が黒くドロツと溶け、緑海に飛びつき、その黒く溶けた顔をべちゃつと顔にぶつつけた。

「うぐ・・・」

生き人形は黒く溶けていき、緑海の鼻から口から、緑海の体内へ侵入していった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

緑海は椅子に倒れ込むと手足をバタバタさせた。生き人形の溶けた液体はすっかり緑海の中に入ってしまった、緑海の黒い喪服がバリバリ裂け、丸く膨れ上がった白い腹が丸見えになった。

「・・・グガツ・・・、おかあ・・・さん・・・・・・・・」

緑海はよだれを垂らして痙攣しながら声を振り絞った。

「うつうつあああああ・・・」

丸い腹部がグルグル動いて緑海は悲鳴を上げた。少し落ち着くと緑海は石油まじりの胃液を吐きながら真っ赤になった目で娘たちを見た。

「いたっ」

芙蓉に指をかまれて晴美が背中から振り落とされた。芙蓉は炭化した紅倉にすがりついた。

「ま、いいや」



晴美は知世のとなりに来てニヤニヤ母親を見た。緑海。

「あんたたち、このバケモノと組んで何をするつもり？」

「バケモノだって。自分の母親にひどいなあ。決まってるじゃない、世界征服よ」

「そうだよ、トモちゃんたち、女王様になるんだもん」

「馬鹿ね。魔界が出現してしまったら、あたしたちなんてただの人間よ？ 魔界の魔物たちになうけないじゃない？」

「大丈夫だよー。こっちにはコンピューターっていう機械文明があるもん。あたしたちがぜーんぶコントロールしてやるんだもん」  
「そんなもの、魔界が実体化したらなんの役に立つものですか。やつぱり子どもね、なんにも分かってないわ」

「ああうるさいなあ。ママなんてさっさとママを産んで死んじやいな」

「ぎゃあああつつつ」

腹がビクビク蠢いて、中から形が浮き上がった。

「ぐぐぐ……」

ズルツ。投げ出された脚の間から黒く濡れたものが現れた。ボタボタボタツ、と赤い半固形物が溢れ出し、ズルツ、腕が突き出てきた。

「！……」

緑海は失神して白目を剥いて痙攣している。

ズルツ、ミシッ、ボタボタボタ。赤く濡れ汚れて裸の葉子が股の間から這い出してくる。

「アアアアアアアアアアアアアアアア……」

顔に掛かる粘膜を食い破って復活の産声を上げた。

ズルズルズルズルズル。ビチャビチャビチャ。

よろよろと葉子は自分の足で立ち上がった。黄色く濁って血走った目で辺りを見渡し、言った。

「長かった。ようやく、生まれることができた」

血に汚れた顔で実に嬉しそうに笑った。

「お誕生おめでとう」

晴美が言った。

「でも女王様はトモちゃんと晴美ちゃんだからね。ママはただのお姫様だよ」

「ええ。従うわ。あなたたちが世界の母よ。さあ！ あなたたちの世界を作りなさい！」

葉子、いや、魔物は自分を産んだ緑海を眺めた。緑海は生きているのか死んでいるのか、椅子からずり落ちそうになりながら手足を投げ出し、喪服はぐつしより濡れ、床にボタボタ大量の血を滴らせている。

「馬鹿な子。母の心も知らず、この裏切り者」

スタジオの出入り口は何物かの力で全てロックされている。中に取り残された出演者スタッフたちは壁際に寄り添いながら震え、泣いている。

ここまでの様子は全てテレビ放映されている。

世界中のテレビに向かって晴美と知世は仲良く手を振った。

「はい、世界の皆さん！ バイバーイ、死ぬ時ですよ！ この世は、消え去りまーす！」

人間は敗北した。

## 第27話 出現

日本国民の7割以上がテレビを見ていた。

これを嘘だ、作り物だと疑う者はもはやいなかった。

一つの例。ある地方都市のある一家族。

50代の夫婦と二人の娘たち。姉は東京の大学に進学してそのまま向こうで就職し、妹は同じく在学中だ。姉は5年、妹は2年実家に帰ってきていなかったが、二人とも今日の夕方8時間掛けて帰ってきた。そこまで不便な土地でもないが、石油湧出の影響で運行停止の路線が全国各地に広がっている。二人とも文句たらたらだったが、それでもこうして帰ってきてくれたのだから両親はひどく喜んだ。

家族4人でテレビを見た。紅倉美姫が死んだ。思わず目を背ける悲惨な死に方で。その映像がテレビに流れているのが驚きだ。そして更にとんでもないものが流れてしまった。ドロドロ。4人ともすっかり無言になった。

「どうなってしまうのかねえ・・・」

ようやく父親がため息まじりに言った。

「どうにもなんないよ。あーあ、悪い時代に生まれちゃったなあー」

「ほんと、貧乏くじだよねー」

「おいおいおまえたち、すっかりあきらめて達観してるんじゃないよ。もっと若者らしくだなあ」

「若者はみんなクールなの。だいたいもともと夢も希望もない社会じゃない?」

「そうそう。ジタバタしたってなるようにしかないもんねー」  
「はあ・・・と父親はため息をついた。

「なんでこんなことになってしまったのかねえ・・・」  
「ねえ、ちよつと」

母親が慌てて言った。

「ねえ、臭くない？」

「俺はやってないぞ」

「オヤジギャグ」

「つまらないこと言ってるんじゃないわよ。ほら、臭うでしょ？」

「おかしいな、この辺りに石油は湧いていないはずだが・・・」

わっ、きゃあっ、と4人とも飛び上がった。畳からじわじわ茶色く、黒い、液体が染み出してきた。

「ああ、おしまいだあ・・・」

テレビではかわいらしく憎々しい幼い魔女姉妹が手を振っている。  
『バイバーイ』

バチツとブラウン管が火を噴いた。

「ギャアアッ！・・・」

感電して頭から煙を噴きながら4人ともベチャリと畳の上に倒れた。染み出す石油が4人の体を浸していく。

変化が起きた。

「・・・キュル・・・」

キュルキュルキュルキュルキュルキュル・・・」

4人とも眼球が雲って破裂し、中から赤い襞襞がはみ出してきた。頭から背中にかけてツーツと赤い線が走り、皮膚がめくれた。中から触覚のように神経が伸びてきて・・・

4人は魔界の住人に変身して外へさまよい出た。その姿は紅倉の説明に依れば魔物の幼生であるらしい。外には各戸から出てきた近所の人々がやはり魔物の幼生の姿でさまよい歩いていた。家々は、石油が染み渡って真っ黒になり、ぬめぬめ溶けだし、太古のジャングルの姿へ変貌していった。

魔界が、出現した。

フラフラさまよい歩いていた幼生たちは、やがて全員が一つの方角を定めて歩き出した。その先に何かあるのか？・・・

「死んじゃった……?」

馬木たちは思わず互いに顔を見つめ合い、それが事実であることを確認し合った。

「紅倉美姫さんが……死んだ?」

何故だ? 信じられない! あの人は無敵のスーパー霊能力者ではなかったのか?!

「そんな……じゃあ俺たちはどうしたらいいんだ!」

何事があるのかと緊張し、じつと息を詰めてテレビを凝視し続けていた。それなのに、何も起きないまま紅倉さんは……死んでしまった……。それもあまりにひどい死に様だった。かすみは硬く目を閉じ、耳を両手で押さえ、馬木にすがりついていた。馬木も心臓をドクドク脈打たせながら必死に震えを堪えてかすみの肩を抱きしめていた。

葉子が出現した。

体は葉子だ。いや体は知らないが、顔は葉子自身に間違いない。

しかし中身は葉子ではない、断じて!

魔物……。裸の全身をドロドロに赤くぬめらせて、バケモノの姿をしていなくても十分に魔界の悪魔だ。

悪魔の出現をテレビが映してしまったという事実、それを全世界が目撃したという事実、それは人間の敗北と言うより、神の敗北ではないか?

世界中の人間がそれぞれ自分の神に祈っていることだろう。しかし、過去どんな悲惨な状態に人間が陥っても、その願いを聞いて神が救済に現れたことは一度もない。

うわあ、きゃあ、と悲鳴が聞こえた気がする……。

「体育館かな?」

「外のような気もするけど……」

「みんなこのテレビを見ているのよ」

「そりゃそうだろうけれど……なんかおかしくないか?」

「ちよつと見てこようか？」

角谷が椅子を引いて立ち上がるうとしたとき、突然すごい勢いで戸が閉まった。前の出入り口も。

「おいっ、誰だ！？」

角谷は戸に飛びついて引き手に手を掛けた。しかしいくら力を込めてもビクともしない。

「ちくしょう・・・窓だ、急げ！」

ここは2階だが、飛び降りても死にはしないだろう。だが、全開だった窓もひとりでに全部ピシャン！と閉じてしまった。

「閉じ込められた！」

馬木たちも立ち上がった。馬木はすがりつくかすみを抱きしめている。由利先生は椅子を振り上げ猛然と窓に投げつけた。ビシツとひび割れ、角谷の第2撃で派手な音を立ててガラスは外に砕け散った。

「逃げよう！」

駆け寄った窓際で、4人は固まった。

いつの間にか中庭の地面は真っ赤なハマナスの花畑に覆われていた。

「におい・・・」

ツーンとガソリンの臭いが強烈に立ち上ってきた。赤い花が真っ黒になって溶けだした。蛍光灯が明滅した。ビシツとすごい音がして閃光が走った。テレビだ。画面が真っ白になって中央が黒く焦げている。ブラウン管が破裂したのだ。スピーカーからブー・・・ン・・・、と電子音が漏れている。

「きゃっ！」

かすみが悲鳴を上げて馬木の背に隠れた。

真っ白になった画面から白い煙が湧いてきたかと思ったら蛇のようにスルスルツと前方に伸びた。そこに、机がある。

煙はそこにガラスの容器があるように丸く対流し、濃くなっている、形を作っていた。

ギョロツと眼を剥いた。

「!・・・葉子!・・・」

葉子だった。葉子の生首。かすみが怯える。白一色から髪の毛、唇、肌に色が付いていき、生々しい姿となった。

葉子は馬木の背に隠れるかすみを恐ろしい目で睨むとビュンと天井まで舞い上がった。長い首がテレビの画面につながっている。ろくろ首だ。

「先輩。ダーリンと何してんのよー？」

シャーツと蛇みたいに口を開いてかすみ目がけて襲いかかってきた。

「きゃあっ!」

「あぶない!」

馬木はかすみをかばって身をかがめた。葉子がガチンと歯を鳴らして元の位置に返っていった。

「ダーリン・・・」

恨めしそうな目で今度は馬木を睨む。

「ひどいわ。あたしが死んじゃったからって沖浦先輩に乗り換えるなんて」

馬木は歯をガチガチ言わせてなんとか言い返した。

「む・・・無茶言つなよ。おまえ、自分が死んでるって知ってるんだろっ?」

「だったらなによ?」

「冷静に考えろ、おまえ、死んでるんだぞお?」

「些細なことよ。二人の愛に変わりはないわ」

葉子はニツと笑うと「ん」と唇を突き出して迫ってきた。馬木はヒツとよけた。

「ダーリン。照れないでよー」

ん、と再びキスを迫ってくる。

「やめろおっ!」

避けざま思わず手でパチンと払いのけた。べちゃっとぬめりが感

じられた。

「・・・・・・・・・・」

葉子はじつと恨めしそうに馬木を見つめた。

「・・・・なあ、おまえにはかわいそうだけどさ、ふつうに成仏してくれよ？　葉子には生きていてほしいって俺もずっと思ってたけどさ、残念だけどさ、おまえはもう死んでいたんだ、最初から・・。頼むから、かわいいままのおまえでいてくれよ？　俺はおまえが本当に好きだった。本気だった。だから、俺におまえを好きなままにさせてくれよ？」

「・・なによそれ・・。じゃあわたしが行方不明の間どうして沖浦先輩といちやいちやしてたのよ？」

「いちやいちやなんてしてないよ」

「してたじゃない！　二人で仲良く楽しそうに話して！　わたしの悪口言ってたじゃない！？」

「な、何言ってるんだよ？　そんなこと言ってるじゃないよ」  
妄想だ。

「言ってた！　わたし知ってるんだから、沖浦先輩はずっとダーリンのことが好きで、わたしをずうっと恨んでたんだから。わたし先輩とも仲良くしたかったのに、先輩わたしのことずっと無視してたじゃない！？　わたし・・、みんな知ってたから！」

馬木は困惑した。かすみが葉子にそんな態度を取ったことなんて自分が知る限りではない。が、ギョツと背中を掴んでいたかすみの手から力が抜けた。

「かすみ？・・」

かすみはうつむいていた顔を上げるとキツと葉子を睨んだ。

「そうよ！　わたしはあなたなんか大嫌いだった！　なにかわいこぶりっこして！　わたしの馬木君を取って！　あんたなんて、とんでもないド淫乱娘じゃない！？　馬木君の叔父さんと、あんなこととして！！！」

馬木はギョツとした。なぜかすみは叔父さんのことを知っている



のか？ かすみは葉子に負けじと睨み合っている。この目も異常だ。馬木の知っているかすみではない。

ふと、かすみの髪の毛が静電気を帯びたように数本フラフラ立っているのに気付いた。その先がごく細い蜘蛛の糸のような物につながっている。つながっている、葉子の生首と！

馬木は慌ててとっさにかすみの髪の毛を払った。かすみはハッと夢から醒めたような顔になって、ヒイツと震え上がった。

葉子は、般若のような顔で激怒をたぎらせている。

「よくもよくもよくも……」

かすみの発した言葉は葉子の生首と連結された葉子の脳波が伝わったものだろう。叔父さんとの関係は……葉子の最も触れられない、最も忌まわしい記憶だったのだろう。

全身の皮膚がチクチク痛んだ。葉子の激怒が針になって突き刺さってくるようだ。

「おまえ！ 殺すっ！！！！」

カッと開いた口に針のように細く尖った歯がぎっしり生えていた。目玉がジョーズの様にクルッと真っ黒にひっくり返った。

「ガァーッ！」

「きゃあああっ！」

「ひゃあっ！」

襲い来る葉子から馬木とかすみは必死となって逃げ回った。角谷が叫んだ。

「オット！ リーチだ！ 葉子ちゃんの首は部屋の隅までは届かないぞ！」

そういう角谷は窓際の隅で由利先生を守っている。馬木もかすみをかばいながら廊下側の隅へ逃げた。ガチンと葉子の顎が鳴って、2度3度繰り返したが、なるほど、テレビから伸びた葉子の白い首はギリギリ部屋の隅までは届かないようだ。葉子は人間の目に戻ると恨めしそくに角谷を睨んだ。

「カク先輩、よくも邪魔したわね？」

葉子は首を伸ばすと窓枠にかじり付き、ズルズル頑丈なテレビ台を引きずった。

「ひい、やばい！」

角谷は慌てて由利先生を連れて馬木たちのいる側の隅に走ろうとしたが葉子が先回りして逃さなかった。馬木は叫んだ。

「葉子！やめろ！ そいつに何かしたら、絶対に許さないぞ！」

葉子が真っ赤に充血した目を向けた。泣いている？

「ダーリン・・・。わたしのこと本気で愛してくれていると思ったのに・・・、わたし、本気だったのに・・・」

「俺だつて本気だつたつてば」

かすみがギュッと馬木の背中を掴んだ。一瞬背中を気にして、葉子の顔が怒りを噴き出した。

「もういい・・・、ダーリン殺してわたしも死ぬ！」

「おまえは既に死んでいるだろう？！」

「ダーリンのバカあゝっ！」

葉子は泣きながらまたバケモノの顔に変身して馬木目がけて飛んできた。首がピーンと伸びきり、ガッシャーン！と派手な音を立ててテレビ台が転倒した。引きずられて葉子は顔面を机の角にしたたかに打ち付けた。お化けでもこれは痛い。顔を上げた葉子は血こそ流していないけれど額が割れて白い繊維のような物が覗いていた。

「許さない・・・」

ガタンガタンと固定したテレビ台ごとテレビを引きずって迫ってくる。机に引っかかつて、葉子は歯を食いしばって首を引っ張る。

力を込めるたびバケモノの顔が浮き上がってくる。だんだんあのビデオのお化けの顔に近づいてくる。

「葉子！ 頼むから、もうやめてくれ！」

「ぐぐグググ・・・、キュル・・・」

一瞬だが完全にバケモノ化した。

「やめろ・・・」

ガコンガコン。机を盛り上げながら迫ってくる。

「もう、やめる・・・」

だんだん哀れになってきた。そこまでしなくてもいいだろう？

「あっ・・・」

何を思ったか由利先生が部屋の前方に走った。？と葉子も振り返る。

先生は、テレビのコンセントを抜いた。

「あ・・・」

まるで電気が切れるように葉子の目が白くなり、がっくりとうなだれた。

「うっそー」

当の由利先生が驚いている。

「まさか本当に上手く行くとは思わなかったなあ」

「もう、先生、無茶しないでください！」

と言いつつ角谷も葉子のつながったテレビ台をよいしょよいしょと前方に引つ張った。

「おーい、戸はどうだ？ 開くか？」

「あ、ああ」

呆氣にとられていた馬木は戸を引いた。動かない。

「駄目・・・」

その戸がドンッ！と叩かれて馬木は飛び上がった。

「おーい、どいてろ、蹴破るぞ！」

と言いながら戸を突き倒して丸い筋肉質の体が肩から転がり込んできた。

「あら、あなた？」

「や、これは先生、どうも！」

「この人テレビのディレクターさん」

「ども、等々力です！」

ひげモジャの熊みたいな男だ。

「なんだかよく分かりますが、逃げましょう！」

馬木たちはとにかく廊下に出た。階段に向かって走る。下に向か

おうとすると、

「そっちは駄目です。上へ」

と言うので上へ向かった。

「下が駄目ってなんで？」

「下は、全滅です。やられました」

「やられた？」

3階に上がり、屋上に出た。外に出た途端ガソリンの刺激臭が強烈にまとわりついてきた。

「どうなってるんだ？」

金網から外を見ると、世界の様相は一変していた。

真っ黒だ。通りの建物が真っ黒に染まって、形を変えていく。お化けのように巨大なソテツや椰子の木に。地面にはわさわさ濃いグリーンシダ類が。そしてドロドロにぬめった道には、ゾンビのように手を突きだしゆらゆら歩く人々が。

「キュルキュルキュルキュルキュルキュルキュルキュル」

「キュルキュルキュルキュルキュルキュルキュルキュル」

テープの早回しのような声を立てて何かと交信している。

「始まっちゃったんだ、魔界化が……」

かすみが顔を押さえて泣いた。彼女の家はすぐ近所だ。その辺りも、景色が変わっている。

「いずれこの建物も……」

「ええ。体育館の方は既に」

あきらめが一同を支配した。

馬木はかすみの肩を抱き、頭を胸に抱いた。

「せめて、最期までいっしょにいような」

かすみは頷いた。馬木は葉子にわびた。やっぱり生きている女の方がいい……。

「先生……」

角谷も由利先生と見つめ合っている。由利先生はため息をついて、微笑んだ。

「しょうがないわね、こうなっちゃ。万事休す。かわいい男の子と  
いっしょだからよしとするか」

角谷は不満そうに先生を睨んだ。

「俺、本気で由利先生が大好きなんですよ」

かすみが泣くのも忘れてまあ！と顔を上げた。

「まいったなあ・・・」

由利先生は照れ隠しに頭を掻いた。

「ハアッ・・・、じゃ正直に白状するけどね・・・」

うわっと等々力が悲鳴を上げてかすみが睨んだ。ムードぶちこわ  
しだと。

「ここも来た！」

金網が黒く染まってドロドロに溶けだした。

「馬木君！」

かすみが抱きついた。

「イテ」

胸に何か硬い物が・・・

「あ、すっかり忘れてた」

紅倉さんからもらった銀の女神像だ。

「効果あるのかな？」

本人が死んじゃったので望み薄な気がするが？

「とにかくやってみるしかないわね。えーい、この女神像が目に入  
らぬか！」

黄門様の印籠よろしく由利先生は今や金網を溶かしコンクリート  
の床を這ってくる黒いしみに向かって女神像を突き出した。

「ああー、やっぱり駄目みたい」

やはり全てが終わってしまったのか？

角谷が先生に詰め寄った。

「先生、さっき言いかけたの、なんです？」

「えっとー、あのねえ・・・、ああ、もう駄目・・・  
じわじわしみが迫ってくる。」

「先生、教えてくださいよう！」

死んでも死に切れまい。

「実はね」

真剣に向き合ったその時、

「おい！ こっち！」

「もう！ またっ！」

またも等々力が邪魔をした。

「こっち！ 見る、あそこだけ白いぞ！」

皆、金網のドロドロに触れないように背伸びして下を見た。さっきまでいた視聴覚室、C塔の屋上だ。C塔は2階までで、その上はここA棟とB棟を結ぶ渡り廊下になっている。

「なんでだろう？ 紅倉さんが何か仕掛けておいたのかな？」

「もう！ なによお！ じゃああそこから動かない方がよかったんじゃない！？」

もう階段からはガソリンの臭いが濃厚に立ちこめている。

「ううむ、めんぼくない。・・・で、どうします？」

「どうするってったって・・・ここにいたんじゃあ・・・」

「行くしかないか」

「でも・・・行けるかなあ？・・・」

こちらからあちらまで段差は3メートルくらいか？ しかしへりの方は石油の浸食が進んで足場には出来ない。ギリギリまで助走をつけて一気に飛び降りるしかない。そうするとかなりの衝撃が予想される・・・。

「じゃ、わたしが先に行きますか」

等々力が助走体勢に入った。

「体力には自信あるんですがね、体格的には不利だな。ま、上手くいったらおなぐさみ。じゃ！」

おりゃあ！ とかけ声勇ましく等々力はドスドス走ってへりの2メートルほど手前から60センチほどの塀を飛び越えた。

「うわあああ・・・」

「等々力さん！」

等々力はむっくり起き上がった。

「いててて。おーい、やったぞお！ さあ、来い！」

受け止めてやる！と言った具合に両手を開いて身構えた。

「誰が行く？」

「馬木君、沖浦さんといっしょに飛びなさい」

由利先生に指示されて馬木はかすみと強く手を握り合つと頷き合つた。

「行くぞ！」

「うん！」

それっ！と走って、思いっきりジャンプした。

「うわあっ」

「きゃあっ」

塀を飛び越えると真つ逆さまに落下する感覚がした。

「どすこい！」

等々力が二人を受け止めると後ろに倒れてクッションになってくれた。

「さあ次！」

角谷はしっかり由利先生の手を握った。すごく気力が充実して、正直すごく嬉しい。

「先生、行くよ」

「ええ」

二人も揃って走った。

「それっ！」

ジャンプ。が、

「あっ！・・・」

突然由利先生の足元のコンクリートがドロツと溶け落ちた。

「きゃあっ」

「先生っ！・・・！」

角谷は塀を蹴って舞い戻った。

「ああ・・・」

由利先生は脚を這い上る異様な感覚に声を上げた。

「先生、しっかりして！」

角谷は急いで先生をコンクリートの黒い裂け目から引き戻した。

先生の脚になつとりしたタールがまわりついている。

「くそおっ」

角谷は狼狽してそのタールを振り払おうとした。

「ダメ！ 触っちゃ・駄目よ」

「俺が先生を担いで飛びます」

「無理よ。ご覧なさい、どんどん足場がもろくなっているわ」

たしかに黒い裂け目が広がっていつている。下を通る鉄骨が先に浸食されたらしい。

「行きなさい」

由利先生は優しく角谷の頬に触れて言った。

「君たちは最期の最期まであきらめないで、生きて」

「いやだよ、先生、なんでそんなこと言うんだよ？」

「大人が子どもを守るのは当たり前のことじゃない」

「俺はもう子どもじゃない！ 先生が、好きなんだ！」

「困った子ね」

由利先生は体を起こすとメガネを取って角谷の首を抱き寄せて唇を重ねた。舌がねつとりと角谷の口の内部を舐めた。唇が離れると角谷は真っ赤になっていた。

「行つて」

「イヤだ！」

「ファーストキス？」

「うん・・・」

「初恋つてね、実らないものなのよ」

「知るかそんなこと」

「実はね、あたしもう25なの」

「だからなんだよ？」



「あのねえ、あなたが22歳で大学を卒業したら、あたしはもう30歳よ？ もうわたしはそういう歳なの」

「知らないよ、そんなこと。俺は先生がいいんだ！」

「お願い、もう行って」

「やだ」

「お願い、もう、駄目なの……」

先生は苦しそうに言った。角谷も分かっている。先生の腰までも真つ黒になっている。先生は角谷を突き飛ばした。実際そんな力はないが、角谷は拒絶されたようによろめいた。

「ちくしょう……なあ神様、女神さま！ たすけてくれよ？！」

角谷は女神像を握りしめて祈った。

「カク君・」

しかし、神が人間を助けることはない。

「カク君・」

「ちつくしよおっ！」

「カク君。わたしもあなたが好きだから、ね？ 憧れの素敵なお姉さんのままでいさせて、お願い」

角谷はゆらりと後ろに下がった。先生の首筋まで黒い筋が這い上  
ってきている。先生は微笑んで、頷いた。角谷は走って、飛んだ。

「先生！好きだあーっ！！！！！！！！！！」

降り立つた角谷はボロボロ涙を流していた。かすみも口を覆って泣いていた。馬木は、怒りに身をブルブル震わせていた。

「なんでだ、なんでこんなことになった……。ちくしょう、誰のせいだあつつつ！！！！！！！！」

うわっと等々力が声を上げた。

葉子の生首が金網の向こうに伸び上がってきた。すっかり顔がグロテスクに変形している。真つ黒な目玉のバケモノの顔でニタツと笑った。

「ダ  
あ  
り  
い  
い  
ん」

⌈  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
⌋

馬木は睨み付け、どうしようもない怒りを込めて銀の女神像を葉子の顔目がけて思い切り投げつけた。  
カッ！、と天から閃光が走った。

## 第28話 光

「紅倉美姫の・・・、嘘つき・・・」

荒井ミイナは居ても立ってもいられず番組の途中から家を飛び出し、親友中谷志保の入院している病院に向かって走った。

病院は、異様な姿に変貌していた。窓という窓から人間が突き出ている。あれは・・・、医師、看護師、入院患者たち。体を半分突きだし、胸を反らし、「あー・・・」と言うように大きく口を開いている。その口から、何かチロチロ覗いていた。舌ではなく、もつとたくさん、イソギンチャクの食指が波にゆらゆら揺れているように・・・。よく見て、ミイナは戦慄した。人間たちは、目がなかった。代わりに赤い、やはりイソギンチャクのようなものが出たり入ったりしている。頭も割れて、赤い糸が何本も飛び出している。魔物だ。魔物の幼生たち。

「志保・・・」

ミイナはなんとなく直感した。彼らを操っているのは、彼らの母親、志保だ。紅倉美姫が言ってた、怪物に変身した女たちは魔界出現の呼び水となる巫女に選ばれたのだと。

「紅倉美姫の嘘つき・・・」

助けるって言ったのに、大丈夫だって言ったのに・・・。

立ち尽くすミイナの背後に黒い世界が迫ってきている。熱帯のジヤングルに変貌しつつ、その中を魔物の幼生に変身した者たちが母親を求めて集まってきている・・・。

ミイナは立ち尽くし、絶望しながら、それでも友人のことを思っていた。

志保、あんた、魔物になっちゃってもあんたでいられるの？ だったらあたしも、あんたの娘になってもいいよ。

背後に、触手を伸ばした魔物たちが迫る・・・。

先生、先生、愛してます。

お願い、わたしも先生のところへ連れて行って・・・

芙蓉はすっかり反抗する気力を失って紅倉の炭化した遺体にすがりついていた。

先生が亡くなった。世界は終わりだ。世界なんて、どうでもいい・、先生のいない世界なんて、生きている意味がない・・・。

「きやははははは」

「きやははははは」

「あはははははは」

魔女三姉妹が勝ち誇った笑い声を上げている。

「世界はみーんな、トモちゃんと晴美ちゃんのもの！ トモちゃん、女王様だあ！」

スタジオ中に何十という人魂が浮かんだ。

「ん？」

ロックされて動かなかった扉がバアーン！と吹っ飛んできた。大きな鉄の重量たつぷりのドアが、ひしゃげている。

スタジオ内の人魂たちが刀を構えた鎧武者たちに変身した。

入り口に真つ赤なオーラを噴き出させながら鬼の形相の岳戸由宇が現れた。スタジオに取り残されていた者たちはヒーツと一目散に逃げ出した。

「おのれバケモノども、ようもわらわを謀ったな！！」

由宇の顔にヌイ姫の怒りの顔が浮き上がった。皮膚が無惨に焼けただれている。冷たく美しかった顔が、熱く恐ろしく燃え上がっている。

「おのれら、皆殺しじゃ！」

晴美が肩をすくめた。

「あーあ、落ち着きなさいよ。あなたを騙したのは、緑海ママでし

よ？ こっちのママは、ちゃんど約束を守るつもりだったのよ？」  
「だったらわらわに国を寄こせ！ 新しき国の主には、わらわがなるのじゃ！」

「ああー、そっかー、それもやだなあー。あたしたちが女王様になるんだもん！」

「やつぱりあんたもいらないや。きやはっ」

晴美はさつと武者たちに手を振って命令した。

「おまえたち、あのきつたない姫様を完全に殺しちゃいな」

武者たちはザツと刀を構えて沈黙した。

「ほらあ、武士の美学なんかいいからさあ、さつさとやつちゃって」  
しかし、武者たちは沈黙している。

「バカッ！ さつさとやれ！」

武者たちは刀を構えてザツザツザツ、と進軍し、

「な、なに？・・・」

いつせいに刀を突き刺した。

「ぎゃあっ」

ズバツ、バリツ、ビシツ、ガチツ。

本物の戦場で磨かれた殺人剣が幼い体をめった刺しにし、切り刻んだ。

「バカ、バカ、バカ、なにしてるうっ！」

息の根を止めると、武者たちは整然と後退した。

そこに、バラバラの肉片となつて知世が転がっていた。

「きゃあっ、知世！ ほら、元に戻つてよ！」

晴美は肉片をかき集めて粘土をこねるように知世の体をくっつけようとした。だが、肉片は手からボロボロこぼれていった。

「このお・・・・・・」

晴美は怒りの目を岳戸由宇、ヌイ姫に向けた。

「おほほほほ、よい気味じゃ」

「おまええ、どうやった！？」

「どうもこうも、わらわの忠実な部下たちじゃ、おまえなどバケモ

ノの言うことを聞くものかつ！」

「そんなはずないもん、そいつらも全部ネットワークに取り込んでいるはずだもん。あたしの言うこと聞かないわけないもん！それに、知世、知世！どこ行っちゃったのよ！？」

晴美はすっかり余裕をなくしてうるたえて叫んだ。

「ほほほ、さあ、その二人も血祭りじゃ！」

再び武者たちはザツと刀を構えた。

「舐めるな、ザコどもっ！」

葉子が晴海の前に出ると両手を怒らせて念波を送った。ブウウウン・・・、と重い震動が発生し、武者たちはボンッボンッ！と潰れて転がった。

「ケツ、くずめ」

葉子は吐き捨てるように言って又イ姫を睨んだ。

「どうやったのか・・・、おまえじゃあないね？」

誰だ？と搜して、葉子は芙蓉に目を止めた。

「おまえ・・・でもないか・・・」

葉子はじつと紅倉の遺体を見つめた。

「おまえかあつ！」

葉子は右手を突きだして破壊の気を打ち出した。

芙蓉はハッとして反射的に紅倉を守って前に立った。とつさに腕をクロスして顔をかばう。衝撃波は、来なかった。

「なんだ？・・・」

葉子もいぶかしげに芙蓉と、その後ろの紅倉を見た。

芙蓉の腕に白い光が宿っていた。その光が葉子の気をまるで寄せ付けず芙蓉を守ったのだ。

「先生・・・」

守ってくれたのは紅倉先生だ、そう思って、芙蓉はハッと振り返った。

光が、紅倉の中から差ししていた。額に、仏のびゃっつうのように、神々しく、真っ白な光が。

「……………」

猛然と葉子が襲いかかってきた。

「はっ！」

芙蓉は腹に得意の回し蹴りを打ち込んだ。葉子の体はあっけなく真横に吹っ飛び、首から床に叩きつけられ、体が一回転して脚を投げ出した。

「……………」

鼻血をダラダラ滴らせながら葉子は起き上がった。芙蓉は徒手を掲げて身構えた。

「イヤアアアアッ！」

葉子はなんとも言えない悲愴な顔で突進してきた。

「はっ！」

みぞおちに正拳を打ち込んだ。葉子はぐえっと呻いてよろめいた。芙蓉を睨み付ける目に戦意は失われていないが体が激痛に言うことを聞かない。

「この世の肉体を十分味わった？」

芙蓉は徒手を構えたまま怒りを込めて言った。

「ここはね、あんたが頭の中だけで考えている世界とは違うのよ！」

「くそお……………」

「自分が弱いのがそんなに信じられない？ 肉体は死を恐れる。自分を守る。自分を壊すようなことはしない。あんたが頭で操っていた葉子さんの肉体とは訳が違うのよ！」

芙蓉が打撃の構えを見せると葉子は怯えた。芙蓉は大声で叱りつけた。

「さっさとこの馬鹿げた状態をやめさせなさいっ！」

葉子は目をつり上げ怒りでブルブル震えた。由宇、いやヌイ姫か、が叫んだ。

「危ないっ！」

芙蓉は一瞬なんのことか分からず、一瞬、対応が遅れた。

「……………」

いつの間にか背後に回った晴美が紅倉の頭目がけて握りしめた両手を振り下ろした。

「!!!! 先生っ!!!!!!」

炭化した首はあっけなく折れた、・・が、目もくらむ真つ白な光が強烈に溢れ出した。

ミイナの背後に魔物の幼生たちが迫った。

「え?・・ きゃあ、きゃあああっ!!!!」

幼生たちはミイナを捕らえると我先にと顔を寄せてきた。

「きゃああ、きゃああ、きゃああああああっ」

赤い汁を滴らせて眼窩からはみ出す触手をミイナの目に伸ばしてくる。

「キュルキュルキュル」

「きゃあああ、きゃあああ、いやああああああっ!」

背後から、白い光が差した気がした。

「ミイナ」

思わぬ至近距離から声を掛けられてミイナは必死に閉じていた目を開いた。見知らぬ女だった。

「ミイナ」

だが、その声は・・

「・・志保?・・」

ミイナに迫っていた女はニコツと笑った。

「ごめんねー、恐い思いさせちゃって。でも嬉しかったよ、あんたの気持ち。待ってね、大丈夫、もうすぐ終わるよ」

女は言うつと、ふうつと、力が抜けてよろめいた。

「あ、あら? なに? わたしこんなところで何してんの?」

不思議そうに辺りを見渡す。そこに同じようにキョロキョロしている人々がいる。ミイナは呟いた。

「そっか・・、終わったんだ・・」



夜空が銀色の膜に覆われたようにうつすら光っている。  
街の景色が、徐々に元に戻っていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

芙蓉も見たいと思いながら耐えられず手でまぶたを覆って光を避けた。

子どもの泣き声がした。

「え〜ん、え〜ん、え〜ん・・・」

ゆっくり目を開けると、炭の中に白く光る裸の少女がうずくまっていた。知世だった。

「知世?!」

晴美も驚いて目を丸くしている。

「あんたどうしてそんなところから・・・」

ハッと、皆、天井付近に白く輝く雲に乗って堂々立っている人物に注目した。

雲はゆっくり降下してきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・先生!・・・・・・・・」

芙蓉は恐い表情が溶けるように笑顔をとろけさせた。

紅倉美姫だった。

だが・・・本当に紅倉美姫なのだろうか？

その人物は右手に両刃の剣を持ち、左手に五鈷杵（ごこしよ）を持っている。そして全身に中国風の黄金の鎧をまとっている。手に持つ剣と五鈷杵も黄金に輝いている。

顔は紅倉美姫にそっくりだ。だが、芙蓉には分かる、そっくりだが、美姫ではない。同じ紫の瞳だがパツチリして生気に溢れている。物がちゃんと見えている。美姫は、ほとんど見えないほど視力が弱い。肌ももつと健康的に張りがある。唇の端に刻まれた微笑も優しくありながら力強い。いつもどこか自信なさげな美姫とは違う。

芙蓉の目に悲しみが溢れた。このお姿を紅倉の生まれ変わりと思いたい。だが・・・違っだろう・・・。

美しく気高い女の闘神は慈悲深く芙蓉に頷いた。芙蓉の目から涙がこぼれた。闘神は自信に溢れた目で晴美と葉子を見つめた。唇が動いた。

「薔薇波羅第4天使美樹見参。この世界に直接介入するのは本意ではありませんが、この事態ではいたしかたありません。・・・友人の頼みでもありますしね」

芙蓉にニツコリ優しく笑った。その笑顔は紅倉にそっくりだった。葉子が憎々しく言った。

「おまえは・・・この世の物ではないな？」

美樹はこっくり頷いた。

「わたしは神です」

葉子は笑った。

「神だと？ そんなものいるか。おまえもわたしと同じ魔物だろう！？」

「たしかに。見た目がこの世界の人間と同じだけで、わたしは別の世界の人間です」

「だったら余計な手出しをするな！ 姿は違っていても、わたしはもともとこの世界の人間だ！」

「でも今は別の世界に分かれて住んでいるでしょう？ これ以上世界の成り立ちを混乱させるのはおやめなさい」

「わたしのせいではない！ わたしだって、好きこのんでこんな世界に生まれてきたんじゃない！」

「では、本来の自分の世界に帰してあげますからそれで満足なさい」「それも今さら出来るか！ ただ帰ったのではわたしはただの人間だ。それ以下だ！ この世界では、わたしが神だ！」

「ハア・・・。我が儘な人ですね。不自由な身で異界の人間たちに神様とおだてられて、そんな地位に未練がありますか？」

「説教するな！ だったらおまえはなんだ？ その紅倉という女を

操って神様を気取っていたのはおまえだろう？」

「わたしはたまたま目に留まってしまったかわいそうな少女を助けちゃっただけです。わたしによく似ていたものですからね。その後の彼女の行動は、彼女自身の意志です。わたしの知ったことではありません」

「無責任なことを言うな！」

「はいはい、たしかに。死者なんて甦らせるものではありませんね。わたしも反省しました。だから、あなたのその体も自然のまま死なせてあげなければなりません」

「勝手なことばかり言うな！」

「神とは、我が儘なものです。さあ、大人しくその体を返して自分の世界に帰りなさい」

「渡すか！」

葉子は凄んで、挑戦的に笑った。

「今この世界の神は、わたしだ！」

叫ぶと同時に床から大量の石油が噴き出し、高い天井まで噴き上がった。

「この世界では、わたしは無敵だ！」

葉子は石油を浴びてタールを積載させていった。タールに埋もれて、どんどん膨れ上がっていく。美樹は石油を浴びて慌てふためいているヌイ姫を神力で引き寄せた。美樹の周りでは石油の噴出はない。その範囲内に晴美もいる。彼女は知世を大事そうに抱いて怯えた子どもの目で美樹を見上げている。

「それでいいわ」

美樹は晴美と知世に言い渡した。

「あなたたちにもちゃんと世界を与えてあげますから大人しく待っていなさい」

4メートルに膨れ上がったタールの固まりは急速に形を作り始めた。人とも魚ともつかない・・・魔物の姿に。

「ガオーッ」

吠える姿はまさに恐竜だった。ぬめった黒が乾いて白と青の硬い体に固まった。

「ガルルルルルル・・・」

『ひ弱な人間の神め！ 食い殺してやる！』

恐竜にしては長い腕を筋肉隆々と、鋭い爪を立てて襲いかからせてきた。

ブイイイインン・・・

五鈷杵から光の盾が現れ、強烈な一撃を受け止めた。

「ガオーッ！」

ドスン！ドスン！

強烈なパンチを浴びせるが美樹は黄金の盾で軽々受け止めた。

「ガアーッ！」

盾を両手で押さえつけて牙を剥き出しにした大口で噛みついてきた。

「痛いわよ」

美樹は黄金の剣を恐竜の鼻先に突き立てた。

「ギヤオオオオオッ！」

どれほどの激痛だったのか、突かれた勢いに数倍する勢いで後ろにひっくり返って鼻先を押さえてドスドス暴れ回った。セツトが破壊されて吹っ飛ぶ。でたらめに巨大な尻尾が襲ってくる。美樹は顔色一つ変えず素早く盾で受け止め続けた。

「ガルルルルル・・・」

ようやく痛みも落ち着いて恐竜は怒りも露わに美樹に向かい合った。

「弱いものいじめってだんだん嫌になってくるのよね。もうあきらめてくれないかなあ？」

「ガルルル・・・」

怒りに震える恐竜の目が、ふと、ある物を見て静止した。

緑海がよろよると立ち上がった。

「ママ・・・」

緑海は美樹の前に立ち、母親と向き合った。

ドロツと股から血を流してよろめいた。芙蓉が駆け寄り、後ろから抱いて支えてやった。緑海は真つ青な顔で夢うつつに母親を見つめている。

「おかあさん……。もう分かったから、お母さんも苦しかったって、わかったから……。もう……。やめましょう。ね？……。ね？……。ね？……。」

「ガルルルル・」

晴美と知世も前に出て緑海の手を握った。

「ごめんなさい。ママ。晴美たちいい子になるから、ごめんなさい。ごめんなさい。魔物のママ。ママもごめんなさい。でも、やっぱり晴美たち緑海ママといっしょに行く」

恐竜はじいつと娘たちを見つめた。

『食ってやる！  
わたしの腹に戻れ！』

巨大に口を開いて全てを飲み込もうと覆い被さってきた。  
ザッ。

美樹の黄金の剣が恐竜を真つ二つに切り裂いた。ズバツ、ズバツ、と剣を旋回させて巨大な肉体をバラバラに解体した。

ドサドサと肉塊が散らばり落ちた。葉子が落下してきて、肉のクッションに膝をついた。バウンドして緑海たちの前に投げ出される。

「葉子……」

緑海は芙蓉の手を振りほどいて葉子にすがりついた。

「葉子ちゃん、ごめんね、ごめんね・・・」

葉子の体がドロツと黒く溶けて、腐敗した生首だけが転がった。緑海はそれを見てうつつ、と嗚咽した。

美樹は剣を旋回させるとドスツと緑海の背中に突き刺した。切り口に手を添え、中から出てきた白い光の玉をすくい上げた。

知世もスツと手のひらに乗る白い光の玉になった。母親のところへ行く。

晴美は美樹の持つ剣を見て怯えた。

「あなたがこの世界で人間として生きていくならいいわ。どうする？」

晴美は考え、決心して硬く目を閉じた。美樹は剣を振り上げ、そつと晴美の肩に置いた。するとすつと晴美の霊体が肉体から剥がれ出てきた。

「痛くなかったでしょ？」

美樹が悪戯っぽく笑った。

「さあいらっしゃい。あなたたち親子にはここよりふさわしい、幸せに暮らせる世界に連れて行ってあげるわ」

晴美の霊体も白い玉になって嬉しそうに踊りながら母と妹の下へやってきた。

又イ姬は美樹の膝にすがりついた。

「おお、あなたこそ真の神じゃ。わらわは、わらわはどうなるのじや？ 家臣どもも女どもも、皆消えてしまった。わらわは一人になつてしもつた。わらわも救いがほしい。わらわも、心の平穏が・・・、欲しい・・・」

「いいけどね・・・」

美樹はちよつと心配そうに言った。

「お姫様でなくっていいんなら、わたしの国に来る？」

「おお！ ありがたや。かまいませんぬ、どうかどうか、わらわを永久にあなた様のお側に仕えさせてくださいませー」

「いえ、あの、そういうことじゃないんだけどなー」

美樹は幾分又イ姫を迷惑そうにしながら、

「ま、いっか。人間として生き直せば自分の天国が見つけれられるでしょう」

と、笑って肩に剣を置いた。又イ姫の霊体が現れた。傷も治り、平穏な、喜びに溢れた美しい顔をしている。又イ姫の抜け出た岳戸由宇はすっかり気の抜けた顔でへたり込んだ。

「美樹・・・さま・・・」

美樹は芙蓉にニッコリ笑いかけ、消えてしまうのかと思ったら椅子に座って、ふわっと、古代ギリシャ風のゆったりした白いドレス姿に変身した。テレビカメラを見て苦笑した。

「うちのお母さんがこういうの好きなのよねー」

じいっとテレビを見て、言った。

「葉子ちゃん。あなたは、どうする？」

「ちつくしよおおっ！」

馬木は葉子のバケモノの顔目がけて銀の女神像を力いっぱい投げつけた。女神像は顔面にめり込み、パアンツ！と破裂した。

「え・・・」

キラキラ銀色の粉が辺りを輝かせた。その瞬きの中に、紅倉美姫の姿が浮かび上がった。

「紅倉さん！」

「紅倉さん！・・・もうっ、遅いですっ！」

『ごめんなさい』

紅倉は微笑んで詫びた。声が、心に直接聞こえてくる。生の肉体ではない。

『なんとか時間稼ぎしてくれたようね。ありがとう。コンピュータなんか経由しているからネットワークを解くのに手間取っちゃって。人間の巫女を利用しようとしたのが敵の失敗だったわね』

つぶふ、と微笑んだ。

「じゃあ、魔界の侵攻は？・・・」

『じきに収まって元通りになるはずです。全部が無傷ってわけにも  
いかないでしょうけれど・・・』

「じゃあっ！」

角谷が咳き込んで言った。

「由利先生は！？」

『ごめんなさいね、悲しい思いをさせて。ほら』

見上げると屋上でもキラキラ銀の輝きが見えた。

目覚めた由利絵梨佳先生はしばらくボーンとした後、頬をポツと  
赤く染めた。

「早まったわねえ・・・どうしよう？」

そして、おかしそうにクックと笑って、唇を舐めた。

そこまでの様子は下から見えない。でも角谷は喜びに体をカァー  
ツと火照らせた。

「先生・・・紅倉さん、ありがとうございます」

紅倉の背後の暗闇がザワツと蠢いた。

「なによ・・・なによ・・・なによ！」

葉子が恨みのこもった目に涙を溢れさせながら金網の外からスー  
ツと迫ってきた。金網を通り抜け、腕を伸ばして馬木に取り憑こう  
とした。

「うわあっ」

馬木はひっくり返りそうになり、紅倉の幽体が葉子の幽霊を後ろ  
から羽交い締めにした。

「はなせはなせはなせええっ！！！！！！」

葉子は泣き喚いた。人間の、馬木たちの知っている葉子だった。

「なんでよお、なんでわたしだけこんなひどい目に遭わなくちゃな  
らないのよおっ！？ ひどいじゃない！？ ひどいわよおっ！！  
！！」

紅倉は葉子を抱きしめながら悲痛に眉を寄せながら頬をすり寄せ  
た。



「そうね。あなたはかわいそうだったわね。一番かわいそうなのはあなた。でも、ね？　悪霊にはならないで。この現世では駄目だったけど、あなたの魂は、幸せになる権利があるわ。だから、ね？　わたしといっしょに来て。わたしがきつと、送り届けてあげるから」

「嫌よおゝ、ひどい・・・、やだよおゝ・・・」

葉子は顔を歪めてポロポロ泣いた。

「やだ、やだ、やだ・・・、ダーリン・・・」  
泣きながら、葉子の姿は紅倉と共に消えていった。  
・・・。。。。。。。

おい、おい。

「みんな無事ー？」

由利先生が上の屋上からおっかなびつくり覗いている。溶けた金網は元の形には戻らないが、鉄の成分には戻ったようだ。

「先生！」

角谷が笑顔を弾けさせて叫んだ。

「ヤッホー」

由利先生は口に手を添えて小さく言った。笑った。

「先生」

「先生」

「せんせえゝ」

馬木もかすみも、等々力ディレクターまで、笑顔で手を振った。

世界は急速に元に戻りつつある。日本中のあちこちでこんな光景が繰り広げられているのだろう。

いったん魔界に取り込まれた多くの人々が無事に現世に帰ってきた。

だが、

けっして現世に戻ってこない人たちもいる・・・。

「まあねえ、いろいろ手違いや計算違いもあったけど、一応大団円

ってことでいいんじゃないかしら？」

神様美樹はテレビから話しかけた。

「みんな、紅倉美姫ちゃんに感謝しなくちゃ駄目よ？ 彼女が身を犠牲にしてネットワークに乗り込んで、中継基地になっている人間たち・・・怪物になっちゃった女の子たちね、彼女たちの呪いを解いて、本当の神様の巫女に変身させたから、わたしがネットワークを乗っ取ることが出来たのよ？ 彼女の頑張りがなかったら、わたしとしてもネットワークを破壊して、つながった人間たちを皆殺しにするしか事態を収拾する手はなかったわね」

本当かどうか分からないが、神様は紅倉美姫に花を持たせた。芙蓉が悲しい顔で質問する。

「それで、紅倉先生は？」

「わたしが消えたら戻ってくるわ。でも、」

美樹も少し悲しそうに芙蓉を見つめた。芙蓉は悲しくてやり切れなくなる。美樹は言う。

「人は誰でも必ず死にます。わたしたち神は死にませんが、それでも必ず終わりはやってきます。永遠というのは、今という時間の中にしかありません。あなたには、分かりますね？」

「はい・・・」

芙蓉は涙を堪えて言った。

「では、」

美樹はニッコリ笑った。

「迎えてあげてください。あなたの大好きな人を。わたしは、この子たちを送っていきますから。では、行きますよ」

又い姫の幽霊は差し出された手を嬉しそうに握った。

「みなさん、さようなら。ごきげんよう」

パアツと黄金の光に桃色の光がまじり、石油臭いにおいを一掃する高貴な薔薇の香りが広がった。

その光に祝福されるように、紅倉美姫はそこに座っていた。

「先生！」

「ただいま。美貴ちゃん」

紅倉は飛びついてきた芙蓉を受け止め、遠慮なく抱きしめた。

## エピソード 心霊ビデオ

紅倉美姫は事件後文章で引退を表明して姿を消した。

ある湖のある高原の別荘で芙蓉といっしょに静養している。

東京を発つ前三津木ディレクターと電話で話した。

三津木は出来たら岳戸由宇、いや、美崎優と結婚したいと言っていた。テレビ局は辞めなければならぬだろうが、

『等々力さんから誘いがありましたね、あっちもいろいろたいへんだろうけれど、何しろタフでしたたかな人ですからねえ、まだまだいろいろ悪巧みしているようですよ。わたしもその悪党の仲間に入り入れられそうで・・・』

笑って・・・、真剣な声で言った。

『先生にはなにもかもお世話になってしまつて・・・』

申し訳ありませんでした、と謝った。紅倉はどうぞお幸せにと明るく言つて電話を切った。

紅倉は芙蓉と手をつないで湖の周りを歩くのを日課にして過ごしている。

人工物に乏しいこの辺りは事件の後遺症はほとんど見られないが、日本中の至る所で後始末に追われている。魔界から現世に復帰して人は無事戻ってきた。が、ドロドロに溶けた人工物は元の姿に戻ることはなかった。ドロドロに溶けた姿のまま元の成分に戻っただけだ。今後数年、ひょっとして10年以上、復興まで時間が掛かるかもしれない。ま、やるべきはつきりした仕事ができいいだろう。

地表に溢れた石油の処理も大問題だった。これも勝手に地中に帰っていくことはなかった。土地はすっかり荒れ、石油を奪われた石油産出各国との関係も微妙だ。

今回の事件は人的被害こそ最小限に抑えられたものの、物的被害は計り知れないものがあつた。

ここは平和だ。美しい自然の中でのんびり過ごしていることを芙蓉は当然だと思っている。マスコミや政府からの詳しい説明の要望は後を絶たない。理不尽な脅迫も多い。芙蓉はそれを全て先生の耳に入る前にシャットアウトした。芙蓉自身そんなことにかかずらうのはごめんだ。先生と、自分へのご褒美だ。芙蓉は先生の手を握って歩く。なんと幸せだろう・・・。

ひと月が経ち、ふた月が経ち、10月も半ばになった。秋の早い高原はすっかりもみじが紅葉し、湖面に見事に美しい色彩を映している。

芙蓉はその見事な景色を先生の目に見せてあげたいと願う。

「ちゃんと見えているわよ」

先生は嬉しそうに芙蓉の肩に頭をもたげて湖の景色を眺める。

「あなたの心の美しさが、わたしの心にそっくり伝わってくる。まあ、なんと綺麗なのかしら」

芙蓉はまるで恋人のように紅倉の手を握り、肩を抱き、髪に頬づりした。

先生が霊界から帰ってきて、屋敷に帰った夜、芙蓉は聞いた。

「あのね、あなたを弟子・・・と言っては失礼ね、パートナーに選んだのはね、あなたが一番美しかったから。なんてかわいい子かしら？と思つてね。それに、・・・わたしのことを一番好きでいてくれたから・・・」

芙蓉は先生と相思相愛であつたことを心から嬉しく思った。芙蓉は、自分が変わり者でもなんでもいい、心から先生を愛していた。この世で最愛の恋人だ。

湖の畔の二人の生活が、永遠に続けばいいと、芙蓉は願った。その願いが叶えられないことは知っていたが・・・。

芙蓉手作りの昼食をとりしばらく休んだ。

馬木良人から手紙が来ていた。

先生に是非視てもらいたいものがある、と。

先生はその手紙を芙蓉に読んでもらって、おかしそくに笑った。

「なんです？」

「いいのいいの。これであの子も気が済んだでしょう」

先生は上機嫌だったが、芙蓉は何故か不吉なものを感じた。

強い日射しを避けて3時、先生にせがまれて日課の散歩に出かけた。芙蓉は何故か今日は気が進まなかったが、先生がどうしても言うので仕方なくつき合った。

先生には一カ所お気に入りの場所があった。もみじの大木が嵐に倒れて、なお根付き、上に伸びた枝がひさしのように湖面にせり出している。その下にちょうどベンチのように割れた幹が寝ていて、そこに腰掛けて湖を眺めるのだ。ちょっと寒いところが恋人たちにはちょうどいいようで、たまに先客があると先生は子どものようにがっかりした。

今日は空いていた。並んで座りながら、湖を渡る外気の冷たさにくつついて座る先生の体の温かさに芙蓉はたまらなく妖しい気分になった。

「美貴ちゃん、いいわよ」

芙蓉はたまらず先生の唇を奪った。

たまらなく切ない気分になった。

「先生、好きです。愛してます」

先生の華奢な体を思い切り抱きしめた。先生も背中に戻した腕に力を込めてくれた。

芙蓉の人生、至福の時だった。

帰り道、芙蓉は幸福な気持ちに充たされていた。先生に自分の気持ちを伝えた。受け入れてもらえた。これ以上、自分の人生で望むものは何もない……。

だから……

背後から襲い来る凶刃にまるで気付かなかった。芙蓉にとっての逢魔が時だった。

「悪魔めっ！」

「危ない！」

強烈なテレパシーが芙蓉の脳裏を駆け抜けた。

「先生！」

何が起こったのか分からなかった。

「先生！」

先生が倒れた。他に二人の女がいた。一人は背後から短刀を構えて突進してきた岳戸由宇、いや、美崎優。

もう一人は、その岳戸をつけ狙って、紅倉先生を襲う岳戸を今がチャンスとナイフを構えて突進してきた岳戸の元マナージャー加納夏美。生きていたのだ。だが、すっかり精神を病んでしまっている。悪魔めっ！と叫んだのは加納だった。

岳戸を襲う加納から岳戸をかばって、その加納のナイフを腹部に背後から背中に、両方から同時に先生は刺されたのだ。

「先生！先生っ！」

芙蓉は泣きながら先生を抱き起こした。先生の血で自分の手が濡れていくのを感じながら、何故二人もの襲撃者の気配を自分がまったく感じられなかったのか、自分の無能を呪った。

「ひいいいっ・・・」

加納は己の所業の恐ろしさに恐れ戦いて逃げ出した。

美崎優はその場にへたり込みへらへら笑った。

「あんたが悪いんだ・・・わたしから神様を奪うから・・・わたしには何も残されていない・・・何もかも、なくなっちゃった・・・」

「

芙蓉は美崎の戯言など聞かず、必死となって紅倉美姫に呼びかけた。

「先生、先生、しっかりして！・・・死なないでえ！・・・」

紅倉美姫は力なく芙蓉に微笑んだ。

「ごめんなさいね、こうなることは分かっていたの」

「そんな、ひどいです先生、わたしを置いていかないで！」

「美貴ちゃん。あなたと過ごした月日がわたしの人生で最も幸せな

時間だった……。ううん、あなたがいてくれなかったら、わたしは自分の幸せなんて知ることはなかった……」

「わたしだって、先生がいなかったら、わたし、わたし……」

「お願いしてもいいかしら？」

「なんです？！」

「ずうつと……。あなたの側にいていいかしら？　わたしは神の力を持て余して上手くつき合うことができなかった。もし、あなたがいいと言ってくれるなら……。わたしはあなたの守護者となつてずつとあなたといっしょにいたい……」

「はい。はい。喜んで。でも……」

「あなたの唇……。温かった……。」

紅倉美姫の目の光が見る見る暗くなつていった。

「先生……。……」

芙蓉はボロボロ涙を流した。

不思議なことが起こった。

紅倉美姫の体が一瞬光を放ちポツと熱くなつて、ふわつと煙が立ち上った。紅倉の体は白い灰となり、風にサラサラ散つていった。

芙蓉は背後に気配を感じた。肩に温かな手が置かれるのを感じた。それは嬉しかったが……。ひどく悲しかった。

「先生、いっしょですよ、永遠に……。……」

芙蓉は残された紅倉の衣服を胸に抱いて、泣いた。

11月3日文化の日。青山高校文化祭。危ぶまれた開催も生徒の熱意でなんとか実現できた。

馬木たち映画研究同好会は自主制作ビデオ映画「プリティーゴーストおとめちゃん」を発表した。

主演の全然怖がってもらえないユーレイおとめちゃんに沖浦かすみ。それをネチネチいじめる意地悪な霊能力者に特別出演の由利絵



梨佳先生。その他の出演は適当に。

あれから由利先生の勧誘で1年生部員も加入して、予想外にスムーズに撮影が進んだ。あんな事件のあった後でこの内容はどうかとも思ったが、撮影は楽しかったし、上映会での評判は上々だった。さらに1年生部員の獲得もできた。大成功だ。

ところで、芙蓉美貴さんから紅倉美姫さんが亡くなったと残念な知らせが届いた。先生の意志でその死は決して口外しないようにと馬木たちにだけ知らせてくれたのだ。

馬木は一つ紅倉さんに視てもらって訊きたいことがあったのだ。映画の評判は上々だ。上映の度に笑い声が上がった。たいへんけっこうなことだが、一つだけ気がかりがある。

映画のラストは、成仏したおとめちゃんのお墓に手を合わせると、土からガバツと手が出てきて、

「たすけて、窒息しちゃう」

とじたばたして、

「線香あげてやるから安心して死ね！」

と、土を盛られ、

「人でなし、呪ってやる」

と、呪いの言葉を吐いて、THE ENDとなる。

「キヤリー」のパロディーだ。

いきなり地面から手が突き出るここはけっこうドッキリするシーンで、あんまり本気で怖がられても困るので演技で笑いを取る。

そのドッキリをゆるめるためにあらかじめおとめちゃんがここから出てくるよと地面を指さしてうらめしやポーズを取るという映像が挿入されているのだが、実はこんな映像撮った覚えはない。おとめちゃんの顔もかすみのようでもあるし、違うようであるし、メイクが濃いのでよく分からない。さらに、土をかぶせられて苦しむ手の映像に、喉を押さえて苦しんでいる振りを笑いながらやっている映像がチラッと被さるのだが、こちらもそんな映像撮った覚えはない。こっちの方はじっくり見るとその正体はつきり分かる。

葉子だ。

どうしても映画に参加したくて遊びに来たのか、お別れを言いに来たのか、それともまだ成仏できないでいるのか……。それを紅倉さんに訊いてみたかったのだ。

映画を見たお客さんは誰一人これが本物の心霊ビデオだなんて気付かない。楽しそうに笑っている。

それでいいのかい、葉子？

おわり。

## エピソード 心霊ビデオ（後書き）

終盤、唐突に女神が現れますが、彼女は前作「くるみの国滞在記」の登場人物で（こっちでもほとんどセリフのないちよい役でしたが）裏設定だけのつもりだったのですが、物語を収拾するためにご登場願いました。お暇がありましたらあちらも読んでやってください。かなりのお暇を必要としますが・・・。

さて、この作品は独立した1本切りのもので、シリーズで書いているものとは別物です。キャラクターが気に入ったのでシリーズ化してみたんですが、あんまり人気ないんですよね、新作ぱったり書いてないなあ。お暇がありましたらこちらも・・・。

まずはこの作品を読んでいただきまことにありがとうございます。た。

2008 / 9 / 3 .

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7980e/>

---

中から出てくる

2010年10月8日14時04分発行